

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第39集

# 御殿川流域遺跡群V

手乱遺跡・鶴喰広田遺跡  
三島市

平成19～24年度 一級河川御殿川広域河川改修事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

静岡県埋蔵文化財センター



## 序

富士山の伏流水を源流とした御殿川は、三島市内を流れる狩野川水系の支流として知られ、江戸期に徳川将軍家の為の御殿が川のほとりにあったことに由来する名称とされます。流路が蛇行する特徴があることから、大雨の際などには川が氾濫することが多い川でもありました。このため、昭和40年代より洪水対策のための河川改修が進められてきました。御殿川流域には埋蔵文化財包蔵地が数多く存在しており、工事に伴ってはこれまで三島市教育委員会、静岡県教育委員会、静岡県埋蔵文化財調査研究所により発掘調査が断続的に実施されています。

今回報告するのは御殿川流域遺跡群のうち、鶴喰広田遺跡及び手乱遺跡についての発掘調査成果であります。平成6～8年に実施された発掘調査区に隣接する地区が対象となりますが、調査区の大半は御殿川の旧流路にあたることが明らかとなりました。旧流路内からは弥生時代から近世に至る土器・陶磁器、木製品、石製品、金属製品といった日常生活に関わるあらゆる道具が大量に出土しました。これらは御殿川流域に広がっていた集落域よりもたらされたことは明らかで、当該期の人々の生活環境を知る上で貴重な成果を得ることができたといえるでしょう。

本書で報告するこれらの成果が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県沼津土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝 田 順 也

## 例　言

- 1 本書は静岡県三島市鶴喰他所在の手乱遺跡・鶴喰広田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成19・21年度一級河川御殿川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。平成23年度以降は静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。平成23年度調査については静岡県教育委員会文化財保護課が実施した。
- 3 手乱遺跡・鶴喰広田遺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

本調査 平成20年5月～10月　調査対象面積 1,000m<sup>2</sup>（手乱遺跡540m<sup>2</sup>・鶴喰広田遺跡360m<sup>2</sup>）

平成21年11月～22年3月　調査対象面積 359m<sup>2</sup>

平成23年6月　調査対象面積 51m<sup>2</sup>

資料整理・保存処理

平成22年6月～23年3月、平成23年10月～平成24年3月、

平成24年7月～平成25年3月

調査体制は、以下の通りである。

<(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所>

平成20年度（現地調査）

所長兼常務理事 清水 哲 次長兼総務課長 大場正夫 総務係長 山内小百合  
会計係長 杉山和枝 次長兼調査課長 及川 司 次長兼任事業係長 稲葉保幸  
東部総括係長 中鉢賢治 調査研究員 松川理治・日吉高幸

平成21年度（現地調査・資料整理）

所長兼常務理事 天野 忍 次長兼総務課長 松村 享 総務係長 山内小百合  
会計係長 杉山和枝 次長兼調査課長 及川 司 次長兼任事業係長 稲葉保幸  
保存処理室長 西尾太加二 次長兼東部総括係長 中鉢賢治

調査研究員 岩名建太郎

平成22年度（資料整理）

所長兼常務理事 石田 彰 次長兼総務課長 松村 享 専門監兼任事業係長 稲葉保幸  
総務係長 潤みやこ 総務課保存処理室長 西尾太加二  
調査課長 中鉢賢治 調査第二係長 岩本 貴 調査研究員 岩名建太郎

<静岡県埋蔵文化財センター>

平成23年度（資料整理）

所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 主幹兼任事業係長 村松弘文  
総務係長 潤みやこ 調査課長 中鉢賢治 調査第二係長 溝口彰啓  
主査 大森信宏 主任 木崎道昭

平成24年度（資料整理）

所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 主幹兼任事業係長 前田雅人  
総務係長 潤みやこ 調査課長 中鉢賢治  
調査第二係長 溝口彰啓 主査 大森信宏

4 本書は第1～3章を岩名健太郎・溝口彰啓が執筆し、第4～6章は溝口彰啓が執筆した。

- 5 出土した木・金属製造物の保存処理は、当センターが実施した。
- 6 現地調査における掘削等業務委託は株式会社深谷（平成20・21年度）、安全管理等業務委託は小野建設株式会社（平成20年度）、基準点測量・空中写真撮影・測量業務委託は株式会社フジヤマ（平成20・21年度）、株式会社デジック（平成21年度）、株式会社シン技術コンサル（平成21年度）にそれぞれ委託した。出土動物遺体の同定については株式会社パレオ・ラボに委託した。平成23・24年度に実施した整理作業・保存処理業務委託については、株式会社パソナに委託した。
- 7 出土木材の樹種同定は東北大大学名誉教授鈴木三男氏に依頼した。
- 8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。  
松井一明 村上伸之 山本宏治（五十音順・敬称略）。
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、周辺調査（平成6・7年度）との整合を図るために、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標・日本測地系（改正前）を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。国土平面直角座標第Ⅷ系のX = -99,650,000、Y = 39,280,000を原点（A1）として、座標方位を基準に1辺10mの方眼（グリッド）を、北から南へ向かって、1・2・3…、西から東へ向かって、A・B・C…と設定し、さらにその中を1辺5m幅で北西（NW）、北東（NE）、南西（SW）、南東（SE）の小区画に4分割して設定した。
- 3 第2章の周辺遺跡分布図（第2図）は国土地理院発行 1:25,000地形図「三島」を複写し加工・加筆した。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。
- 6 出土木製品の漆椀の文様については下記のように網掛けによって手法を区別した。



蒔絵



赤漆



黒漆

# 目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 調査の経過と方法	
第1節 調査の経過 .....	6
第2節 調査の方法 .....	8
第3節 基本土層 .....	8
第4章 手乱遺跡の遺構と遺物	
第1節 検出された遺構 .....	9
第2節 出土遺物 .....	12
第5章 鶴喰広田遺跡の遺構と遺物	
第1節 検出された遺構 .....	37
第2節 出土遺物 .....	39
第6章 まとめ .....	104
第1節 遺構について .....	104
第2節 出土遺物について .....	104
付編1 手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木製品の樹種 .....	107
付編2 手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土の動物遺体 .....	140
写真図版	
抄録	

## 挿図目次

第1図	御殿川流域遺跡群調査区配置図	2
第2図	周辺遺跡分布図	4
第3図	グリッド配置図	7
第4図	手乱遺跡調査区全体図	10
第5図	手乱遺跡杭検出状況図	11
第6図	御殿川・手乱川合流地点調査区全体図	11
第7図	手乱遺跡出土遺物実測図1（土器）	14
第8図	手乱遺跡出土遺物実測図2（土器）	15
第9図	手乱遺跡出土遺物実測図3（土器）	16
第10図	手乱遺跡出土遺物実測図4（土器）	17
第11図	手乱遺跡出土遺物実測図5（土器）	18
第12図	手乱遺跡出土遺物実測図6（土器）	19
第13図	手乱遺跡出土遺物実測図7（陶磁器）	20
第14図	手乱遺跡出土遺物実測図8（陶磁器・瓦・土製品）	21
第15図	手乱遺跡出土遺物実測図9（木製品）	26
第16図	手乱遺跡出土遺物実測図10（木製品）	27
第17図	手乱遺跡出土遺物実測図11（木製品）	28
第18図	手乱遺跡出土遺物実測図12（木製品）	29
第19図	手乱遺跡出土遺物実測図13（木製品）	30
第20図	手乱遺跡出土遺物実測図14（木製品）	31
第21図	手乱遺跡出土遺物実測図15（木製品）	32
第22図	手乱遺跡出土遺物実測図16（木製品）	33
第23図	手乱遺跡出土遺物実測図17（石器・金属製品）	34
第24図	鶴喰広田遺跡H20調査区全体図	38
第25図	鶴喰広田遺跡H21調査区全体図	39
第26図	H21調査区土器出土状況図	40
第27図	鶴喰広田遺跡杭検出状況図	41
第28図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図1（土器）	44
第29図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図2（土器）	45
第30図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図3（土器）	46
第31図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図4（土器）	47
第32図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図5（土器）	48
第33図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図6（土器）	49
第34図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図7（土器）	50
第35図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図8（土器）	51
第36図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図9（土器）	52
第37図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図10（土器）	53
第38図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図11（土器）	54

第39図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図12（土器）	55
第40図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図13（土器）	56
第41図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図14（土器）	57
第42図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図15（陶磁器）	58
第43図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図16（陶磁器）	59
第44図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図17（陶磁器・土製品・瓦）	60
第45図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図18（陶磁器）	61
第46図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図19（陶磁器他）	62
第47図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図20（木製品）	72
第48図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図21（木製品）	73
第49図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図22（木製品）	74
第50図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図23（木製品）	75
第51図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図24（木製品）	76
第52図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図25（木製品）	77
第53図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図26（木製品）	78
第54図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図27（木製品）	79
第55図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図28（木製品）	80
第56図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図29（木製品）	81
第57図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図30（木製品）	82
第58図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図31（木製品）	83
第59図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図32（木製品）	84
第60図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図33（木製品）	85
第61図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図34（木製品）	86
第62図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図35（木製品）	87
第63図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図36（木製品）	88
第64図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図37（木製品）	89
第65図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図38（木製品）	90
第66図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図39（木製品）	91
第67図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図40（木製品）	92
第68図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図41（木製品）	93
第69図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図42（木製品）	94
第70図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図43（木製品）	95
第71図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図44（木製品）	96
第72図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図45（石器・石製品・金属製品）	97
第73図	鶴喰広田遺跡出土遺物実測図46（金属製品）	98

## 挿表目次

第1表	御殿川流域遺跡群調査一覧	1
第2表	手乱遺跡出土土器・陶磁器一覧表	22
第3表	手乱遺跡出土木製品一覧表	35
第4表	手乱遺跡出土石器一覧表	36
第5表	手乱遺跡出土金属製品一覧表	36
第6表	鶴喰広田遺跡出土土器・陶磁器一覧表	63
第7表	鶴喰広田遺跡出土木製品一覧表	99
第8表	鶴喰広田遺跡出土石器・石製品一覧表	103
第9表	鶴喰広田遺跡出土金属製品一覧表	103

## 図版目次

図版1	1. 手乱遺跡遠景（南より） 2. 手乱遺跡杭検出状況 3. 弥生土器出土状況 4. 須恵器出土状況 5. 木製品出土状況
図版2	1. 手乱遺跡全景（北より） 2. 鶴喰広田遺跡H20調査区全景（北より）
図版3	1. 鶴喰広田遺跡H20調査区全景（南より） 2. 鶴喰広田遺跡H20調査区北区全景（北より） 3. 鶴喰広田遺跡H20調査区中区全景（北より） 4. 鶴喰広田遺跡H20調査区南区全景（北より） 5. 鶴喰広田遺跡H20調査区杭検出状況
図版4	1. 鶴喰広田遺跡H21調査区全景（南より） 2. 鶴喰広田遺跡H21調査区流路2遺物出土状況（北東より）
図版5	手乱遺跡出土遺物1（土器）
図版6	手乱遺跡出土遺物2（土器）
図版7	手乱遺跡出土遺物3（土器）
図版8	手乱遺跡出土遺物4（土器・陶磁器）
図版9	手乱遺跡出土遺物5（陶磁器）
図版10	手乱遺跡出土遺物6（陶磁器他）
図版11	手乱遺跡出土遺物7（木製品）
図版12	手乱遺跡出土遺物8（木製品）
図版13	手乱遺跡出土遺物9（木製品）
図版14	鶴喰広田遺跡出土遺物1（土器）
図版15	鶴喰広田遺跡出土遺物2（土器）

- 図版16 鶴喰広田遺跡出土遺物3（土器）  
図版17 鶴喰広田遺跡出土遺物4（土器）  
図版18 鶴喰広田遺跡出土遺物5（土器）  
図版19 鶴喰広田遺跡出土遺物6（土器）  
図版20 鶴喰広田遺跡出土遺物7（土器）  
図版21 鶴喰広田遺跡出土遺物8（陶磁器）  
図版22 鶴喰広田遺跡出土遺物9（陶磁器）  
図版23 鶴喰広田遺跡出土遺物10（陶磁器）  
図版24 鶴喰広田遺跡出土遺物11（陶磁器）  
図版25 鶴喰広田遺跡出土遺物12（陶磁器他）  
図版26 鶴喰広田遺跡出土遺物13（木製品）  
図版27 鶴喰広田遺跡出土遺物14（木製品）  
図版28 鶴喰広田遺跡出土遺物15（木製品）  
図版29 鶴喰広田遺跡出土遺物16（木製品）  
図版30 鶴喰広田遺跡出土遺物17（木製品）  
図版31 鶴喰広田遺跡出土遺物18（木製品）  
図版32 鶴喰広田遺跡出土遺物19（木製品）  
図版33 鶴喰広田遺跡出土遺物20（木製品）  
図版34 鶴喰広田遺跡出土遺物21（木製品）  
図版35 鶴喰広田遺跡出土遺物22（木製品）  
図版36 鶴喰広田遺跡出土遺物23（木製品）  
図版37 鶴喰広田遺跡出土遺物24（木製品）  
図版38 鶴喰広田遺跡出土遺物25（木製品）  
図版39 鶴喰広田遺跡出土遺物26（木製品）  
図版40 手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（石器・石製品）  
図版41 手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（金属製品）

# 第1章 調査に至る経緯

御殿川は三島市街中心に位置する蘆池から湧出する富士山伏流水を起源とし、三島扇状地の東部にある三島市街地中央部を南流して大場川へと合流する。その規模は流程 6 km、流路延長 9.5 km、流域面積 2.3 km<sup>2</sup>で、狩野川二次支川とされている。

御殿川自体が流下の途中に数多くの蛇行部を持つ上、合流する大場川、さらにこれが下って合流する狩野川下流部は河床勾配が比較的緩やかであるため、その背水影響の及ぶ流域では、短時間の急激な降雨に対して排水処理能力が追いつかず、湛水・浸水被害が度々もたらされてきた。静岡県は昭和45年より、排水能力の向上と流域面積確保を目的とした御殿川蛇行部の直進化及び護岸整備工事事業を断続的に進めてきた。同時に工事計画箇所にある埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の必要が生じたため、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、三島市教育委員会の間で協議のもと、大場川合流部より御殿川を巡る方向で遺跡分布調査・発掘調査が順次実施された。

昭和49年、御殿川と大場川合流部に位置する中島（城内）遺跡調査の後、昭和55年に中島地区、昭和57年には、鶴喰・八反田・中地区で分布調査が実施され、発掘調査対象地の選定がされた。中島地区的御殿川流域部（東岸部）に包蔵地登録されている中島B遺跡の範囲内では、昭和56年に中島下舞台遺跡、昭和61年に中島上舞台遺跡での発掘調査が三島市教育委員会によって実施されている。

平成2年以降は財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査担当を三島市教育委員会から引き継ぎ、第1表及び第1図にまとめたとおり、発掘調査を実施している。平成2～4年に中島西原田・梅名大曲田遺跡で発掘調査を行い、その上流部の西岸側では平成3年に八反田前田遺跡、平成6年に鶴喰前田遺跡、平成7年には鶴喰広田遺跡の南側地点の発掘調査を実施した。東岸側の中地区では、平成8・9年に中手乱遺跡の一部について、調査を行った。さらに上流部（東岸側）の南二日町地区でも、平成10～11・17～18・21年に青木原遺跡で発掘調査を実施している。

今回実施した手乱遺跡と鶴喰広田遺跡の調査は、平成6～9年の調査区に隣接する地区にあたり、浸水対策等の作業安全確保のため緩衝用地として残されたことにより未着手となっていた、御殿川本流に接地する河岸部を対象としたものである。また、平成23年には御殿川と手乱川が合流する地点において、静岡県教育委員会文化財保護課による本発掘調査が実施され、今回報告にその成果を報告する。

なお、静岡県埋蔵文化財調査研究所及び静岡県埋蔵文化財センターによる上記発掘調査ではそれぞれ別の遺跡名として報告されているが、今回の報告にあたっては第1表に示したとおり、現在の周知の包蔵地名に準じることとする。

第1表 御殿川流域遺跡群調査一覧

報告時遺跡名	遺跡名(現包蔵地名)	調査期間	調査面積	報告
中島西原田遺跡	中島B遺跡	平成2年9月～平成3年3月	4,096m <sup>2</sup>	御殿川流域遺跡群Ⅰ・Ⅱ
八反田前田遺跡	鶴喰広田遺跡	平成3年4月～平成4年3月	13,421m <sup>2</sup>	御殿川流域遺跡群Ⅰ・Ⅱ
梅名大曲田遺跡	中島B遺跡	平成4年4月～平成5年3月	800m <sup>2</sup>	御殿川流域遺跡群Ⅰ・Ⅱ
鶴喰前田遺跡	鶴喰広田遺跡	平成6年10月～平成7年3月	1,055m <sup>2</sup>	御殿川流域遺跡群Ⅲ
鶴喰広田遺跡1・2区	鶴喰広田遺跡	平成7年10月～平成8年3月	1,292m <sup>2</sup>	御殿川流域遺跡群Ⅳ
鶴喰広田遺跡3区	鶴喰広田遺跡	平成8年4月～平成8年6月	866m <sup>2</sup>	御殿川流域遺跡群Ⅳ
中手乱遺跡	手乱遺跡	平成8年10月～平成9年3月	1,984m <sup>2</sup>	御殿川流域遺跡群Ⅳ
手乱遺跡(H20)	手乱遺跡	平成20年5月～平成20年8月	540m <sup>2</sup>	本報告
鶴喰広田遺跡(H20)	鶴喰広田遺跡	平成20年7月～平成20年10月	360m <sup>2</sup>	本報告
鶴喰広田遺跡(H21)	鶴喰広田遺跡	平成21年11月～平成22年3月	359m <sup>2</sup>	本報告
手乱遺跡(H23)	手乱遺跡	平成23年6月	51m <sup>2</sup>	本報告



第1図 御殿川流域遺跡群調査区配置図

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

手乱・鶴喰広田遺跡は静岡県東部、伊豆半島の付け根の西方に当たる、北西側に愛鷹山、東側に箱根山、南側に静浦山地に囲まれた黄瀬川・狩野川下流域に広がる平野に立地する。

平野はおよそ現沼津市東部から三島市街地南部付近、西走する狩野川の南北で二分され、北側は三島・沼津平野と通称される地域の東部に当たり、愛鷹山・箱根山間の谷に富士火山溶岩（三島溶岩流／約1万年前）が流れ込んだのち、縄文海進・海退を経て、富士山体崩落により発生した火山砂礫層（御殿場泥流／約2900年前）の被覆により形成された扇状地（三島扇状地）である。一方、南側は田方平野または、狩野川平野と通称され、縄文時代前期の海進時に入江（古狩野湾）であった地域が、海退後に天城カワゴ平火山の降下軽石及び火砕流に由来する軽石質砂層によって埋められた谷底平野である。

堆積が先行した三島扇状地の南端部は、静浦山地の手前まで伸び、これに行く手を阻まれる形で狩野川の流れは静浦山地に添いながら、北上から西走へと方向を変化させ、三島溶岩流が形成した台地端部より湧出する富士山の伏流水や箱根山を源流とする小河川との合流を重ね、静浦山地の北側で、南下して来る黄瀬川と合流したのち、静浦山地北西麓を廻り込むようにして駿河湾に注いでいる。

御殿川は富士山伏流水の湧出地である蘆池を起源として、三島市街南部に相当する扇状地上を南東方向に蛇行を繰り返しながら狩野川の一次支川である大場川へと合流する。御殿川の中・下流域では、蛇行流路の消長により幅100~200mの開析谷が形成され、一部段丘が発達している。その内側の谷底平野部には、砂・砂礫質の氾濫物が堆積する。

手乱遺跡と鶴喰広田遺跡は御殿川中流域の東西対岸にそれぞれ位置し、調査区の多くは御殿川の旧河道にあたっている。

### 第2節 歴史的環境

駿東・伊豆北地区における旧石器・縄文時代遺跡の立地は富士山南東麓・愛鷹山南・東麓・箱根山西麓の丘陵部に集中し、三島扇状地上では流入したと見られる少数の縄文土器が包含層より確認されるのみである。

三島扇状地上で明確な人間の生活痕跡が認められるのは、弥生時代中期に至ってからである。当該期の遺物出土例は多數報告されるが、明確な遺構として把握されているのは、当該期の住居跡を検出した境川東岸の長伏遺跡、同じく住居跡が検出された御殿川中流西岸の青木B遺跡、6基の方形周溝墓が検出された御殿川下流東岸の中島上舞台遺跡（中島B遺跡上舞台地点）とそれほど多くはない。

弥生時代後期も中期同様、遺物の出土報告は多數認められる。住居を伴う集落域の検出例は境川流域では清水町瀬戸川遺跡、岩崎屋敷跡等の例が挙げられ、御殿川流域では、中島上舞台遺跡（中島B遺跡上舞台地点）で2軒の住居跡が検出され、青木B遺跡では方形周溝墓1基が検出されている。三島扇状地周辺では住居跡を伴う集落遺跡は、三島市谷田押切遺跡、夏梅木遺跡群、函南町向原遺跡、伊豆信玄病院遺跡など多数にのぼり、箱根西麓丘陵上に数多く展開している傾向がうかがえる。

当該地域周辺における集落域は古墳時代に入ると面的な広がりを見せるようになる。古墳時代前期に



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	鶴喰広田遺跡	11	谷田天台遺跡	21	藏地原遺跡
2	手乱遺跡	12	源平山遺跡	22	青木B遺跡
3	青木原遺跡	13	猪瀬山遺跡	23	平田前田遺跡
4	伊豆國分寺跡	14	茶臼山遺跡	24	金沢遺跡
5	芝本町遺跡	15	御園川遺跡	25	中島B遺跡
6	三崎大社・塔ノ森庵寺	16	巻町山遺跡	26	桶田遺跡
7	三島御殿跡	17	道下遺跡	27	長伏遺跡
8	三島代官所跡	18	西大久保遺跡	28	向山古墳群
9	市ヶ原廣寺	19	奈良橋向遺跡	29	上阿弥陀遺跡
10	上才塚遺跡	20	柳添遺跡	30	中島遺跡

第2図 周辺遺跡分布図

比定される住居跡を伴う集落遺跡は、箱根西麓に所在する夏梅木遺跡群、伊豆通信病院遺跡でもみられるが、大場川・御殿川間の地域でも展開し、中島上舞台遺跡（中島B遺跡上舞台地点）、金沢遺跡、壱町田遺跡などで集落跡が検出される。奈良橋向遺跡及び西大久保遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭に比定される集落跡と水田域が検出され、注目されている。御殿川流域でも青木原遺跡では微高地上の調査区で、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される方形周溝墓が3基検出されたほか、河岸部の調査区より、三連系銅鐸の模倣品である小銅鐸と円環型銅鏡の再加工品が出土しており、鶴喰広田遺跡の平成6年調査（鶴喰前田地点）では、円環型銅鏡が出土している。

古墳時代中期以降は、手乱川間の段丘面から微高地に立地する金沢遺跡をはじめとして、多数の住居跡を伴う集落遺跡が増加し、狩野川本流北岸部にも拡大する反面、箱根西麓では平井の台地と通称される地域に集落立地が限定されるようである。

奈良時代になると、湧水源流部が集中する溶岩台地末端部にあたる現三島市街中心部に国分寺が建立され、近隣に伊豆国庁が存在していたと想定されている。古代の寺院・官衙関連遺跡は、市ヶ原庵寺、塔ノ森庵寺、上才塚遺跡など、大場川と御殿川に挟まれた空間（御殿川東岸側）に集中している。現在もここに三鷹大社より南側へ旧下田街道が延びており、古代以降この地域の重要な交通起点の一つとなっていたことがうかがえる。

近世に入り、御殿川上流部と西側に流れるその支流を跨ぐ形で三島宿が整備される。宿場周辺には集落が展開し、手乱・鶴喰広田遺跡で出土した数多くの日常生活品は、これら近隣村落より廃棄され流入したものと考えられる。

鶴喰広田遺跡は元来、御殿川右（西）岸の崖線上に範囲設定されていた埋蔵文化財包蔵地である。昭和57年に住宅建設に伴い発掘調査が実施された際、弥生時代中・後期に比定される土器とそれに伴う方形周溝墓周溝の一部の可能性がある溝や土坑群、古墳時代後期に比定される竪穴住居1軒ほか、掘立柱建物跡1棟などが検出されている。対岸に位置する手乱遺跡もまた、微高地に範囲設定された埋蔵文化財包蔵地であり、弥生土器や土師器が採取されていた。

平成6年以降、両包蔵地外縁に位置する河岸部で実施された、河川改修工事に伴う発掘調査の主たる成果は、近世以降と目される護岸杭列や排水用暗渠等の遺構が検出されたほか、旧流路中から断続的ながら縄文時代晚期から近現代に及ぶ多種多様な遺物の出土が挙げられる。しかし、調査区内における度重なる河川の開析・堆積により、それら遺物の具体的な流入・漂着経緯や時期の追求が出来ないことから、近接する微高地部や上流部の遺跡・包蔵地との具体的な関わりを言及するに至っていない。

## 第3章 調査の経過と方法

### 第1節 調査の経過

#### （1）手乱遺跡の調査経過

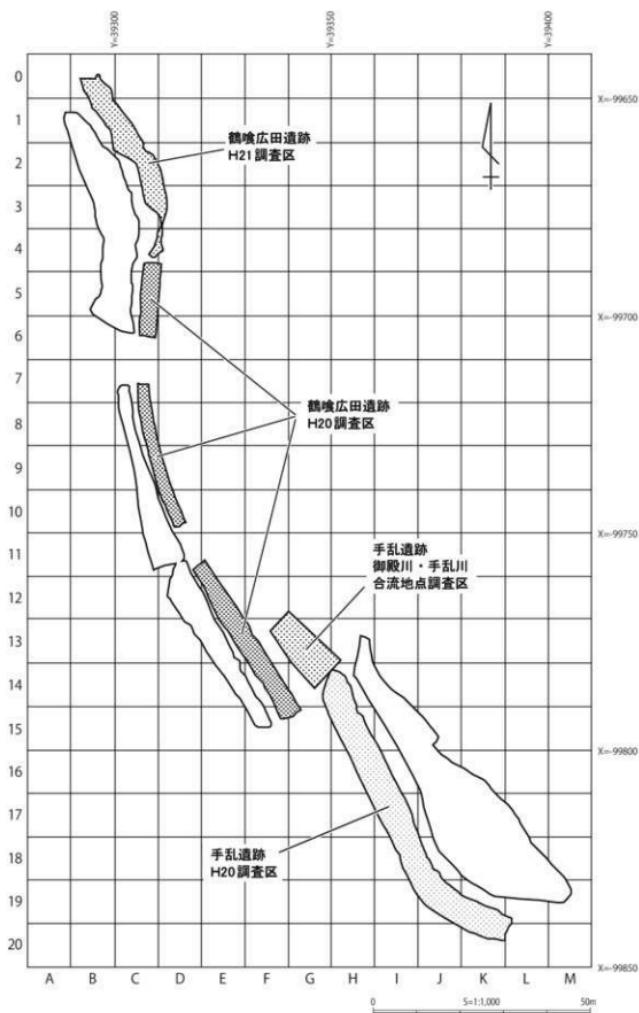
御殿川東岸、手乱川合流部より下流に位置する手乱遺跡調査区（以下H20調査区）は対象面積540m<sup>2</sup>であり、平成20年5月下旬より、重機・車輛（パックホウ・クローラーダンプ）を用いた表土除去作業を開始した。表土除去終了後、6月上旬には基準点及びグリッド杭を打設し、ベルトコンベア・水中ポンプ等の機械用電源の架線・配線工事を行った後、包含層人力掘削作業を開始した。調査区北・中・南部3箇所に東西方向のレンチを設定・掘削し、その壁面より土層堆積状況を確認しながら掘削作業を進めた。掘削作業と並行し、河川から浸水・湧水に対処するため、調査区周縁部に排水溝・集水井を設定した。集中豪雨等により調査区が水没するなど、作業は困難であったが、遺物包含層の掘削を進め、8月上旬には掘削作業を完了させ、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、現地調査を終了した。

平成23年6月には御殿川と手乱川の合流地点において、静岡県教育委員会文化財保護課による対象面積51m<sup>2</sup>に対する本調査が行われ、遺物包含層より土器類の出土が確認された。

#### （2）鶴喰広田遺跡の調査経過

御殿川西岸の鶴喰広田遺跡の平成20年調査区（以下H20調査区）は、対象面積360m<sup>2</sup>である。西側集落からの生活排水等を河川に流すための土管により調査対象地が3つに分断されていたため、上流から北区、中区、南区の3つに分けて調査を行った。7月中旬より下旬まで、重機・車輛（パックホウ・ダンプトラック）を用いた表土除去を実施した。発生した堆土は、鉄板を敷設した簡易道路及び市道を通過して、東岸側に設定した堆土場へ搬出・管理した。交通安全のため誘導員を配置し、土埃が立たないように散水車を稼動させた。表土除去終了後、基準点及びグリッド杭を打設し、あわせて機械用電源の架線・配線工事を行った。8月上旬より北区、中旬より中区、9月上旬より南区にて包含層人力掘削を開始し、手乱遺跡と同様、発掘作業に並行して排水溝・集水井を設定・掘削した。8月下旬には北区、9月上旬には中区、9月下旬には南区の掘削作業が終了し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査を完了した。

平成21年調査区（以下H21調査区）は、平成20年調査区の北側に当たり、対象面積は、359m<sup>2</sup>である。平成21年11月上旬より、ベルトコンベア・水中ポンプ等の機械用電源の架線・配線工事を行い、重機・車輛を用いた表土除去を開始した。平成20年調査時と同様に発生した堆土は、東岸側に設定した堆土場へ搬出した。表土除去終了後の11月下旬3箇所に東西方向にレンチを設定し、壁面より土層堆積状況を確認しながら、掘削作業を実施した。数度の降雨・増水に伴う調査区水没と復旧を繰り返しつつ、人力掘削を翌22年2月末まで行い、3月上旬に調査区完掘状況のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査を終了した。



第3図 グリッド配置図

## 第2節 調査の方法

現地調査にあたり、過去の周辺調査との整合を図るため、測量基準点は平成6～8年に実施した調査区で設定されたグリッド軸を利用することとした。設定されたグリッドは10m間隔で、南北方向は北から順にアラビア数字を用い、東西方向は西から順にアルファベットを用いて表示し、改正前の日本測地系WGS91基準座標に基づいている。遺物の取上げはグリッド・層位別一括取上げを基本としているが、一部の遺物の出土位置についてはトータルステーションによる平面位置の記録、あるいは縮尺率1/10の遺物出土状況図を作成した。遺跡発掘状況の全体図作成は株式会社フジヤマ（平成20年調査）及び株式会社デジック・株式会社シン技術コンサル（平成21年調査）に委託し、併せて空中写真撮影についても実施した。写真撮影は、現地発掘調査では35mm版カラーネガ、6×7版モノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、資料整理では出土品の撮影に6×7版モノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用した。

## 第3節 基本土層

鶴喰広田遺跡、手乱遺跡ともに今回の調査対象区は御殿川氾濫原内で、流水量の変化により浸食と堆積が繰り返された谷底平野に当たり、これまで御殿川流域遺跡群で実施された基本土層の考え方に関する検討（静文研1993・1994・1995・1998）。

表土層の多くは堤防構築用盛土であり、その下部には水田床として搬入・敷設されたとみられる粘土層が部分的にみられ、御殿川流域遺跡群基本土層第I層と認識される層位である。

これより下に残る層位には、砂層及び砂礫層を主体とした河川堆積層が認められる。その上層は御殿川流域遺跡群基本土層第II層と設定された砂層で、20～30cm程度の堆積厚を持っている。今回の調査では検出された杭列の多くがII層堆積後に設置されていることが確認され、II層の一部はこれよりも新しい旧河川によって削平されている。II層には多量の木製品を含む遺物が多数含まれている。

下層は、御殿川流域遺跡群基本土層第III層と設定された砂礫層である。30mm以下の亜角礫と砂の混合層で、下位の一部に粘土塊の混入が認められる。御殿川上流の青木原遺跡の砂礫層最下位には、玄武岩質の小兎頭大から径1mに達する円錐礫・岩が含まれていたが、手乱遺跡・鶴喰広田遺跡では確認されていない。III層は1m～1.5m程度の堆積厚であるが、平面上での分離は困難で、重複が予想される旧流路の把握は基盤層まで浸食したものに限られる。III層中位までは弥生土器から近世の陶磁器片が多量に出土しているが、II～III層中位までの出土土器の年代観は層の上下に対応しておらず、細片化したうえに表面に流痕が観察されるものが多数認められる。幾度もの増水に伴う流路の変更や底部攪拌に伴い、二次堆積が繰り返されて来たものであろう。ただし、III層の最下層では一転して、残存率の高い弥生時代後期から古墳時代後期にかけての土器類が出土することから、III層最下層のみは出土土器の年代観を反映した時期に堆積した土が、度重なる流路の変更にも関わらず削平されずに残存した可能性が高い。過去の調査において、II層は中近世、III層は古代以前の堆積層という推定がなされていたが、上述のようにIII層中位以上については、近世以降に堆積した二次堆積層の可能性が高いことから、基本層位の年代観には再考が必要となってきている。

II・III層の砂層及び砂礫層を除去すると、堅く締まった褐灰色を呈する硬質砂である基本土層第IV層が表出するが、これは三島扇状地の基盤を形成する火山砂礫再堆積層（通称マサ）であり、無遺物層となる。

## 第4章 手乱遺跡の遺構と遺物

### 第1節 検出された遺構

#### (1) 旧流路

手乱遺跡調査区内では、前章で述べたように盛土と旧耕作土の下に河川堆積による堆積層が確認されている。その主体となるのは基本土層Ⅱ層とⅢ層となり、これらは度重なる流路の変更に伴って堆積したと考えられるが、その層位は錯綜した形でしか認識できないため、流路の新旧を平面・断面から捉えることは不可能であった。Ⅲ層を除去し、基盤層となるⅣ層を検出する段階になると、Ⅳ層を削り込む形で流路の痕跡が確認されている。平成8・9年に行われた東隣の調査区（以下H8・9調査区）では、同じくⅣ層を浸食した弥生時代中期～古墳時代後期とみられる流路を3条、近世とみられる流路を1条確認しているが、その一部は西側に隣接する今回調査区（以下H20調査区）でも連続する形で検出されている。

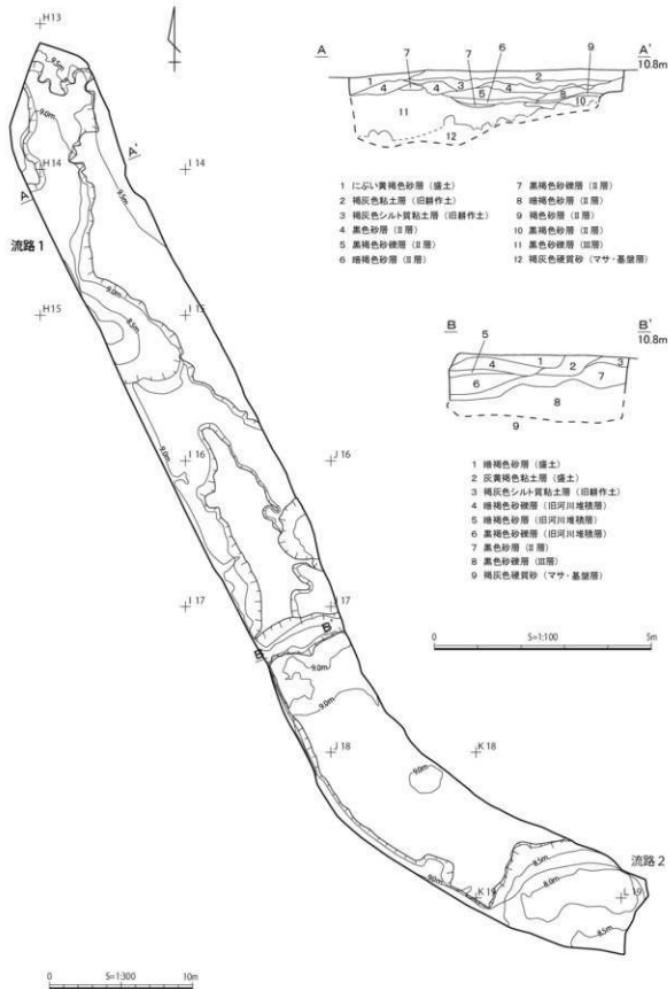
調査区北端のH13グリッド付近からI16グリッド付近にかけて蛇行する流路1が検出されており、全体としては30～50cm程度の深いものであった。H15グリッド付近にⅣ層上面との比高差が1m近くにもなる窪み状の窪みも見受けられ、流路内での一様ではない水流の様子を窺うことができる。これら流路は北端に始まり、蛇行しつつ東方向へと抜けると考えられ、H8・9調査区方向で検出された東西方向の流路へと連続する可能性がある。Ⅳ層を基盤とした微高堤を挟み、K18～19グリッドにかけて比高差80cm～1mのやや深い流路2が検出されている。ほぼ東西方向を向くこの流路はH8・9調査区南端で検出された流路1と連続する可能性がある。

これら流路は手乱遺跡における最古段階の流路と考えられ、下層において出土する弥生時代～古墳時代の遺物群から古墳時代頃の流路である可能性が高い。ただし、上記のように流路上層のⅢ層中層以上では近世までの遺物群が混在することから、近世以降の流路によって堆積層が削平され再堆積していく状況が窺える。

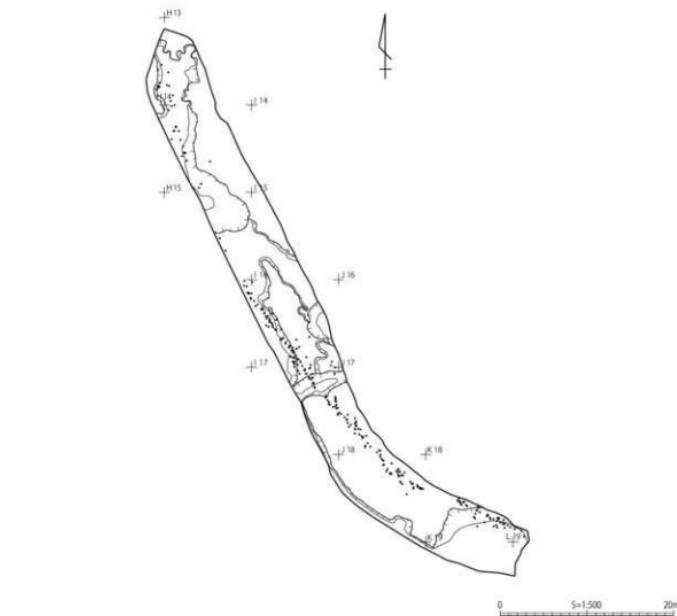
#### (2) 杭列

これまでの御殿川流域遺跡群の調査同様、今回の調査でも多くの杭列を検出している（第5図）。杭の設置された時期は先端がⅢ層に及ぶ古い段階のものもあるが、多くはⅡ層堆積後に設置されたものである。隣接するH8・9調査区ではH20調査区側となる西側付近で検出されているが、散在する状況であったため杭列の多くはH20調査区側に設置されたといえる。杭はH16グリッド北西から南東方向に向かって調査区に沿う形で列をして検出されている。これまで実施された調査成果によれば、これら杭列は護岸あるいは水流制御のために川岸付近に沿って打ち込まれている可能性が高い（静文研1993・1995）、一時期の河川が杭列の西側にあったことが想定される。杭列の西側は第4図B-B'土層図が示すように、Ⅱ層を削り込む形で旧河川堆積層の堆積が確認され、Ⅱ層自体が残っていない部分もある。杭列はこの旧河川に伴って設置されたもので、杭列は旧河川の東側川岸になっていたとみられる。旧河道はⅡ層を削り込むことから、近世よりも新しい時期の流路であり、現御殿川以前の流路の一部であったことがわかる。

#### (3) 御殿川・手乱川合流地点の調査



第4図 手乱遺跡調査区全体図



第5図 手乱跡杭検出状況図



第6図 御殿川・手乱川合流地点調査区全体図

御殿川と手乱川の合流地点については平成23年度に静岡県教育委員会文化財保護課による本発掘調査及び工事立会いが行われた。本発掘調査は合流地点を1区と2区に分割して実施している（第6図）。

1区、2区ともに現護岸施設の盛土が地表下3~4mまで確認され、その直下に遺物を含む河川堆積層である暗褐色砂礫層が確認されている。これは基本土層Ⅲ層に相当する遺物包含層とみられ、Ⅱ層に相当する砂層は確認されていない。暗褐色砂礫層は1区よりも2区側の方が厚く堆積しており、Ⅲ層が堆積する以前の流路は手乱川の川床の方が低いため、御殿川との合流部は灘み状となっていた可能性が高い。遺物は弥生時代~近世にかけての土器・陶磁器が出土しているが、暗褐色砂礫層下層は古墳時代までの遺物に限られるため、古墳時代頃までに堆積したもので、その後の流路の影響を受けていないと考えられる。なお、本調査区に隣接する現手乱川と御殿川川床部分については工事立会いによる調査が行われ、残存状況は不明瞭ながら包含層である暗褐色砂礫層の一部が確認されている。

## 第2節 出土遺物

### （1）土器・陶磁器（第7~14図）

**縄文土器・弥生土器・土師器** 1・2は縄文晩期~弥生前期初頭頃に位置づけられる。1は壺で、外面の調整は不明瞭である。2は深鉢で、口縁外面に2条の沈線が巡り、口縁端部は波状とみられる。3は弥生中期中葉の細頸の壺口縁で、縦位の縄文が施される。4・5・8は弥生後期~古墳前期の壺口縁で、5は内外面ともに比較的丁寧に磨かれる。6は完形の弥生後期後半の壺である。体部下半は丁寧なミガキ調整、頸部から口縁にかけてはハケ調整によって仕上げられる。7は古墳前期の壺口縁で、外面はハケ調整の後、ミガキ調整がなされる。9~11は大廓様式とされる大型の複合口縁壺である。11は口縁内面端部に突帯を巡らせる特徴的な形態をなす。12・13は弥生後期の壺頭部、14は二重口縁壺の頭部である。15~18は弥生中期中~後葉の壺の肩部で、いずれもヘラ描きの文様が施される。19は弥生後期~古墳前期に北定される壺で、外面はミガキ、内面はハケ調整が施される。21の壺底部は木葉痕を模した文様がみられる。22~25は古墳前期の高杯の坏部、28~30は脚部である。22・23はハケ調整の後、縦位のミガキ調整が顕著にみられ、22は体部に焼成後の穿孔がなされる。26・27は器台で、26は内面に放射状のミガキ調整がなされ、27の底部中央には穿孔がみられる。31は弥生後期の所産とみられる高杯の脚部で、外面は丁寧にミガキ調整がなされる。32~34は弥生後期~古墳前期の壺口縁部で、いずれも内外面にはハケ調整が顕著にみられる。35・36はS字口縁壺の口縁部である。外面は縦位のハケ調整がなされ、内面には指頭圧痕が認められる。37~41は弥生後期~古墳前期の台付壺の脚部で、37~39は外面とともにハケ調整が顕著である。

42~45は古墳時代中期の小型壺である。体部が半球状となり、平底となる形態を持つ。44は無頸形態となる小型壺である。いずれも口縁部は横ナデ調整がなされ、体部の調整は不明瞭であるが、42はミガキ調整がなされている。46~55は古墳時代中~後期の坏である。46は底部に木葉痕が残り、口縁部が内湾する駿豆型とされる坏である。内面には放射状のミガキ調整がなされ、外面は横方向にミガキ調整がなされるが、摩滅により不明瞭である。47・51~53は須恵器模倣坏で、47は坏身、51~53は坏蓋を模倣した坏とされるものである。51・53は黒色、52は赤色処理された後に丁寧にミガキ処理されている。また53は対面した口縁部を割り欠いていることから、何らかの祭祀的行為に伴う可能性もある。50・54・55はやや深めの形態となり、50・55は口縁端部が外側に引き出され、54は強い横ナデで口縁部に段を作りだして内湾する。56は浅い丸底の坏で、口径9.4cmと小振りである。内外面の摩減が激しく調整は不明である。57・58は手捏ねの坏である。58は指頭痕が残る粗いつくりで、53の坏と同様に対面する口縁

部を割り欠いている。59・60は古墳時代中期の高坏の坏部である。59はハケ調整、60はミガキ調整が外面に施される。61・62・64・65は古墳後期の壺、63は壺である。61は全体にハケ調整がなされ、口縁部はハケ調整の後に横ナデ調整される。62は口縁内部が肥厚する駿東窯で、全体にハケ調整がなされる。63・64はかなり硬質に焼成され、赤褐色を呈する。66は甲斐型坏とされる坏で、底部から体部外面にかけてヘラ削りされ、底部には糸切り痕が残る。内面には放射状のミガキ調整がみられる。67~69は灰釉陶器を模倣した有台坏である。底部は糸切り痕が残り、68は内部の一部にミガキ調整がみられる。70~72は平安時代の壺口縁部で、清瀬型壺とされるものである。

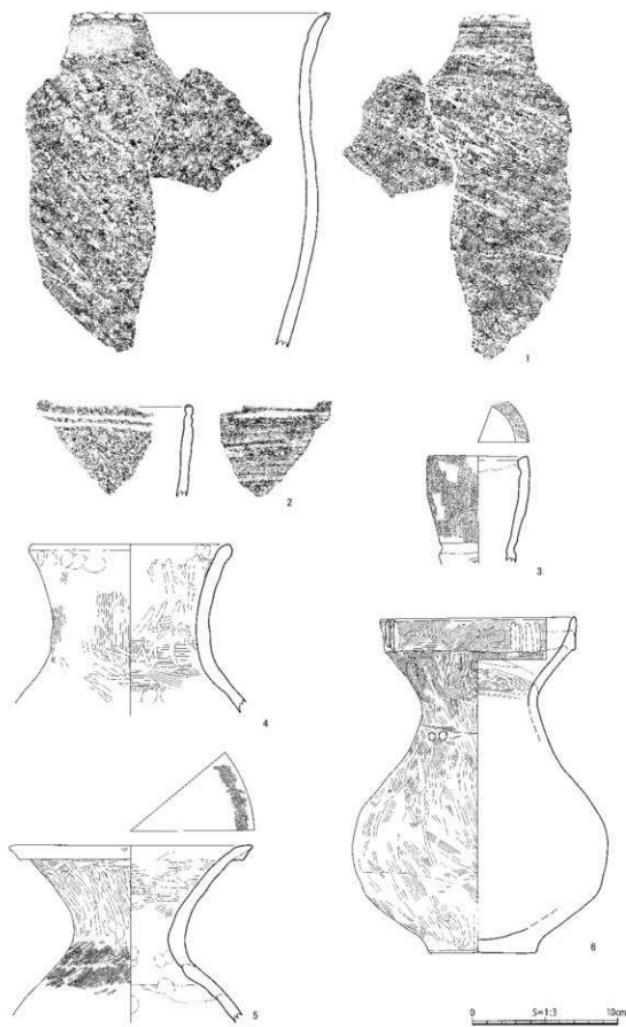
**須恵器・灰釉陶器・山茶碗** 73・74は須恵器坏蓋である。73は頂部外面が回転ヘラ削りされ、口縁部は内溝する。7世紀前葉に位置づけられよう。74は頂部に宝珠つまみがつく蓋で、8世紀代のものであろう。75~79は坏身で、かえりのつく蓋坏である。75・76は長い口縁がやや内傾しつつ立ち上がり、端部に面を持つ古手の坏である。75はT字47型式並行期に位置づけられ、体部外面に焼成前のヘラ記号らしきものがみられる。76はT字10型式並行期のものとみられる。77~79はかえり部が短く内傾し、特に78は口径が小さくなる。6世紀末~7世紀前葉の製品であろう。81は完形の有台坏である。高台内に判読不明の墨書きがみられる。8世紀前半頃の製品であろう。80・82は高坏で、7世紀中頃のものであろう。83は脚付長頭壺で、頭部から口縁部と脚部が欠損している。7世紀前葉頃の製品であろう。84は器台脚部とみられ、体部に放射状、裾部に斜格子状のヘラ書きによる文様が施される。同様の遺物がH8・9調査区でも出土しており、同一個体の可能性もある。85は大型壺口縁である。7世紀代の製品であろう。86は灰釉陶器碗である。底部内面にはハケ塗りの灰釉が施される。K14窯式並行期に位置づけられる製品であろう。87は片口鉢の口縁部で、12世紀代の東遠江産の製品とみられる。

**陶磁器・土師質土器** 88~94は貿易陶磁である。88は青白磁梅瓶の体部である。89~91・93・94は青磁碗である。89は内面にヘラ書きの劃花文が施される青磁碗A類（原1999）、90は体部外面に鏽迹弁文が入るB1類に位置づけられる製品で、94はB1類の底部であろう。13世紀中葉~14世紀前半に位置づけられよう。91は無文の端反碗で青磁碗D類とされるものである。93はその青磁碗D類の底部とみられ、14世紀後半~15世紀前半の所産とされる。

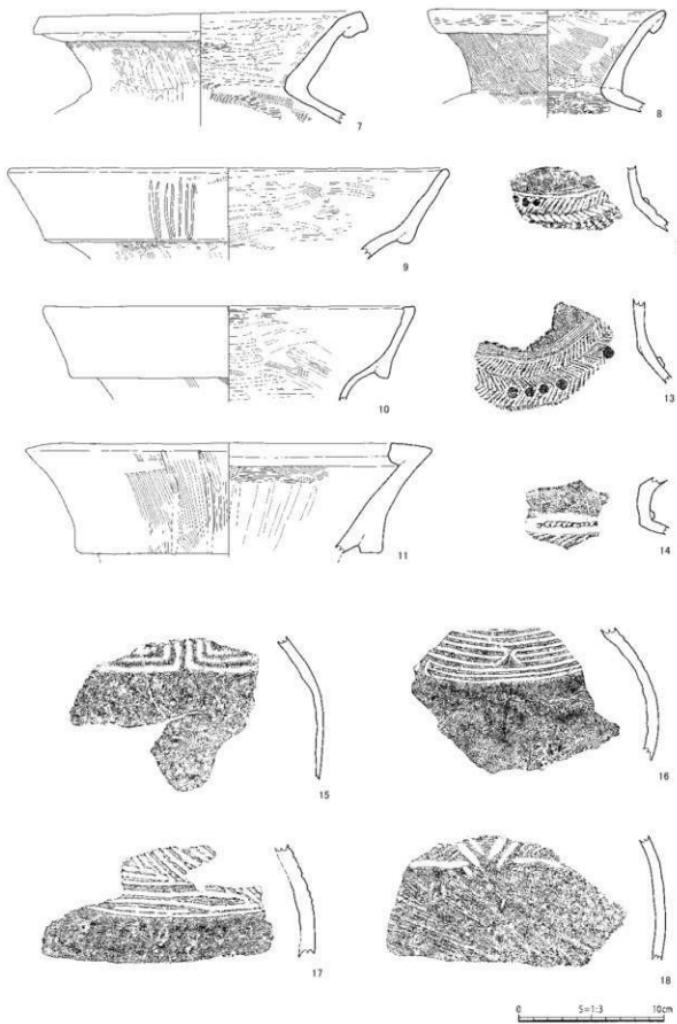
95~100は瀬戸美濃産施釉陶器である。95は灰釉丸皿で、口縁部がヒダ状となるいわゆる巻皿である。大窯3段階の製品であろう。96は鉢皿で、端部には灰釉が掛かる。古瀬戸後IV期の製品であろう。97は灰釉端反皿で、大窯2段階の製品であろう。98は灰釉縁小皿で、古瀬戸後IV期の製品である。99は天目茶碗、100は擂鉢である。いずれも古瀬戸後IV期新段階の製品である。101は常滑産の片口鉢である。口縁端部が内外に伸びる常滑10型式の製品であろう。102~105はかわらけである。いずれもロクロ成形であり、103は底部に明瞭な糸切痕が残る。104は底部が厚く、小さくなる。古代末に遡る可能性もある。105は底部内面に強いナデが渦巻き状にみられ、ススが付着する。

106~118は近世施釉陶器で、111・113が志戸呂瀬戸産である以外は瀬戸美濃産である。106は灰釉反碗で、17世紀中頃の製品とみられる。107~110は灰釉小杯である。107の底部には判読不明の墨書きがみられる。111は鉄釉小坏で、高台内に「志戸呂」印がみられる。112は反皿、113~115は丸皿である。113が鉄釉以外、いずれも灰釉掛けとなる。113は底部内面が無施釉となる。17世紀代の製品であろう。116は灰釉仏龕器である。117・118は灰釉利刃で、117は19世紀前半、118は18世紀後葉の製品であろう。

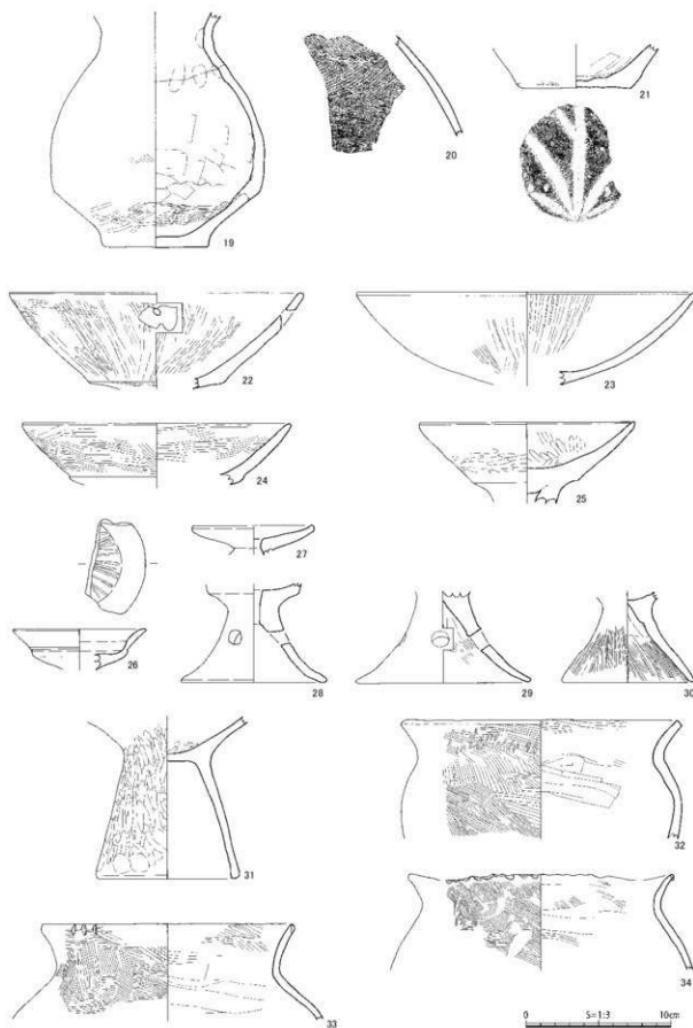
119~126は肥前產器である。119は染付端反碗の蓋で19世紀前半の製品であろう。120~122は18世紀後半頃の染付筒形碗で、122は青磁染付である。120の高台内には湯福銘がみられる。123は染付端反碗で、19世紀前半のものである。底部内面に「天」を互い違いにした錦を入れる。124は染付廣東碗で19世紀前葉の製品であろう。125は染付薺麦猪口で、体部外面には蜻唐草文が描かれる。19世紀前半の製品である。126の染付瓶は19世紀前半の製品である。127の仏龕器は18世紀代のものであろう。



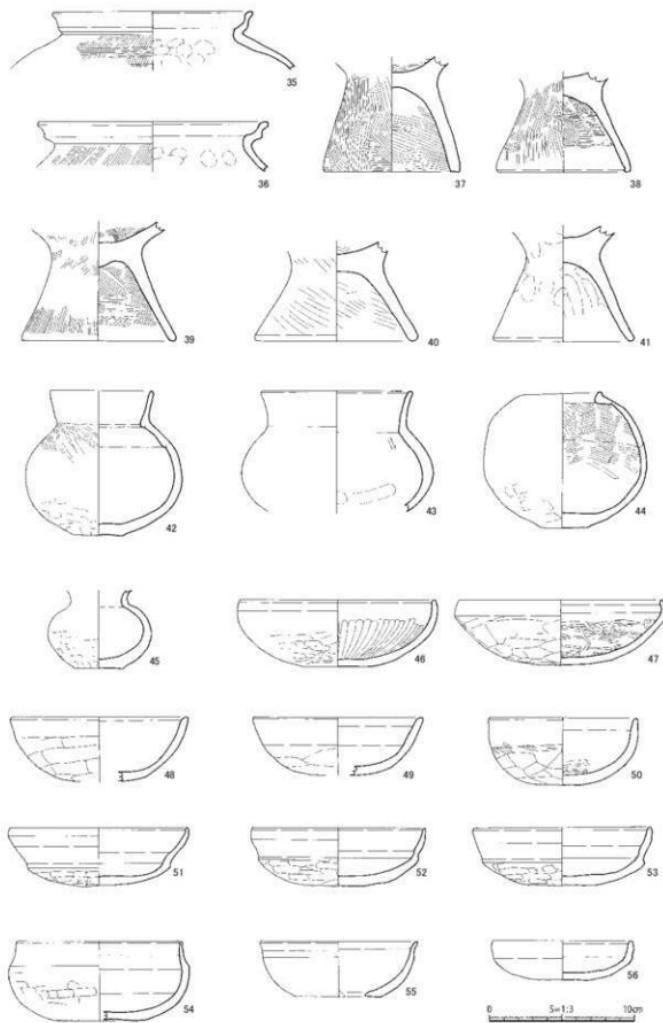
第7図 手乱遺跡出土遺物実測図1（土器）



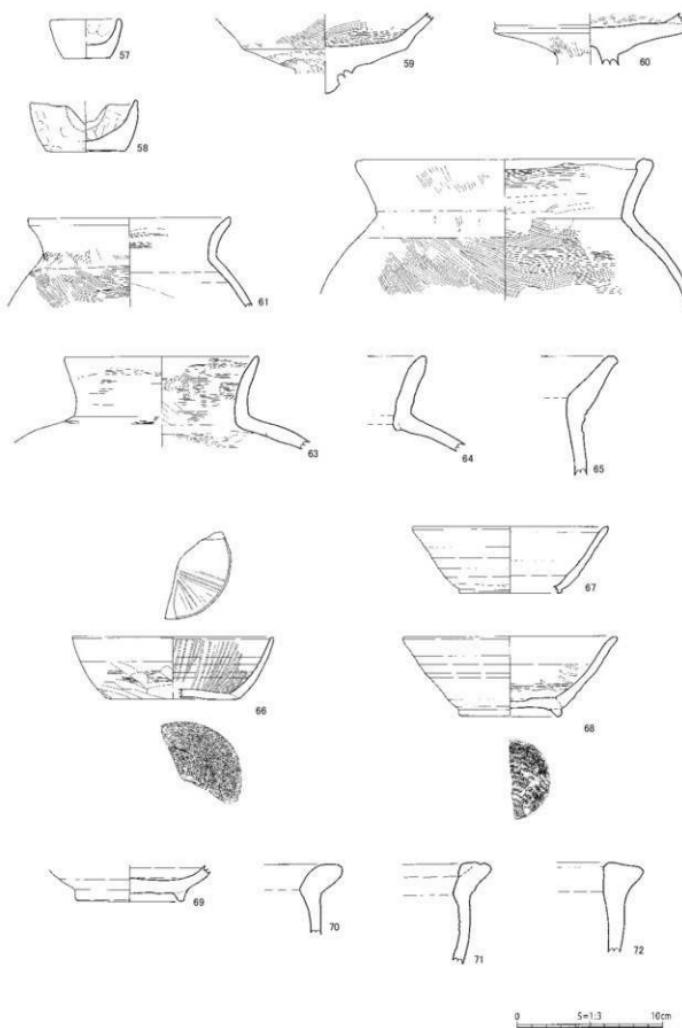
第8図 手亂遺跡出土遺物実測図2（土器）



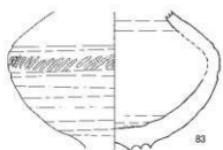
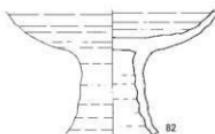
第9図 手乱遺跡出土遺物実測図3（土器）



第10図 手乱遺跡出土遺物実測図4（土器）

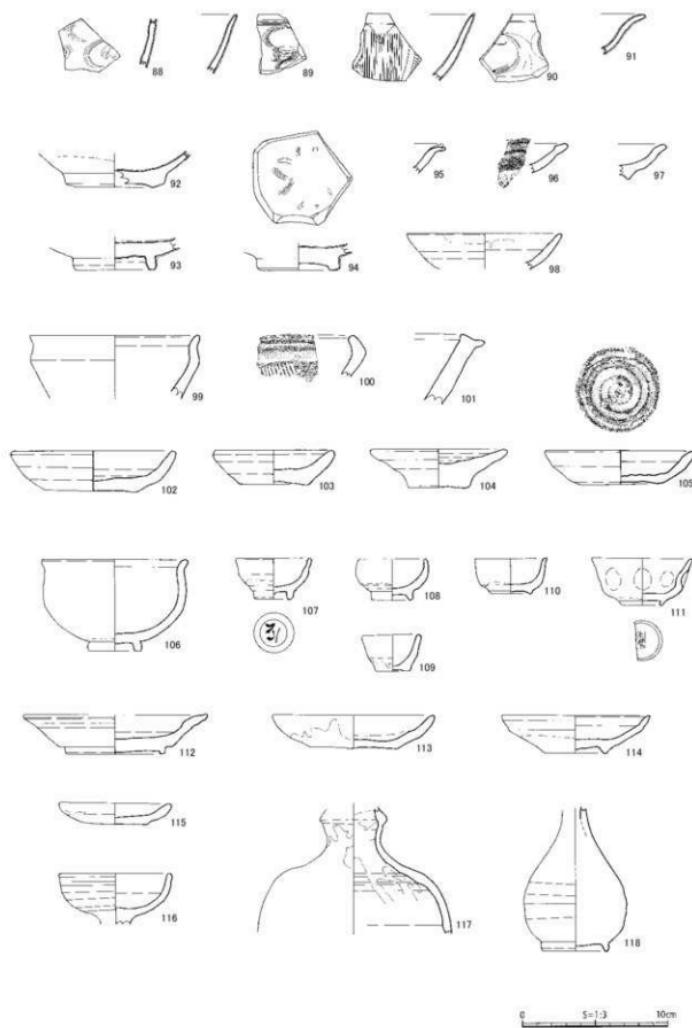


第11図 手乱遺跡出土遺物実測図5（土器）

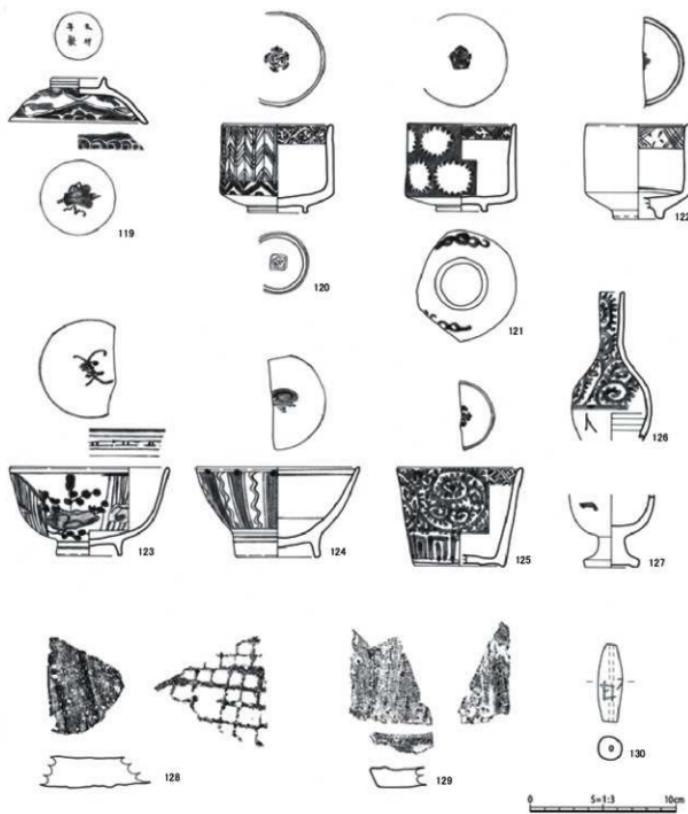


0 S=1:3 10cm

第12図 手乱遺跡出土遺物実測図6（土器）



第13図 手乱遺跡出土遺物実測図7（陶器）



第14図 手造跡出土遺物実測図8 (陶磁器・瓦・土製品)

第2表 手乱遺跡出土土器・陶磁器一覧表

国	報告書 番号	遺構 タリット	層位	種別	部類	計測値(cm)			色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大深				
7	1	I 18	Ⅲ	繩文-弥生 土器	深鉢	-	-	-	(23.1) 内 2.5V 4.1 黄灰 外 2.5V 4.1 黄灰	口縁部~側部	破片	
	2	J 19	田河川 堆積層	繩文-弥生 土器	深鉢	-	-	-	内 2.5V 5.2 黄灰 外 2.5V 6.1 黄灰	口縁部	破片	
3	K 19	Ⅲ	弥生土器	壺	(6.8)	-	-	(7.4)	内 2.5V 4.4 12.4cm 中型 外 2.5V 5.4 12.4cm 小型	口縁部~側部	20%	
4	I 17	Ⅲ	弥生土器	壺	(13.4)	-	-	(11.7)	内 BOYR 5.3 にぶい黄褐色 外 2.5V 5.4 にぶい褐色	口縁部~側部	20%	
5	K 20	Ⅲ	弥生土器	壺	(16.6)	-	-	(12.3)	内 BOYR 5.3 にぶい黄褐色 外 2.5V 5.4 にぶい黄褐色	口縁部~側部	30%	
6	L 19	Ⅲ	弥生土器	壺	13.2	7.1	17.5	23.2	内 BOYR 5.7 にぶい黄褐色 外 2.5V 5.1 黄灰	完形		
8	7	J 19 K 20	田河川堆積層	土器群	壺	22.0	-	-	(7.8) 内 2.5V 6.0 黄白 外 2.5V 6.0 黄白	口縁部	90%	
	8	I 18	Ⅲ	土器群	壺	(16.3)	-	-	(6.8) 内 2.5V 6.1 にぶい褐色 外 2.5V 6.1 にぶい褐色	口縁部~側部	10%	
9	K 19	-	土器群	壺	(30.0)	-	-	(6.2) 内 BOYR 4.3 にぶい黄褐色 外 2.5V 4.3 にぶい黄褐色	口縁部			
10	K 19	-	土器群	壺	(25.4)	-	-	(6.6) 内 2.5V 6.3 12.5cm 中型 外 2.5V 7.3 12.5cm 中型	口縁部	20%		
11	-	清水溝	土器群	壺	(22.4)	-	(28.0)	(7.6) 内 BOYR 5.2 灰白 外 BOYR 5.2 灰白	口縁部	20%		
12	I 19 K 20	-	弥生土器	壺	-	-	-	(4.6) 内 BOYR 5.3 黄褐色 外 2.5V 2.3 にぶい黄褐色	頭部~側部	破片		
13	J 19	田河川 堆積層	弥生土器	壺	-	-	-	(5.8) 内 BOYR 4.1 細底 外 BOYR 4.1 細底	頭部~側部	破片		
14	K 20	Ⅲ	土器群	壺	-	-	-	(3.9) 内 BOYR 6.0 にぶい褐色 外 2.5V 5.4 にぶい褐色	頭部	破片		
15	J 18	Ⅲ	弥生土器	壺	-	-	-	(10.0) 内 BOYR 5.4 にぶい褐色 外 2.5V 6.2 灰オーブル	頭部	破片		
16	I 17	Ⅲ	弥生土器	壺	-	-	-	(9.5) 内 BOYR 6.2 にぶい黄褐色 外 2.5V 6.2 灰白	側部	破片		
17	J 18	-	弥生土器	壺	-	-	-	(7.8) 内 BOYR 6.2 にぶい黄褐色 外 2.5V 6.2 灰白	側部	破片		
18	I 18	Ⅲ	弥生土器	壺	-	-	-	(8.6) 内 2.5V 5.1 黑	側部	破片		
9	19	合流地点 段々塚	土器群	壺	-	-	-	(16.2) 内 2.5V 6.4 にぶい褐色 外 2.5V 5.3 にぶい褐色	側部~底部	50%		
20	J 19	田河川 堆積層	土器群	壺	-	-	-	(3.9) 内 BOYR 5.1 にぶい黄褐色	側部	破片		
21	合流地点 砂礫帯	土器群	壺	高杯	-	7.6	-	(2.7) 内 2.5V 5.3 にぶい褐色	瓶部	70%		
	22	J 19	Ⅲ	土器群	高杯	(20.1)	-	-	(6.7) 内 2.5V 5.4 にぶい褐色 外 2.5V 5.4 にぶい褐色	口縁部~全体	40%	
	23	H 15	Ⅲ	土器群	高杯	(23.2)	-	-	(6.4) 内 BOYR 6.4 にぶい褐色 外 2.5V 6.4 にぶい褐色	口縁部~全体	10%	
24	合流地点 段々塚	土器群	高杯	(18.3)	-	-	(4.2) 内 BOYR 6.4 にぶい褐色 外 2.5V 6.4 にぶい褐色	環部	30%			
25	I 17	Ⅲ	土器群	高杯	14.6	-	-	(5.7) 内 2.5V 6.4 にぶい褐色 外 2.5V 6.4 にぶい褐色	上半部~底部	30%		
26	J 19	Ⅲ	土器群	台舟	(9.2)	-	-	(2.8) 内 N 5 黑	口縁部~全体	20%		
27	J 19	-	土器群	台舟	(8.2)	-	-	(2.0) 内 2.5V 6.4 にぶい褐色 外 2.5V 6.4 にぶい褐色	口縁部~側部	70%		
28	I 16	Ⅲ	土器群	高杯	-	(30.0)	-	(6.8) 内 2.5V 6.4 12.5cm 中型 外 2.5V 6.4 12.5cm 中型	側部~底部	20%		
29	H 16	Ⅲ	土器群	高杯	-	(11.6)	-	(6.2) 内 2.5V 5.4 にぶい褐色 外 2.5V 5.4 にぶい褐色	側部	60%		
30	H 15	Ⅲ	土器群	高杯	-	(8.9)	-	(6.2) 内 2.5V 6.4 にぶい褐色 外 2.5V 6.4 にぶい褐色	側部	50%		
31	J 19	Ⅲ	土器群	高杯	-	(9.4)	-	(11.2) 内 2.5V 5.4 にぶい褐色 外 2.5V 5.4 にぶい褐色	側部~側部下半	20%		
32	K 19	Ⅲ	土器群	内付甕	(18.7)	-	(19.3)	(8.2) 内 BOYR 4.3 にぶい黄褐色 外 BOYR 4.2 にぶい黄褐色	口縁部~側部	20%		
33	H 16	Ⅲ	土器群	内付甕	(17.2)	-	-	(6.6) 内 2.5V 4.4 黑 外 2.5V 4.4 黑	口縁部	20%		
34	J 19	-	土器群	内付甕	(18.0)	-	-	(6.6) 内 2.5V 6.1 黑 外 2.5V 5.1 細底	口縁部	20%		
10	35	H 15	-	土器群	S字甕	(13.6)	-	-	(4.0) 内 2.5V 6.1 黄灰 外 2.5V 6.1 黄灰	口縁部~側部上部	10%	
	36	J 18	-	土器群	S字甕	(15.6)	-	-	(3.4) 内 2.5V 4.4 黑 外 2.5V 4.4 黑	口縁部~側部	30%	
37	H 15	Ⅲ	土器群	内付甕	-	9.4	-	(7.9) 内 2.5V 6.4 にぶい黄褐色 外 2.5V 6.4 にぶい黄褐色	側部	100%		
38	合流地点 段々塚	土器群	台舟	内付甕	(9.2)	-	(6.7)	内 2.5V 5.2 黄灰 外 2.5V 5.2 黄灰	側部	50%		
39	K 20	Ⅲ	土器群	内付甕	-	(10.4)	-	(8.2) 内 2.5V 4.3 にぶい褐色 外 2.5V 4.3 にぶい褐色	側部	60%		
40	K 19	Ⅲ	土器群	内付甕	-	10.8	-	(6.9) 内 2.5V 5.4 にぶい褐色 外 2.5V 5.4 にぶい褐色	側部	100%		
41	J 19	Ⅲ	土器群	内付甕	-	(9.0)	-	(8.0) 内 2.5V 5.4 にぶい褐色 外 2.5V 5.4 にぶい褐色	側部	30%		
42	K 19	Ⅲ	土器群	小盤	(7.0)	33	-	10.0 内 BOYR 4.2 にぶい黄褐色 外 BOYR 4.2 にぶい黄褐色	口縁部~側部	20%		
43	-	清水溝	土器群	小盤	(10.2)	-	(13.2)	(8.3) 内 BOYR 4.2 にぶい黄褐色 外 BOYR 4.2 にぶい黄褐色	口縁部~側部	10%		
44	K 19	Ⅲ	土器群	小盤	5.2	3.0	11.2	9.4 内 2.5V 5.6 明水面 外 2.5V 5.6 明水面	口縁部~側部	90%		

団	報告書番号	遺構 タリット	部位	種別	器種	計測値 (cm)			色調	部位	残存率	備考	
						口径	底径	最大深					
10	45	I16	Ⅲ	土器	小型壺	-	3.3	-	(5.4)	内:BYR 4/4 黄褐色 外:SYR 4/4 黄褐色	底部	100%	
	46	K20 L19.20	-	土器	壺	(13.3)	-	(13.8)	4.6	内:BYR 4/3 にぶい黄褐色 外:SYR 6/3 にぶい褐色	口縁部~底部	40%	
	47	K19	-	土器	壺	(14.0)	-	(14.6)	4.5	内:SYR 4/3 にぶい褐色 外:SYR 4/3 にぶい褐色	口縁部~底部	50%	
	48	J19	-	土器	壺	(12.0)	-	-	(4.4)	内:2 SY 4/1 黄褐色 外:SY 4/1 黄褐色	口縁部~体下部	10%	
	49	K19	-	土器	壺	(11.6)	-	-	(4.0)	内:SYR 6/2 にぶい褐色 外:SYR 6/2 にぶい褐色	口縁部~体下部	20%	
	50	K20 L19.20	-	土器	壺	(10.0)	-	-	4.6	内:SYR 5/4 にぶい褐色 外:SYR 6/6 棕	口縁部~底部	80%	
	51	I17	Ⅲ	土器	壺	(12.2)	-	-	4.0	内:BYR 1/1 黄褐色 外:SYR 1/1 黄褐色	口縁部~底部	30%	黒色
	52	I16	Ⅲ	土器	壺	11.8	-	-	4.6	内:2 SYR 4/6 黄褐色 外:SYR 3/4 暗赤褐色	口縁部~底部	70%	赤色
	53	I17	Ⅲ	土器	壺	12.1	-	-	4.1	内:BYR 1/1 黄褐色 外:SY 6/2 暗オーラープ	口縁部~底部	60%	黒色
	54	I16	-	土器	壺	(11.2)	-	(12.0)	5.5	内:SYR 5/5 棕~明赤褐色 外:SYR 6/2 暗オーラープ	口縁部~底部	20%	
11	55	H16	-	土器	壺	(10.7)	5.8	-	3.8	内:SYR 5/5 棕~明赤褐色 外:SYR 6/6 暗赤褐色	口縁部~底部	20%	
	56	H15	Ⅲ	土器	壺	9.4	-	-	2.7	内:SYR 5/5 棕~明赤褐色 外:SYR 6/6 暗赤褐色	口縁部~底部	20%	完全
	57	K19	-	土器	壺 (手付)	4.7	3.1	-	2.7	内:SYR 5/6 明褐色 外:SYR 5/6 明褐色	口縁部~底部	10%	
	58	K20 L19.20	-	土器	壺 (手付)	7.3	5.4	-	3.5	内:SYR 5/5 黑褐色 外:SYR 5/2 黑褐色	口縁部~底部	完全	
	59	J19	Ⅲ	土器	高壺	-	-	-	(5.65)	内:SYR 4/5.5 にぶい褐色 外:SYR 4/5.5 にぶい褐色	底部	30%	
	60	H17	Ⅲ	土器	高壺	-	-	-	(3.60)	内:SYR 4.5 にぶい褐色~米褐色 外:SYR 4.5 にぶい褐色~米褐色	底部	40%	
	61	I17	Ⅲ	土器	壺	(13.8)	-	-	(6.2)	内:BYR 4/4 にぶい黃褐色 外:BYR 4/3 にぶい黃褐色	口縁部	40%	
	62	I17	Ⅲ	土器	壺	(19.2)	-	-	(9.6)	内:SYR 5/5 黑褐色 外:SYR 5/5 黑褐色	口縁部	20%	
	63	G14	Ⅲ	土器	壺	(13.2)	-	-	(6.4)	内:BYR 4/4 にぶい黃褐色 外:BYR 4/4 にぶい黃褐色	口縁部	30%	
	64	K19	-	土器	壺	-	-	-	(6.5)	内:SYR 4/5 黄褐色 外:SYR 4/5 黄褐色	口縁部	缺片	
12	65	J18	-	土器	壺	-	-	-	(8.3)	内:SYR 4/6 黑褐色 外:SYR 4/6 黑褐色	口縁部	缺片	
	66	K20	-	土器	壺	(13.7)	(9.1)	-	4.3	内:SYR 5/5 明褐色 外:SYR 5/5 明褐色	口縁部~底部	20%	
	67	L19.20	-	土器	壺	(13.3)	-	-	4.6	内:SYR 5/3 にぶい褐色 外:SYR 5/3 にぶい褐色	口縁部~底部	20%	
	68	K20 L19.20	-	土器	壺	(14.6)	-	-	5.5	内:SYR 4/6 黄褐色 外:SYR 4/6 黄褐色	口縁部~底部	30%	
	69	H15	Ⅲ	土器	壺	-	-	-	(2.5)	内:SYR 6/4 にぶい褐色 外:SYR 6/4 にぶい褐色	底部	100%	
	70	H15	Ⅲ	土器	清酒甌	-	-	-	(4.8)	内:SYR 4/4 黄褐色 外:SYR 4/4 黄褐色	口縁部	缺片	
	71	H15	-	土器	清酒甌	-	-	-	(7.0)	内:SYR 4/3 黄褐色 外:SYR 4/3 黄褐色	口縁部	缺片	
	72	K19	-	土器	清酒甌	-	-	-	(6.2)	内:SYR 4/4 黄褐色 外:SYR 4/4 黄褐色	口縁部	缺片	
	73	J19	出河川 苗穂層	埴造	壺	(10.4)	-	(10.8)	3.6	内:SY 5/1 黄褐色 外:N 5/9 黄	口縁部~天舟部	20%	
	74	H15	Ⅲ	埴造	壺	-	-	-	(2.3)	内:SY 6/2 黄 外:N 4/4 黄	天舟部	100%	
13	75	H16	Ⅲ	埴造	壺	10.8	-	13.0	5.1	内:SY 6/2 黄 外:N 4/4 黄	天舟部	完全	
	76	H14.15	Ⅲ	埴造	壺身	12.8	-	15.2	5.5	内:N 5/0 黄 外:N 5/0 黄	口縁部~底部	90%	
	77	I17	Ⅲ	埴造	壺身	10.2	-	12.4	4.2	内:N 6/0 黄 外:N 6/0 黄	口縁部~底部	90%	
	78	K19	-	埴造	壺身	8.5	-	10.7	2.9	内:N 5/ 黄 外:N 5/ 黄	口縁部~底部	60%	
	79	I17	Ⅲ	埴造	壺身	9.8	-	12.4	3.4	内:N 5/ 黄 外:SP 5/1 黑灰	口縁部~底部	60%	
	80	H16	Ⅲ	埴造	高壺	(14.7)	-	-	(4.2)	内:N 8/ 黄 外:N 6/ 黄	口縁部~底部	30%	
	81	J19	出河川 苗穂層	埴造	有台壺	17.0	-	-	5.8	内:SY 2/1 黄白 外:SY 2/1 黄白	口縁部~底部	90%	
	82	K19	Ⅲ	埴造	壺	-	-	-	(8.7)	内:SY 7/ 黄白	体部~脚部	40%	
	83	K19	Ⅲ	埴造	脚付 良造	-	-	-	14.5	内:N 7/ 黄白 外:N 7/ 黄白	脚部	100%	
	84	I18	Ⅲ	埴造	脚台	-	-	-	(7.1)	内:SYR 5/1 黑灰 外:SYR 4/2 黑灰	脚部	缺片	
14	85	J19	Ⅲ	埴造	壺	(23.5)	-	-	(7.6)	内:N 7/ 黄白 外:N 6/ 黄白	口縁部	20%	
	86	I17	-	灰陶壺	壺	-	-	-	(2.7)	内:2 SY 2/1 黄白 外:2 SY 2/1 黄白	体部	20%	
	87	K20 L19.20	-	中腹陶壺	片口壺	-	-	-	5.2	内:N 6/ 黄 外:N 6/ 黄	口縁部	缺片	
	88	J19	出河川 苗穂層	質済陶	青白磁	-	-	-	(9.3)	内:SY 2/1 白 外:SY 2/1 白	脚部	缺片	
	89	-	-	質済陶	青白磁	-	-	-	(9.3)	内:SY 5/3 陕西リーフ 外:SY 5/3 陕西リーフ	脚部	缺片	

回 数	報告書 番号	地図 番号	測定 部位	測定 器具	部材	計測値(cm)				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大深	部高				
13	90	-	-	貿易沟道	青磁磚	-	-	-	-	内: 60Y 6.2×4.9リーブ 外: 60Y 6.2×4.9リーブ灰	白縁部	破片	
	91	-	-	貿易沟道	青磁磚	-	-	-	-	内: 60Y 7.2×4.6 外: 60Y 7.2×4.6灰	白縁部	破片	
	92	-	-	貿易沟道	白磁磚	-	-	-	-	内: 60Y 7.2×4.6 外: 60Y 7.2×4.6灰	底部	20%	
	93	-	-	貿易沟道	青磁磚	-	-	-	-	内: 7.5Y 4.3 底リーブ 外: 7.5Y 4.3 底リーブ	底部	60%	
	94	-	-	貿易沟道	青磁磚	-	-	-	-	内: 60Y 6.2×4.9リーブ 外: 60Y 6.2×4.9リーブ灰	底部	100%	
	95	I 18	-	中井 施用沟	丸組(鉄製)	-	-	-	-	内: SY 8.2 底白 外: SY 8.2 底白	白縁部	破片	
	96	I 18	-	中井 施用沟	鉄組	-	-	-	-	内: SY 6.3 オリーブ 外: SY 6.3 オリーブ	白縁部	破片	
	H 14	-	中井 施用沟	逆反組	-	-	-	-	内: 7.5Y 7.2 底白 外: 7.5Y 7.2 底白	白縁部	破片		
	K 20	-	中井 施用沟	絲袖小組(10.4)	-	-	-	-	内: SY 6.3 オリーブ蓋 外: SY 6.3 オリーブ蓋	白縁部~全体	10%		
	J 19	-	中井 施用沟	天日井施	(11.6)	-	-	-	(4.3) 内: BOY R 1.7/1 黒 外: BOY R 1.7/1 黒	白縁部	10%		
100	J 18	田川市 田川町 田川 基盤層	中井 施用沟	露排	-	-	-	(2.2)	内: 7.5YR 2/1 黒 外: 7.5YR 2/1 黒	白縁部	破片		
101	I 18	田川市 田川町 田川 基盤層	中井 施用沟	片口詰	-	-	-	(4.8)	内: SYR 4/4 にじ半黒 外: SYR 5/6 明赤黒	白縁部	破片		
102	K 19	-	土壁 施用沟	かわらけ	11.0	-	-	2.8	内: SYR 7.4 にじくろ 外: SYR 7.4 にじくろ	白縁部~底部	60%		
103	K 19	-	土壁 施用沟	かわらけ	(8.0)	-	-	2.3	内: 7.5YR 6/1 黒にぶ 外: 7.5YR 6/1 黒にぶ	白縁部~底部	10%		
104	I, 19, 20	-	土壁 施用沟	かわらけ	(9.0) (4.1)	-	-	2.6	内: SYR 8/4 淡赤 外: SYR 8/4 淡赤	白縁部~高台	20%		
105	J 18	III	土壁 施用沟	かわらけ	10.0	-	-	2.4	内: SYR 6/4 黒にぶ 外: SYR 6/4 黒にぶ	白縁部~底部	90%		
106	K 19	-	近鉢 施用沟	反鋼	(9.8)	-	-	6.3	内: SY 7/2 底白 外: SY 7/2 底白	白縁部~底部	20%		
107	-	トレンチC	施用沟	小組	(4.8)	-	-	2.8	内: SY 8.2 底白 外: SY 8.2 底白	白縁部~底部	50%		
108	J 19	-	近鉢 施用沟	小組	4.6	-	-	2.8	内: SY 7/1 底白 外: SY 7/1 底白	完全			
109	-	津木溝	施用沟	小組	(5.0)	-	-	2.4	内: SY 7/2 底白 外: BOY R 1.7/1 黒	白縁部~底部	50%		
110	-	津木溝	施用沟	近鉢	小組	3.8	2.3	-	2.5	内: SY 6.2 底オリーブ 外: SY 6.2 底オリーブ	完全		
111	-	津木溝	施用沟	小組	(7.0)	-	-	3.2	内: SYR 2/2 黑 外: SYR 2/2 黑	白縁部~底部	30%		
112	-	トレンチ内	近鉢 施用沟	反組	(12.4)	-	-	2.7	内: SY 7/3 浅黄 外: SY 7/3 浅黄	白縁部~底部	20%		
113	J 19	-	近鉢 施用沟	丸組	11.0	-	-	2.3	内: SY 4/2 底オリーブ 外: SY 4/2 底オリーブ	完全			
114	K 20	-	近鉢 施用沟	丸組	(10.2)	-	-	2.6	内: SYR 2/2 黑 外: SYR 2/2 黑	白縁部~底部	20%		
115	K 19	-	近鉢 施用沟	丸組	7.3	4.4	-	1.4	内: SY 8/2 底白 外: SY 8/2 底白	白縁部~底部	80%		
116	J 19	田川市 田川町 田川 基盤層	近鉢 施用沟	仮断頭	(7.4)	-	-	(3.5)	内: SY 6.3 オリーブ蓋 外: SY 6.3 オリーブ蓋	白縁部~側部	50%		
117	J 19	田川市 田川町 田川 基盤層	近鉢 施用沟	利	-	-	-	(8.7)	内: SY 7/2 底白 外: SY 7/2 底白	側部	70%		
118	I 18	田川市 田川町 田川 基盤層	近鉢 施用沟	利	-	4.4	-	(9.8)	内: SY 7/6 明赤黒 外: SY 7/6 明赤黒	側部~底部	100%		
14	119	J 19	III	筋器 取付	蓋	9.6	-	-	3.1	内: BOY 8/1 黒 外: BOY 8/1 黒	白縁部~底部	80%	
	I 18	-	筋形鋼	筋形鋼	(7.4)	-	-	6.1	内: 2.5GY 7/1 底オリーブ 外: 2.5GY 7/1 底オリーブ	白縁部~底部	30%		
	121	-	津木溝	筋器 取付	筋形鋼	(7.4)	-	-	6.05	内: 7.5GY 8/1 基礎 外: 7.5GY 8/1 基礎	白縁部~底部	30%	
	122	-	津木溝	筋器 取付	筋形鋼	(6.9)	-	-	6.5	内: BOY 7/2 黒 外: BOY 7/2 黒	白縁部~底部	40%	
	123	-	田川市 田川町 田川 基盤層	筋器 取付	端反組	10.6	-	-	6.1	内: SY 7/1 明赤 外: SY 7/1 明赤	白縁部~底部	70%	
	I 18	-	筋器 取付	広楽頭	(11.2)	-	-	6.2	内: BOY 8/1 黒 外: BOY 8/1 黒	白縁部~底部	30%		
	K 20	-	筋器 取付	衛生頭	8.4	-	-	6.8	内: NK 8/1 黒 外: NK 8/1 黒	白縁部~底部	50%		
	126	J 19	III	筋器 取付	利	1.6	-	(5.4)	(10.2)	内: NK 8/1 黒 外: NK 8/1 黒	白縁部~底部	70%	
	J 19	田川市 田川町 田川 基盤層	筋器 取付	仮断頭	-	3.6	-	(5.1)	内: 2.5GY 7/1 底オリーブ 外: 2.5GY 7/1 底オリーブ	白縁部~台部	70%		
	H 14	-	瓦	瓦	-	-	-	1.8	内: SY 7/1 底白 外: SY 7/1 底白	破片			
	H 16	-	瓦	瓦	-	-	-	1.3	内: N/A 黄 外: N/A 黄	破片			
	130	瓦	-	土製品	全長	孔径 0.4	1.7	厚度 14.1a	7.5YR 5/6 明暗			完全	

**瓦・土製品** 128・129は平瓦の破片である。128にはタタキ痕、129の内面には布目が残る。130は土鍤である。

#### (2) 木製品 (第15~22図)

**農耕土木具** 1は平鍤の直柄鍤の身である。全体的に摩滅が進んでいるが、鍤先約10cmに刃を装着した痕跡がわずかに窺みとして残っている。

**服飾具** 2~8は下駄で、近世の製品とみられる。2・4~8は一本造りの連齒下駄である。4・5は全長13cm前後の小型品である。歯の下部はいずれも使用による摩滅が顕著にみられる。9はかんざしである。かなり流磨が激しく、表面の塗りの有無などは不明である。

**容器** 10~44は漆椀及び蓋で、近世の製品とみられる。10~13は蓋で、10・11は蒔絵と漆による蔓草文が描かれる。14~44は漆椀である。14~18はやや浅い形態をなし、三つ柏紋などの家紋や蔓草文を朱漆によって描く。19はやや箱形となる器形で、高台内には丸に一つ星一文字紋が朱で入れられる。20の高台内にも朱による文字か記号が書かれるが、判読できない。21は腰が張らずに立ち上がり、高台を削り出す形態の椀である。体部下半はいわゆるかつら目に仕上げられ、その部分は黒下地のみとなる。内外面は朱漆による鋸歯文状の文様が描かれる。23は丸に三階松紋、24は丸に桔梗紋が体部外面に朱漆によって描かれる。26・27・29・31は無文であるが、高台が高い特徴を持つもので、近世でも古い段階の製品とみられる。30・32~39は無文の漆椀で、30・32・33はやや深め、それ以外は浅い形態となる。37の高台内には判読不明の記号かと思われるものが書かれる。44は浅い皿状の製品であるが、あるいは蓋の可能性もある。45・46は内外面黒漆塗りされるが、底部に穿孔がみられる。47~49は合子である。47は筒状の体部中央と底部にかつら目がみられ、本来蓋が伴うため口縁部外面が削り込まれる。48・49は地点・層位とも隔たった箇所で出土しているが、形態と法量から同一個体あるいは同一の製品となる可能性が高い。50~52は皿で、いずれも木地のままである。51は内外面、52は底部内面に同心円状のかづら目が顕著に残る。

53~56は曲物等の蓋板である。56は組合せの蓋板で、中央に把手を取り付けた痕跡が残る。

**食事具** 58は折敷の底板である。端部中央に樋紐が残る。59は膳の側板である。欠損しているが、朱漆の上から黒漆を全面に塗布する。

**土木材** 60~66は杭である。流路の護岸で使用されたもので、いずれも丸太の先端を粗く尖らせた簡素なものである。

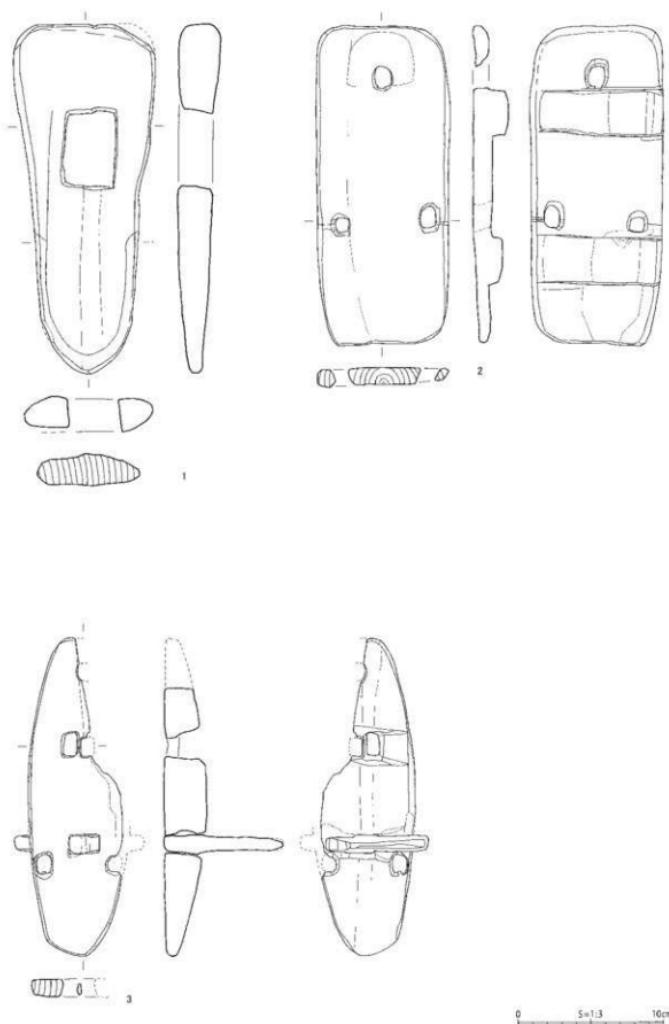
**用途不明品** 67・68は何らかの部材であろう。67は先端がホゾ状に加工され、中央にもホゾ穴がみられる。68は先端の角が落とされ、やはりホゾ穴がみられる。70は箱状に組み上がる製品の部材であろう。側面や底面には部材同士を固定する木釘が残存する。71も何らかの部材であるが、用途不明である。ホゾによって部材同士が組まれた状態で出土し、もう一方の端部は円形の穿孔が認められる。

#### (3) 石器・石製品 (第23図)

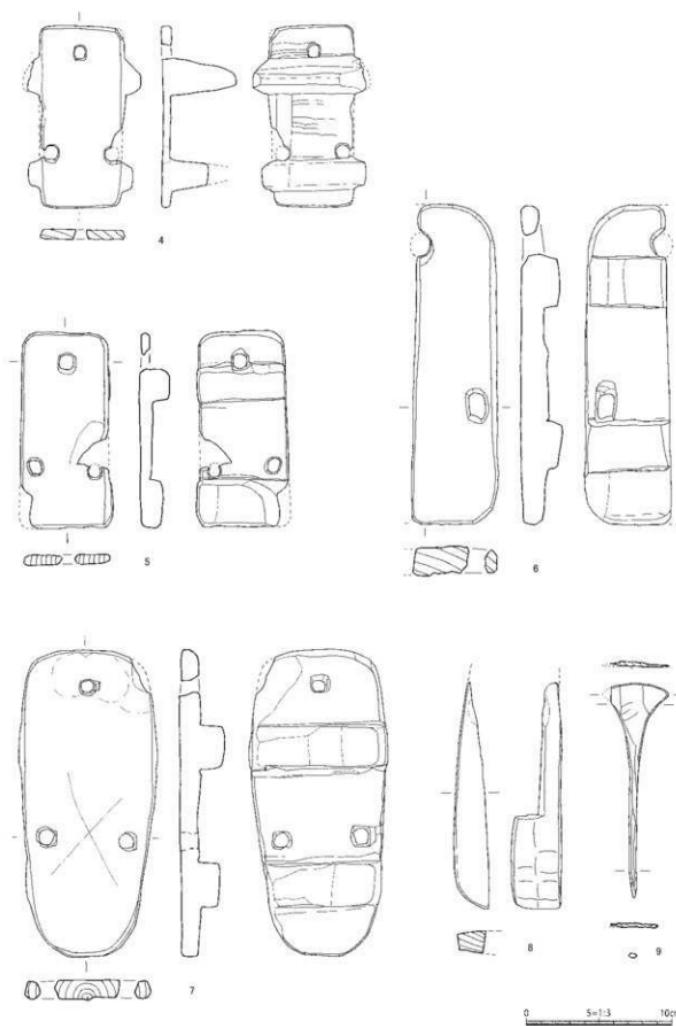
1・2は大型蛤刃の磨製石斧である。いずれも閃緑岩製で、敲打による成形後に刃先を中心に丁寧に磨かれる。2の刃先は使用による破損がみられる。3はガラス小玉である。青色を呈する。

#### (4) 金属製品 (第23図)

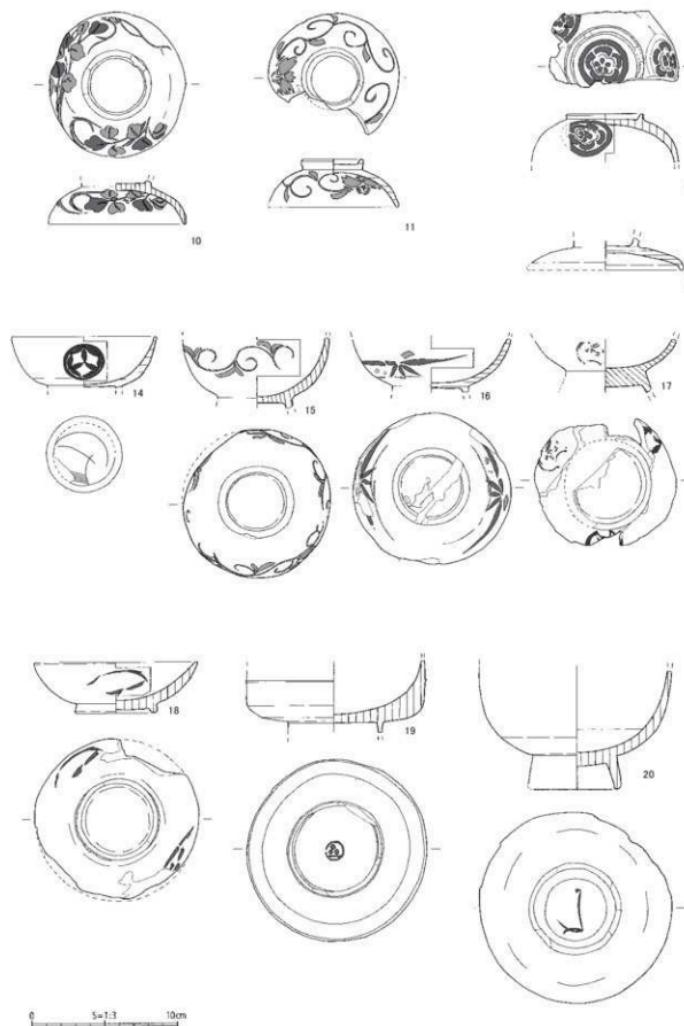
4~6はいずれも宋錢である。4は太平元寶(976~983年鑄造)、5は景祐元寶(初鑄1034年)である。6は篆書体の治平元寶(初鑄1064年)である。7は□□元寶とみえるが、判読不明である。



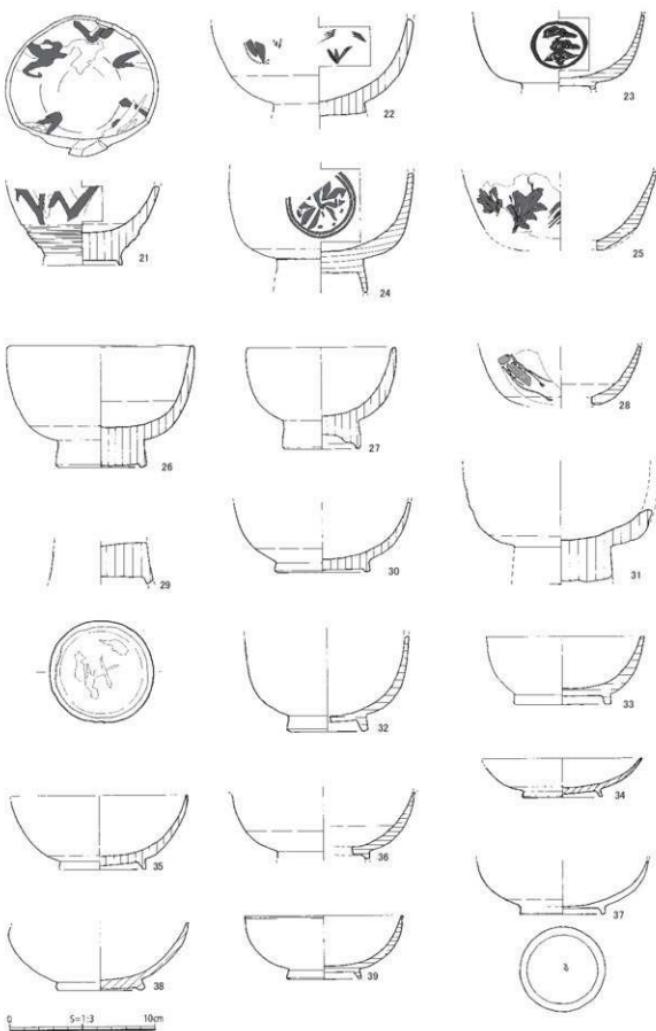
第15図 手乱遺跡出土遺物実測図9（木製品）



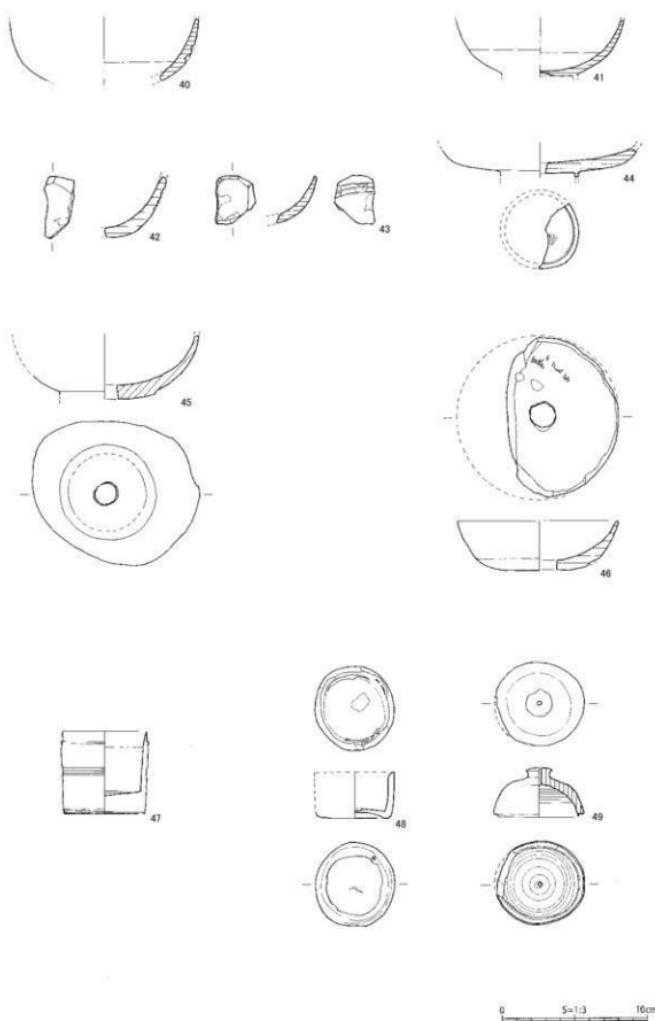
第16図 手乱遺跡出土遺物実測図10（木製品）



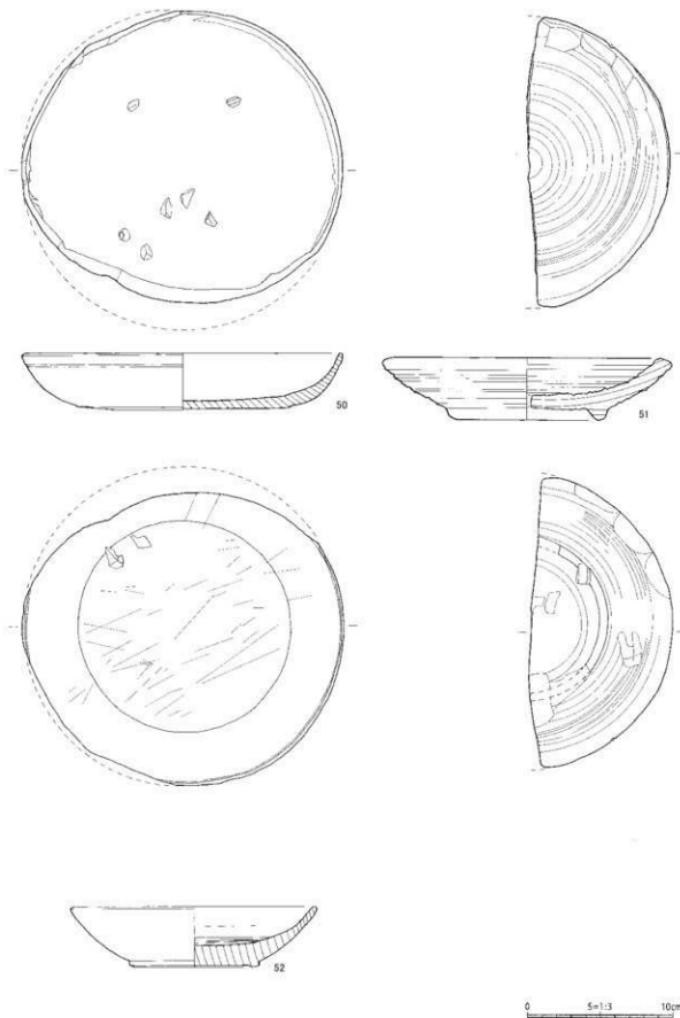
第17図 手乱遺跡出土遺物実測図11（木製品）



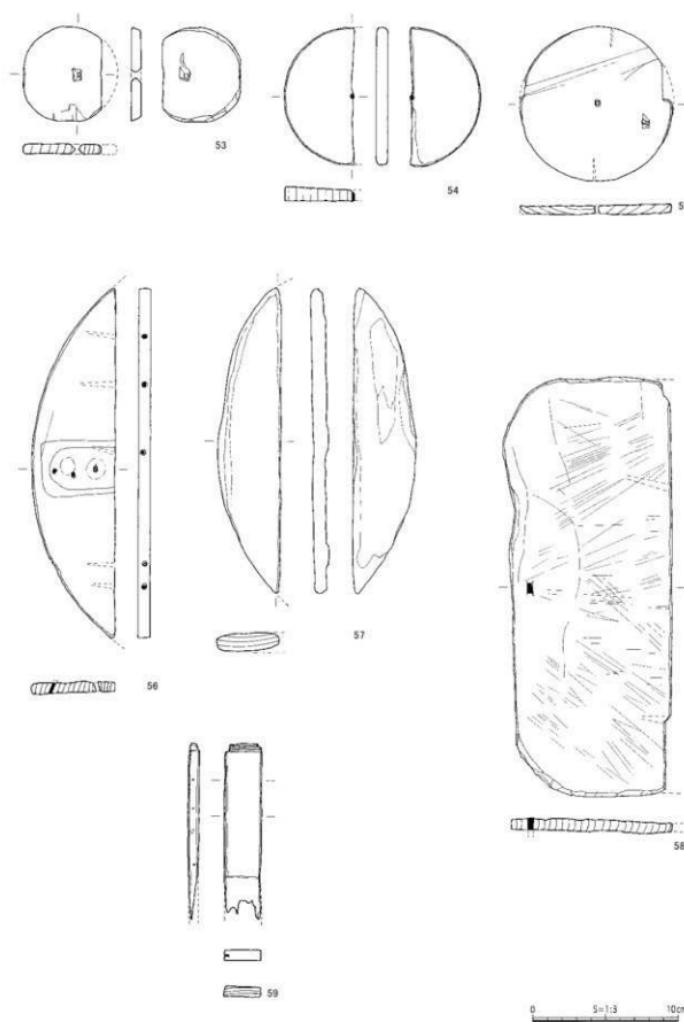
第18図 手乱遺跡出土遺物実測図12（木製品）



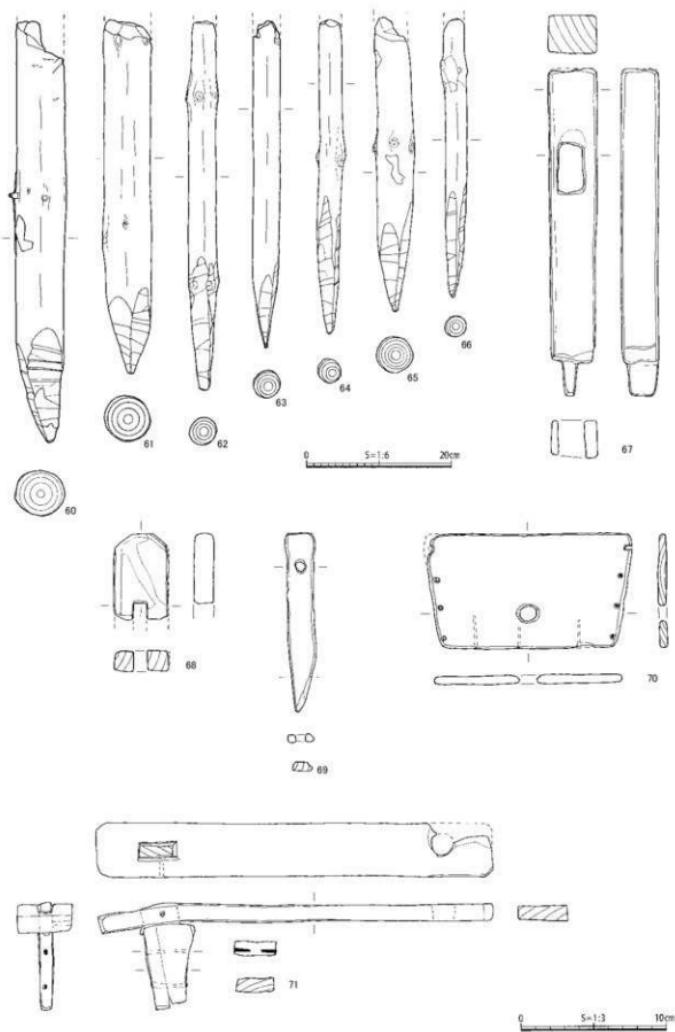
第19図 手乱遺跡出土遺物実測図13（木製品）



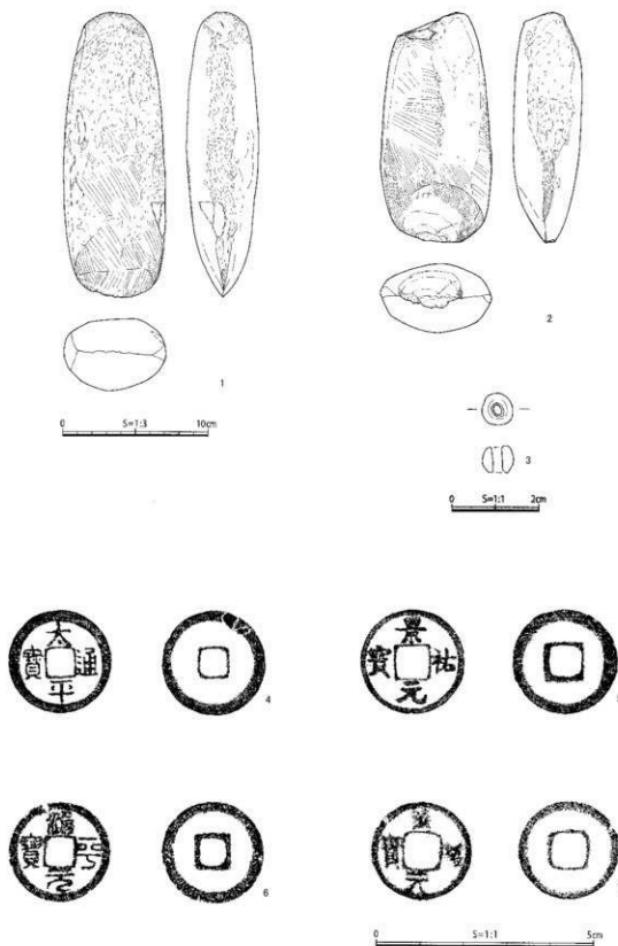
第20図 手乱遺跡出土遺物実測図14（木製品）



第21図 手乱遺跡出土遺物実測図15（木製品）



第22図 手乱遺跡出土遺物実測図16（木製品）



第23図 手乱遺跡出土遺物実測図17（石器・金属製品）

第3表 手造遺跡出土木製品一覧表

回	番号	遺構 グリッド	層位	分類	形種	器種細分1	器種細分2	計測値(cm)			形種	本取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
15	1	I 16	II	農耕土木具	鉢	直柄鉢	平鉢	24.1	9.8	2.2	アガダシ 茎属	板目	
	2	I 17	II	鋸歯鉢	穀物	下鉢	漬漿 (一木)	22.2	9.3	2.5	ヒノキ	芯持材	
3	J 19	南詰田河川 堆積層	鋸歯鉢	穀物	下鉢	漬漿 (重合)	21.7	6.3	8.2	クリ	板目		
4	I 18	II	鋸歯鉢	穀物	下鉢	漬漿 (一木)	12.5	7.8	5.1	クリ	削材		
5	J 19	南詰田河川 堆積層	鋸歯鉢	穀物	下鉢	漬漿 (重合)	13.6	6.4	1.5	ケヤキ	板目		
6	I 16	II	鋸歯鉢	穀物	下鉢	漬漿 (重合)	22.1	(6.0)	2.8	スギ	板目		
7	H 16	洋水漬	鋸歯鉢	穀物	下鉢	漬漿 (一木)	21.2	9.6	3.5	ヒノキ	芯持材		
8	I 17	II	鋸歯鉢	穀物	下鉢	無縫	(15.6)	(2.4)	3.5	ツガ	板目		
9	L 20	II	鋸歯鉢	葵鉢			15.0	(4.0)	0.3	数孔材	板目		
10	10	I 16	II	容器	壺	穀物	(9.5)	(4.8)	(3.0)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆	
11	I 18	II	容器	壺	穀物	(9.0)	4.3	3.3	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
12	J 19	南詰田河川 堆積層	容器	壺	穀物	10.3	5.4	(3.2)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
13	I 17	II	容器	壺	穀物	(10.8)	4.5	2.2	数孔材	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
14	I 17	II	容器	壺	穀物	10.0	5.1	3.5	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
15	I 17	II	容器	壺	穀物	(10.1)	5.2	4.7	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
16	I 17	II	容器	壺	穀物	(11.1)	(5.3)	3.8	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
17	H 15	II	容器	壺	穀物	(9.7)	(6.6)	3.7	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
18	K 19	旧河川堆積層	容器	壺	穀物	11.2	5.7	3.5	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
19	J 19	南詰田河川 堆積層	容器	壺	穀物	(12.4)	(6.5)	(4.9)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
20	J 18	II	容器	壺	穀物	(13.3)	6.4	(8.2)	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
21	H 16	II	容器	壺	穀物	(10.5)	5.5	(5.3)	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
22	H 16	II	容器	壺	穀物	(14.0)	(6.5)	(6.0)	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
23	I 17	II	容器	壺	穀物	(11.8)	(5.1)	(5.1)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
24	I 18	II	容器	壺	穀物	(12.7)	(6.5)	(8.3)	数孔材	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
25	I 18	II	容器	壺	穀物	(13.6)	-	(5.4)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
26	I 17	II	容器	壺	穀物	(13.0)	(6.4)	8.4	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・赤褐色		
27	H 15	表土(旧耕作土)	容器	壺	穀物	10.4	5.4	7.0	クリ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
28	I 17	II	容器	壺	穀物	(11.1)	-	(4.0)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
29	I 17	II	容器	壺	穀物	-	7.2	(2.9)	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
30	H 16	II	容器	壺	穀物	(12.3)	6.6	(4.8)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
31	I 16	II	容器	壺	穀物	(13.5)	(7.0)	8.2	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
32	I 18	旧河川堆積層	容器	壺	穀物	(11.3)	5.6	(6.5)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
33	H 14 (旧耕作土)	容器	壺	穀物		10.9	6.8	4.7	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
34	I 16	II	容器	壺	穀物	(10.1)	5.6	2.7	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
35	I 16	II	容器	壺	穀物	(12.2)	6.1	(5.1)	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
36	I 16	II	容器	壺	穀物	(13.2)	(6.4)	4.6	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
37	K 19	南詰田河川 堆積層	容器	壺	穀物	(11.0)	5.9	(3.7)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
38	I 17	II	容器	壺	穀物	(12.0)	6.2	5.0	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
39	J 18	II	容器	壺	穀物	11.0	5.2	4.4	ブナ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆 筒内・閉口口碌王冠乳		
40	J 18	II	容器	壺	穀物	(13.0)	-	(4.1)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
41	K 19	南詰田河川 堆積層	容器	壺	穀物	(11.0)	5.2	(3.9)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・赤漆		
42	H 16	II	容器	壺	穀物	-	-	(4.2)	トチノキ	破片 板目	内外面・黒漆		
43	H 16	II	容器	壺	穀物	-	-	(3.4)	トチノキ	破片	内外面・赤漆		
44	L 19	南詰田河川 堆積層	容器	壺	穀物	(13.5)	(5.4)	(2.1)	トチノキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆		
45	H 16	II	容器	壺	穀物	(128)	67	(4.3)	ケヤキ	櫛木取引 板目	内外面・黒漆 近縁穿孔		

図	番号	遺構 グリッド	層位	分類	器種	部機組分1	部機組分2	計測値 (cm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
19	46	I 17	II	容器	椀	複数		(10.6)	-	3.4	鉢孔材 木取扱 板目
	47	I 17	II	容器	合子		身	5.8	5.7	鉢孔材 木取扱 板目	
	48	I 17	II	容器	合子		身	(5.5)	4.7	3.2	タケ 木取扱 内外面・黒漆
	49	J 19	南延田河川 堆積層	容器	合子		蓋	6.3	1.8	3.5	フバキ? 木取扱 内外面・黒漆 板目
20	50	I 16	II	容器	皿	複数		22.1	14.7	3.5	ケヤキ 木取扱 板目
	51	I 18	II	容器	皿	複数		20.0	10.9	4.3	ケヤキ 木取扱 板目
	52	I 17	II	容器	皿	複数		12.0	9.0	4.2	ブナ 木取扱 板目
21	53	I 18	II	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		6.5	5.4	0.8	トウヒ 板目
	54	I 17	田河川堆積層	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		9.5	(4.8)	0.8	キヌコ 板目
	55	H 15 (田耕作上)	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		10.6	10.6	0.7	ヒノキ 板目	
	56	I 16	II	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		(24.1)	(5.8)	0.8	ニノキ 全面・黒漆
	57	H 16 (田耕作上)	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		(20.9)	(4.3)	1.1	スギ 板目	
	58	H 16	II	食事用	折敷	便板		29.0	(11.8)	0.9	モミ 板目
	59	I 18	II	食事用	膳	複数		(12.1)	2.6	0.8	ヒノキ 板目
	60	H 16	-	土木材	杭			(58.9)	8.1	6.4	クロマツ 芯持材
	61	I 16	-	土木材	杭			(49.3)	6.1	6.5	アカマツ 芯持材
22	62	J 18	-	土木材	杭			(51.6)	4.5	4.0	クロマツ 芯持材
	63	-	-	土木材	杭			(45.8)	4.0	3.9	クロマツ 芯持材
	64	-	-	土木材	杭			(43.8)	4.0	3.4	アカマツ 芯持材
	65	I 17	-	土木材	杭			(41.2)	6.0	5.1	アカマツ 芯持材
	66	I 18	-	土木材	杭			(29.0)	3.8	3.0	クロマツ 芯持材
	67	H 16	II	用途不明	その他の不明			22.6	3.1	2.6	ヒノキ 板目
	68	K 19 トレンチC		用途不明	その他の不明			16.0	3.8	1.5	アカガシ 栗属 板目
23	69	J 19	神水溝	用途不明	その他の不明			8.4	2.3	0.7	ヒノキ 板目
	70	I 17	II	用途不明	その他の不明			8.0	14.1	0.7	フガ 板目
	71	I 17	II	用途不明	その他の不明			27.3	3.9	1.2	モミ 板目

第4表 手乱遺跡出土石器一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	器種	計測値 (cm)				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	質量(g)		
23	1	I 18 S E	III	磨製石斧	15.8	7.7	4.7	830.0	閃緑岩	
	2	J 18 SW	III	磨製石斧	19.6	7.0	4.9	1070.0	閃緑岩	
	3	-	-	ガラス小玉	0.75	0.75	0.65	0.5	六角0.25×0.3	青緑色

第5表 手乱遺跡出土金属製品一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	種別	計測値 (cm)	質量(g)	備考	
							直径	元
23	4	H 15 S W	III	銭貨	銭径2.4	2.87	太平通寶 (976~983年鑄造)	
	5	H 17 N E	III	銭貨	銭径2.4	2.95	景祐元寶 (初鑄1034年)	
	6	K 19 S W	III	銭貨	銭径2.3	3.65	治平元寶 (篆書) (初鑄1064年)	
	7	H 15 S E	III	銭貨	銭径2.3	1.76	□□元寶	

## 第5章 鶴喰広田遺跡の遺構と遺物

### 第1節 検出された遺構

#### (1) 流路

H20調査区は北・中・南区の3地区に分割した調査を実施している(第24図)。いずれの調査区においても手乱遺跡と同様、河川による堆積層が確認されている。度重なる流路の変更に伴って堆積した基本土層Ⅱ層とⅢ層に相当する層位であるが、前章で述べたように流路の新旧を平面・断面から捉えることは不可能であった。H20調査区ではⅢ層を除去し基盤層となるⅣ層を検出すると、やや凹凸はあるものの、ほぼ平坦な面が表出し、調査区全体がⅣ層を掘り込む最古段階の時期の流路の川床であったと考えられる。西側に隣接するH7調査区ではこの時期の西側河岸が検出されているため、流路自体が西側に寄っていたのであろう。

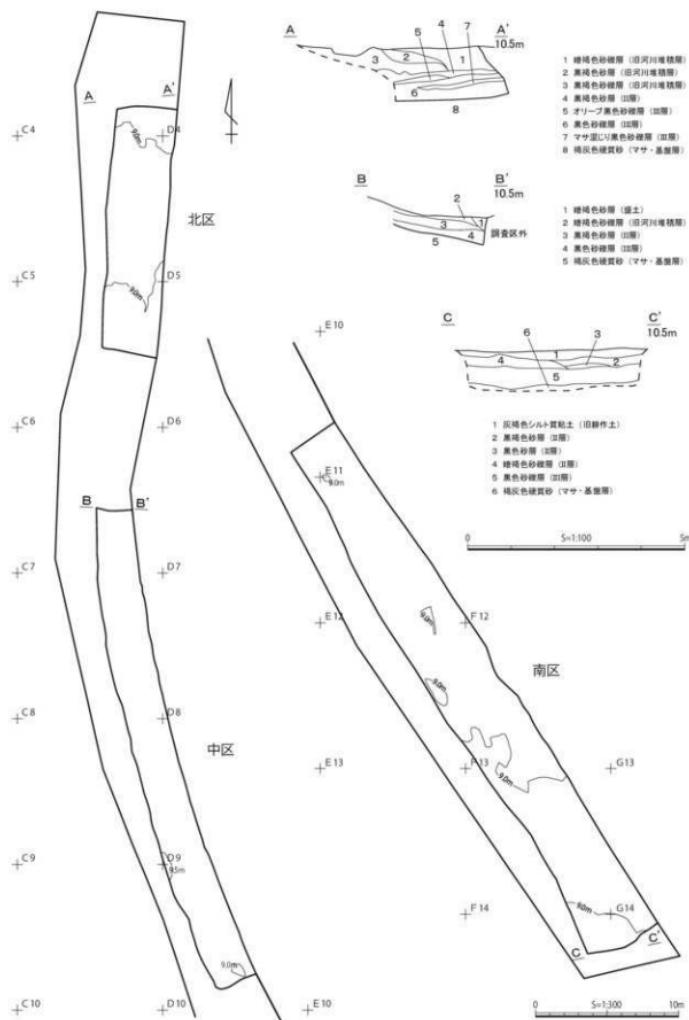
一方、H21調査区ではⅢ層を除去すると、Ⅳ層を削り込む東西方向に走る旧河道路が3条確認された(第25図)。すべてが同時期の流路とは限らないが、鶴喰広田遺跡でみられる最古段階の旧河道が蛇行していた様子を反映するものと考えられる。いずれもⅣ層上面からの深さは30~50cm程度であった。調査区中央C1グリッド南の流路2は幅1~5m程度の小規模な流路であるが、その底面では古墳時代後期を中心とした時期の完形に近い土器がまとまって出土している(第26図)。穿孔された甕(第39図139)の存在などから、川辺における何らかの祭祀行為に伴う可能性がある。ただし、西端の第39図140~142のように弥生後期に遡る土器を含み、また出土レベルにもやや差があるため、流路によって運ばれた土器が二次的に集積した可能性もある。調査区北側B0~C0グリッドにかけての流路1と、南端D2~D3グリッドにかけての流路3はこれよりも大規模なものであり、位置関係から同時に流れたとは考えにくいが、これら流路に堆積するⅢ層下層の遺物相から、流路2と近い時期に流れている流路と考えられる。

#### (2) 杖列

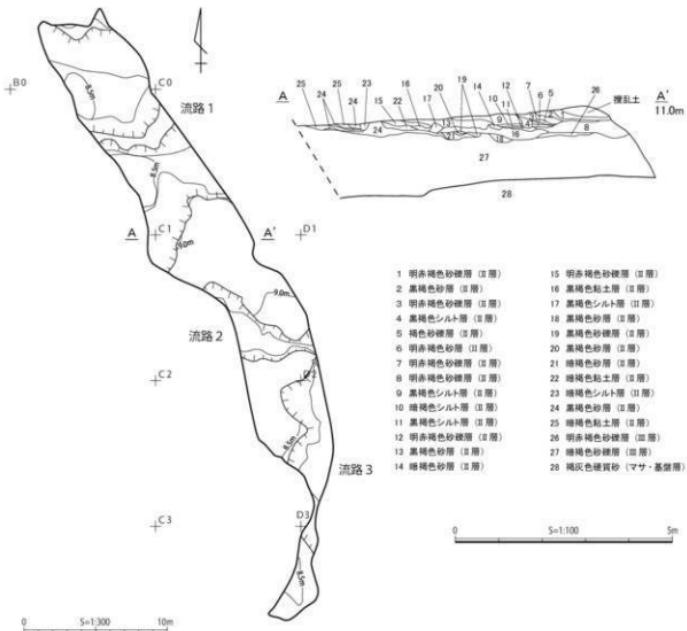
今回の鶴喰広田遺跡H20調査区、H21調査区とともに多くの杖列が検出されている(第27図)。杖の設置された時期はⅢ層に打ち込まれた古い段階のものもあるが、散在的であり、列をなす形で設置される多くの杖はⅡ層堆積後に打ち込まれたものである。

H20調査区では各区で杖列の状況が異なる。北区では北西から南東にかけてきれいに列を成すのに対し、中区は南部のみとなり、南区は調査区を縦断する形で杖列が並ぶ様子が窺える。北・中区では基本土層Ⅱ層、Ⅲ層に相当する層位の上に旧河川の堆積層が確認される。これは手乱遺跡H20調査区で確認された近世より新しい時期の旧御殿川流路に関連するものと考えられ、これら杖列もそれに伴う可能性が高い。南区については旧河川堆積層が確認されないが、杖の様相から同じ性格の遺構とみられる。

H21調査区では調査区北端から西側にかけて弧状に杖列が並ぶ様子が窺える。調査区外で検出された杖は安全勾配をとった法面で検出されたものである。調査区中央付近にⅢ層に及ぶ杖もあるが、やはり散在的であり、列として認識することはできず、列状となるのはⅡ層堆積後に打ち込まれた杖である。H20調査区北・中区のような旧河川堆積層は明瞭でないが、やはり近世より新しい時期の旧河川に伴う杖列であり、弧状となった杖列が旧河川の西側河岸であった可能性が高い。



第24図 鶴喰広田遺跡H20調査区全体図

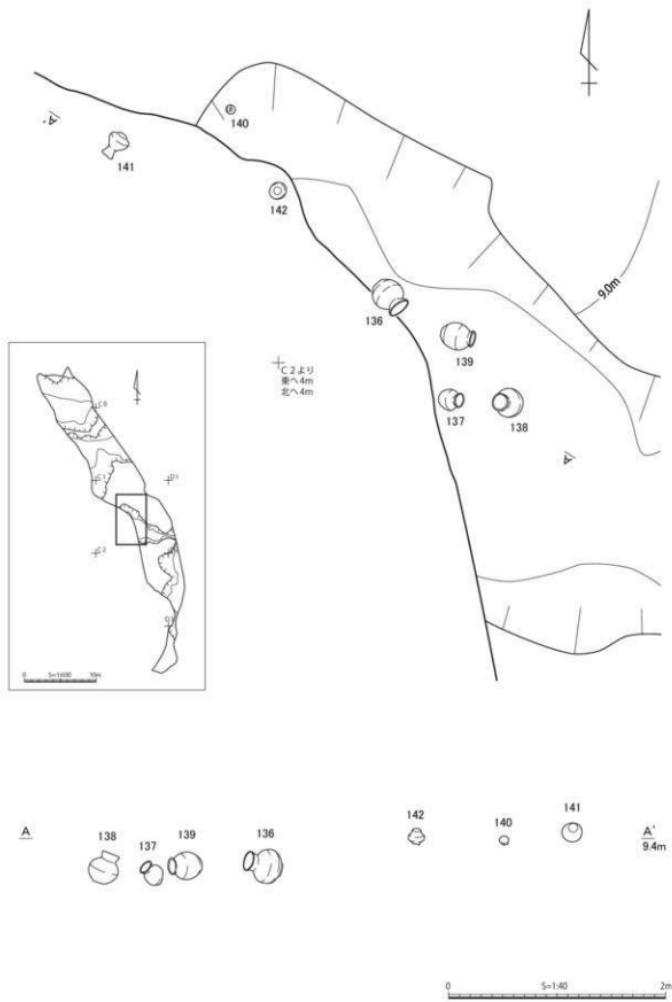


第25図 鶴喰広田遺跡H21調査区全体図

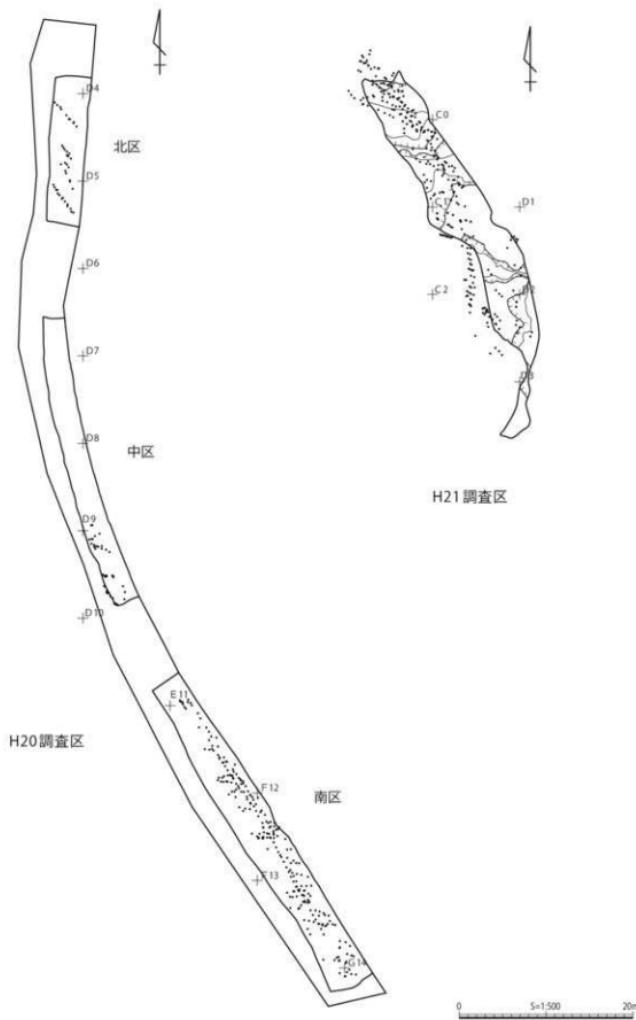
## 第2節 出土遺物

### (1) 土器・陶磁器 (第28~46図)

**縄文土器・弥生土器・土師器** 1・2は縄文時代晩期～弥生時代前期初頭頃の深鉢である。1は口縁内外面に沈線が巡り、体部上部に穿孔がみられる。3は縄文時代中期前半、藤内式の深鉢とみられる。4～7は弥生中期中～後葉の壺口縁である。8は弥生中期後葉の小型の細頸壺で、肩部には焼成後穿孔がみられる。9～15は弥生後期後半の壺である。9・12は単純口縁壺で、内外面をミガキ調整し、櫛刺突による文様を施す。10・11は複合口縁壺、13は折返し口縁壺である。いずれも口縁外面に棒状浮文を貼付ける。11は口縁下部に3カ所の焼成前穿孔がある。16～25は古墳前期の壺口縁部で、16～23は複合口縁壺、24・25は折り返し口縁壺である。17～23は大腹様式とされる大型壺である。いずれも口縁外面下端が突出し、19・21は口縁端部内面に突帯が巡る。内外面はハケ調整が施されるが、22・23は内面をミガキ調整し、23は表面を黒色仕上げとする。22には焼成後穿孔がみられる。26～29は弥生中期中葉の壺底部である。26・27は底部に網代痕が残る。30・31・33～35は弥生後期～古墳前期、32は古墳中期の



第26図 H21調査区土器出土状況図



第27図 鶴喰広田遺跡杭柵出狀況図

壺底部である。32は体部下半に焼成後穿孔がみられ、34・35の底部には木葉痕が残る。36～41は古墳前期の高坏の坏部で、いずれも内面を丁寧にミガキ調整で仕上げる。36は口縁端部を屈曲させ、37は体部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。42・43は小型器台である。43の底部内面のミガキ調整は放射状となる。44～46は高坏の脚部である。古墳時代前期に位置づけられよう。47～56は弥生後期～古墳前期の台付壺である。いずれも内外面をハケ調整し、口縁端部外面には調整工具による刻みが入れられる。57～60はS字壺である。61は受口状口縁の壺である。62～67は台付壺の脚部で、63は弥生中期後葉、他は弥生後期～古墳前期のものであろう。内外面ともにハケ調整がなされるが、62はナデ調整となる。68・69は古墳時代中期の壺である。

71～75・77～84は古墳中～後期の小型壺で、77～84は体部が丸く口縁が聞く形状となる古墳中期の小型壺である。71・73は外面全体を丁寧にミガキ調整する。72・75は厚手のつくりで、内外面ともにハケ調整される。74は底部に木葉痕がみられる。77～80の底部付近はヘラ削り調整で仕上げられる。76・85～87は鉢である。76は口縁部が直立し、85～87は外反する形態である。88・89は手捏ねの坏である。88は外面に輪積みが残る粗いつくりで、89は口縁を波状に整形している。90～103は古墳時代中～後期の坏である。90～94・97は駿豆型坏とされる内湾する口縁部、平底の坏である。底部に木葉痕が残り、91は木葉をヘラ描きする。95・96・98～103は須恵器模倣坏である。98～102は蓋の模倣坏で、底部外面はいずれもヘラ削りで仕上げられ、内面はミガキ調整される。99は赤色、101は黒色で内外面が処理されている。95・96・103は坏の模倣坏で、95・103は黒色、96は赤色で内面が処理される。104～116は古墳時代中～後期の高坏である。104～109・111の坏部は体部下半に稜を持ち、口縁は聞く形態となる。坏部内面の調整は104がミガキ調整、105・109はハケ調整、他はナデ調整である。110は駿豆型高坏とされるもので、駿豆型坏と調整、胎土が類似する。111・112は坏部が須恵器坏の模倣坏となるものである。117～121は古墳時代中～後期の壺である。122は古墳時代前期の壺で、肩部外面を工具によるタタキで調整する。125～129は律令期の坏で箱形を呈する駿豆型坏とされるものである。130は底部が厚い小皿、131は平底の坏である。132は駿東型の球胴型壺の口縁部である。133・134は古墳後期の壺である。133はほぼ球胴、134・135はやや長胴となり、133は体部下半に穿孔がみられる。136～142はH21調査区流路2で出土した土器である（第26図）。前節で述べたように近接して出土するが、時期的には隔たりがあり、二次的に集積した遺物を含む可能性が高い。136・137は駿東壺、137は同時期のやや小振りの壺である。136・137の底部には木葉が残り、いずれも体部外面に縱方向のミガキ調整が観察される。139は古墳後期の壺、140は古墳中期の小型壺である。139は体部中央に穿孔がみられる。141・142は弥生後期後半の壺である。141の体部中央及び下半には穿孔がみられる。

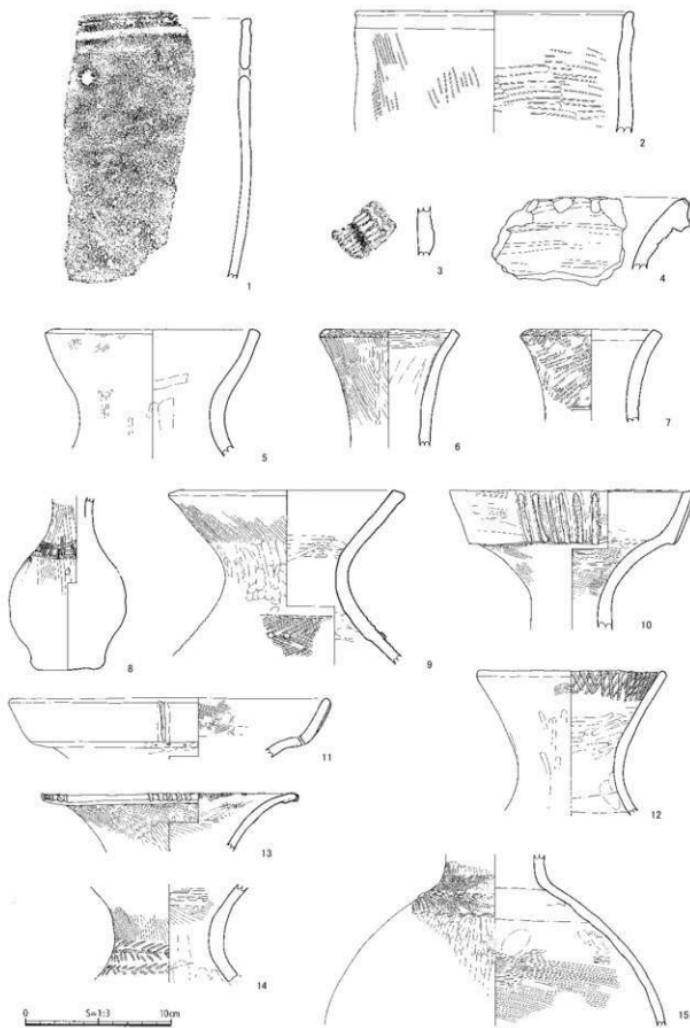
須恵器・灰釉陶器・山茶碗 143～152は蓋である。143はMT15型式並行、147・152はTK10型式並行、148はTK43並行に位置づけられよう。149～151は小型化が顕著となる7世紀前～中葉の製品であろう。かえりのつく153・154の蓋は7世紀後半に位置づけられよう。155～157は8世紀代の製品である。156は口径24.8cmに復原される大型品である。158～164・168は坏身である。158はTK10型式並行、159～161・163はTK43型式並行に位置づけられよう。小型となる164は7世紀前葉のものであろう。168は8世紀の箱坏である。165・167・169は高坏の坏部である。170～176は大型壺の口縁である。170・171・174は波状、175・176は拂刺突による文様が口縁外面に施される。178・179は長頸壺の底部で、8世紀の製品であろう。180～189は灰釉陶器で、O53窯式並行期～百代寺窯式並行期の製品である。いずれも東遠江～西駿河で生産されたものであろう。180・181は高台の高い深碗である。182～185・187・188は碗で、182・185は底部内面に灰釉が濁け掛けされる。O53窯式並行の製品であろう。186・189は小碗である。高台内には系切り痕が残り、189は高台に沿ってつけられた爪痕が認められる。190・191は片口鉢、192は小碗である。いずれも12世紀前～中葉に東遠江の山茶碗窯で生産された製品であろう。

**陶器・土師質土器・磁器** 193~206は貿易陶磁である。193・194は青白磁梅瓶である。195・197は白磁碗で、12世紀後葉頃の端反碗であろう。196は白磁皿底部で、口兀皿である。198~201は青磁碗である。198・199は青磁連弁文碗B 1類である。200は無文の端反碗で青磁碗D類に分類される。201は体部内面にヘラ書きの割花文が施される青磁碗A類である。202は縦描連弁文が施文される青磁連弁文折線皿、203は青磁稜花皿である。204は青磁盤である。205・206は染付皿で、206は底部が茎筒底となる染付皿C群である。207・208・210~212・214・215は瀬戸美濃系施釉陶器である。207は灰釉平碗、208・211は縦釉小皿で、古瀬戸後IV期の製品であろう。212は大窯第4段階の志戸呂窯産の灰釉丸皿である。214・215は古瀬戸後期の鉢皿である。216~223は常滑産の陶器である。216は壺、217~221は壺口縁で、13~14世紀代の製品である。222・223は15世紀代の片口鉢である。224~229はかわらけである。いずれも15世紀代のロクロ成形品で、底部には糸切痕が残る。225は口縁部の対面2ヶ所が打欠かれ、下に224が重ねられた状態で出土した。何らかの祭祀行為に使用された可能性が高い。

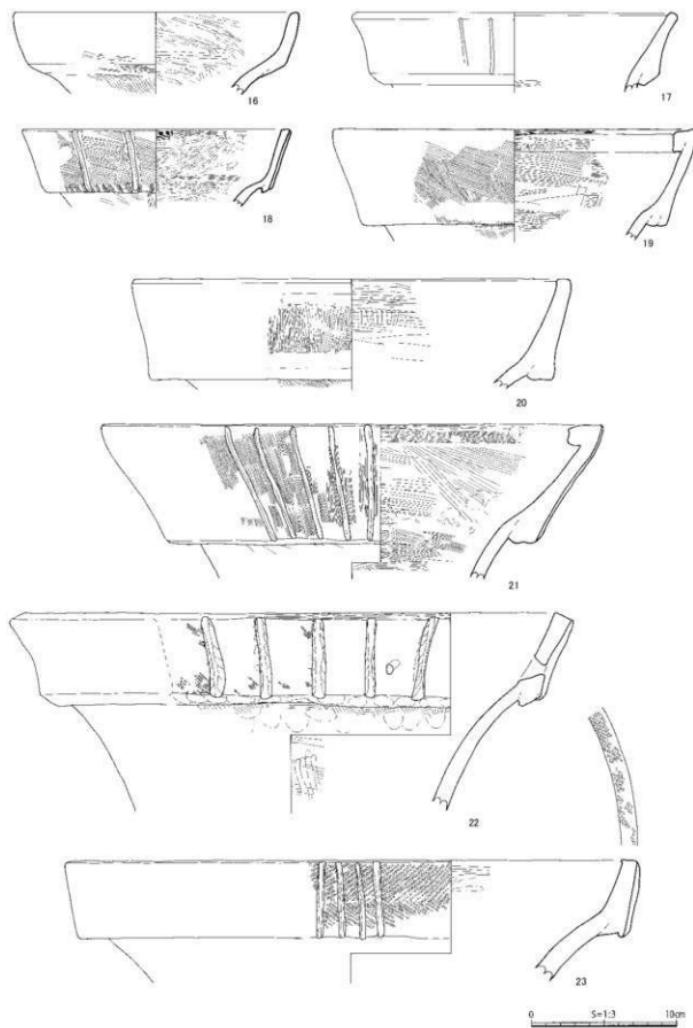
209・213・230~264・266は近世施釉陶器で、瀬戸美濃産の製品である。209・213は17世紀代の鉄釉耳付水注であろう。231・232は筒形碗、233は腰錫茶碗である。234~239は小杯である。240は志野皿で、17世紀前半の製品であろう。241は鉄釉小皿、242・243は灰釉小皿である。244は内面に鉄絵で笹が描かれる笠絵皿である。245・246は片口である。18世紀前半頃の製品であろう。247・248は鉄釉筒形香炉である。18世紀代の製品であろう。249~255は灯明具で、249は鉄釉灯明受皿、250・251は鉄釉の灯明具、252~255は秉燭である。254の外側には油煙が残っている。18世紀後半~19世紀前半の製品であろう。257は灰釉水滴、258は鉄釉壺である。259・260は徳利で、260の底部には「今」の墨書がある。261は油徳利で、内部には油が入っていた痕跡が残る。18世紀代の製品であろう。264は織部の鉢である。265・266は擂鉢である。265は大窯第4段階の製品、266は19世紀前葉頃の製品であろう。

276~311は肥前産磁器である。276・277は青磁染付碗の蓋で、朝顔形碗とセットになるものであろう。内面にはコンニャク印判がみられる。18世紀後半の製品である。278・280・281は広東碗の蓋である。281はつまみ内に及ぶ文様が描かれる。279は端反碗の蓋で、瓢箪などの図柄が描かれる。282は合子蓋で、福や寿の文様を描いている。18世紀後半のものであろう。283~285は18世紀後半頃の染付丸碗である。283は波佐見窯、285は瀬戸美濃窯の製品とみられる。286・287は筒形染付碗、288・289は筒形の青磁染付碗である。いずれも見込にコンニャク印判が配される。18世紀後半頃の製品である。290・292は染付広東碗である。292の底部には「山形屋？」の朱書がみられる。293・294は染付端反碗である。19世紀前半の製品である。295は薺麦猪口で、18世紀前半頃のものとみられる。296~299は小杯である。18世紀前半の製品で、296は薄手で胎土も精良であることから、色絵生地の製品と考えられる。300~302は染付皿である。300は17世紀中頃、301・302は18世紀前半頃の製品である。302の見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。303・304は染付瓶である。303は網手文が描かれる18世紀前半の製品、302は蛸唐草文が描かれる19世紀前半の製品である。305・306は仏飯器である。305は18世紀後半の製品であろう。307は青磁香炉である。308・309は白磁紅皿である。体部外面に細かい刻みが入り、308はミニチュア品であろう。18世紀代のものとみられる。310は白磁合子の身である。体部外面に型による文様が施される。311は色絵の餅入れである。312は牛乳瓶である。明治時代に花鳥兵右衛門が三島市で創業した豊牧舎で売り出された牛乳の容器である。

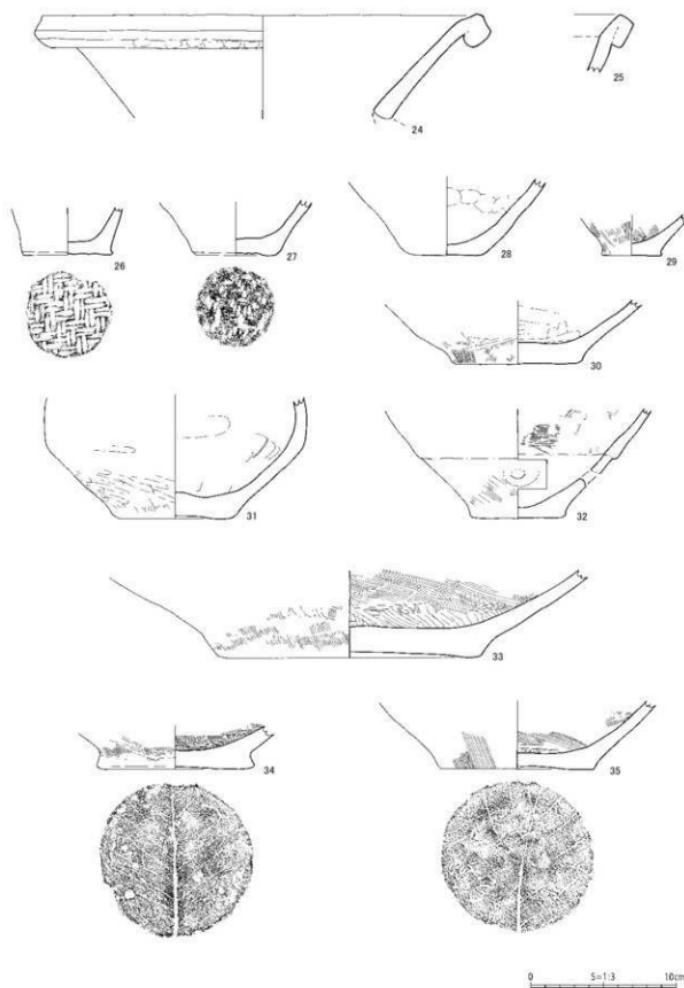
**瓦質土器・土製品・瓦** 267~270は瓦質火鉢とみられ、外面にスタンプが押印される。271は土製人形の頭部である。272は土錘、273は土製円盤である。274・275は丸瓦で、凹面に布目が観察される。



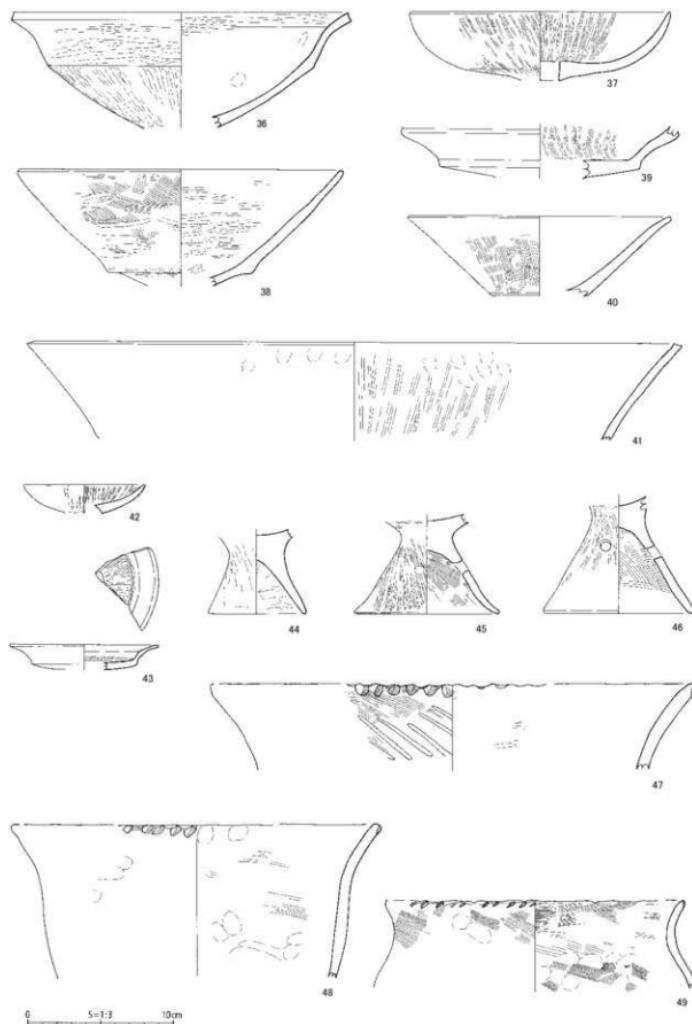
第28図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図1（土器）



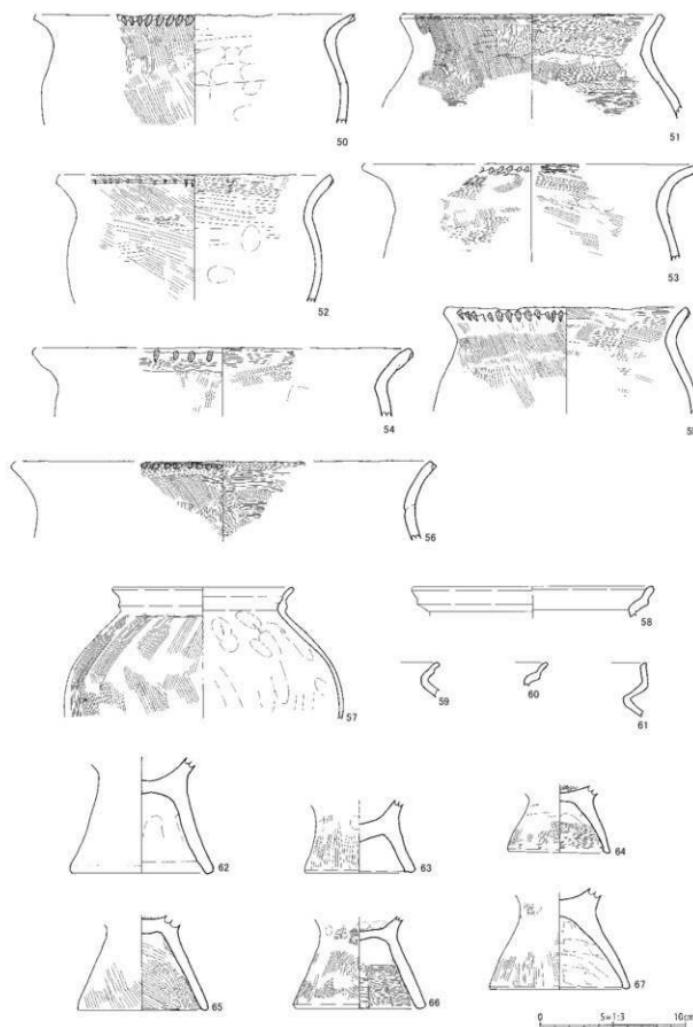
第29図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図2（土器）



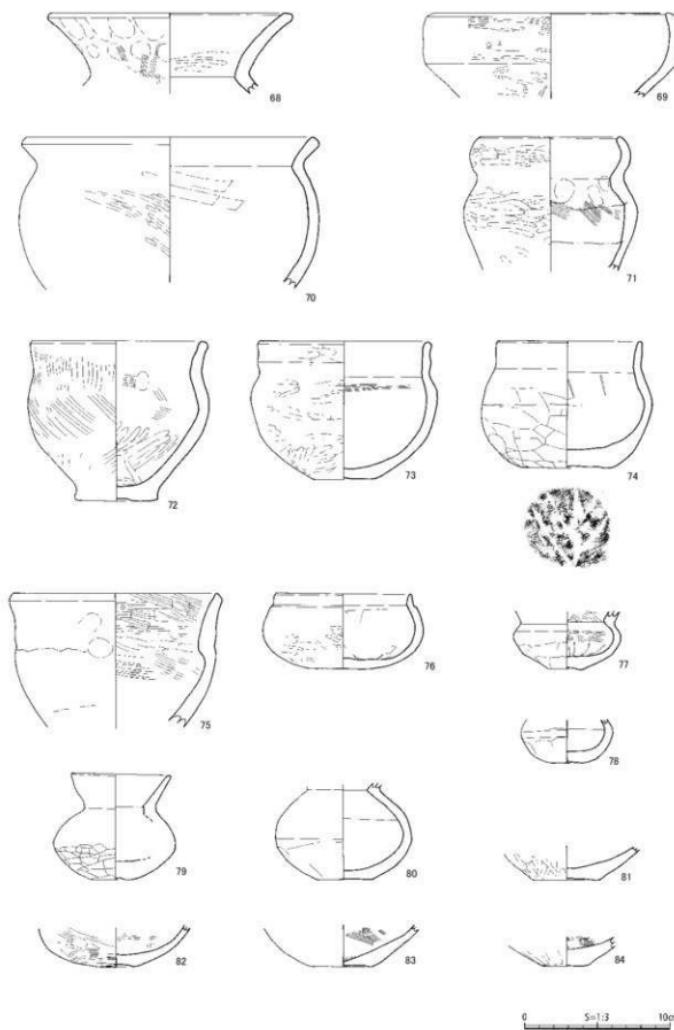
第30図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図3（土器）



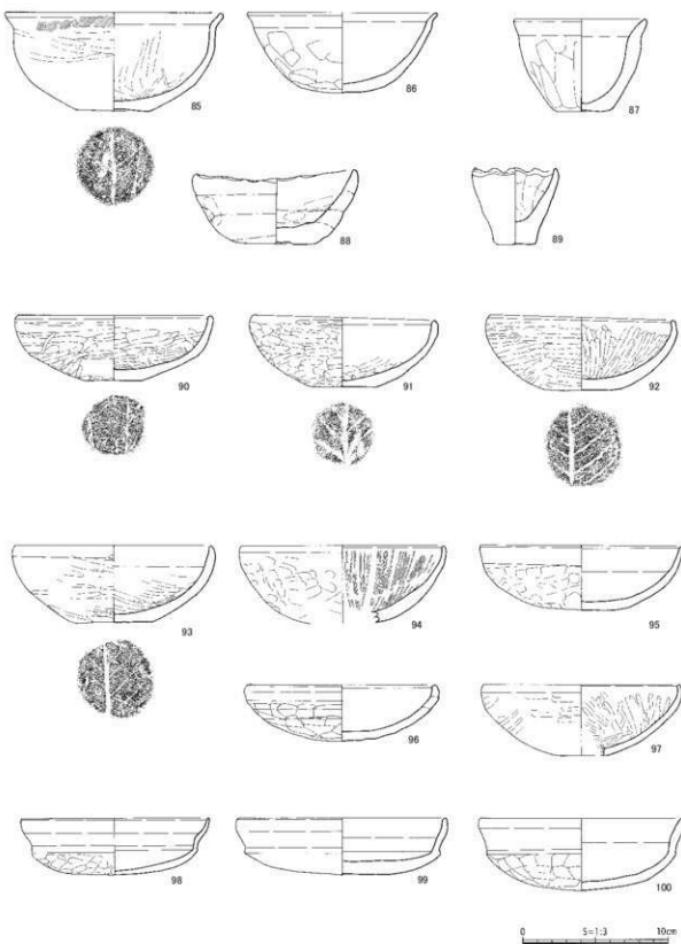
第31図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図4（土器）



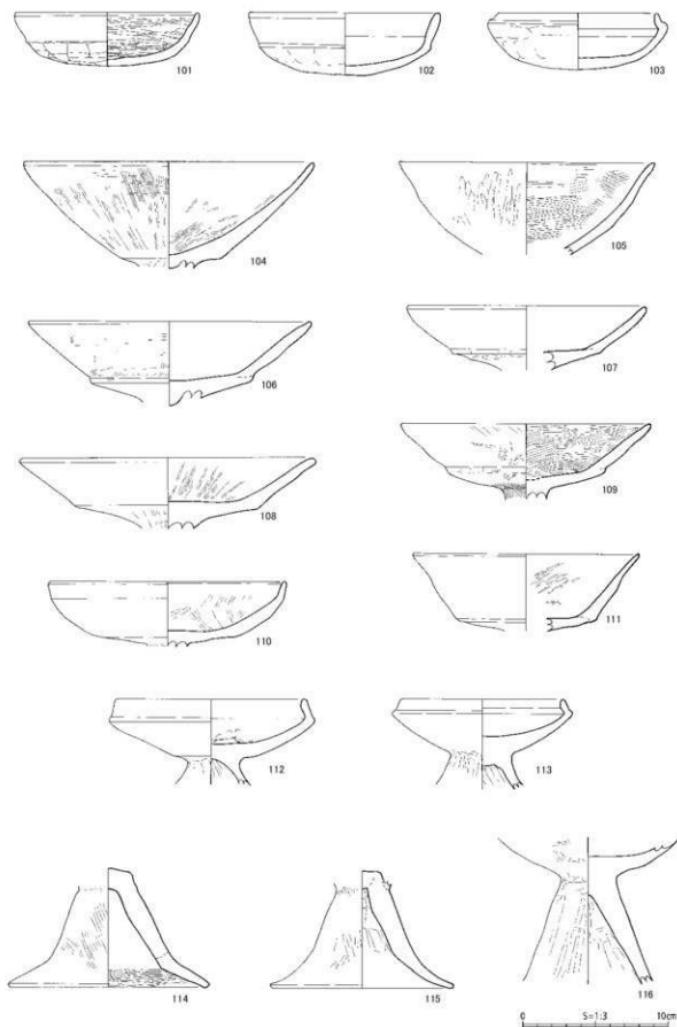
第32図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図5（土器）



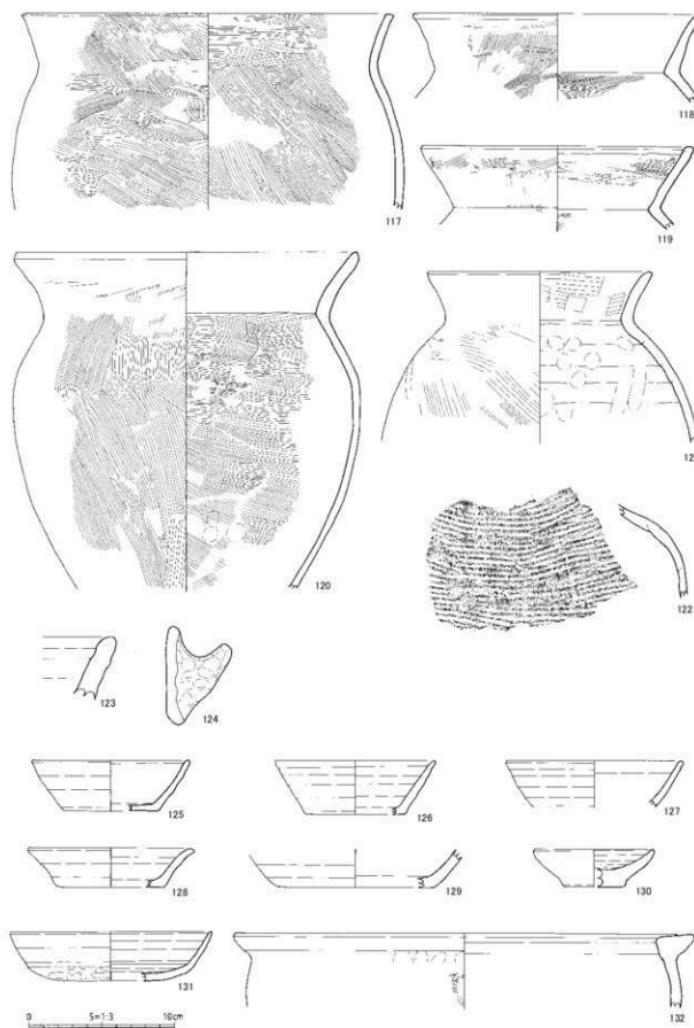
第33図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図6（土器）



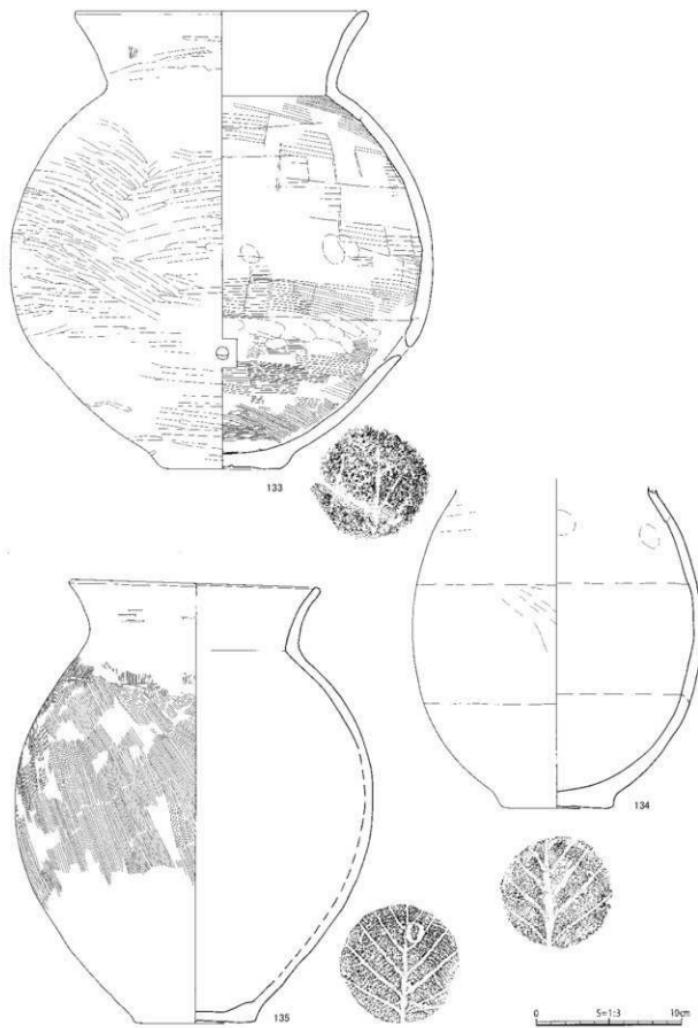
第34図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図7（土器）



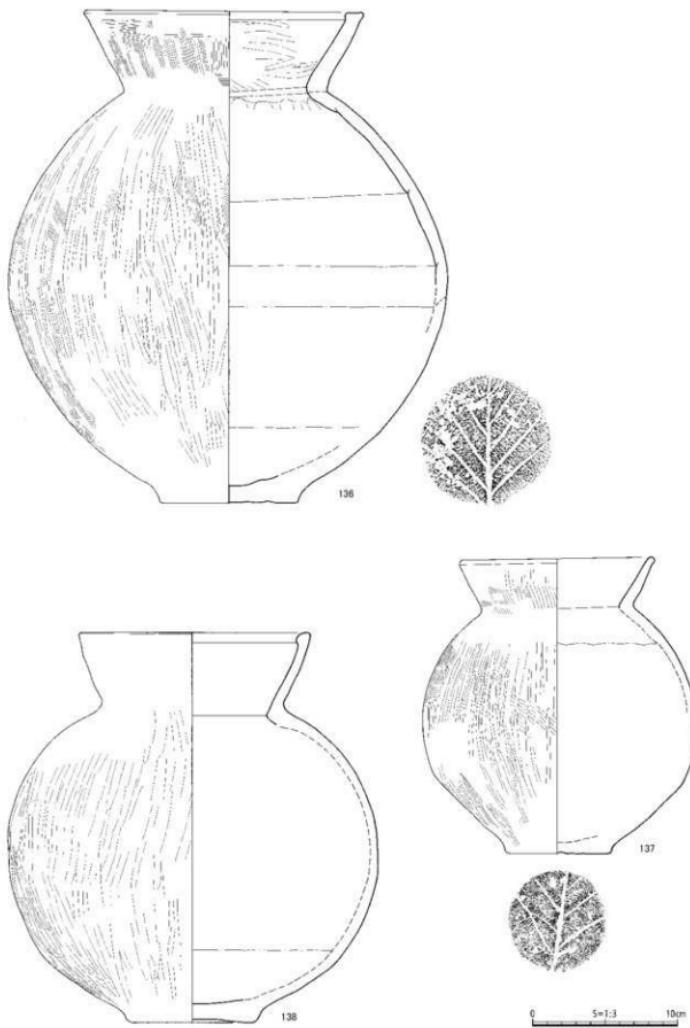
第35図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図8（土器）



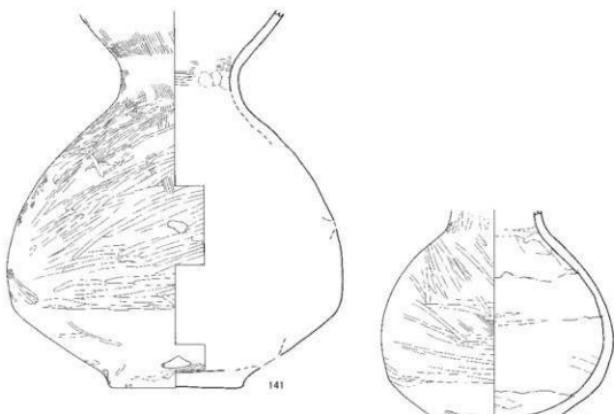
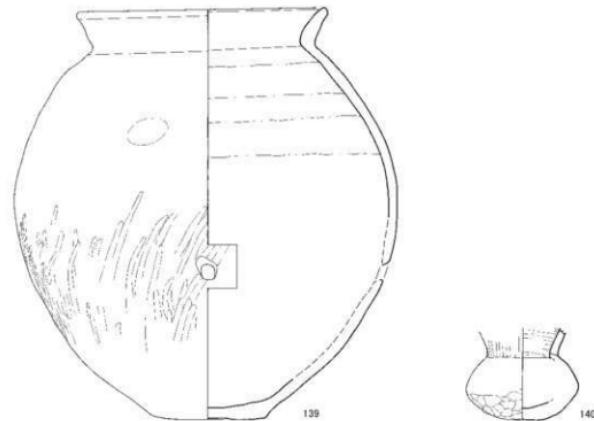
第36図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図9（土器）



第37図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図10（土器）

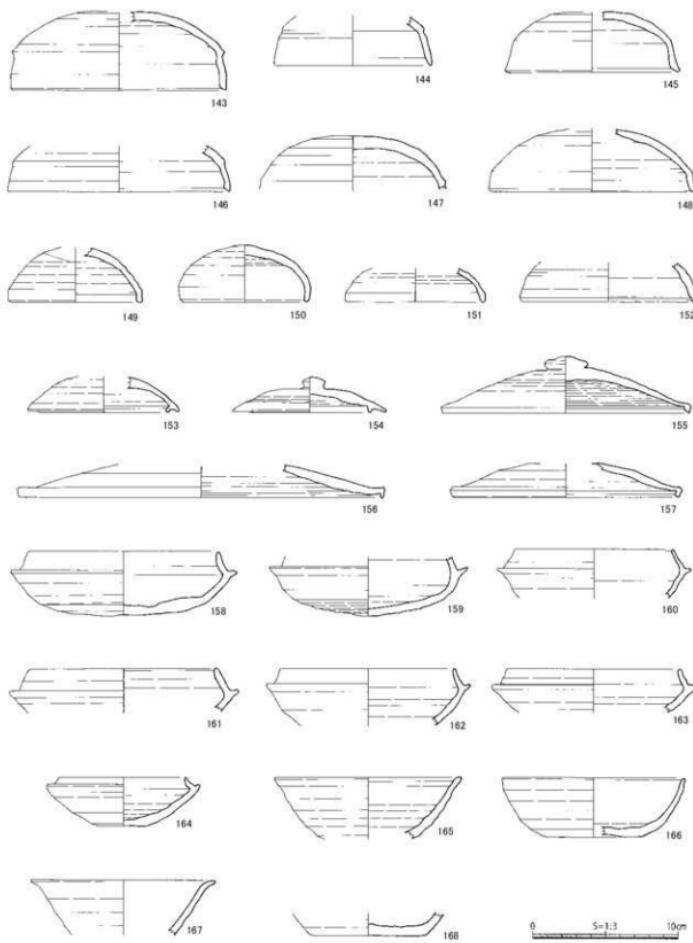


第38図 鶴塙広田遺跡出土遺物実測図11（土器）

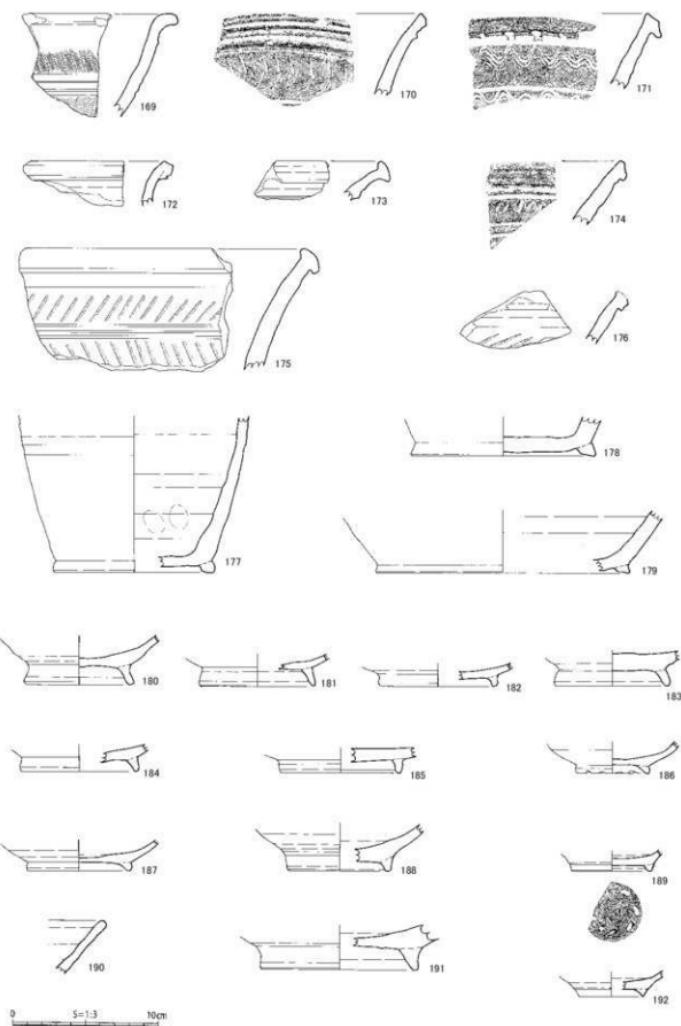


0 5cm 10cm

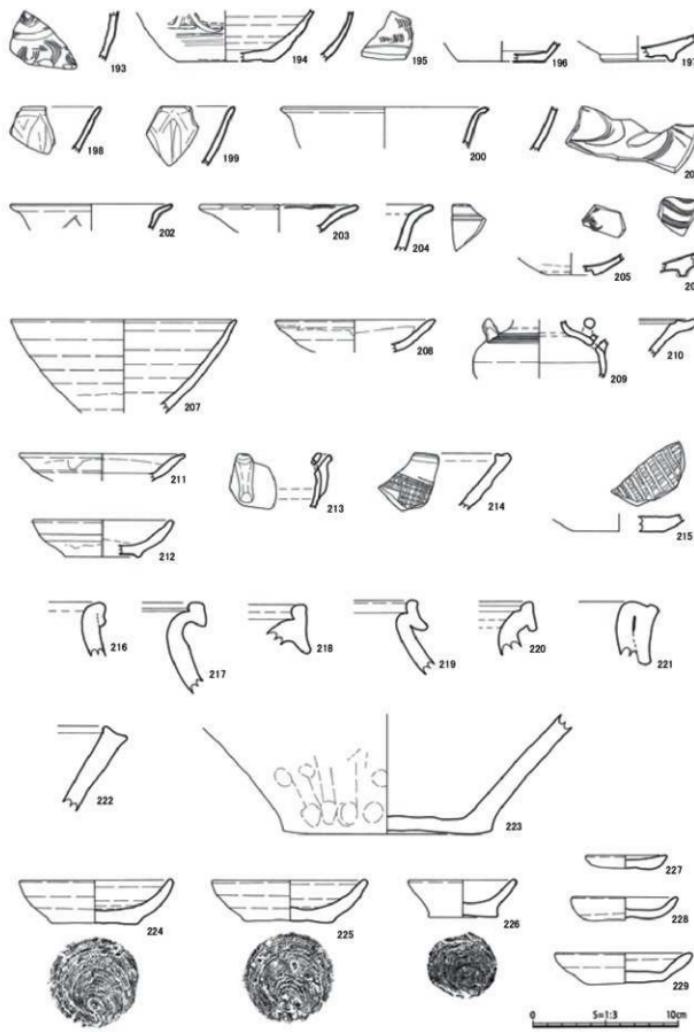
第39図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図12（土器）



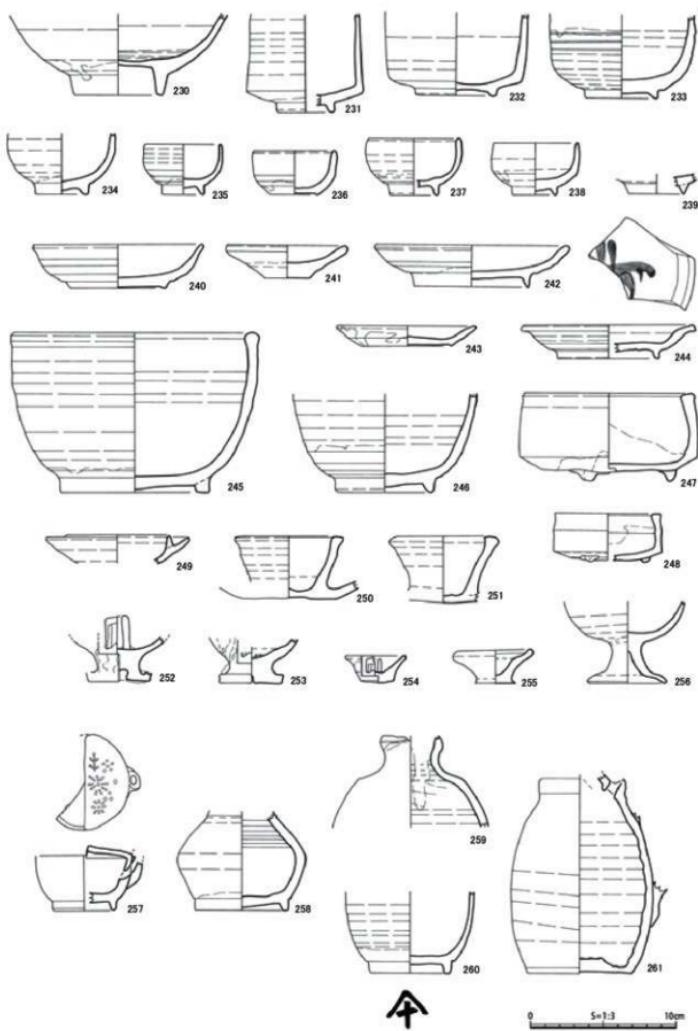
第40図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図13（土器）



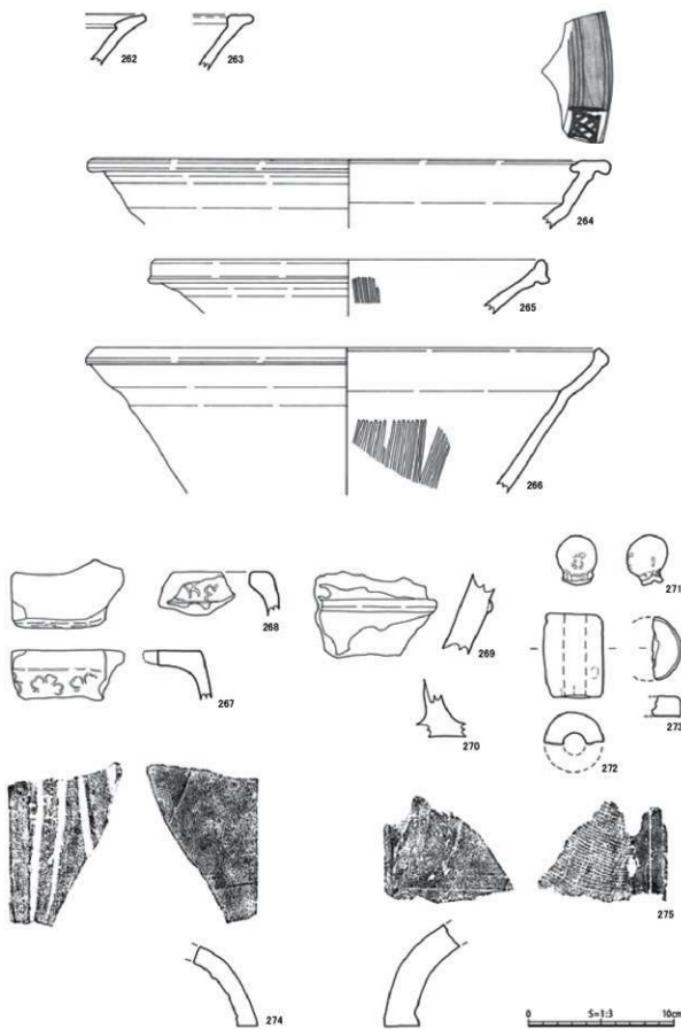
第41図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図14（土器）



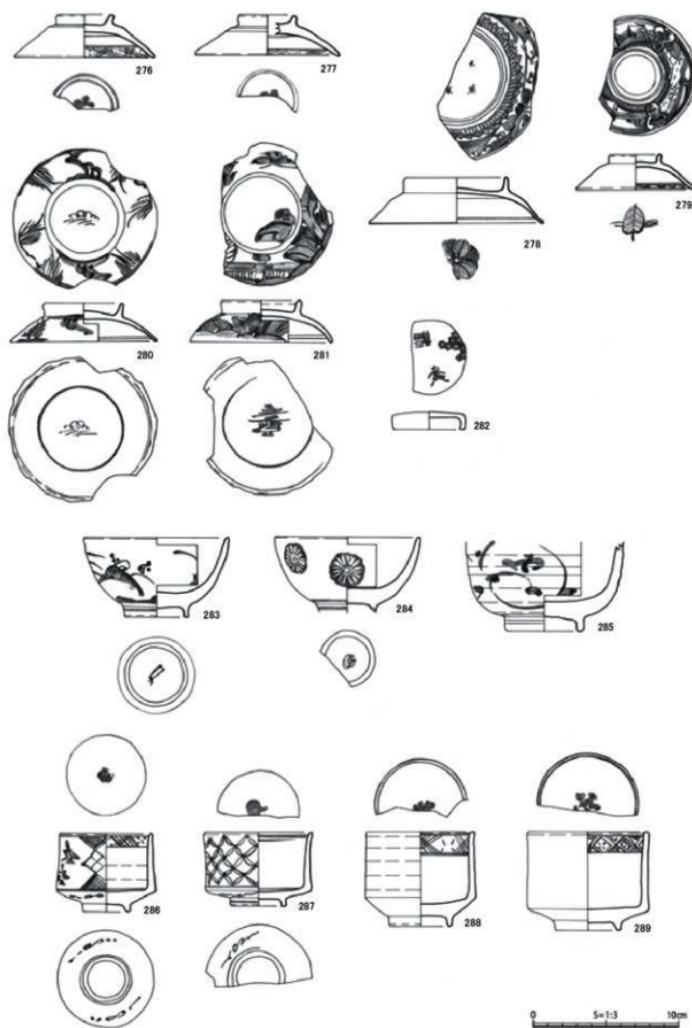
第42図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図15（陶磁器）



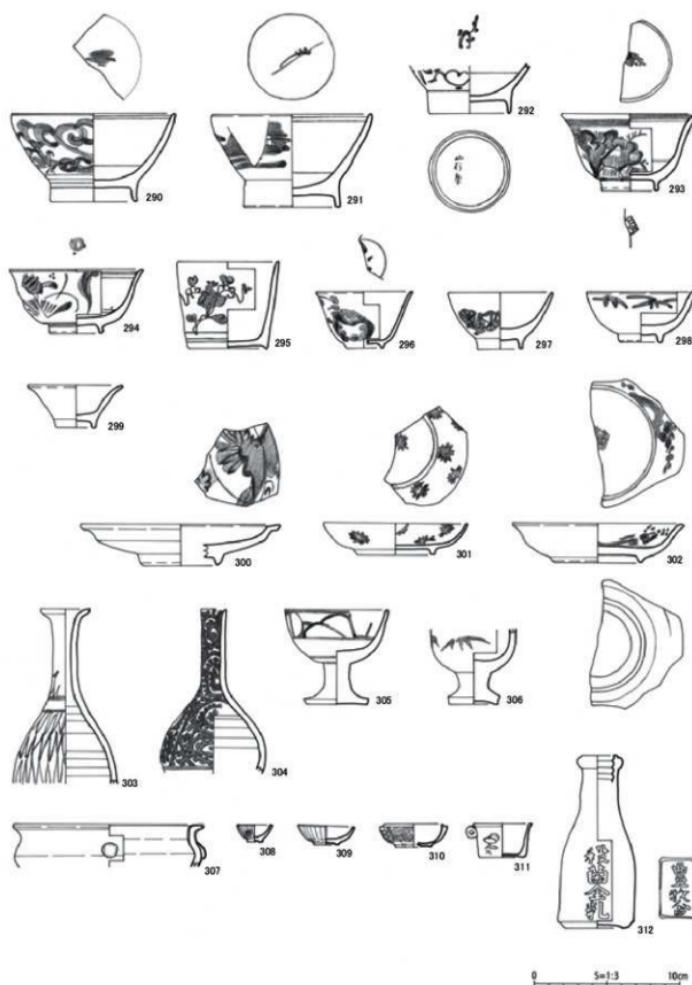
第43図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図16（陶磁器）



第44図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図17(陶磁器・土製品・瓦)



第45図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図18（陶磁器）



第46図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図19（陶磁器他）

第6表 鶴喰広田遺跡出土土器・陶磁器一覧表

図 組合 番号	地名 タリード	層位	種別	基準	計測値 (cm)	部位	残存率	備考
28	1	E13S E	Ⅲ	陶文・ 乳牛土器	深鉢	-	-	(18.9) 内: N 3/4 黒灰 外: N 2/2 黒
	2	C6	-	陶文・ 乳牛土器	深鉢	(18.4)	-	(8.4) 内: 3YR 5/3 12.4cm 横 外: 3YR 5/3 12.4cm 横
	3	B1N E	Ⅲ	陶文土器	深鉢	-	-	(3.4) 内: 10YR 4/2 灰黄 外: 10YR 4/2 灰黄
	4	E12	-	乳牛土器	盤	-	-	(6.0) 内: 7.5YR 5/1 黒灰 外: 7.5YR 5/1 にひい黒
	5	F13	Ⅱ	乳牛土器	盤	(1.3)	-	(14.8) (8.8) 内: 3YR 5/3 12.4cm 横 外: 3YR 5/3 12.4cm 横
	6	F14N E	Ⅲ	乳牛土器	盤	8.8	-	9.7 内: 3YR 5/3 12.4cm 横 外: 3YR 5/2 埋立
	7	C6	-	乳牛土器	盤	(8.6)	-	(9.8) (6.3) 内: 10YR 4/2 灰黄 外: 10YR 4/1 黄
	8	C2S W	Ⅲ	乳牛土器	小型盤	-	4.2	8.0 (12.0) 内: 3YR 5/1 黑 外: 3.5YR 4/1 リニア
	9	C8S E	Ⅲ	乳牛土器	盤	(14.6)	-	(16.2) (12.0) 内: N 4/4 黑 外: 2.5Y 5/2 黄灰
	10	C2S E	Ⅲ	乳牛土器	盤	(16.7)	-	(9.6) 内: 10YR 4/2 12.4cm 横 外: 2.5Y 5/2 黑
	11	C1S W	Ⅲ	乳牛土器	盤	(21.4)	-	(4.1) 内: 7.5YR 6/3 12.4cm 横 外: 10YR 4/2 12.4cm 横
	12	C3N W	Ⅲ	乳牛土器	盤	(12.4)	-	(13.0) (10.0) 内: 2.5Y 5/2 黑 外: 2.5Y 5/2 黄
	13	C3N E	Ⅲ	乳牛土器	盤	(17.4)	-	(4.1) 内: 7.5YR 7/4 にひい黒 外: 7.5YR 7/4 にひい黒
	14	C5S E	Ⅲ	乳牛土器	盤	-	-	(6.7) 内: 7.5YR 6/4 12.4cm 横
	15	F14 S E	Ⅲ	乳牛土器	盤	-	-	(11.8) 内: 10YR 8/2 12.4cm 横 外: 10YR 8/3 にひい黄
29	16	C8	-	土師器	盤	(19.5)	-	(5.6) 内: 3YR 2/6 稲 外: 3YR 2/6 黄
	17	F13	-	土師器	盤	(21.5)	-	(5.5) 内: 2.5Y 6/4 12.4cm 横
	18	E12S E	Ⅲ	土師器	盤	(18.3)	-	(5.3) 内: 7.5YR 7/6 横 外: 3YR 4/3 にひい黄
	19	C3S E	Ⅲ	土師器	盤	(24.8)	-	(7.6) 内: 10YR 4/2 12.4cm 横 外: 2.5Y 5/2 黄
	20	F15	-	土師器	盤	(30.6)	-	(7.5) 内: 3YR 7/3 にひい黒 外: 7.5YR 6/3 にひい黒
	21	C3N E	Ⅲ	土師器	盤	(34.2)	-	(10.6) 内: 10YR 6/4 にひい黄 外: 10YR 6/4 にひい黄
	22	G14S W	Ⅲ	土師器	盤	(36.5)	-	(18.7) 内: 7.5YR 6/1 12.4cm 横 外: 2.5Y 5/3 12.4cm 横
	23	C8N E	Ⅲ	土師器	盤	(37.2)	-	(8.4) 内: 10YR 7/2 にひい黄 外: 10YR 7/2 にひい黄
	24	D10	-	土師器	盤	(30.1)	-	(7.2) 内: 3YR 6/2 12.4cm 横 外: 3YR 6/2 12.4cm 横
	25	-	-	土師器	盤	-	-	(4.4) 内: 2.5Y 3/2 黑 外: 7.5YR 4/3 黑
30	26	C5	Ⅱ	兔生土器	盤	-	6.1	(3.3) 内: 2.5Y 5/2 研磨 外: 2.5Y 5/2 黑
	27	E12NW	Ⅲ	兔生土器	盤	-	5.4	(3.7) 内: 10YR 6/2 12.4cm 横 外: 10YR 5/2 12.4cm 横
	28	E13N E	Ⅲ	兔生土器	盤	-	5.4	(5.2) 内: 3YR 5/3 12.4cm 横 外: 3YR 5/3 12.4cm 横
	29	C2N E	Ⅲ	兔生土器	小型盤	-	(4.0)	(2.8) 内: 2.5Y 5/2 黑 外: 10YR 5/2 黑
	30	B1S E	Ⅲ	土師器	盤	-	8.9	(4.4) 内: 3Y 7/2 白 外: 3Y 6/2 12.4cm 横
	31	G15NW	Ⅲ	兔生土器	盤	-	8.3 (18.0) (8.4) 内: 3YR 5/1 12.4cm 横 外: 3YR 5/1 12.4cm 横	内: 3YR 5/1 12.4cm 横 外: 3YR 5/1 12.4cm 横
	32	G14S W	Ⅲ	土師器	盤	-	(6.4)	(7.3) 内: 2.5Y 2/1 黑 外: 7.5YR 6/3 にひい黒
	33	C3N E	Ⅲ	土師器	盤	-	18.3	(6.0) 内: 10YR 6/2 12.4cm 横 外: 10YR 6/2 12.4cm 横
	34	B0S W	Ⅲ	土師器	盤	-	10.8	(3.0) 内: 2.5Y 6/2 12.4cm 横 外: 10YR 5/2 12.4cm 横
	35	B1N W	Ⅲ	土師器	盤	-	10.5	(4.7) 内: 2.5Y 6/2 黄 外: 10YR 5/3 12.4cm 横
31	36	-	-	土師器	高环	(21.0)	-	(8.0) 内: 3YR 3/1 黑
	37	-	-	土師器	高环	(17.8)	-	(4.7) 内: 7.5YR 6/4 12.4cm 横 外: 10YR 6/3 にひい黄
	38	C2S E	Ⅲ	土師器	高环	(22.0)	-	(8.0) 内: 30YR 4/3 にひい黄 外: 30YR 4/3 にひい黄
	39	C2NW	Ⅲ	土師器	高环	-	-	(3.7) 内: 30YR 4/2 12.4cm 横 外: 30YR 4/2 12.4cm 横
	40	C1S W	Ⅲ	土師器	高环	(17.9)	-	(5.5) 内: 2.5Y 5/4 12.4cm 横 外: 2.5Y 5/4 12.4cm 横
	41	B0S E	Ⅲ	土師器	高环	(44.0)	-	(6.7) 内: 3YR 5/3 にひい黄 外: 3YR 5/3 にひい黄
	42	C3N E	Ⅲ	土師器	小型盤台	(8.4)	-	(2.0) 内: 7.5YR 5/3 12.4cm 横 外: 7.5YR 5/3 12.4cm 横
	43	B1N W	Ⅲ	土師器	小型盤台	(10.2) (3.0)	-	(1.7) 内: 2.5Y 6/2 12.4cm 横 外: 2.5Y 6/2 12.4cm 横
	44	F14NW	Ⅲ	土師器	高环	-	6.7	(5.8) 内: 2.5Y 6/4 12.4cm 横 外: 7.5YR 6/4 12.4cm 横
	45	C2N E	2列トレント	土師器	高环	-	(9.7)	(6.8) 内: 30YR 5/3 にひい黄 外: 7.5YR 5/4 12.4cm 横

図 別書 番号	遺構 グリッド	部位	種別	形様	計測値 (cm)			色調	部位	残存率	備考	
					上径	底径	最大幅					
31	46	B1S E	III	土器部	壺	-	30.2	-	(8.0) 内 2.5YR 4.5-3 に近い黄褐色 外 2.5YR 4.5-3 に近い黄褐色	腹部	100%	
	47	-	II	土器部	台付壺	(32.8)	-	(6.0)	内 2.5YR 5.0-4 黄褐色 外 2.5YR 5.0-4 黄褐色	口縁部	10%	
	48	-	-	土器部	台付壺	(24.4)	-	(19.6)	内 2.5Y 4.5-6 黄褐色 外 2.5Y 3.1 オーバー黒	口縁部～側部	10%	
	49	C3N E	III	土器部	台付壺	(20.2)	-	(6.2)	内 2.5YR 5.0-4 黄褐色 外 2.5YR 5.0-4 黄褐色	口縁部～側部	10%	
32	50	C2N W	III	土器部	台付壺	(21.8)	-	(7.6)	内 2.5Y 4.1 黄褐色 外 2.5Y 4.1 黄褐色	口縁部～側部	10%	
	51	C6	-	土器部	台付壺	(17.6)	-	(18.3) (7.2)	内 10YR 6.3-3 に近い黄褐色 外 10YR 5.3-3 に近い黄褐色	口縁部	20%	
	52	-	-	土器部	台付壺	(18.5)	-	(8.9)	内 10YR 4.1 黄褐色	口縁部～側部	10%	
	53	-	-	土器部	台付壺	(22.8)	-	(6.7)	内 10YR 6.3-3 に近い黄褐色 外 10YR 5.3-3 に近い黄褐色	口縁部～側部	10%	
	54	-	-	土器部	台付壺	(25.6)	-	(4.8)	内 2.5YR 6.0-6 黄褐色 外 2.5YR 5.0-6 黄褐色	口縁部	10%	
	55	C2N W	III	土器部	台付壺	(16.3)	-	(7.4)	内 2.5Y 5.2-2 黄褐色 外 2.5Y 4.0-2 黄褐色	口縁部～側部	10%	
	56	-	-	土器部	台付壺	(28.4)	-	(5.5)	内 2.5YR 5.0-3 黄褐色 外 2.5YR 4.0-3 黄褐色	口縁部	10%	
	57	C2N E	III	土器部	S字型	(12.2)	-	(9.0)	内 10YR 5.4-3 に近い黄褐色 外 10YR 3.2 黒褐色	口縁部～側部	30%	
	58	E12	-	土器部	S字型	(16.4)	-	(2.1)	内 5Y 4/3 黄褐色 外 5Y 4/3 黄褐色	口縁部	30%	
	59	-	II	土器部	S字型	-	-	(2.4)	内 2.5Y 5.2 黄褐色 外 2.5Y 5.2 黄褐色	口縁部	成形	
60	60	B1N E	19]	トレンチ	土器部	S字型	-	-	(1.7) 内 2.5Y 5.2 黄褐色 外 2.5Y 5.2 黄褐色	口縁部	成形	
	61	F13	II	土器部	壺	-	-	(3.7)	内 10YR 5.3-3 に近い黄褐色 外 10YR 5.3-3 に近い黄褐色	口縁部	成形	
	62	C2S E	III	土器部	台付壺	-	9.3	-	(8.0) 内 10YR 3.1 黑褐色 外 10YR 3.2 黑褐色	口縁部	100%	
	63	G14S W	III	陶生工具	台付壺	-	7.4	-	(5.0) 内 7.5YR 5.0-3 黄褐色 外 7.5YR 5.0-3 黄褐色	口縁部	100%	
	64	E12	-	土器部	台付壺	-	6.8	-	(4.7) 内 2.5YR 5.1 黄褐色 外 2.5YR 5.1 黄褐色	口縁部	100%	
	65	N14FW	III	土器部	台付壺	-	8.9	-	(6.6) 内 5YR 4/3 に近い黄褐色 外 5YR 4/2 黄褐色	口縁部	100%	
	66	C2S E	III	土器部	台付壺	-	8.8	-	(6.4) 内 10YR 4/2 黄褐色 外 10YR 4/2 黄褐色	口縁部	100%	
	67	C5N E	II	土器部	台付壺	-	9.4	-	(7.4) 内 5YR 6/4 に近い橙褐色 外 5YR 6/4 に近い橙褐色	口縁部	100%	
33	68	E12	-	土器部	壺	(16.7)	-	(5.5)	内 2.5Y 5.0-2 黄褐色 外 2.5Y 5.0-2 黄褐色	口縁部	30%	
	69	C1S W	III	土器部	壺	-	(16.0)	-	(5.8) 内 2.5Y 5.2 黄褐色 外 2.5Y 5.2 黄褐色	口縁部	10%	
	70	C5	III	土器部	壺	(19.6)	-	(20.5) (10.5)	内 7.5YR 6.4-3 黄褐色 外 10YR 4/1 に近い黄褐色	口縁部～側部	10%	
	71	B1S E	III	土器部	小型壺	(9.4)	-	(12.0) (9.2)	内 10YR 4/1 黑褐色	口縁部～側部	70%	
	72	D10SW	III	土器部	小型壺	(11.6)	5.8	-	(11.0) 内 2.5YR 5.3 に近い黄褐色 外 2.5YR 6/3 に近い黄褐色	口縁部～底部	90%	
	73	C2N W	III	土器部	小型壺	(11.6) (4.2)	(12.8)	9.5	内 2.5YR 5.2 黄褐色 外 2.5YR 5.2 黄褐色	口縁部～底部	30%	
	74	C1NW	III	土器部	小型壺	9.8	6.0	-	8.7 内 5YR 5/4 に近い黄褐色 外 7.5YR 5/4 に近い黄褐色	口縁部～底部	90%	
	75	C3N E	III	土器部	小型壺	(14.0)	-	-	内 10YR 5/4 に近い黄褐色 外 10YR 4/4 に近い黄褐色	口縁部～底部	20%	
	76	B0S E	III	土器部	鉢	(9.3)	-	(11.0) 5.2	内 2.5Y 5.2 黄褐色 外 2.5Y 5.2 黄褐色	口縁部～底部	50%	
	77	C1NW	III	土器部	小型壺	-	2.3	(7.5) (4.0)	内 7.5YR 4/3 黑褐色 外 10YR 3/1 黑褐色	体部～底部	50%	
34	78	-	III	土器部	小型壺	-	2.0	6.3	(3.0) 内 10YR 4/2 黄褐色 外 10YR 4/2 黄褐色	体部～底部	80%	
	79	C1NW	III	土器部	小型壺	6.7	3.0	8.4	7.3 内 5YR 5/4 に近い黄褐色 外 7.5YR 5/4 に近い黄褐色	体部～底部	完形	
	80	C3N E	III	土器部	小型壺	-	3.7	9.4	(6.6) 内 7.5YR 6/4 橙褐色 外 7.5YR 6/4 橙褐色	体部～底部	80%	
	81	-	III	土器部	小型壺	-	4.6	-	(2.3) 内 2.5Y 5.2 黄褐色 外 2.5Y 5.2 黄褐色	底部	100%	
	82	F15	-	土器部	小型壺	-	2.8	-	(2.8) 内 10YR 5/1 黑褐色 外 10YR 6/3 黑褐色	底部	100%	
	83	B1N E	III	土器部	小型壺	-	4.0	-	(2.9) 内 2.5Y 5/1 オーバー黒 外 2.5Y 5/1 オーバー黒	底部	100%	
	84	CT	-	土器部	小型壺	-	3.3	-	(2.0) 内 2.5Y 5/2 黄褐色 外 2.5Y 5/2 黄褐色	底部	100%	
	85	G14S W	III	土器部	鉢	(14.6)	4.9	-	6.8 内 10YR 4/3 に近い黄褐色 外 10YR 5/3 に近い黄褐色	口縁部～底部	60%	
	86	B1S E	III	土器部	鉢	(13.0)	-	-	5.5 内 10YR 5/3 に近い黄褐色 外 10YR 5/3 に近い黄褐色	口縁部～底部	60%	
	87	B1N E	III	土器部	鉢	9.0	4.6	-	6.4 内 7.5YR 5/3 に近い黄褐色 外 7.5YR 5/3 に近い黄褐色	口縁部～底部	40%	
	88	E13N E	III	土器部 (手捏ね)	壺	11.0	5.4	-	5.1 内 2.5Y 4/2 黄褐色 外 2.5Y 4/2 黄褐色	定形		
	89	B1N E	III	土器部 (手捏ね)	壺	(5.6)	(2.7)	-	5.2 内 7.5YR 5/4 に近い黄褐色 外 7.5YR 6/4 に近い黄褐色	口縁部～底部	90%	
	90	C1SW	III	土器部	壺	(13.2)	(4.0)	-	4.5 内 7.5YR 6/3 に近い黄褐色 外 7.5YR 6/3 に近い黄褐色	口縁部～底部	70%	

図 組合 番号	遺構 グリッド	部位	種別	形様	計測値 (cm)				色調	部位	残存率	備考	
					U径	底径	最大径	高さ					
34	91	C1SW	Ⅲ	土師器	环	12.5	4.3	-	5.0	内:7.SYR 6.4 に古い黒 外:10YR 4.3 に古い黒	底部	完形	
	92	C1SW	Ⅲ	土師器	环	12.5	-	-	5.2	内:7.SYR 6.4 に古い黒 外:10YR 6.4 に古い黒	底部	完形	
	93	F14S E	Ⅲ	土師器	环	13.6	5.6	-	5.3	内:10YR 6.4 に古い黒 外:10YR 6.4 に古い黒	底部	完形	
	94	F14S E	Ⅲ	土師器	环	(13.8)	-	-	(5.3)	内:2.SYR 6.1 黄褐色 外:10YR 6.4 に古い黒	口縁部～全体	20%	
	95	-	Ⅲ	土師器	环	13.8	-	-	4.5	内:10YR 1.7/1 黒 外:7.SYR 5.5/3 に古い黒	底部～底部	90%	黒色
	96	C1SW	Ⅲ	土師器	环	(12.8)	-	-	3.9	内:2.SYR 4/3 明るい黄 外:7.SYR 6.3 に古い黒	口縁部～底部	80%	赤色
	97	C1NW	Ⅲ	土師器	环	(13.3)	(3.6)	-	(4.9)	内:10YR 1.7/1 黒 外:7.SYR 5.5/3 に古い黒	底部	20%	
	98	G14SW	Ⅲ	土師器	环	12.8	-	-	3.9	内:10YR 1.7/1 黒 外:7.SYR 4.6 明るい黄	底部～底部	90%	黒色
	99	-	-	土師器	环	14.2	-	-	3.9	内:10YR 1.7/1 黒 外:7.SYR 5.5/3 に古い黒	底部	完形	赤色
	100	G14SW	Ⅲ	土師器	环	14.0	-	-	5.0	内:2.SYR 5/2 明るい黄 外:7.SYR 5/2 明るい黄	底部	完形	
35	101	G15NW	Ⅲ	土師器	环	(12.5)	-	-	3.7	内:2.SYR 3/1 黒褐色 外:2.SYR 3/1 黒褐色	口縁部～底部	60%	黒色
	102	G14SW	Ⅲ	土師器	环	12.8	-	-	4.3	内:2.SYR 3/1 黒褐色 外:2.SYR 3/1 黒褐色	底部	完形	
	103	F14N E	Ⅲ	土師器	环	10.9	-	-	3.9	内:2.SYR 2/1 黒 外:5.SYR 5.5/3 水緋	口縁部～底部	75%	黒色
	104	-	-	土師器	高环	(19.8)	-	-	(7.3)	内:2.SYR 4/6 明るい黄 外:10YR 4/2 に古い黒	口縁部～全体	40%	
	105	C3N E	Ⅲ	土師器	高环	(17.6)	-	-	(6.3)	内:10YR 5/1 頸輪 外:10YR 5/1 頸輪	口縁部～全体	20%	
	106	F13NW	Ⅲ	土師器	高环	19.2	-	-	(5.8)	内:2.SYR 5/6 明るい黄 外:2.SYR 5/6 明るい黄	口縁部～全体	50%	
	107	C1SW	Ⅲ	土師器	高环	16.2	-	-	(4.4)	内:10YR 5/1 に古い黒 外:10YR 5/3 に古い黒	口縁部～全体	30%	
	108	F14S E	Ⅲ	土師器	高环	(19.8)	-	-	(4.9)	内:10YR 3/1 黒褐色 外:10YR 3/1 黒褐色	口縁部～全体	50%	黒色
	109	B1N E	Ⅲ	土師器	高环	(17.0)	-	-	(5.2)	内:2.SYR 5/6 明るい黄 外:3.YR 5/6 明るい黄	口縁部～全体	40%	
	110	-	-	土師器	高环	16.0	-	-	(4.5)	内:10YR 6/3 に古い黒 外:10YR 6/3 に古い黒	口縁部～全体	30%	
	111	B1S E	Ⅲ	土師器	高环	15.4	-	-	(5.3)	内:10YR 3/1 黒褐色 外:10YR 3/1 黒褐色	口縁部～全体	20%	
	112	C8N E	Ⅱ	土師器	高环	(12.9)	-	14.2	(5.5)	内:2.SYR 4/3 12.45 明るい黄 外:2.SYR 5/3 12.45 明るい黄	口縁部～全体	40%	
	113	-	-	土師器	高环	(11.0)	-	(32.5)	(6.2)	内: N 3.0 明赤 外: N 3.1 明赤	口縁部～全体	20%	
	114	D10S E	Ⅲ	土師器	高环	-	(13.4)	-	(8.2)	内:10YR 5/4 に古い黒 外:10YR 5/4 に古い黒	脚部	80%	
	115	F14S E	Ⅲ	土師器	高环	-	(12.4)	-	(8.1)	内:7.SYR 3/2 明るい黄 外:10YR 3/1 黒褐色	脚部	40%	
	116	F14S E	Ⅲ	土師器	高环	-	-	-	(10.0)	内:2.SYR 3/1 12.45 明るい黄 外:2.SYR 3/1 12.45 明るい黄	全体～脚部	50%	
36	117	C2NW	Ⅲ	土師器	壺	(24.6)	-	-	(13.6)	内:10YR 5/2 に古い黒 外:10YR 5/2 に古い黒	口縁部～全体	20%	
	118	C2S E	Ⅲ	土師器	壺	(19.6)	-	-	(6.0)	内: SY 4/1 黄 外: SY 4/1 黄	口縁部～脚部	20%	
	119	B1N E	Ⅲ	土師器	壺	(18.5)	-	-	(5.7)	内:7.SYR 6/3 12.45 明るい黄 外:7.SYR 6/2 12.45 明るい黄	口縁部～脚部	20%	
	120	C1SW	Ⅲ	土師器	壺	(23.4)	-	(24.0)	(28.3)	内:10YR 6/1 頸輪 外:10YR 5/2 に古い黒	口縁部～脚部	30%	
	121	E12S E	Ⅲ	土師器	壺	(15.2)	-	-	(11.8)	内:7.SYR 4/2 に古い黒 外:7.SYR 4/2 に古い黒	口縁部～脚部	40%	
	122	D3S W	Ⅲ	土師器	壺	-	-	-	(6.5)	内:10YR 5/1 頸輪 外:7.SYR 6/3 12.45 明るい黄	-	破片	
	123	C3S W	Ⅲ	土師器	壺	-	-	-	(4.3)	内:2.SYR 6/1 明るい黄 外:2.SYR 6/1 明るい黄	口縁部	破片	
	124	D9	Ⅱ	土師器	瓶	-	-	-	(6.8)	内:10YR 5/5/2 光沢黒 外:10YR 5/5/2 光沢黒	把手	-	
	125	C2N E	Ⅲ	土師器	壺	(10.7)	(6.4)	-	3.5	内:SYR 4/4 12.45 明るい黄 外:SYR 4/4 12.45 明るい黄	口縁部～底部	20%	
	126	C5	Ⅱ	土師器	壺	(11.0)	(6.0)	-	3.7	内:10YR 3/1 明るい黄 外:7.SYR 4/2 明るい黄	口縁部～脚部	20%	
	127	B1N E	Ⅲ	土師器	壺	(12.6)	-	-	(3.2)	内:SYR 4/3 12.45 明るい黄 外:SYR 4/3 12.45 明るい黄	全体	10%	
	128	B1N E	Ⅲ	土師器	壺	(11.0)	(7.2)	-	2.7	内:SYR 3/1 明るい黄 外:SYR 3/1 明るい黄	口縁部～脚部	10%	
	129	C1NW	Ⅲ	土師器	壺	(10.6)	-	-	(2.6)	内:7.SYR 4/4 明るい黄 外:7.SYR 5/4 に古い黒	全体～脚部	20%	
	130	B0'S E	Ⅲ	土師器	小壺	(8.1)	(4.0)	-	2.6	内:10YR 4/2 に古い黒 外:10YR 4/2 に古い黒	口縁部～底部	30%	
	131	C1S E	Ⅲ	土師器	壺	(13.8)	-	-	(3.4)	内:10YR 4/2 に古い黒 外:10YR 5/3 に古い黒	口縁部～底部	20%	
	132	D9	Ⅱ	土師器	壺	(31.4)	-	-	(5.1)	内:7.SYR 4/3 明るい黄 外:7.SYR 4/3 明るい黄	口縁部	10%	
37	133	C1SW	Ⅲ	土師器	壺	(19.9)	(7.5)	(29.0)	(31.6)	内:10YR 4/2 に古い黒 外:10YR 5/2 に古い黒	口縁部～底部	90%	
	134	-	-	土師器	壺	-	-	-	(22.2)	内:2.SYR 4/1 黄褐色 外:7.SYR 6/1 黄褐色	脚部～底部	70%	
	135	C2S E	Ⅲ	土師器	壺	16.7	8.2	24.5	30.3	内:10YR 4/2 に古い黒 外:10YR 6/2 に古い黒	口縁部	完形	

図 別書 番号	遺構 グリッド	部位	種別	形様	計測値 (cm)				色調	部位	残存率	備考	
					口径	底径	最大幅	高さ					
38	136 底面2 土芯丸中	Ⅲ	土陶器	甕	19.0	9.5	30.3	32.9	内:N:10YR 7/4 に近い黄褐色 外:N:10YR 7/4 に近い黄褐色	底部	完形		
	137 底面2 土芯丸中	Ⅲ	土陶器	甕	13.0	7.1	—	20.3	内:N:7.5YR 6/2 黄褐色	底部	完形		
	138 底面2 土芯丸中	Ⅲ	土陶器	甕	15.8	8.2	25.3	26.9	内:N:10YR 7/2 に近い黄褐色 外:N:10YR 7/2 に近い黄褐色	底部	完形		
39	139 底面2 土芯丸中	Ⅲ	土陶器	甕	16.8	7.8	26.3	26.1	内:N:5YR 5/2 黄褐色	底部	完形		
	140 底面2 土芯丸中	Ⅲ	土陶器	小型甕	—	1.9	(7.8)	(6.3)	内:N:7.5YR 5/4 に近い黄褐色 外:N:10YR 5/2 黄褐色	颈部～底部	80%		
	141 底面2 土芯丸中	Ⅲ	陶土器	甕	—	9.2	23.0	(26.0)	内:N:2.5Y 7/1 白灰 外:N:2.5Y 6/1 黑灰	口縁部～底部	90%		
40	142 底面2 土芯丸中	Ⅲ	陶土器	甕	—	7.3	16.0	(15.1)	内:N:5YR 5/2 黄褐色 外:N:5YR 4/8 小型甕	颈部～底部	100%		
	143 — 2例トレンチ	甕他器	甕	(14.6)	—	—	(5.4)	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	口縁部～天井部	50%		
	144 B1S E	Ⅲ	甕他器	甕	(10.6)	—	(3.4)	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	口縁部	20%		
41	145 C2N E 2例トレンチ	甕他器	甕	(11.8)	—	—	(4.1)	N:5	内:N 5/4 外:N 4/4	口縁部～天井部	20%		
	146 C2N W	Ⅲ	甕他器	甕	(15.1)	—	—	(3.2)	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	口縁部	10%	
	147 D2S W	Ⅲ	甕他器	甕	—	—	(3.6)	N:5	内:N 5/4 外:N 4/4	口縁部～天井部	70%		
42	148 C3N E	Ⅲ	甕他器	甕	(13.9)	—	—	(4.3)	N:5Y 5/1 白 外:N:7.5Y 5/1 白	口縁部～天井部	10%		
	149 C6	Ⅱ	甕他器	甕	(8.7)	—	—	(3.6)	N:5Y 5/1 白 外:N:4.5Y 5/1 白	口縁部～天井部	25%		
	150 C8	—	甕他器	甕	(8.4)	—	—	(3.9)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部～天井部	40%	
43	151 E12	—	甕他器	甕	(9.2)	—	—	(2.3)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部～全体	10%	
	152 C1N W	Ⅲ	甕他器	甕	(12.0)	—	—	(2.7)	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	口縁部	10%	
	153 B1S W	Ⅲ	甕他器	甕	(8.7)	—	(10.4)	2.45	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	口縁部～全体	20%	
44	154 B1N E	Ⅲ	甕他器	甕	(8.2)	—	(10.6)	2.4	N:5Y 5/1 白 外:N:2.5Y 6/1 黑灰	口縁部～全体	30%		
	155 F13NW	Ⅲ	甕他器	甕	(16.9)	—	(3.9)	N:4	内:N 4/4 外:N 5/4	口縁部～全体	70%		
	156 E13	—	甕他器	甕	(24.8)	—	—	2.3	N:3Y 3/1 白 外:N 3Y 3/1 白	口縁部～全体	10%		
45	157 —	—	甕他器	甕	(15.4)	—	(16.0)	2.3	N:5Y 6/1 白 外:N:7.5Y 6/1 白	口縁部～全体	10%		
	158 —	—	甕他器	耳杯	(13.1)	—	15.7	4.5	N:5	内:N 5/4 外:N 4/4	底部	完形	
	159 F14S E	Ⅲ	甕他器	耳杯	—	—	(13.6)	(4.1)	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	底部～底部	30%	
46	160 C2NW	Ⅲ	甕他器	耳杯	(11.0)	—	(13.4)	(3.3)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部～全体	10%	
	161 G15	—	甕他器	耳杯	(12.8)	—	(15.8)	(3.0)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部～全体	10%	
	162 B1S E	Ⅲ	甕他器	耳杯	(12.0)	—	(14.0)	(3.9)	N:4	内:N 4/4 外:N 6/4	口縁部～全体	10%	
47	163 —	—	甕他器	耳杯	(12.0)	—	(14.1)	(3.0)	N:5Y 5/1 白	口縁部～全体	10%		
	164 C2N	2例トレンチ	甕他器	耳杯	(8.7)	—	(10.6)	(3.4)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部～全体	50%	
	165 —	—	甕他器	高环	(12.7)	—	—	(4.2)	N:5Y 7/1 白 外:N:5Y 7/1 白	口縁部～全体	20%		
48	166 C2S E	Ⅲ	甕他器	耳杯	(12.4)	(7.0)	—	4.1	N:5Y 7/1 白 外:N 5/4 黑	口縁部～底部	20%		
	167 F13	Ⅱ	甕他器	高环	(12.6)	—	—	(3.8)	N:5Y 7/1 白 外:N:5Y 7/1 白	口縁部～全体	10%		
	168 C6	Ⅱ	甕他器	耳	—	(8.0)	—	(1.6)	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	底部	30%	
49	169 C2N E	2例トレンチ	甕他器	高环	—	—	—	(7.1)	N:4	内:N 4/4 外:N 4/4	口縁部	破片	
	170 B1N E	Ⅲ	甕他器	甕	—	—	—	(5.7)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部	破片	
	171 F13	Ⅱ	甕他器	甕	—	—	—	(5.2)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部	破片	
50	172 B1S E	Ⅲ	甕他器	甕	—	—	—	(3.1)	N:5Y 5/1 白 外:N:5Y 5/1 白	口縁部	破片		
	173 B1N E	Ⅲ	甕他器	甕	—	—	—	(2.7)	N:5Y 6/1 白 外:N:5Y 6/1 白	口縁部	破片		
	174 C1NW	Ⅲ	甕他器	甕	—	—	—	(4.4)	N:5Y 4/1 白 外:N:7.5Y 4/1 白	口縁部	破片		
51	175 B1S E	Ⅲ	甕他器	甕	—	—	—	(8.3)	N:5Y 3/1 白 外:N:5Y 3/1 白	口縁部	破片		
	176 —	—	甕他器	甕	—	—	—	(3.7)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	口縁部	破片	
	177 C1NW	Ⅲ	甕他器	甕	—	(10.9)	(15.8)	(10.8)	N:6	内:N 6/4 外:N 6/4	颈部～底部	40%	
52	178 C5	Ⅲ	甕他器	甕	—	12.6	—	(2.7)	N:5	内:N 5/4 外:N:2.5Y 4/2 壁医青	底部	80%	
	179 G15	—	甕他器	甕	—	(17.4)	—	(4.3)	N:5	内:N 5/4 外:N 5/4	底部	10%	
	180 D9	Ⅱ	灰陶陶器	甕	—	(7.0)	—	(3.4)	N:5Y 6/1 白 外:N:2.5Y 6/1 白	底部	50%		

図 号	報告書 番号	遺物 グリッド	部位	種別	形様	計測値 (cm)			色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径				
41	181	C1NW	I列トレンチ	灰陶陶器	圓	-	(7.8)	-	(2.2) 内:2.5V 7/2 黄赤 外:2.5V 7/2 黄赤	底部	20%	
	182	B0SW	II	灰陶陶器	圓	-	(7.8)	-	(1.6) 内:2.5V 7/2 黄赤 外:2.5V 8/2 黄赤	底部	20%	
	183	B1SE	III	灰陶陶器	圓	-	(7.8)	-	(2.4) 内:3V 8/2 黄白 外:3V 8/2 黄白	底部	60%	
	184	D10	-	灰陶陶器	圓	-	(7.9)	-	(1.9) 内:2.5V 7/1 黄白 外:2.5V 7/1 黄白	底部	40%	
	185	C7	-	灰陶陶器	圓	-	(8.2)	-	(1.8) 内:2.5V 8/1 黄白 外:2.5V 8/1 黄白	底部	30%	
	186	-	-	灰陶陶器	小網	-	(5.6)	-	(2.2) 内:2.5V 7/1 黄白 外:2.5V 7/1 黄白	底部	30%	
	187	D10	-	灰陶陶器	圓	-	(6.9)	-	(2.15) 内:2.5V 7/1 黄白 外:2.5V 7/1 黄白	底部	60%	
	188	C8	II	灰陶陶器	圓	-	(7.0)	-	(3.3) 内:2.5V 8/1 黄赤 外:2.5V 8/2 黄赤	底部	40%	
	189	B1NE	III	灰陶陶器	小網	-	(5.4)	-	(1.4) 内:2.5V 8/2 黄赤 外:2.5V 8/2 黄赤	底部	70%	
	190	D10	-	中世陶器	片口鉢	-	-	-	(3.7) 内:10Y 5/1 朱 外:10Y 5/1 朱	口縁部	破片	東瀛江底
	191	C3SW	III	中世陶器	片口鉢	-	(10.2)	-	(3.2) 内:7.5V 6/1 朱 外:10Y 5/1 朱	底部	20%	東瀛江底
	192	C2SE	III	山系鏡	小網	-	(4.4)	-	(1.8) 内:2.5V 7/1 朱 外:2.5V 6/1 朱	底部	20%	東瀛江底
42	193	C5	III	貢系陶器	青白磁 瓶底	-	-	-	(3.4) 内:10GY 7/1 明暦灰 外:10GY 7/1 明暦灰	体部	破片	
	194	C3NE	II	貢系陶器	青白磁 瓶底	-	(6.6)	-	(3.5) 内:2.5GY 7/1 明暦灰 外:2.5GY 7/1 明暦灰	底部	10%	
	195	C3NE	II	貢系陶器	青白磁 瓶底	-	-	-	(3.4) 内:10Y 8/1 朱赤 外:10Y 8/1 朱赤	体部	破片	
	196	C6NE	3列レーンチ	青白磁	瓶底	-	(6.0)	-	(1.4) 内:10Y 8/1 朱赤 外:10Y 8/1 朱赤	体部~底部	10%	
	197	C3NE	III	貢系陶器	白磁 瓶底	-	(4.8)	-	(1.8) 内:10Y 8/1 朱赤 外:10Y 8/1 朱赤	底部	30%	
	198	B2SW	III	貢系陶器	青磁 瓶底	-	-	-	(3.2) 内:10GY 7/1 明暦灰 外:10GY 7/1 明暦灰	口縁部	破片	
	199	C2NE	III	貢系陶器	青磁 瓶底	-	-	-	(4.1) 内:10GY 7/1 明暦灰 外:10GY 6/1 緑灰	口縁部	破片	
	200	B0SW	III	貢系陶器	青磁 瓶底	(13.9)	-	-	(2.8) 内:3GY 5/1 緑灰 外:3GY 5/1 緑灰	口縁部~体部	10%	
	201	B1SE	III	貢系陶器	青磁 瓶底	-	-	-	(3.1) 内:2.5GY 6/1 緑灰 外:2.5GY 6/1 緑灰	体部	破片	
	202	C1NW	III	貢系陶器	青磁 瓶底	(11.0)	-	-	(1.8) 内:3GY 6/1 オリーブ 外:3GY 6/1 オリーブ灰	口縁部	破片	
	203	C5	III	貢系陶器	青磁 桔花口	(10.6)	-	-	(1.9) 内:2.5GY 6/1 緑灰 外:2.5GY 6/1 緑灰	口縁部~体部	10%	
	204	C3SE	III	貢系陶器	青磁 桔花口	-	-	-	(3.2) 内:2.5GY 6/1 緑灰 外:2.5GY 6/1 緑灰	口縁部	破片	
	205	B0SE	III	貢系陶器	青磁 桔花口	(3.2)	-	-	(1.2) 内:10Y 8/1 朱赤 外:10Y 8/1 朱赤	体部~底部	10%	
	206	C1SW	III	貢系陶器	青磁 桔花口	-	-	-	(1.7) 内:2.5Y 8/1 明暦灰 外:2.5Y 8/1 明暦灰	底部	破片	
	207	B0NW	III	中世	施釉陶器	灰陶平鍋	(15.4)	-	(6.4) 内:5Y 6/3 オリーブ 外:5Y 7/2 黄赤	口縁部~体部	10%	
	208	C2NE	II	中世	施釉陶器	綠釉 桔花口	(10.8)	-	(2.3) 内:2.5Y 4/1 朱赤 外:2.5Y 4/1 朱赤	口縁部~底部	30%	
	209	C2SW	III	中世	施釉陶器	青磁 桔花口	-	-	(9.1) 内:2.5Y 3/3 緑 外:2.5Y 3/3 緑	口縁部~体部	20%	
	210	B0NE	III	中世	施釉陶器	青磁 桔花口	-	-	(2.6) 内:3Y 6/4 オリーブ 外:3Y 6/4 オリーブ	口縁部	破片	
	211	-	-	羅繩	羅繩小皿	(11.3)	-	-	(1.9) 内:2.5Y 5/3 オリーブ 外:2.5Y 5/3 オリーブ	口縁部	10%	
	212	D3NW	III	中世	施釉陶器	灰陶丸皿	(9.6) (5.2)	-	2.5 内:2.5Y 4/3 前 外:2.5Y 4/3 後	口縁部~底部	10%	
	213	C15W	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(3.8) 内:2.5Y 3/1 黒 外:2.5Y 3/1 黒	口縁部	破片	
	214	C5	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(3.9) 内:10Y 3/2 黒 外:10Y 3/2 黒	口縁部	破片	
	215	C2NW	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(3.7) 内:10Y 3/2 黒 外:10Y 3/2 黒	口縁部	破片	
	216	C2NE	II	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(3.7) 内:10Y 3/4 超 外:10Y 3/4 超	口縁部	破片	常滑窯
	217	C5	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(6.3) 内:10Y 4/1 黒 外:9.5Y 3/2 前	口縁部	破片	常滑窯
	218	C2SE	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(3.4) 内:2.5Y 3/1 黒 外:2.5Y 3/1 黒	口縁部	破片	常滑窯
	219	C5	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(5.1) 内:10Y 3/2 黒 外:10Y 3/2 黒	口縁部	破片	常滑窯
	220	C3NE	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(3.7) 内:10Y 3/2 黒 外:10Y 3/2 黒	口縁部	破片	常滑窯
	221	C4SE	III	中世	施釉陶器	青磁 耳付水注	-	-	(4.3) 内:10Y 3/4 黒 外:10Y 3/4 黒	口縁部	破片	常滑窯
	222	-	-	中世	施釉陶器	片口鉢	-	-	(6.3) 内:3Y 6/6 稲 外:3Y 6/6 稲	口縁部	破片	常滑窯
	223	B1NE	III	中世	施釉陶器	片口鉢	-	-	(8.3) 内:2.5Y 5/4 明小鉢 外:2.5Y 5/4 明小鉢	体部~底部	30%	常滑窯
	224	B0SW	III	土師質 瓦器	かわらけ	10.3	6.0	-	3.1 内:3YR 5/6 黄赤 外:3YR 5/6 明黄	底部	完形	
	225	B0SW	III	土師質 瓦器	かわらけ	10.3	6.0	-	3.0 内:7.5Y 5/4 棕 外:7.5Y 5/4 棕	口縁部~底部	80%	

図 報告書 番号	遺構 グリッド	部位	特徴	形様	片側面 (cm)				色調	部位	残存率	備考	
					L径	幅径	最大幅	深さ					
42	226	B15 E	Ⅲ	土器質 瓦	かわらけ	(7.3)	4.7	-	2.6	内:7.5YR 6/6 桂 外:7.5YR 6/6 桂	口縁部~底部	70%	
	227	C3N E	Ⅲ	土器質 瓦	かわらけ	5.8	4.6	-	1.0	内:7.5YR 6/6 桂 外:7.5YR 6/6 桂		完形	
	228	C7	-	土器質 瓦	かわらけ	6.9	4.1	-	1.6	内:SYR 6/6 桂 外:SYR 6/6 桂		完形	
	229	C3N E	Ⅲ	土器質 瓦	かわらけ	9.2	5.3	-	2.2	内:SYR 6/6 桂 外:SYR 6/6 桂	口縁部~底部	80%	
43	230	G15	-	瓦 施釉陶器	瓶	-	(6.0)	-	(5.6)	内:2.5Y 5/4 黄 外:2.5Y 3/3 淡黄	体部~底部	50%	
	231	C9	Ⅱ	瓦 施釉陶器	瓶	-	(3.8)	(8.0)	(6.8)	内:SY 8/2 淡白 外:5Y 5/2 淡白	体部~底部	30%	
	232	C5	Ⅲ	瓦 施釉陶器	瓶	-	(5.2)	-	(5.7)	内:SY 8/2 淡白 外:SY 8/2 淡白	体部~底部	60%	
	233	-	Ⅲ	瓦 施釉陶器	織錦茶碗	-	4.7	16.0	(5.8)	内:SY 7/2 淡白 外:7.5YR 2/2 黒麗	体部~底部	100%	
	234	C5	Ⅲ	瓦 施釉陶器	小杯	-	3.4	-	(4.2)	内:SY 7/3 淡青 外:SY 7/3 淡青	体部~底部	80%	
	235	-	-	瓦 施釉陶器	小杯	(5.1)	2.8	-	3.5	内:SY 8/2 淡白 外:5Y 8/2 淡白	口縁部~底部	60%	
	236	D19	-	瓦 施釉陶器	小杯	(5.4)	(3.4)	-	3.0	内:SY 8/2 淡白 外:5Y 8/2 淡白	口縁部~底部	30%	
	237	C3N E	Ⅲ	瓦 施釉陶器	小杯	(6.2)	(3.2)	-	3.9	内:10YR 2/2 黑麗 外:2.5Y 6/4 にふく灰	口縁部~底部	50%	
	238	D9	Ⅱ	瓦 施釉陶器	小杯	5.8	2.9	-	3.6	内:7.5Y 2/2 淡白 外:7.5Y 2/2 淡白		完形	
240	239	C2NW	Ⅲ	瓦 施釉陶器	小杯	-	(3.8)	-	(1.4)	内:SY 8/2 淡白 外:2Y 6/1 淡白	底部	20%	
	241	C2N E	Ⅱ	瓦 施釉陶器	志野豆	(11.6)	(6.6)	-	3.0	内:SY 8/2 淡白 外:5Y 8/2 淡白	口縁部~底部	30%	
	242	D9NW	Ⅱ	瓦 施釉陶器	粗陶小皿	8.2	3.1	-	2.3	内:SY 3/2 暗青 外:SY 3/2 暗青	口縁部~底部	完形	
	243	C2N E	Ⅲ	瓦 施釉陶器	粗陶小皿	(13.2)	(7.9)	-	2.9	内:SY 6/3 オリーブ黃 外:5Y 6/3 オリーブ黃	口縁部~底部	40%	
	244	B05 E	Ⅲ	瓦 施釉陶器	盆鉢	9.6	6.2	-	1.5	内:SY 8/3 淡青 外:SY 8/3 淡青	口縁部~底部	70%	
	245	-	Ⅲ	瓦 施釉陶器	片口	(16.4)	(10.0)	(17.0)	11.0	内:7.5YR 2/1 黒 外:7.5YR 2/1 黒	口縁部~底部	30%	
	246	C6	Ⅱ	瓦 施釉陶器	片口	-	(6.3)	-	(6.8)	内:7.5Y 2/2 淡白 外:7.5Y 2/2 淡白	体部~底部	60%	
	247	H15NW	Ⅱ	瓦 施釉陶器	筒形香炉	(11.6)	(9.1)	-	6.1	内:2.5Y 3/3 暗青 オリーブ 外:2.5Y 3/3 暗青 オリーブ	口縁部~底部	30%	
	248	D9	Ⅱ	瓦 施釉陶器	筒形香炉	(7.2)	(5.3)	-	3.3	内:2.5Y 3/3 暗青 オリーブ 外:2.5Y 3/3 暗青 オリーブ	口縁部~底部	20%	
249	250	C1SW	Ⅱ	瓦 施釉陶器	灯明具	(19.8)	-	-	(1.9)	内:10R 2/2 施釉小皿 外:10R 2/2 施釉小皿	口縁部	10%	
	251	-	Ⅱ	瓦 施釉陶器	灯明具	(6.2)	(6.5)	-	4.3	内:2.5Y 4/3 オリーブ 外:2.5Y 4/3 オリーブ	口縁部	30%	
	252	D9	Ⅱ	瓦 施釉陶器	灯明具	(6.4)	(4.7)	-	4.6	内:2.5Y 3/3 暗青 外:2.5Y 3/3 暗青	口縁部	50%	
	253	C2S E	Ⅲ	瓦 施釉陶器	垂壺	-	4.1	-	(4.6)	内:2.5Y 3/3 暗青 オリーブ 外:7.5Y 5/3 淡青 オリーブ	体部~底部	90%	
	254	C2N W	Ⅲ	瓦 施釉陶器	垂壺	-	4.2	-	(3.1)	内:2.5Y 2/1 黒 外:2.5Y 2/1 黒 にふく灰	体部~底部	100%	
	255	D9	Ⅱ	瓦 施釉陶器	垂壺	5.1	2.8	-	2.4	内:SY 8/1 淡白 外:7.5Y 2/2 淡白	口縁部~底部	50%	
	256	C2N E	Ⅱ	瓦 施釉陶器	垂壺	-	5.1	-	(5.6)	内:7.5Y 2/1 淡白 外:7.5Y 2/1 淡白	体部~底部	70%	
	257	C2S E	Ⅲ	瓦 施釉陶器	灰陶水滴	-	(3.9)	(6.6)	4.5	内:SY 6/2 淡オリーブ 外:5Y 6/2 淡オリーブ	口縁部~底部	50%	
	258	D9	Ⅱ	瓦 施釉陶器	灰陶壺	-	6.4	8.8	(6.8)	内:7.5YR 3/3 明麗 外:7.5YR 3/3 明麗	体部~底部	80%	
259	260	D2S W	Ⅲ	瓦 施釉陶器	灰陶壺	-	(10.7)	(6.3)	-	内:SY 6/3 オリーブ 外:5Y 6/3 オリーブ	口縁部~底部	20%	
	261	C2N E	Ⅱ	瓦 施釉陶器	懸壺	-	5.4	-	(5.6)	内:2.5Y 8/4 淡青 外:2.5Y 6/3 オリーブ	体部~底部	50%	
	262	D10 S W	Ⅱ	瓦 施釉陶器	油滴壺	-	7.0	-	(13.7)	内:BYR 4/4 橙 外:BYR 4/4 橙	口縁部~底部	80%	
	263	D10	-	瓦 施釉陶器	瓶	-	-	-	(3.5)	内:SYR 3/1 黄褐 外:SYR 3/3 暗青	口縁部	破片	
	264	C8	Ⅱ	瓦 施釉陶器	瓶	-	-	-	(3.9)	内:SYR 4/3 にふく灰 外:SYR 4/3 にふく灰	口縁部	破片	
	265	C3N E	Ⅲ	瓦 施釉陶器	瓶	(35.0)	-	-	(4.7)	内:2.5Y 7/2 淡青 外:30YR 4/3 にふく灰	口縁部	10%	
	266	C5	Ⅲ	中 瓦 施釉陶器	瓶	(26.6)	-	-	(3.7)	内:2.5Y 3/1 暗青 外:2.5Y 3/1 暗青	口縁部	10%	
	267	C2N E	2列トレンチ	瓦 施釉陶器	瓶	(34.0)	-	-	(10.0)	内:SYR 4/3 にふく灰 外:2.5Y 8/1 淡青	口縁部	10%	
	268	C3N E	Ⅲ	瓦 質土器	火鉢	-	-	-	(3.4)	内:N 4/0 灰 外:N 4/0 灰	-	破片	
269	270	C2S E	Ⅲ	瓦 質土器	火鉢	-	-	-	(3.0)	内:N 4/0 灰 外:N 4/0 灰	-	破片	
	271	C6	-	瓦 質土器	火鉢	-	-	-	(5.9)	内:N 4/5.0 灰 外:N 4/5.0 灰	-	破片	
	272	C4N E	Ⅲ	瓦 質土器	火鉢	-	-	-	(4.0)	内:SY 5/1 灰 外:SY 5/1 灰	-	破片	

図 別書 番号	遺物 グリッド	層位	種別	器種	計測値(cm)				色調	部位	残存率	備考	
					口径	底径	最大径	高さ					
44	271	—	南区排水路	土製品	人形頭部	—	—	2.8	(3.4)	7.5SV 6-6 灰	頭部	100%	
	272	B1NE	1列トレンチ	土製品	土調	幅5.8 厚1.5	孔径 1.5	容量 57.5ml	内:10YR 3.2 黒褐色 外:10YR 6.1 黒褐色	—	50%		
	273	B1SE	—	土製品	甕	径5.4 厚1.4	—	—	内:10YR 6.1 黒褐色 外:10YR 6.1 黒褐色	—	40%		
	274	C2N	2列トレンチ	瓦	瓦	—	—	—	(5.5)	内:SV 2.1 黑 外:SV 2.1 黑	—	—	破片
	275	B0S E	—	瓦	瓦	—	—	—	(7.0)	内:3Y 5.5-5 灰 外:3Y 5.5-5 灰	—	—	破片
45	226	D10	—	漆器	蓋	φ9.6	輪み付 (3.8)	—	3.0	内:2.5GY 8/1 灰白 外:10Y 7.2 灰白	口縁部~天井部	30%	
	271	D10	—	漆器	蓋	(9.9)	輪み付 (3.8)	—	2.8	内:2.5GY 8/1 灰白 外:7.5GY 2/1 黒褐色	口縁部~天井部	40%	
	278	C2S E	III	漆器	蓋	φ12.0	輪み付 (7.0)	—	3.1	内:N 8.0 灰白 外:N 8.0 灰白	天井部~全体	30%	
	279	C6	—	漆器	蓋	(8.2)	輪み付 (5.4)	—	2.4	内:N 8.0 灰白 外:N 8.0 灰白	天井部~全体	80%	
	280	C5	III	漆器	蓋	(9.8)	輪み付 (5.4)	—	2.7	内:7.5GY 8/1 明緑灰 外:7.5GY 8/1 明緑灰	U縁部~天井部	80%	
	281	D10	—	漆器	蓋	(9.6)	輪み付 (5.2)	—	2.9	内:N 8.0 灰白 外:N 8.0 灰白	U縁部~天井部	60%	
	282	C2S E	III	漆器	蓋	5.0	—	—	1.3	内:7.5Y 8/1 灰白 外:7.5Y 8/1 灰白	口縁部~天井部	80%	
	283	D9	II	漆器	丸瓶	(9.8)	(4.3)	—	5.5	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	40%	洗面見底
	284	C8	II	漆器	丸瓶	(8.8)	—	—	(5.2)	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	40%	
	285	C2N E	2列トレンチ	漆器	丸瓶	—	—	—	(6.2)	内:10Y 6/1 灰 外:10Y 6/1 灰	全体~底部	50%	漱口用漆器
46	286	C2N	2列トレンチ	漆器	筒形瓶	6.2	3.2	—	5.4	内:2.5GY 8/1 明緑灰 外:2.5GY 8/1 明緑灰	完形		
	287	C3N E	II	漆器	筒形瓶	(7.4)	(3.6)	—	5.1	内:2.5GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	40%	
	288	D10	—	漆器	筒形瓶	(7.4)	(4.2)	—	6.5	内:7.5Y 7/2 灰白 外:3GY 7/1 明緑灰	口縁部~底部	50%	
	289	D10	—	漆器	筒形瓶	(6.0)	(4.4)	—	6.8	内:3GY 7/1 明緑灰	口縁部~底部	40%	
	290	C5	III	漆器	広葉柄	(11.2)	(5.9)	—	6.1	内:2.5GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~全体	30%	
	291	D2S W	III	漆器	広葉柄	(10.8)	(6.4)	—	6.4	内:2.5GY 7/1 明オリーブ 外:3GY 7/1 明オリーブ	口縁部~底部	30%	
	292	C3N E	II	漆器	広葉柄	—	—	—	(3.4)	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	底部	90%	
	293	—	—	漆器	蘿叢瓶	(9.4)	(3.8)	—	5.3	内:N 8.0 灰白 外:N 8.0 灰白	口縁部~底部	30%	
	294	C4N E	III	漆器	蘿叢瓶	(9.2)	(3.6)	—	4.4	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	30%	
	295	C2N E	II	漆器	薺麦瓣L	(6.9)	(5.4)	—	6.0	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	30%	
296	296	C2NW	II	漆器	小杯	(6.5)	(2.3)	—	3.9	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部~底部	20%	
	297	D4NW	III	漆器	小杯	(7.1)	(3.0)	—	3.9	内:N 8.0 灰白 外:N 8.0 灰白	口縁部~底部	20%	
	298	—	—	漆器	小杯	7.3	2.8	—	3.5	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	80%	
	299	D9	II	漆器	小杯	6.6	2.6	—	2.9	内:N 8.0 灰白 外:N 8.0 灰白	口縁部~底部	完形	
	300	—	—	漆器	皿	(13.6)	(5.2)	—	2.8	内:7.5GY 8/1 明緑灰 外:7.5GY 8/1 明緑灰	口縁部~底部	20%	
	301	C3N E	III	漆器	皿	(9.8)	(5.2)	—	2.1	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部~底部	30%	
	302	D9	II	漆器	皿	(11.8)	(5.9)	—	2.6	内:10GY 8/1 明緑灰 外:10GY 8/1 明緑灰	口縁部~底部	30%	
	303	C2S E	III	漆器	瓶	(3.4)	—	—	(12.0)	内:10YR 7.3 にじみ青緑 外:10YR 7.3 にじみ青緑	口縁部~底部	60%	
	304	C2S E	III	漆器	瓶	—	—	—	(11.3)	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	70%	
	305	C1SW	II	漆器	弘瓶	(7.0)	4.2	—	6.5	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部~底部	40%	
306	306	C8	II	漆器	弘瓶	—	3.5	—	(5.2)	内:3GY 7/1 明オリーブ 外:2.5GY 8/1 明オリーブ	全体~底部	100%	
	307	C5	III	青面	香炉	(12.8)	—	—	(2.9)	内:10GY 7/1 明緑灰 外:3Y 8/1 灰白	口縁部	20%	
	308	C2N E	2列トレンチ	白磁	紅皿	2.4	1.0	—	1.2	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部~底部	完形	
	309	C2SW	III	白磁	紅皿	3.9	1.6	—	2.3	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部~底部	90%	
	310	D3SW	III	白磁	合子身	4.0	2.4	4.6	1.6	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部~底部	50%	
	311	C2N E	II	白磁	弘瓶	—	—	—	—	内:3GY 8/1 灰白 外:3GY 8/1 灰白	口縁部~底部	20%	抹み跡 8.0 抹み跡 4.4 容量900ml (5勺量)
	312	—	—	ガラス 製品	牛乳瓶	2.2	4.2	—	11.8	—	—	—	完形

(2) 木製品 (第47~71図)

**工具** 1は鋸の柄であろう。先端に鋸部を装着し、穿孔された孔に釘等で固定したと考えられる。柄は縦に半裁された形で出土しており、先端はやや細くなるよう削られている。

**農工土木具** 2~4は平歛の直柄鍬身である。全体的に流磨が激しく、刃部の装着痕などは不明である。3は柄の先端が折れて装着されたままの状態で出土している。

**編み具・紡織具** 5は糸巻具の糸巻の横木と考えられる。中央に径5.5cmの穿孔を施し、両端を突起状に削りだしている。6~7は糸巻具糸棒を構成する支え木である。6は腕木との接合部に釘孔がみられる。8は紡錘車の紡輪である。

**服飾具** 9~48は下駄である。9~32・34は一本造りの連歛下駄である。9~16・18は平面形が方形となる角型の下駄で、17・20~32は平面形が小判形となる丸型の下駄である。歯の下面是使用による摩減が進むものが多く、11は後歯がすり減ったため、切込みを追加した歯を差し込んで補修している。12は長さ14.1cmと小さいため子供用かと思われる。大半の下駄は後緒穴が後歯の前方に穿たれるが、15は後歯の後方となっている。36~39は連歛下駄であるが、歯の部分が別部材で組み合わされる。37・39は歯が残存する。40は台に歯のホゾ穴が露出する露卯下駄の歯であろう。35・41~45・47は無歯の下駄で、いわゆる草履下駄と呼ばれるものである。前歯、後緒穴の位置にはそれぞれ2つの穴が穿たれ、その中には木釘が残存していた。木釘によって鼻緒を固定していたものと思われる。台の表には表地が貼られたとみえ、鉢の痕跡が残る。33・46・48は無歯の下駄で、剥り下駄に属するものであろう。下駄の下面が方形に抉られた木履とされるもので、48は長さ14.4cmと小型であるため子供用と思われる。

49は横櫛で、1cmあたりの歯の本数は7本となり密である。50~52は傘の櫛である。50・52は頭櫛、51は手元櫛とみられ、50は54本、51は55本の骨受けの溝が確認される。50には竹製の柄が残しておらず、木釘で固定される様子が窺える。

**容器** 53~55は漆椀の蓋である。上面に蔓や家紋を蒔絵や朱漆によって描いている。56~74は漆椀である。56・58・59・62・64は浅い形態の碗で、器壁は薄くつくられる。57の違い鷹の羽や58の抱き桟といった家紋を描くものが見受けられる。57・60・63は器壁が厚く、深めの椀で、家紋や植物を漆描きする。67は底部が箱形で浅い形態の平椀で植物が描かれる。68・70・72は深い形態で高台も高くなる。70は高台内に文字が書かれるが、判読は困難である。75・76・78・79は挽き物の皿で、漆がかかららない木地皿である。77は柄杓の杓とみられる。竹製で、節が底になるように製作され、側面下方には柄の先端が残存する。81は黒漆が塗られ、高台が厚く、体部がほぼ直線的に立ち上がる特異な形態の容器である。

82・83は曲物の側板である。いずれも櫛紐によって薄板をとじる。86は箱の底板である。84・85・87~89は桶の側板である。85と86は組み合う同一個体のもので、木釘によって結合される。87は外面に數条のタガの圧痕が残り、88・89は上部に切込みが入る。90~126は曲物の底板(蓋板)である。90~109は蓋板、110~126は底板とみられ、大小様々な大きさがある。中央に穿孔されるものや櫛紐が残存するものが多く、97や109のように把手を取り付けた跡が残る場合もある。大型品は部材を木釘によって繋いで製作する。99には中央に判読不明の焼印があり、102の中心部に銅線の両端を差し込んで把手をしている。127~130は容器の栓である。131は容器の把手とみられ、木釘が残存する。

**食道具** 132~143は箸である。調査区内では多量の箸が出土しているが、ここではその一部を図示している。簡素な白木の箸である。144~146は膳で、いずれも漆塗りの製品である。144は組み合う側板で、結合部を木釘で留めている。145は脚部、146は側板であるが、やはり結合面に木釘が残存する。

**調度** 147は両端を脚状に加工し、上面中央部を削って窪ませている。何らかの調度品の可能性がある。

**遊戯具** 148は羽子板である。柄の部分は欠損している。表面は丁寧に平滑化され、羽子をついた痕跡は見えない。149~151は独楽である。いずれも芯持材を削り出して製作され、中央には貫通孔がある。

**建築部材** 152～155は鶴居あるいは敷居の部材であろう。152は上部に溝が入れられ、中央には貫通孔があけられる。155は側面に鋸による加工の痕跡がみられる。156は建築部材同士を組み合わせる際に差し込まれる結合補助材であろう。157は大半が焼けているため形状が明らかではないが、上部の加工状況から、建築部材の一部と考えられる。

**土木材** 158・159は柵材である。地面上に打ち込むため、板の先端を尖らせる。159は4箇所の貫通孔が認められる。160～169は杭である。旧河川の護岸に使用されたもので、丸太の先端を粗く尖らせていく。

**葬具** 170は木製卒塔婆である。下端は地面に刺すため尖らせ、上端は平らに加工する。表面には文字などの痕跡は認められない。171は位牌である。脚部を削りだした台座で、中央に板状の部材が差し込まれるが、これは牌身部と台座の結合材とみられ、牌身は失われている。塗りの痕跡は認められない。

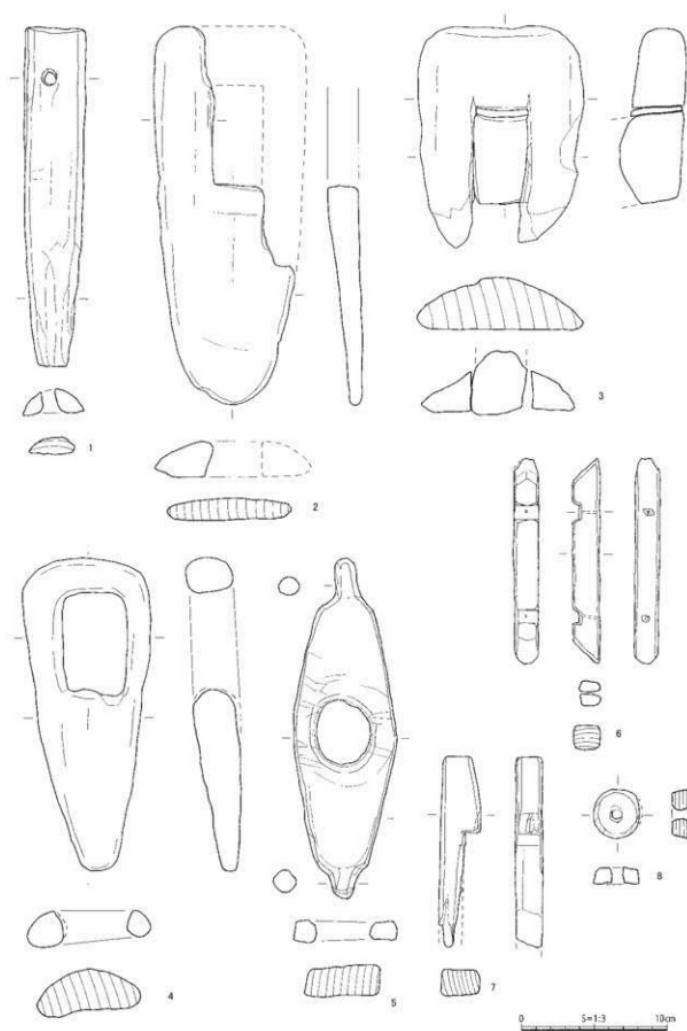
**用途不明品** 172～217は用途不明品である。172は「穴」の墨書きがあり、札のようなものと思われる。173・174は有孔円盤で紡錘車とみられる。175は有孔板である。180は上部が一部欠損する。何らかの飾り板の一部であろうか。183～185・190は切欠きや木釘、180～189・191～194・197は貫通孔があることから組み合う部材の一部とみられる。195は箱状製品の側板かと思われ、木釘が残る。199は湾曲する方形板の中央に貫通孔が設けられる。200～206は比較的大型の加工材で、ホゾやホゾ孔の加工がみされることから、建築材などの部材の一部かと思われる。207は先端を粗く削って尖らせ、中央に方形の貫通孔を入れる。208は一方を細く削り、その先端を丸くおさめ、一方の幅広部に貫通孔をあける。209～212・214も切欠きがみられるため、組み合う部材の一部とみられる。215・217は棒状の加工材で、215は先端を細くホゾ状に削り出し、217は両端を平らに加工している。216は先端部を中心に一部炭化する。

### (3) 石器・石製品（第72図）

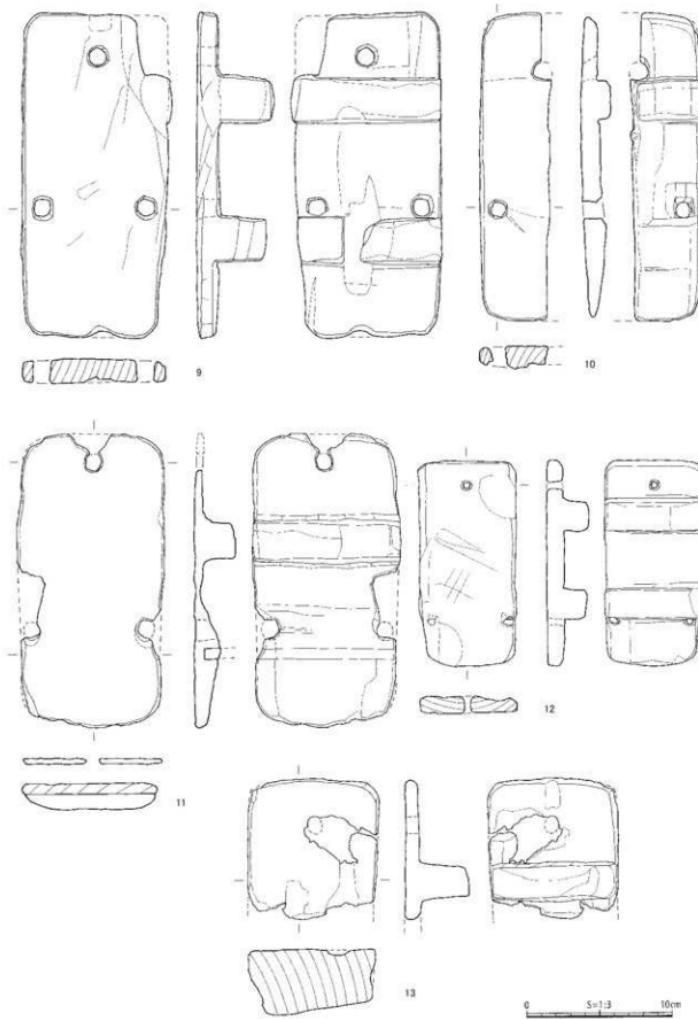
1は閃綠岩製の大型蛤刃の磨製石斧である。刃先を中心にして磨かれ、柄の装着部付近は細かい敲打痕が残る。2・3は白色凝灰岩製の砥石である。砥面はかなり使い込まれているが、裏面は切り出した工具痕がそのまま残る。4は蛇紋岩製の石製紡錘車、5は流紋岩を使用した用途不明の有孔石製品である。

### (4) 金属製品（第72図）

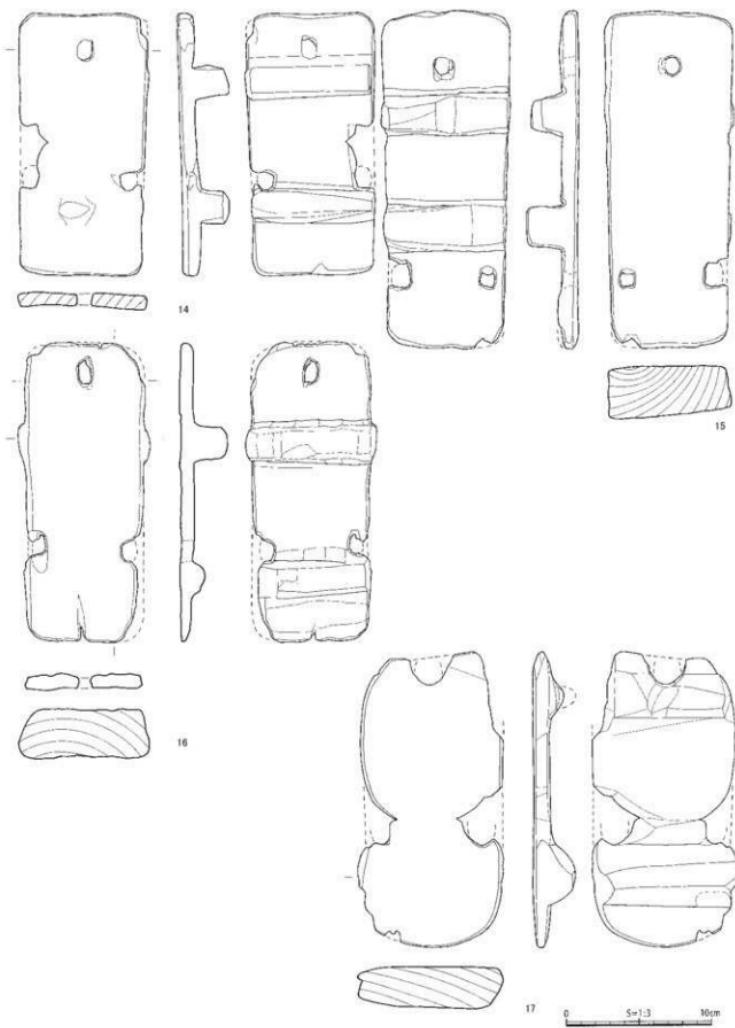
6は銅製の小形彷彿鏡で、面径は6.4cmである。鏡背は縁側から幅1cmの平縁、幅0.4cmの直行櫛歯文様帯と3条の円縫によって重圓文が施される。中央の半球形の紐には貫通孔2通がそれぞれの一部を重ねながら穿孔される。静岡県下で同様の直行櫛歯文様帯を持つ重圓文鏡は静岡市清水区長崎遺跡、焼津市小深田西1号墳の出土例が知られ、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される。7は袋状鉄斧である。刃先は欠損し、柄との装着部には木質が残存する。8は匙である。円形の匙に細い柄をつけた形状で、薄い板を打ち出して製作する。9はキセルの雁首、10・11は吸口である。9・10には羅字の木質が残存する。12～14は寛永通寶で、いずれも新寛永である。15は天保通寶である。



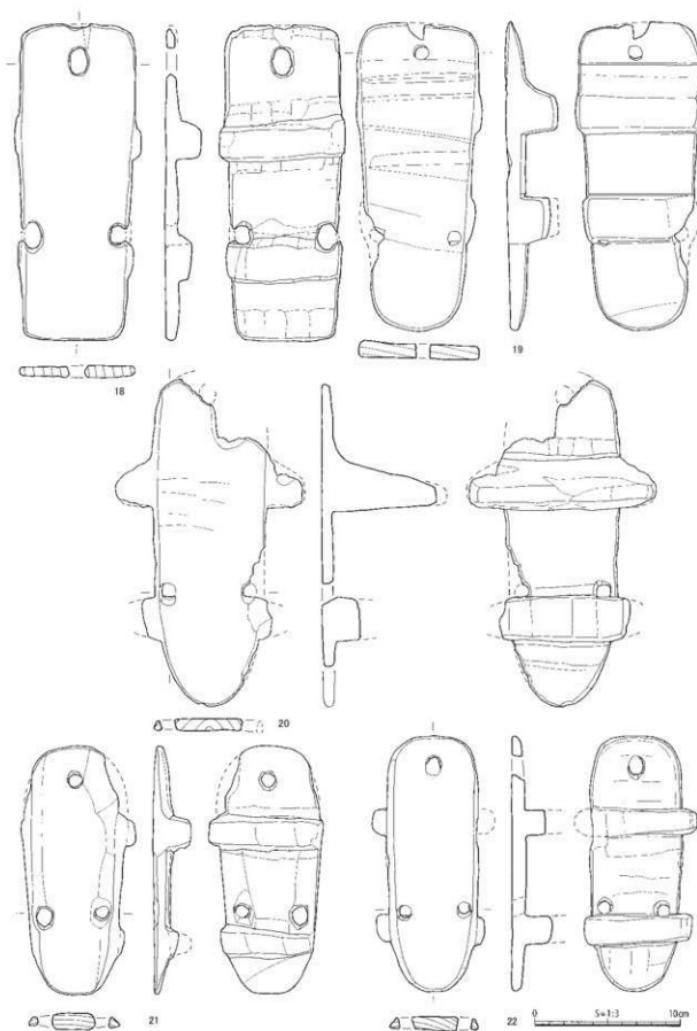
第47図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図20（木製品）



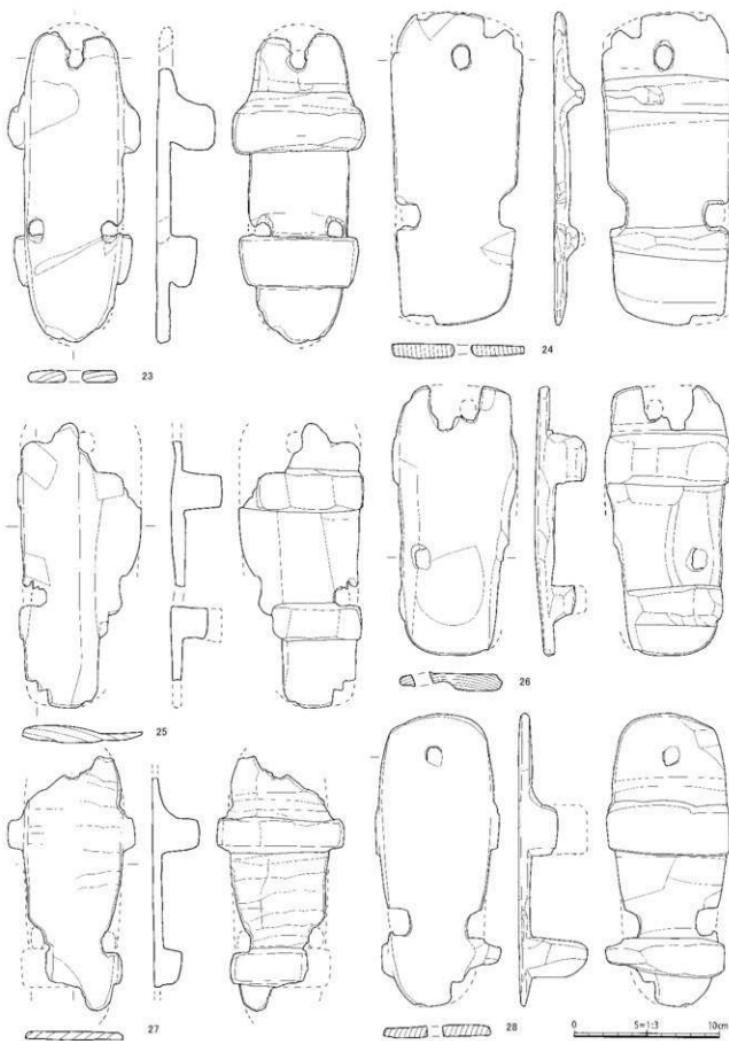
第48図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図21（木製品）



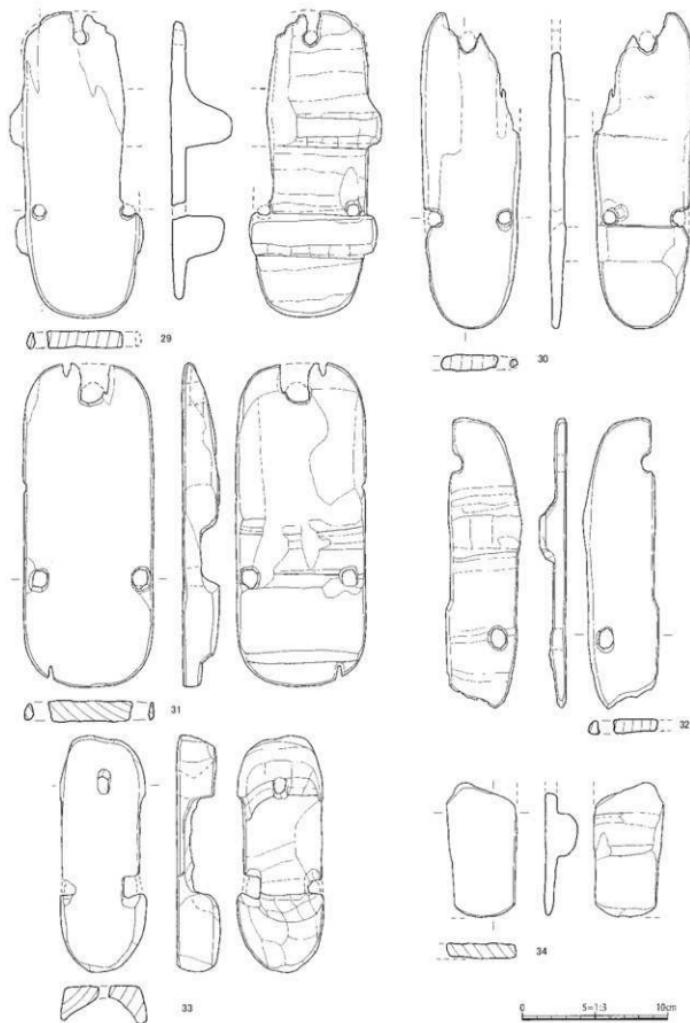
第49図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図22（木製品）



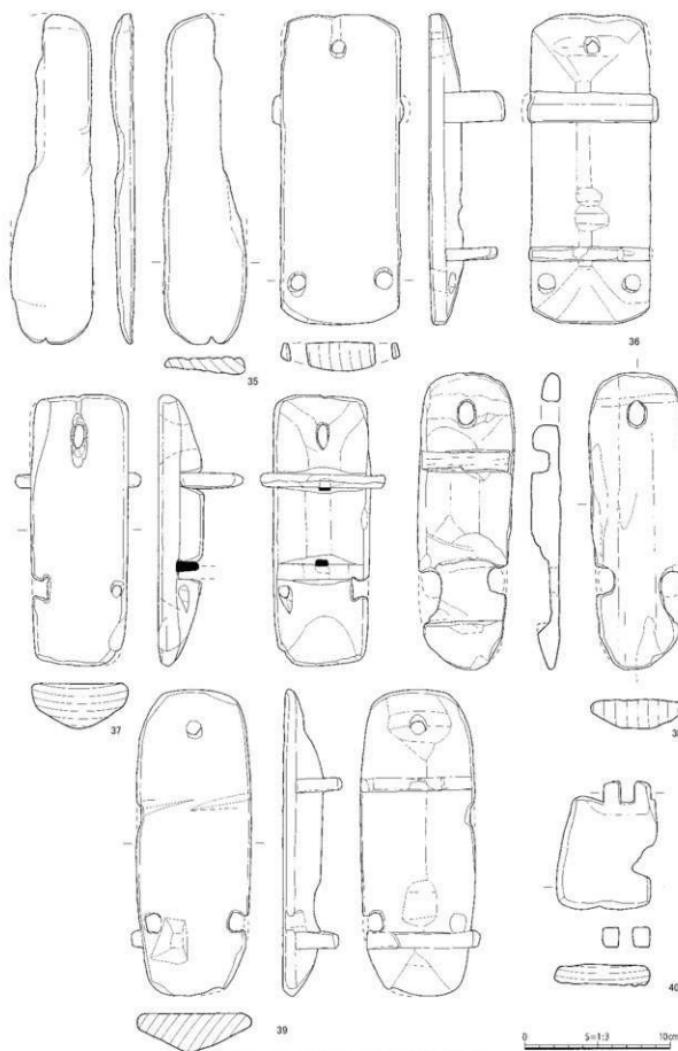
第50図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図23(木製品)



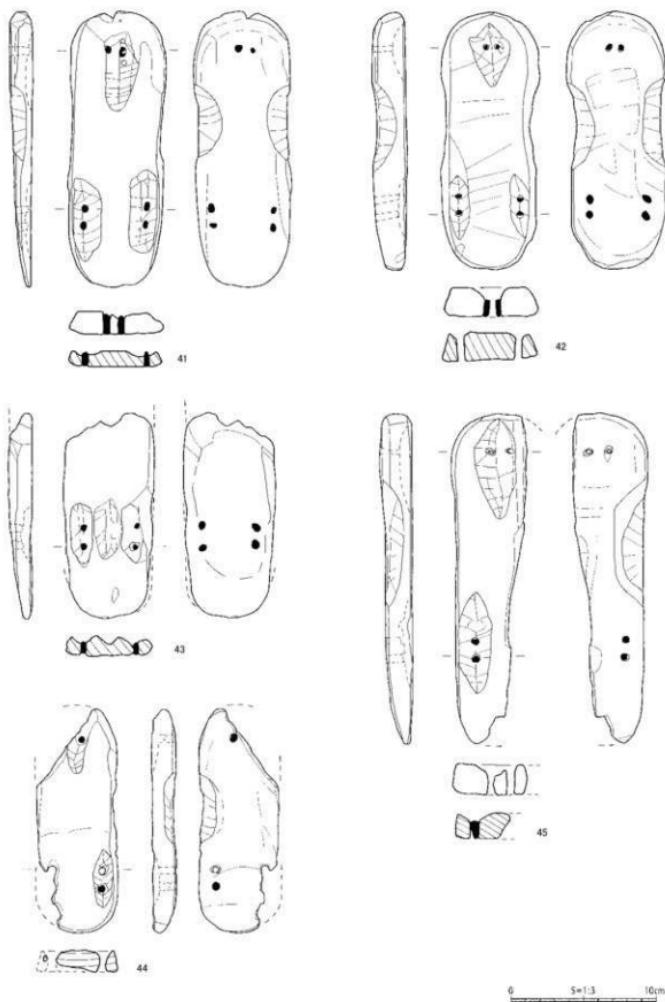
第51図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図24（木製品）



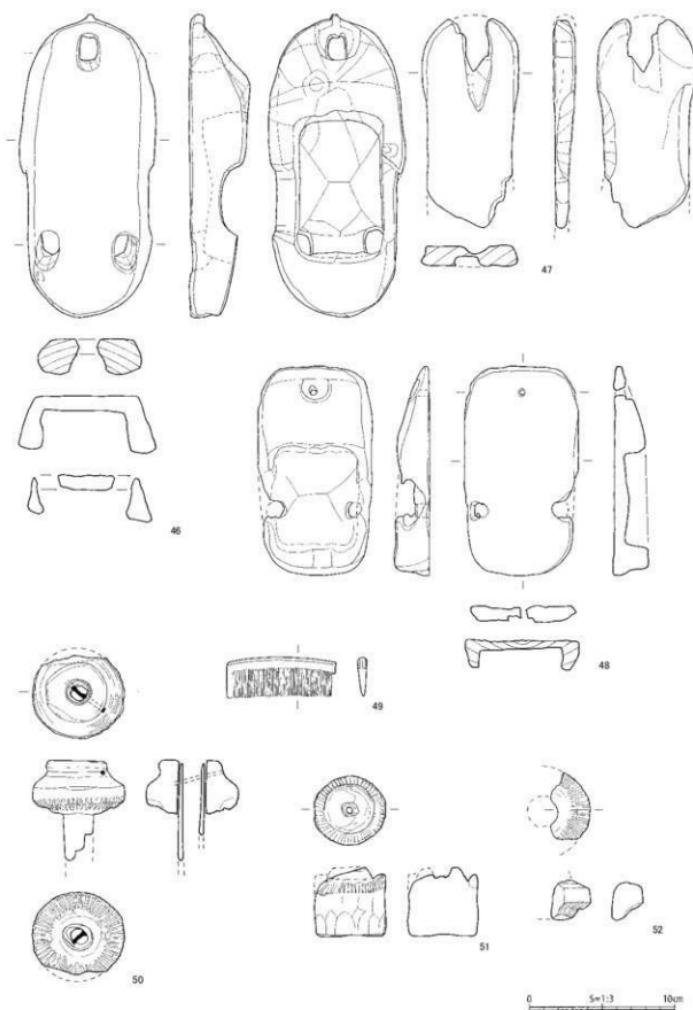
第52図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図25（木製品）



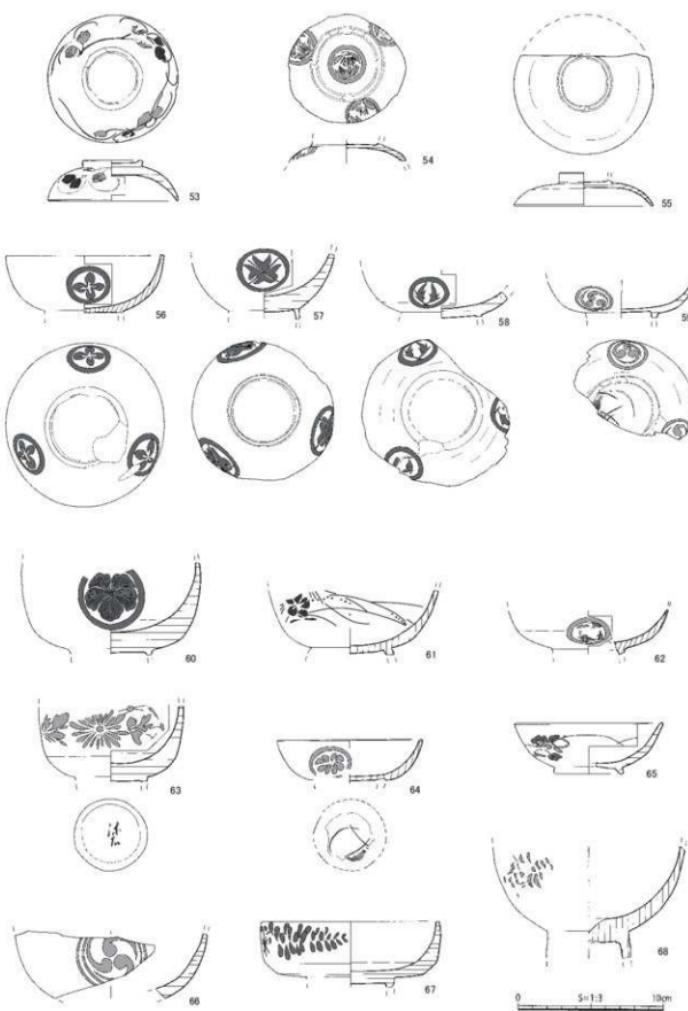
第53図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図26（木製品）



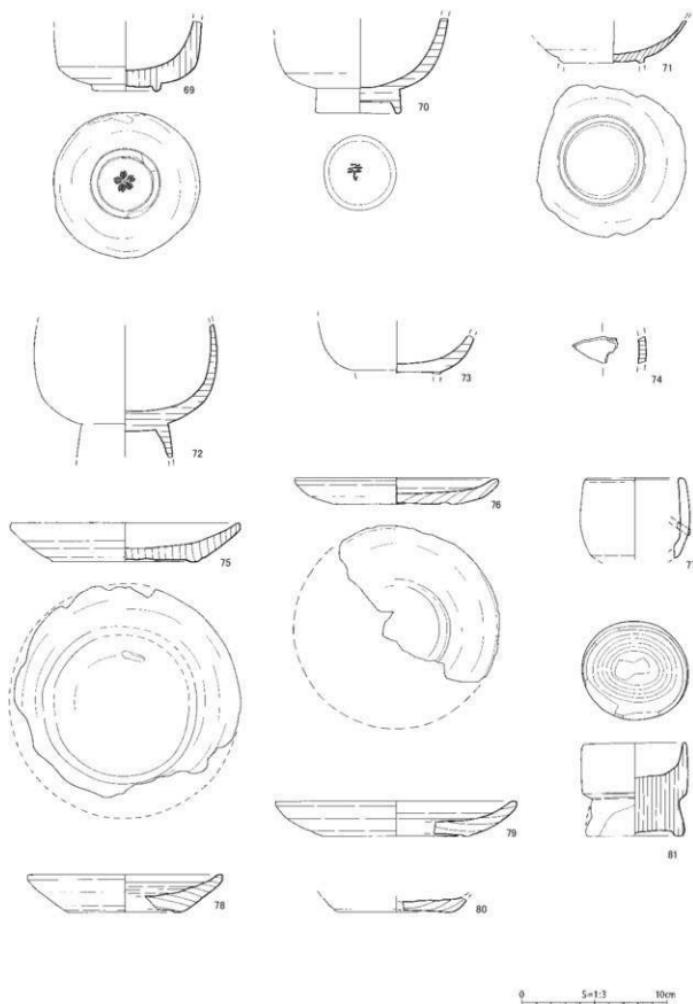
第54図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図27（木製品）



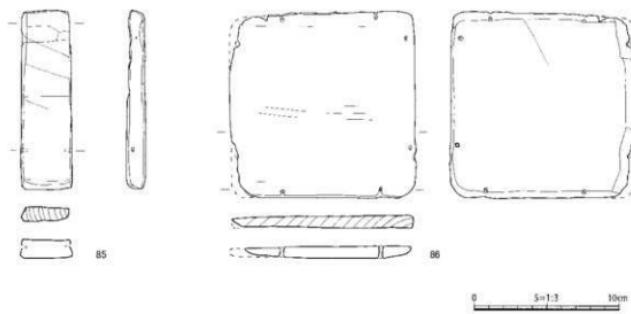
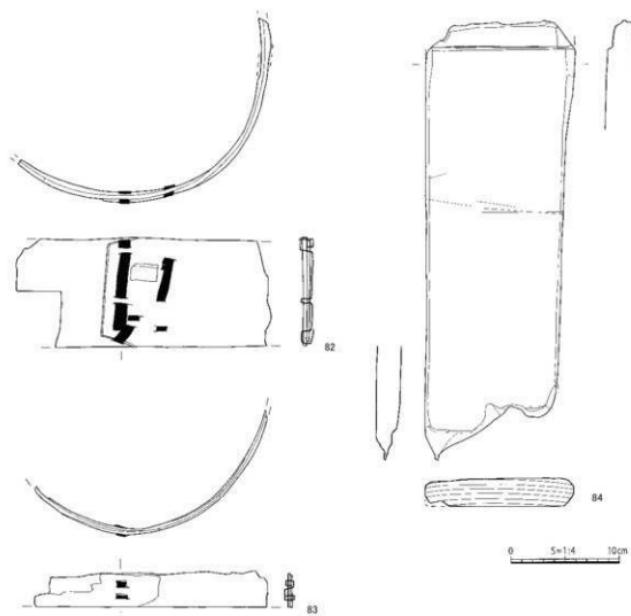
第55図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図28（木製品）



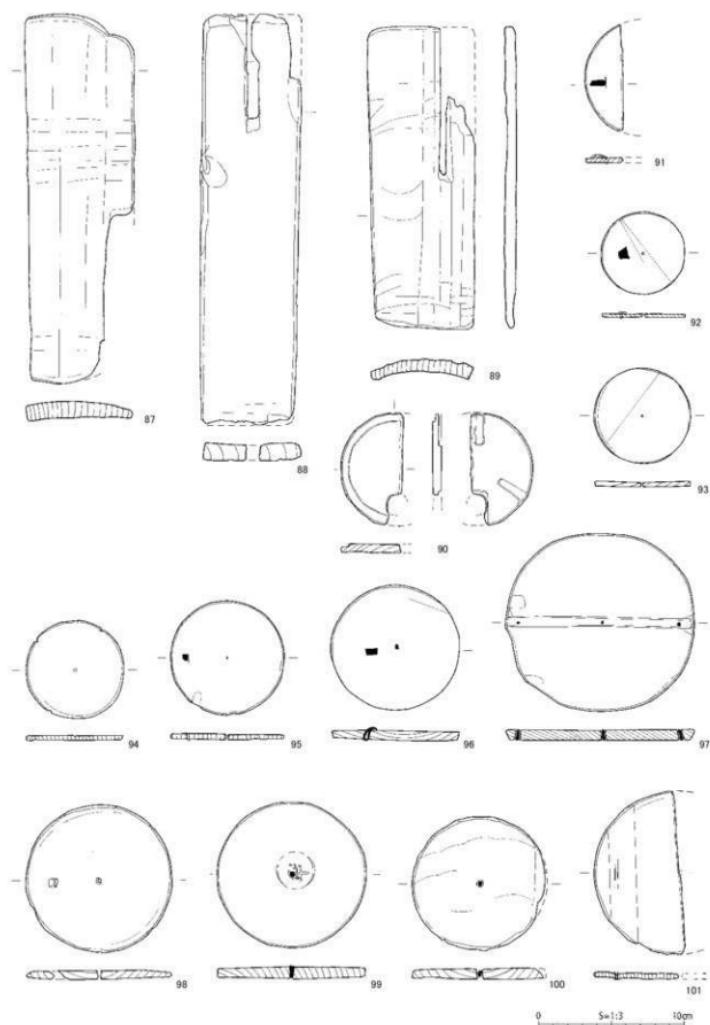
第56図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図29（木製品）



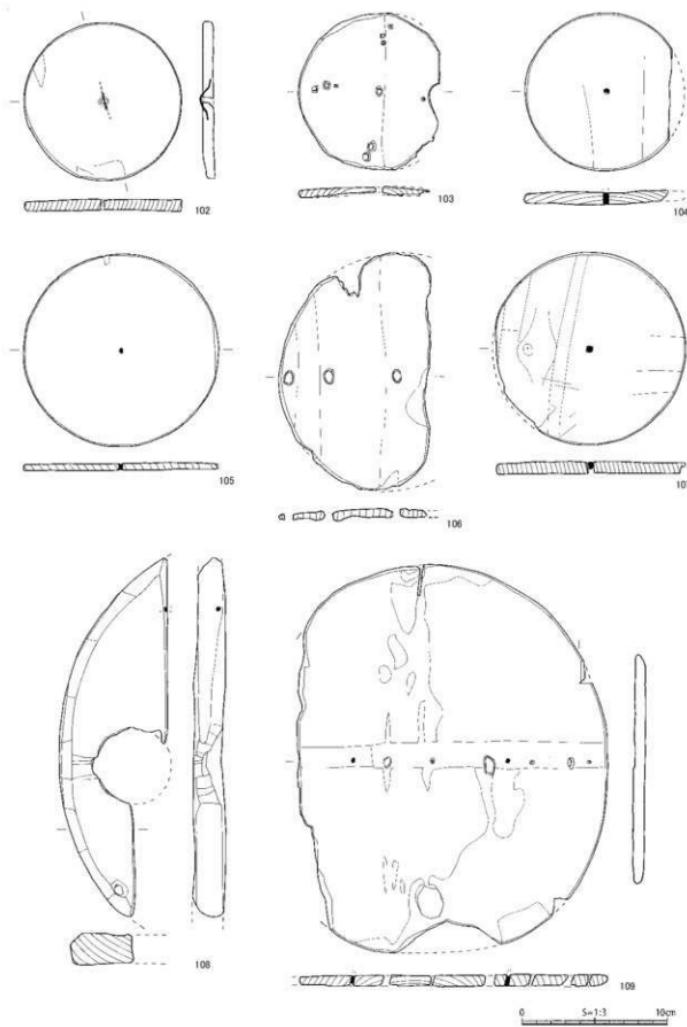
第57図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図30（木製品）



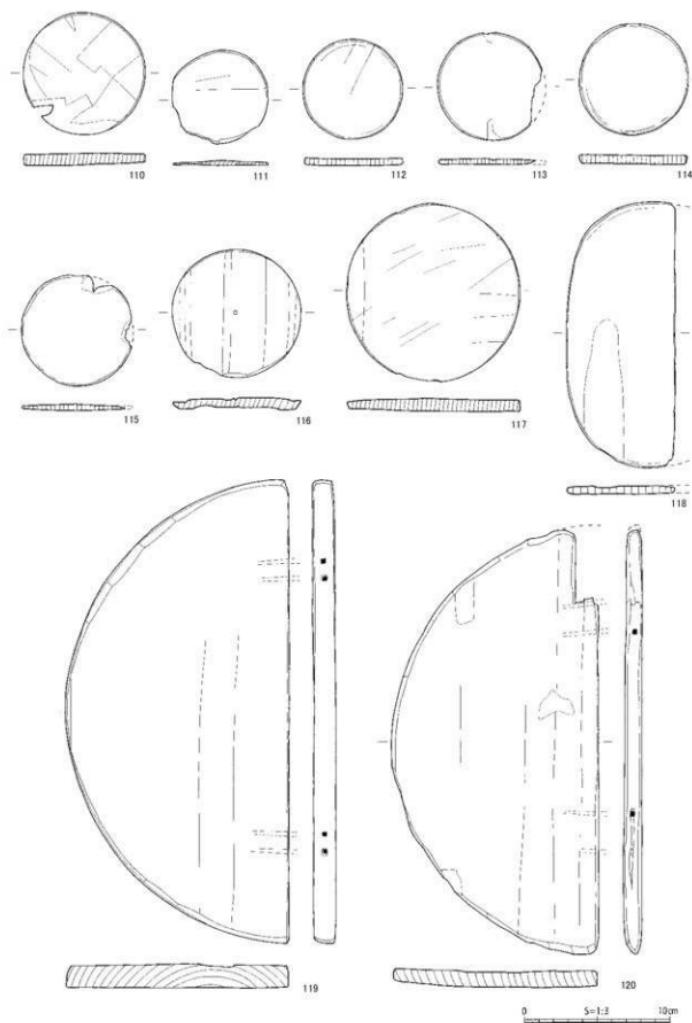
第58図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図31（木製品）



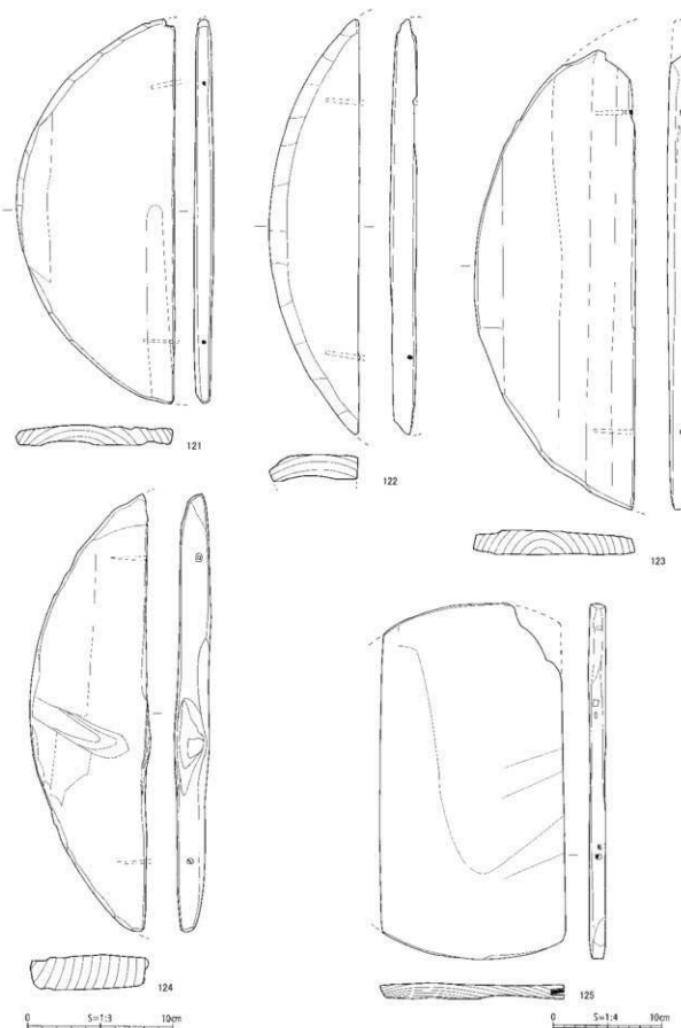
第59図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図32（木製品）



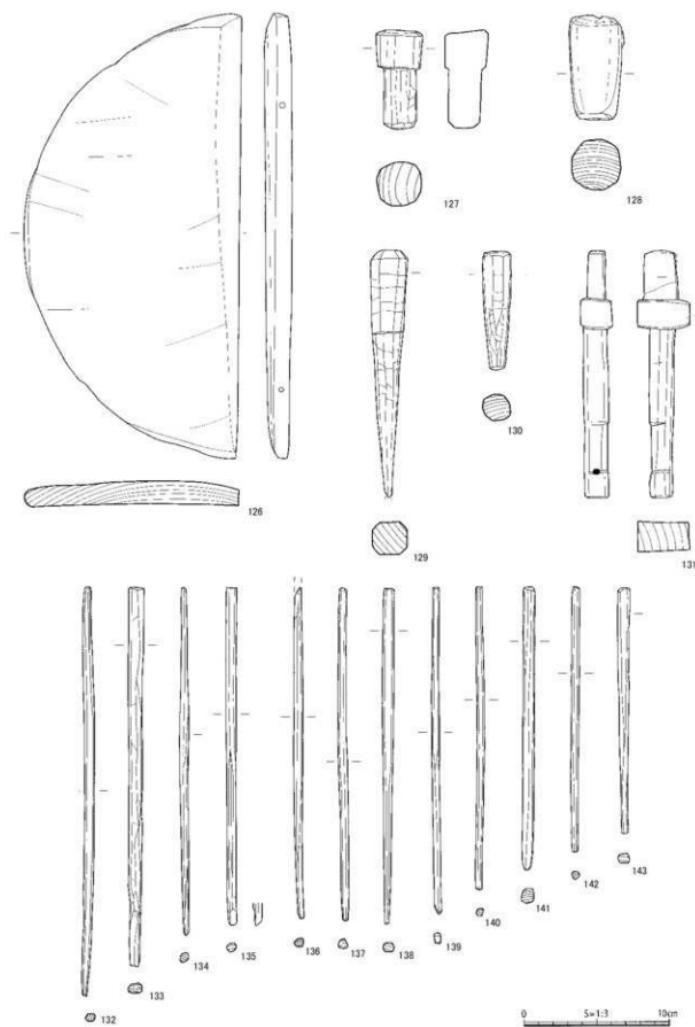
第60図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図33（木製品）



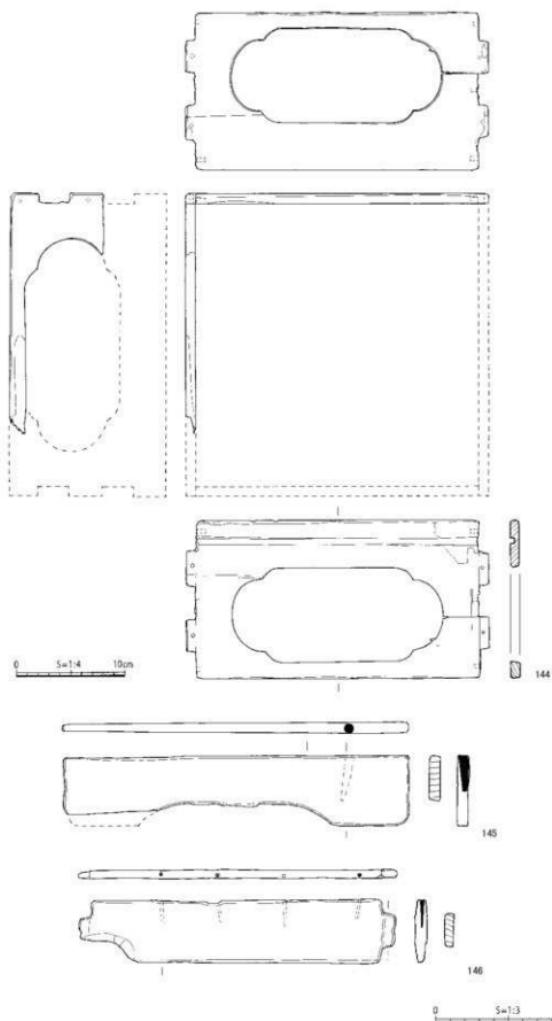
第61図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図34（木製品）



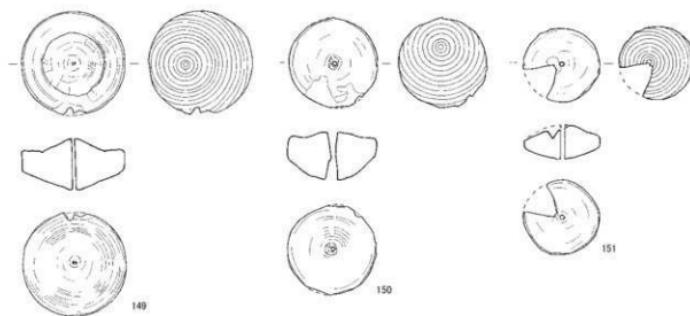
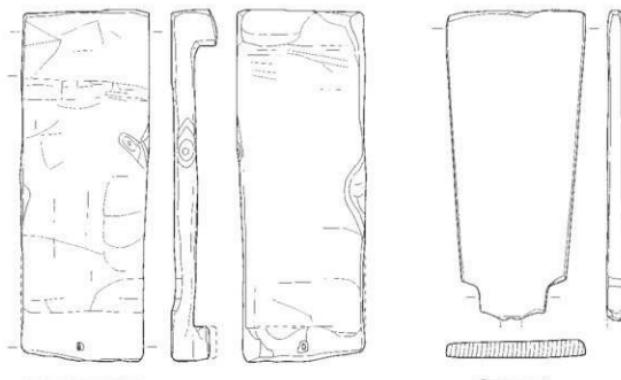
第62図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図35（木製品）



第63図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図36（木製品）

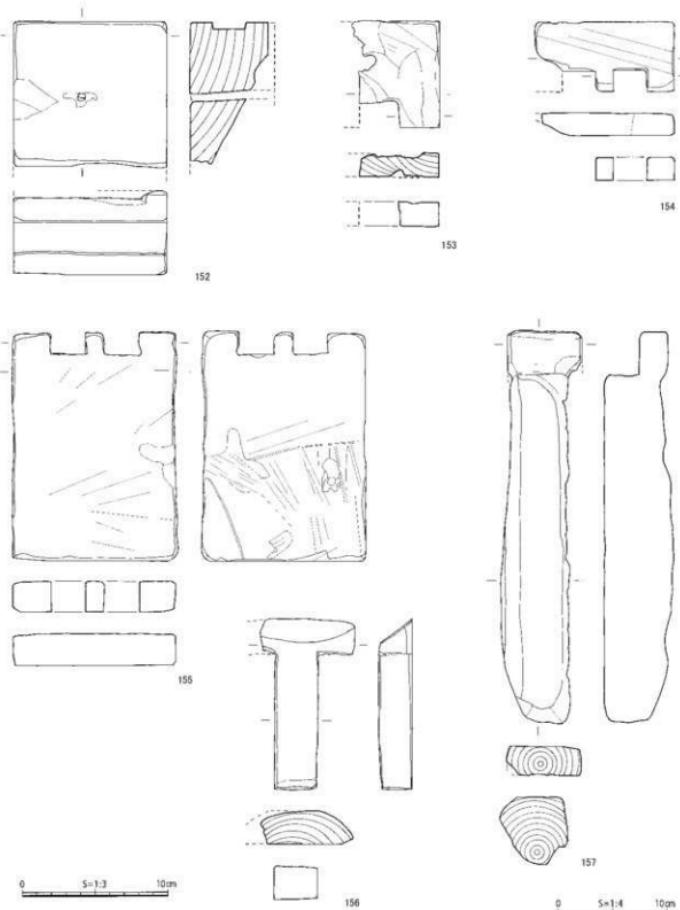


第64図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図37（木製品）

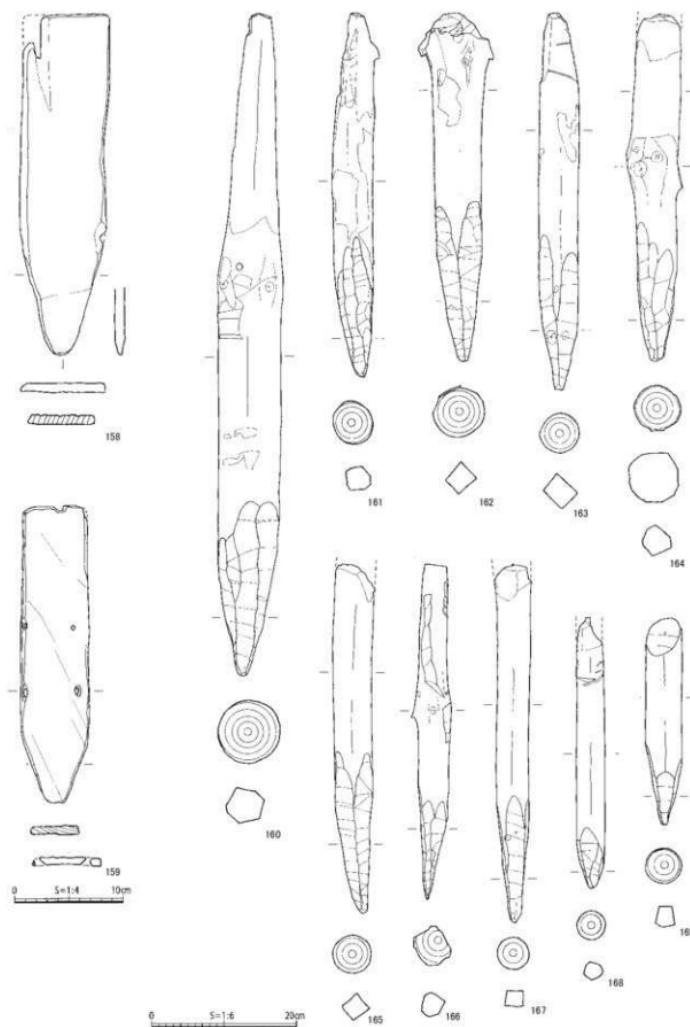


0 5cm 10cm

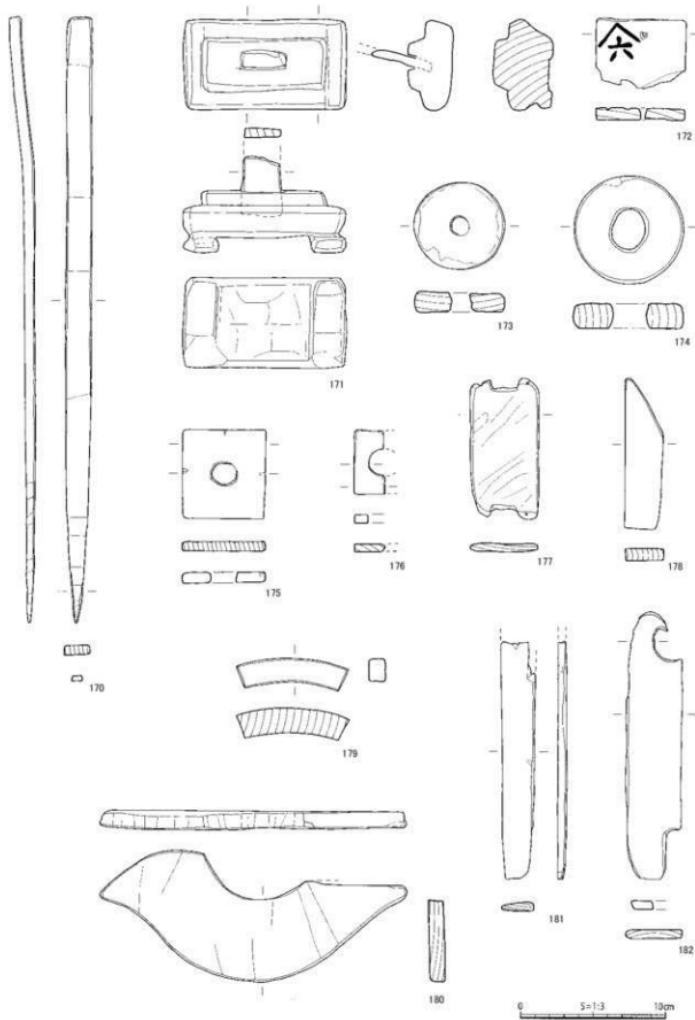
第65図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図38（木製品）



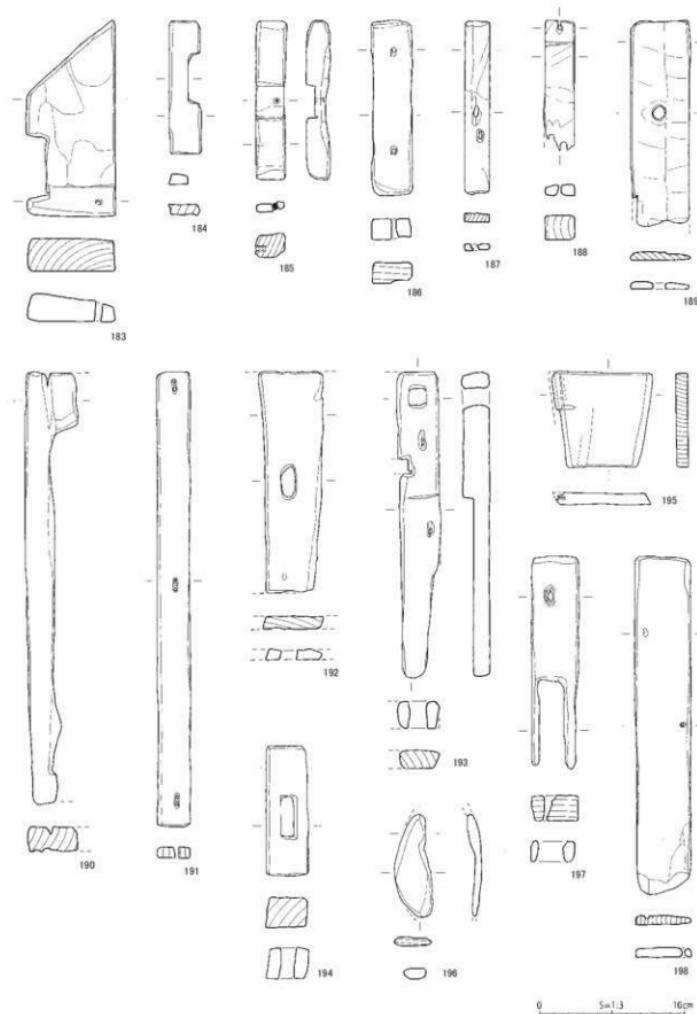
第66図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図39（木製品）



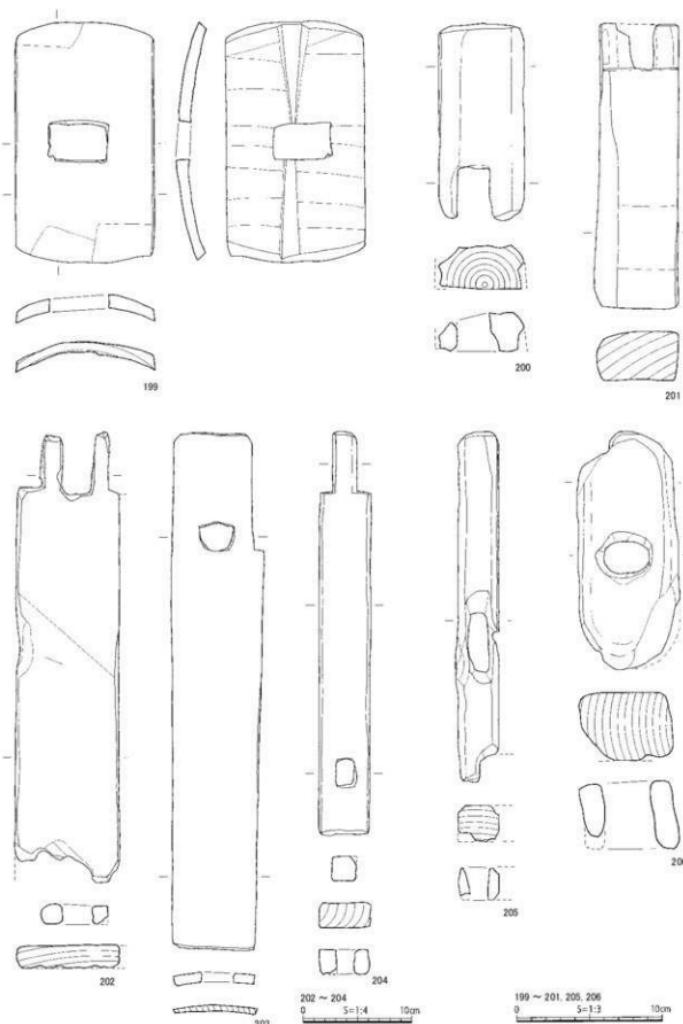
第67図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図40（木製品）



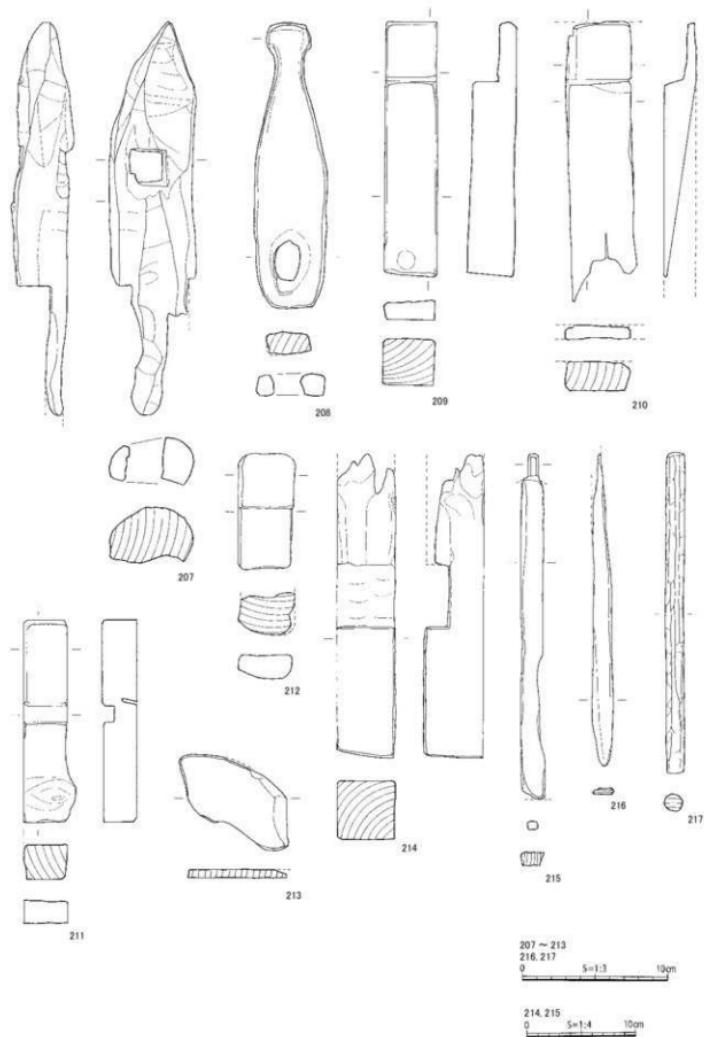
第68図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図41（木製品）



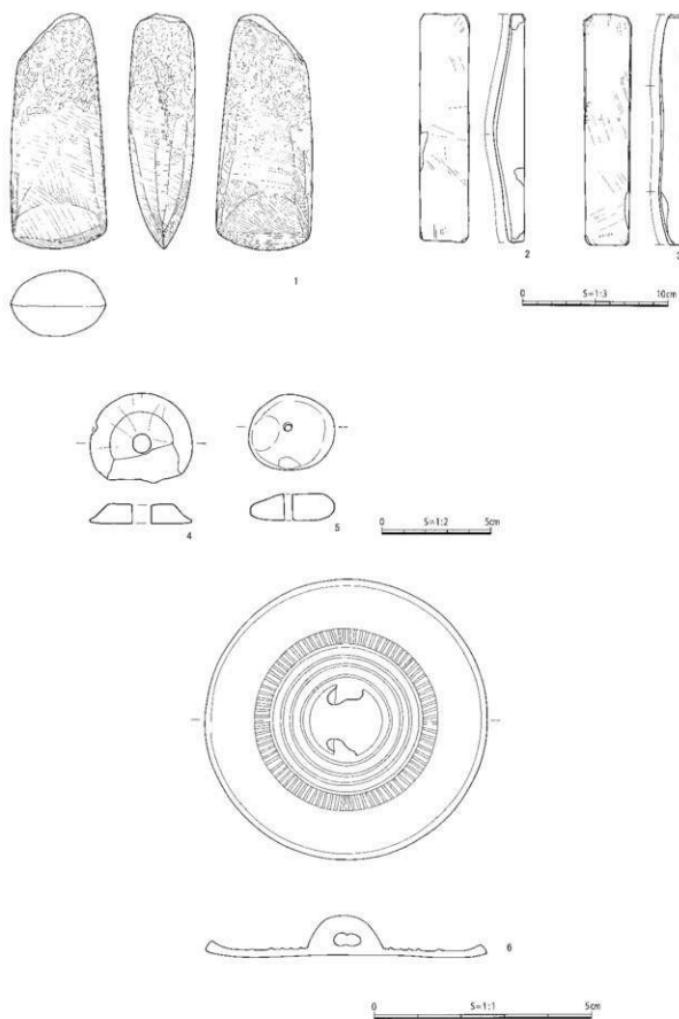
第69図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図42（木製品）



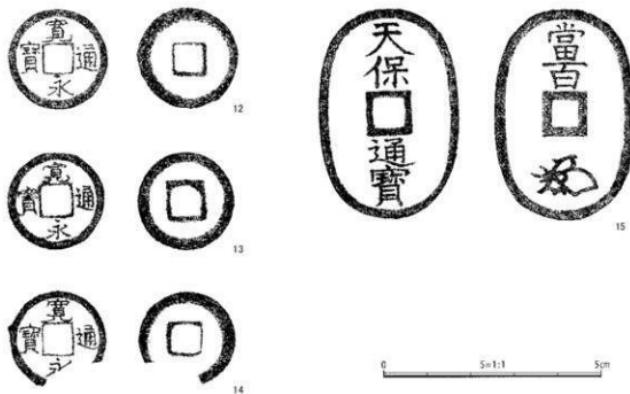
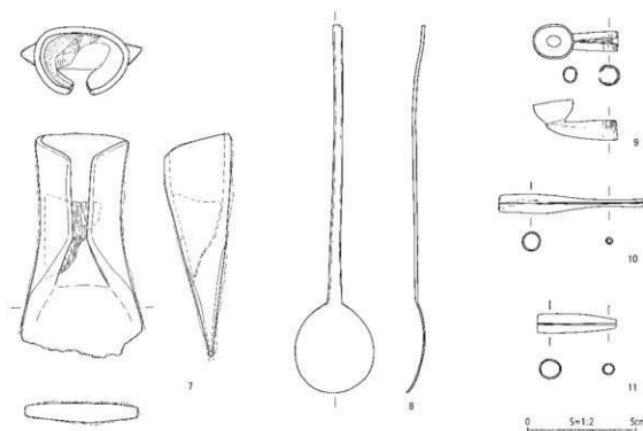
第70図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図43（木製品）



第71図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図44（木製品）



第72図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図45（石器・石製品・金属製品）



第73図 鶴喰広田遺跡出土遺物実測図46（金属製品）

第7表 鶴喰広田遺跡出土木製品一覧表

図 番号	遺構 タリフ	層位	分類	形態	器種組分1	器種組分2	計測値(cm)			樹種	木取り	備考
							長さ	幅	厚さ			
47	1 C2	2列トレンチ	工具	網枠	柄		23.3	4.2	1.8	スギ	板目	
2	B0	II	農耕土木具	網	直柄網身	平網	26.0	(9.8)	2.4	コナラ属	板目	
3	B0	II	農耕土木具	網	直柄網身	平網	(15.2)	(11.5)	3.5	コナラ属	板目	
4	C2	II	農耕土木具	網	直柄網身	平網	23.5	8.8	3.3	アカシキモ属	板目	
5	-	-	編み具・ 結繩具	条也具	手巻		23.5	7.1	2.2	スギ	板目	
6	C3	II	編み具・ 結繩具	条也具	柔持	網人合せ	19.1	1.9	1.7	ヒノキ	板目	
7	C2	II	編み具・ 結繩具	条也具	柔持	網人合せ (丸丸)	(13.7)	2.8	1.9	ヒノキ	板目	
8	C3	II	編み具・ 結繩具	結綱車	結綱輪		3.3	(3.1)	1.1	スギ	板目	
48	9 F14	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	22.4	10.4	3.6	ヒノキ	板目	
10	B0	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	23.2	(4.9)	2.0	ヒノキ	板目	
11	D3	-	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	20.2	10.1	2.6	①トクリコ属 (主にミ属) ハンノキ属 ヤシケブン属	板目	立彌修復後(別部材)
12	B0	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	14.1	6.7	3.0	スギ	板目	
13	E12	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(9.7)	9.0	4.5	ハンノキ属	板目	
49	14 E12	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	18.1	8.8	3.6	モクシン属	板目	
15	B1	1列トレンチ	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	23.2	8.9	3.6	モイ属	芯持材	
16	C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	23.6	9.1	3.3	クスノキ	板目	
17	F14	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	20.4	10.0	2.9	ケヤキ	板目	
50	18 C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	21.8	8.7	1.5	タリ	板目	
19	F13	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	23.3	8.6	3.6	ブナ属	板目	
20	C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(22.5)	(12.8)	8.6	タリ	芯持材	
21	D10	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	17.1	7.9	2.6	タリ	板目	
22	C3	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	17.6	7.7	3.4	タリ	板目	
51	23 C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(21.3)	9.2	4.0	タリ	板目	
24	F15	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	23.5	9.1	2.1	カツラ	板目	
25	E13	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(19.6)	8.5	3.5	カツラ	板目	
26	C9	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	18.5	8.6	3.5	ヒノキ	板目	
27	C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(17.5)	8.8	3.2	タリ	板目	
28	C6	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	20.2	8.6	4.7	タリ	板目	
52	29 B0	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	21.1	9.1	1.0	ヤツラ	板目	
30	C1	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(21.8)	(6.8)	(1.1)	スギ	板目	
31	D3	-	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	22.2	9.0	1.3	コナラ属	コナラ属	
32	C2	2列トレンチ	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(19.9)	(5.2)	1.9	タリ	板目	
33	C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網	16.3	5.9	2.9	アカマツ	芯持材	
34	B1	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	(9.3)	(4.8)	(2.2)	スギ	板目	
53	35 C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	22.7	5.7	1.6	アカマツ	板目	
36	C3	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	21.3	8.2	2.3	ヒノキ	板目	
37	C2	2列トレンチ	船脚具	網物	下駄	漁網 組合せ	18.6	8.6	5.8	タリ	板目	
38	C3	3列トレンチ	船脚具	網物	下駄	漁網 組合せ	20.4	6.5	2.1	タリ	板目	
39	C6	II	船脚具	網物	下駄	漁網 組合せ	21.1	8.3	4.1	ケヤキ	板目	
40	C2	2列トレンチ	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	8.8	(7.0)	1.4	ケヤキ	板目	
54	41 C2	-	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	18.9	6.7	1.6	アカマツ	板目	
42	C3	3列トレンチ	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	17.7	6.9	2.4	アカマツ	板目	
43	C3	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	(14.2)	(6.3)	1.6	アカマツ	板目	
44	C2	-	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	(15.4)	(5.6)	1.6	アカマツ	板目	
45	C3	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (草葉下駄)	(22.6)	(5.2)	2.3	アカマツ	板目	
55	46 C2	II	船脚具	網物	下駄	漁網 (一本)	20.8	9.4	3.2	スギ	板目	

回	番号	差構 タリット	部位	分類	部構	部構研1	部構研2	沿面積 (cm)			部構	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
55	47	C2	II	船身具	器物	下款	表面 (草葉・輪)	(14.3)	6.7	1.5	サワグルミ	板目	
	48	C2	2列トレンチ	船身具	器物	下款	表面 (木現)	14.4	7.8	2.4	スギ	板目	
	49	C2	II	船身具	施	横掘	提出し	(7.5)	2.8	0.7	カヤ	板目	
	50	D10	II	船身具	牟	牟横縫		(5.7)	6.3	3.6	エゴノキ属	楓木取り	
	51	C2	2列トレンチ	船身具	牟	牟横縫		4.7	4.9	4.7	エゴノキ属	楓木取り	
	52	C3	II	船身具	牟	牟横縫		(4.6)	(2.8)	(2.7)	エゴノキ属	楓木取り 北持材	
56	53	C2	II	容器	蓋	投物		9.0	4.2	2.8	エゴノキ属	楓木取り	外面、中漆
	54	-	II	容器	蓋	投物		(8.1)	(4.8)	(1.6)	サクラ属	楓木取り	内面、黒漆
	55	E13	II	容器	蓋	投物		9.6	3.6	2.3	ケヤキ	楓木取り	外面、中漆
	56	D13	II	容器	蓋	投物		10.9	5.8	(4.1)	ブナ属	楓木取り	内面、中漆
	57	C1	II	容器	蓋	投物		(9.6)	(4.9)	4.3	ブナ属	油松目	外面、黒漆
	58	B6	II	容器	蓋	投物		(10.6)	5.5	(3.3)	ブナ属	楓木取り	内面、黒漆
57	59	B1	1列トレンチ	容器	蓋	投物		(6.4)	-	(5.5)	トチノキ	楓木取り	中面
	60	C1	II	容器	蓋	投物		(12.2)	6.0	(6.3)	トチノキ	楓木取り	内面、中漆
	61	B1	1列トレンチ	容器	蓋	投物		(13.9)	(8.6)	2.6	ブナ属	楓木取り	外面、水漆
	62	E12	II	容器	蓋	投物		(11.6)	4.8	3.0	トチノキ	楓木取り	内面、水漆
	63	C2	2列トレンチ	容器	蓋	投物		(10.0)	5.0	(5.1)	ブナ属	楓木取り	外側、黒漆
	64	B1	1列トレンチ	容器	蓋	投物		(10.0)	5.0	(2.8)	ブナ属	楓木取り	内面、中漆
58	65	C2	2列トレンチ	容器	蓋	投物		(10.2)	4.8	3.5	ブナ属	楓木取り	外側、黒漆
	66	-	II	容器	蓋	投物		(13.4)	-	(4.6)	ブナ属	楓木取り	外側、水漆
	67	F14	II	容器	蓋	投物		12.4	(6.0)	4.5	ブナ属	板目	内面、水漆
	68	C2	2列トレンチ	容器	蓋	投物		(13.3)	5.6	(2.5)	ブナ属	楓木取り	外側、水漆
	69	C3	II	容器	蓋	投物		(10.2)	4.8	(4.6)	ブナ属	楓木取り	外側、黒漆
	70	C2	II	容器	蓋	投物		(12.1)	5.7	(6.5)	トチノキ	楓木取り	内面、黒漆
59	71	E13	II	容器	蓋	投物		(10.2)	5.9	(2.9)	ケヤキ	楓木取り	内面、水漆
	72	-	II	容器	蓋	投物		(10.2)	6.0	(9.1)	ブナ属	楓木取り	内面、中漆
	73	-	-	容器	蓋	投物		(10.7)	6.0	(3.6)	ブナ属	楓木取り	外側、黒漆
	74	E13	II	容器	蓋	投物		-	-	1.8	ブナ属	破片	外面、漆塗
	75	C2	II	容器	蓋	投物		(15.8)	10.0	2.6	ケヤキ	楓木取り	外側、水漆
	76	C2	II	容器	蓋	投物		(14.0)	(9.2)	1.8	ハンノキ属 ハンノキ泡	楓木取り	外側、水漆
58	77	C3	3列トレンチ	處理加工工具	納約	研磨		(6.4)	-	(5.5)	タケ	-	柵の一部が残存・漆?
	78	C3	3列トレンチ	容器	蓋	投物		(13.9)	(8.6)	2.6	ブナ属	楓木取り	外側、水漆
	79	C2	2列トレンチ	容器	蓋	投物		(16.6)	(8.8)	2.4	ケヤキ	楓木取り	外側、水漆
	80	C3	3列トレンチ	容器	蓋	投物		(10.8)	(8.0)	(1.0)	トチノキ	楓木取り	外側、水漆
	81	E12	II	容器	合子?	投物		7.4	6.8	6.4	ミズキ	板目	外側、黒漆
	82	C2	II	容器	蓋	曲物		(28.2)	7.6	0.35	トウヒ属	板目	曲物
59	83	B1	1列トレンチ	容器	蓋	糊		(21.5)	2.5	0.2	サワラ	板目	曲物
	84	B6	II	容器	蓋	板織物	糊	(40.5)	13.8	2.7	ケヤキ	板目	
	85	C3	II	容器	蓋	板織物	糊	12.3	3.3	1.4	スギ	板目	
	86	C3	3列トレンチ	容器	蓋	板織物	重板	13.0	12.9	0.9	スギ	板目	
	87	C3	II	容器	蓋	板織物	糊	25.3	7.6	1.1	ヒノキ	板目	
	88	C3	II	容器	蓋	板織物	糊	(28.2)	6.9	1.2	スギ	板目	
59	89	C3	II	容器	蓋	板織物	糊	20.8	7.4	0.8	ヒノキ	板目	
	90	B2	II	容器	蓋(板)	曲物蓋板		(7.7)	(4.3)	0.6	ツツジ属 ツツジ泡	板目	
	91	C2	-	容器	蓋(板)	曲物蓋板		(7.8)	(2.6)	0.4	ヒノキ	油松目	
	92	C3	3列トレンチ	容器	蓋(板)	曲物蓋板		5.6	5.7	0.3	ヒノキ	油松目	
	93	C3	II	容器	蓋(板)	曲物蓋板		6.6	6.6	0.4	ヒノキ	板目	

ID	番号	差積 タリット	部位	分類	形種	形種細分1	形種細分2	沿面積 (cm)			形種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
59	94	C2	—	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		6.7	6.7	0.4	スギ	板目	
	95	C3	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		7.8	7.8	0.4	モミ属	板目	
	96	—	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		8.6	8.8	0.9	サワラ	板目	
	97	—	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		12.2	13.0	0.8	ヒノキ	板目	分体・黒漆
	98	C2	2列トレンチ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		10.2	10.0	0.6	サワラ	板目	
	99	C2	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		10.2	10.0	0.8	ヒノキ	板目	
	100	C2	2列トレンチ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		9.2	(9.1)	0.8	サワラ	板目	
	101	C3	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		11.2	(5.3)	0.4	サワラ	板目	
60	102	C3	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		10.8	10.8	0.8	サワラ	板目	
	103	C2	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		10.8	(9.7)	0.6	サワラ	板目	
	104	C2	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		10.9	(9.9)	0.9	スギ	板目	
	105	C2	2列トレンチ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		13.2	13.5	0.5	モミ属	造板目	
	106	C2	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		16.3	(10.5)	0.7	モミ属	板目	
	107	D10	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		13.2	13.1	0.9	スギ	板目	
	108	C2	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		28.6	7.4	2.2	スギ	板目	
	109	B1	1列トレンチ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物蓋板		26.7	21.3	0.8	アマツ	板目	
61	110	E13	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		8.4	8.3	0.9	ヒノキ	板目	分体・黒漆
	111	—	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		6.4	6.5	0.3	トウヒ属	板目	
	112	C3	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		6.9	6.9	0.5	ヒノキ	板目	
	113	B9	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		7.4	(7.2)	0.4	ヒノキ	板目	
	114	C2	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		7.6	7.5	0.7	モミ属	板目	
	115	C3	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		7.6	(7.5)	0.4	モミ属	板目	
	116	G15	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		8.7	8.8	0.8	サワラ	板目	
	117	G15	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		12.2	11.9	0.9	トウヒ属	板目	
	118	C3	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		18.3	(7.5)	0.6	スギ	板目	
	119	—	—	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		31.8	15.4	1.6	スギ	板目	
	120	B9	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		29.0	14.3	1.3	サワラ	板目	
62	121	C2	2列トレンチ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		26.4	10.8	1.3	スギ	板目	
	122	C2	—	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		28.5	6.2	1.8	スギ	板目	
	123	B1	1列トレンチ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		31.6	11.1	1.8	スギ	板目	
	124	C2	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		30.1	8.3	2.5	スギ	板目	
	125	E13	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		32.7	17.1	0.6	モミ属	板目	
63	126	D10	Ⅲ	容器	蓋板 (蓋板)	曲物底板		41.0	20.0	2.5	スギ	板目	
	127	C2	2列トレンチ	容器	その他不明	栓		6.8	3.2	3.1	スギ	板目	
	128	C2	2列トレンチ	容器	その他不明	栓		7.2	3.4	3.5	スギ	板目	
	129	C3	3列トレンチ	容器	その他不明	栓		17.0	2.5	2.3	サワラ	造板目	
	130	C3	3列トレンチ	容器	その他不明	栓		8.2	1.9	1.8	サワラ	板目	
	131	C2	—	容器	その他不明	把手?		17.0	3.6	2.2	スギ	板目	
	132	E12	Ⅲ	食事具	箸			28.1	0.9	0.6	トウヒ属	板目	
	133	E12	Ⅲ	食事具	箸			26.1	1.1	0.8	ツガ属	板目	
	134	F14	Ⅲ	食事具	箸			24.0	0.6	0.6	スギ	板目	
	135	—	Ⅲ	食事具	箸			23.3	0.7	0.7	スギ	板目	
	136	F14	Ⅲ	食事具	箸			(22.8)	0.6	0.6	ツガ属	板目	
	137	C5	Ⅲ	食事具	箸			23.0	0.6	0.6	スギ	板目	
	138	E12	Ⅲ	食事具	箸			23.1	0.8	0.7	ヒノキ	板目	
	139	C5	Ⅲ	食事具	箸			22.4	0.6	0.7	スギ	板目	
	140	F14	Ⅲ	食事具	箸			20.8	0.6	0.5	ヒノキ	板目	

回	番号	差積 タリット'')	解説	分類	部種	部種細分1	部種細分2	沿面積 (cm)			解説	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
64	141	—	II	食事具	箸			19.6	0.8	1.0	スギ	板目	
	142	C5	II	食事具	箸			18.3	0.6	0.5	スギ	板目	
	143	—	II	食事具	箸			16.9	0.9	0.6	スギ	板目	
64	144	—	—	食事具	匙	匙		27.9	14.6	0.9	ヒノキ	板目	外面・加須 内面・水黒漆
	145	C2	II	食事具	匙	匙板		23.8	4.8	0.8	ヒノキ	板目	外面・水漆
	146	—	—	食事具	匙	匙板		21.9	4.4	0.8	ヒノキ	板目	外面・水漆
65	147	C1	II	調度	その他不明			24.2	8.8	3.1	タリ	芯持材	
	148	E13	II	調度具・日用品	羽子板			(21.4)	9.5	1.3	ヒノキ	板目	
	149	D10	II	調度具・日用品	物架			(7.1)	7.1	3.5	ヤマガウシ	芯持材	
65	150	D10	II	調度具・日用品	歌楽			(6.2)	6.1	3.25	サワガニ	芯持材	
	151	C3	II	調度具・日用品	歌楽			5.1	5.2	2.3	ヤマガウシ	芯持材	
	152	C3	II	建築部材	鶴居・敷居	鶴居		(19.1)	10.5	5.8	アカマツ	板目	
66	153	C3	II	建築部材	鶴居・敷居	鶴居		7.4	(6.0)	1.9	スギ	板目	
	154	C3	II	建築部材	鶴居・敷居	鶴居?		4.8	9.1	1.6	アカマツ	芯持材	
	155	B1	1例トレンチ	建築部材	鶴居・敷居	鶴居		15.8	11.4	2.2	アカマツ	板目	外面・加須 内面・水漆
66	156	C2	II	建築部材	結合部材	鶴居		11.7	(6.6)	2.3	アカマツ	板目	
	157	C2	II	建築部材	その他不明			(36.3)	(7.5)	6.5	サワラ	芯持材	表面の一部炭化
	158	C3	II	画材・道具	稚			31.5	8.3	1.0	アカマツ	板目	
67	159	C2	—	画材・道具	稚			27.5	6.5	0.9	サワラ	板目	
	160	—	—	土本材	枕			(92.7)	9.1	8.9	クロマツ	芯持材	
	161	—	—	土本材	枕			(50.9)	6.7	6.1	クロマツ	芯持材	
67	162	—	—	土本材	枕			48.8	10.5	7.2	アカマツ	芯持材	
	163	—	—	土本材	枕			52.7	5.7	5.6	アカマツ	芯持材	
	164	—	—	土本材	枕			(48.5)	7.9	7.0	クロマツ	芯持材	
67	165	—	—	土本材	枕			(48.7)	5.9	5.4	クロマツ	芯持材	
	166	—	—	土本材	枕			46.9	5.6	5.6	クロマツ	芯持材	
	167	—	—	土本材	枕			(50.1)	5.2	4.6	アカマツ	芯持材	
67	168	—	—	土本材	枕			(37.8)	4.1	4.1	アカマツ	芯持材	
	169	—	—	土本材	枕			29.0	5.1	5.0	アカマツ	芯持材	
	170	E13	II	種類具・器具	卒塔婆			55.8	2.4	1.1	ヒノキ	板目	
68	171	C3	II	種類具・器具	付牌	台座		11.2	6.2	(6.6)	アカマツ コラカラツ	組版目	①台座 ②結合材
	172	C3	3例トレンチ	用達不明品	枕?			(4.8)	6.1	0.8	アカマツ	板目	
	173	C3	II	用達不明品	その他不明	結縫?		6.3	5.9	1.4	アカマツ	板目	
68	174	C3	II	用達不明品	その他不明	結縫?		7.5	7.4	1.7	アカマツ	板目	外面・水漆 内面・水漆
	175	C3	3例トレンチ	用達不明品	その他不明			6.1	5.7	0.7	スギ	板目	
	176	C3	II	用達不明品	その他不明			4.4	(2.1)	0.6	スギ	板目	
68	177	B9	II	用達不明品	その他不明	板植物?		9.8	4.7	0.6	ヒノキ	板目	
	178	D3	—	用達不明品	その他不明			10.4	2.6	0.8	アカマツ	板目	
	179	C3	II	用達不明品	その他不明	調度品?		(7.6)	2.3	1.1	スギ	板目	
68	180	F14	II	用達不明品	その他不明			9.1	21.1	1.3	クロマツ	板目	
	181	F14	II	用達不明品	その他不明			(16.3)	2.4	0.6	ヒノキ	板目	表裏面・水漆 板面・加須
	182	C1	II	用達不明品	その他不明			18.4	3.9	10.6	スギ	板目	
69	183	C2	2例トレンチ	用達不明品	その他不明			13.4	6.1	2.2	スギ	板目	外面・加須褐色漆 内面・水漆
	184	C3	3例トレンチ	用達不明品	その他不明			9.1	(2.2)	0.7	スギ	板目	
	185	C3	3例トレンチ	用達不明品	その他不明	調度品?		10.9	2.1	1.6	スギ	板目	外面・水漆 内面・水漆
69	186	C3	II	用達不明品	その他不明			12.0	2.8	1.4	スギ	板目	
	187	C2	2例トレンチ	用達不明品	その他不明			11.9	1.7	0.6	サワラ	板目	外面・加須 内面・水漆

国	番号	遺構 グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値(cm)			種類	木取り	備考
								長S	幅	厚S			
69	188	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(6.9)	2.1	1.6	スギ	板目	
	189	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			(14.1)	4.1	0.5	ツガ属	道板目	
	190	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			29.7	(3.5)	1.7	スギ	板目	外面・背面 内面・中面
	191	C1	Ⅱ	用途不明品	その他不明			31.2	2.4	0.8	スギ	板目	
	192	B2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			15.2	(4.4)	0.9	スギ	板目	
	193	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			21.0	(2.9)	1.9	スギ	板目	
	194	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			8.9	2.9	2.1	スギ	板目	外面・黒漆 内面・黒漆
	195	-	-	用途不明品	その他不明	鉛鉢部材?		6.5	(6.9)	0.7	ヒノキ	板目	外面・黒漆 内面・黒漆
	196	B1	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(7.0)	(2.6)	2.7	ケヤク	板目	
	197	B1	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(14.6)	3.2	1.8	サツラ	板目	
	198	-	-	用途不明品	その他不明			23.2	3.8	0.6	ヒノキ	板目	外面・黒漆 内面・黒漆
70	199	F14	Ⅱ	用途不明品	その他不明			16.6	9.6	2.2	ヤマグワ	板目	
	200	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明	建築部材?		13.6	5.9	3.0	スギ	芯材	
	201	E2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			19.7	5.9	3.5	モミ属	道板目	
	202	B6	Ⅱ	用途不明品	その他不明	井口枠?		41.6	9.7	2.2	カツラ	板目	
	203	F14	Ⅱ	用途不明品	その他不明			47.9	8.6	1.3	ヒノキ	板目	
	204	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			32.2	4.8	2.4	スギ	板目	外面・黒漆 内面・中面
	205	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			24.1	3.0	2.9	サツラ	板目	
	206	B6	Ⅱ	用途不明品	その他不明			16.4	7.1	4.7	クスノキ	板目	
71	207	B1	1列トレンチ	用途不明品	その他不明			(27.0)	6.0	3.8	ヒノキ材	板目	外面・黒漆 内面・黒漆
	208	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			19.7	5.1	1.6	スギ	板目	
	209	C2	-	用途不明品	その他不明			17.5	3.6	3.3	アガマツ	板目	
	210	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(19.3)	(4.9)	2.2	スギ	板目	
	211	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			13.9	3.6	2.4	スギ	板目	
	212	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			8.0	3.9	2.9	サツラ	板目	
	213	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(6.7)	(7.5)	0.6	コナラ属	板目	
	214	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			(28.0)	5.4	5.5	ヒノキ	材材?	外面・中面 内面・中面
	215	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			31.8	(2.2)	1.3	クリ	板目	
	216	B6	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(21.4)	1.5	0.4	ヒノキ	板目	
	217	C2	-	用途不明品	その他不明	結縫串?		22.1	1.4	1.2	ヒノキ	板目	

第8表 鶴喰広田遺跡出土石器・石製品一覧表

国	番号	遺構 グリッド	層位	種別	計測値(cm)			石材	備考
					長S	幅	厚S		
72	1	C2S E	Ⅲ	磨削石斧	16.2	6.5	4.5	800.0	閃綠岩
	2	G15	-	石砍	15.7	3.4	2.1	160.0	凝灰岩
	3	D10NW	II	石砍	15.9	3.2	1.7	140.0	凝灰岩
	4	-	-	結縫串	(4.1)	4.7	0.9	24.3	蛇紋岩
	5	C2SE	Ⅲ	結縫串	3.5	3.9	1.2	12.4	流紋岩

第9表 鶴喰広田遺跡出土金属製品一覧表

国	番号	遺構 グリッド	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	備考
					長S	幅	厚S		
72	6	F13NW	Ⅲ	小型鏡	ø6.45	高さ1.0	鋸幅1.7	鏡面0.8	緑色
	7	-	-	嵌状铁斧	長さ(10.3)	幅(5.6)	厚3.1	231.4	
	8	-	-	砲	全長16.9	最大幅3.7	厚0.15	11.73	
	9	-	-	雁首	全長3.9	雁首高1.8		3.58	
	10	F13	Ⅱ	吸口	全長6.7			4.07	銅製
	11	-	-	吸口	全長3.7			3.93	
	12	D10S E	Ⅱ	鍼貨	鍼幅2.2			2.34	寛永通寶
	13	D9SW	II	鍼貨	鍼幅2.3			2.21	寛永通寶
	14	-	-	鍼貨	幅2.2	板(2.15)		1.82	寛永通寶
	15	-	-	鍼貨	ø4.3	横3.2		21.5	大保通寶

## 第6章　まとめ

### 第1節　遺構について

今回の手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡における調査では、これまで御殿川流域遺跡群で実施された調査状況と同様に、調査区の大半が流路にあたり、新旧の河川堆積層で覆われていたことが確認された。基本土層Ⅱ層及びⅢ層がこれにあたり、土層中には弥生時代～近世の遺物が多数含まれていた。第3章で述べたように、Ⅱ層～Ⅲ層中位までは弥生時代～近世までの遺物が混在し、度重なる流路の変更によって古い堆積層が削平され、再堆積が繰り返されたものと考えられる。Ⅲ層の砂礫層下層は弥生時代後期～古墳時代後期を中心とした時期の土器類が比較的まとまって出土することから、古墳時代後期を下限とした時期の堆積層が残っている可能性があり、基盤層であるⅣ層を削り込む形で検出された手乱遺跡流路1・2、鶴喰広田遺跡H20調査区流路1～3といった流路堆積層がそれにあたると考えられるが、遺物の出土状況や堆積層から明確にそれがどの時期に流れたのかを特定するのは困難であった。

調査区内では多数の杭列が検出され、その多くはⅡ層堆積後に設置されたもので、Ⅱ層を削平する旧河川に伴って、近世よりも新しい時に、蛇行する御殿川の護岸、あるいは整流のために設けられたと考えられる。各調査区における杭列の方向が当該期の河川の流路を反映しているものであろう。

### 第2節　出土遺物について

調査区で認められた河川堆積層から弥生時代～近世にわたる多種多様な遺物が出土している。これら遺物群は流磨が少ないものが多く含まれることから、御殿川流域に広がる各時代の近隣集落域からもたらされたものと考えられる。縄文時代に遡る土器も出土しているが、遺物が増加するのは弥生中期以降であり、遺跡周辺での本格的な集落域の形成はこの頃からであろうと推察され、以後近世に至るまで断続的に出土遺物がみられることから、集落域であり続けたことが想定される。

弥生中期葉～後葉にかけての土器類は壺を中心とした土器群が出土するが、比較的少量である。今回調査区西側の鶴喰遺跡では集落域に伴う土坑から中期後葉頃の土器群がまとまって出土しており（三島市1984）、周辺に当該期の集落域の広がりが想定される。弥生後期の土器群については、前半期よりは中～後葉の壺・壺類の出土量が増加する傾向があり、形態や文様のあり方から東遠江様式の影響がみられるものもある。若干の盛衰はあるものの、御殿川周辺では弥生後段階においても継続して集落域が営まれていたと考えられる。

弥生末～古墳前期の土器群は壺・台付壺・高杯・器台など、集落域で出土する器種がほぼ揃う。S字壺や大廓様式の大型壺など、広域に移動する土器を含み、地域間での交流を窺うことはできるものの、古墳時代中～後期にかけての土器群と比較した場合、出土量としてはやや低調となるようである。古墳時代中～後期には遺物量が増加するとともに、完形品に近い土器の出土が目立つようになる。特に中期後葉～後期にかけては駿東型壺や須恵器模倣壺、駿東壺といった当地域の土器様相を特徴づける遺物群が多量に出土するようになる。御殿川流域では手乱遺跡北東に所在する金沢遺跡（三島市1993）、また手乱・鶴喰広田遺跡よりも下流に位置する中島下舞台遺跡（中島B遺跡）で古墳後期の住居跡群が検出され（三島市1983）、当該期における集落が大きなまとまりをもって営まれたことが明らかとなってい

る。出土した土器類の中には祭祀行為に使用されたものが多数見受けられ、御殿川の旧流路がこうした周辺集落域の生活の場の一部となっていたことが想定されるのである。

古代の出土遺物は少數の土師器、須恵器、灰釉陶器などがあるので、それらの背景となる集落などの様相を窺えるほどの資料は得られておらず、遺跡周辺における人々の活動は低调であったとみられる。

中世に位置づけられる遺物としては、瀬戸美濃産施釉陶器や貿易陶磁、かわらけなどの出土がある。貿易陶磁の中には青白磁梅瓶などの高級品も認められるが、碗皿類が大半を占める。瀬戸美濃産施釉陶器は古瀬戸後期～大窯期の碗皿や擂鉢などが出土している。中世を通じてこのような陶磁器類の出土はあるものの少量であり、ここから集落域の様相を窺うのは困難である。ただ、鶴喰広田遺跡H21調査区で出土した42-224・225のように祭祀行為に使用されたとみられるかわらけもあることから、中世後期においても御殿川の旧流路が周辺集落の祭祀的な場であったことが窺われる。

近世の出土遺物は陶磁器、木製品、土製品など多岐にわたっている。陶磁器は瀬戸美濃産の施釉陶器、肥前産磁器がその多くを占める。瀬戸美濃産施釉陶器は碗・皿・小杯などの供膳具、片口・擂鉢などの調理具、壺・徳利などの貯蔵具の他、灯明具や神仏具といった日常生活に関わる道具類がみられる。肥前産磁器については青磁染付碗、染付の丸碗・筒形碗・広東碗・端反碗、染付皿などの供膳具がほとんどで、瓶や仏壇などの製品は少量出土しているにとどまる。これら陶磁器類については18世紀以降の製品が多く出土する傾向があり、それ以前の製品は比較的の少量である。特に肥前産磁器については最も多く出土する碗皿類の出土傾向から、18世紀後半～19世紀前半頃までの製品が多いことが窺われ、近世集落域の変遷をある程度反映している可能性がある。また出土した肥前産磁器は有田外山で生産された量産品が多くを占めている可能性があり（註1）、近世三島宿の周辺部にあたる当遺跡周辺の近世村落に居住した人々の生活水準を窺うこと也可能かと思われる。

御殿川流域遺跡群では木製品が多量に出土しており、今回調査区においても同様の状況であった。木製品は一部が前代に遡る可能性はあるが、ほとんどは近世集落に伴うものと考えられる。鍬などの農具、下駄・櫛・傘といった服飾具、漆椀・底板や蓋板・桶などの容器類、箸や膳などの食事具、羽子板や独楽などの遊戯具、敷居や鶴居などの建築材、杭や柵などの土木材、塔婆や位牌といった葬具、その他多くの用途不明品を含む多種多様な木製遺物が出土している。使用木材の傾向については付編1で詳述されるように、種別によって特徴が表れていることが指摘される。これら多様な木製生活遺物は御殿川流域周辺の近世集落における生活様式のあり方を推測できる資料群であるといえる。

今回の調査で出土した遺物群から、御殿川流域周辺に広がる弥生時代～近世に至る集落域の特徴と変遷を概観した。しかし、各時代における遺構・遺物については未だ資料が少なく、集落景観の復原については課題が残ることも事実である。今後、近隣地域における新たな発掘調査成果を得ながら検討していく必要がある。

註1）佐賀県有田町歴史民俗資料館村上伸之氏のご教示による。

## 参考文献

- 波井英誓 1996 「東駿河における布留式並行期の様相（前）－土器編年の設定－」『静岡県考古学研究No28』静岡県考古学会
- 山本恵一 1999 「駿河の古墳時代中期の土器－東駿河を中心にして－」『東国土器研究第5号』東国土器研究会
- 原廣志 1999 「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地域総合調査報告書』菊川町教育委員会
- 池谷初恵 1999 「駿河伊豆型平底杯について」『東国土器研究第5号』東国土器研究会
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
- 木ノ内義昭 2002 「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相－主として富士郡推定地の出土遺物から－」『東平安跡 第16地区（三日市廃寺跡） 第27地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
- 佐藤由紀男・荻野谷正宏・篠原和大 2002 「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 菊川シンボジウム実行委員会 2005 「陶磁器から見る静岡県の中世社会」
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 「木の考古学 出土木製品用材データベース」 海青社
- 三島市教育委員会 1983 「中島下舞台遺跡」
- 三島市教育委員会 1984 「鶴喰遺跡」
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 「御殿川流域遺跡群Ⅰ」
- 三島市教育委員会 1993 「金沢遺跡」
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 「御殿川流域遺跡群Ⅱ」
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「御殿川流域遺跡群Ⅲ」
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 「御殿川流域遺跡群Ⅳ」
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005 「来光川遺跡群Ⅰ」・「来光川遺跡群Ⅱ」
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 「青木原遺跡」
- 有田町教育委員会 2009 「広瀬向窯跡」
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011 「青木原遺跡Ⅱ」

## 付編 1

### 手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木製品の樹種

小林和貴・小川とみ・鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県三島市鶴喰の鶴喰広田遺跡及び手乱遺跡から出土した、主に近世の木製品の樹種を調べた。両遺跡は三島駅南の富士山の湧水池を水源とし、南に流れて大場川、狩野川へと合流する御殿川の両岸にあり、同時期の一連の遺跡と看做される。近世の主な遺構は御殿川の護岸の杭列と河道で構成の杭群に加えて様々な生活木器等が出土した。ここでは鶴喰広田遺跡からは404点、手乱遺跡からは100点、合計504点の木製品を抽出してその樹種を調べた。これらの遺物から作成されたプレパラートを検鏡観察した結果、表1にある48の分類群が識別された。以下に識別された分類群についてその同定の根拠等を記載し、当該遺跡における植物利用について検討した。なお、作成されたプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに保管されている。

#### 1 同定された植物種

##### 1. モミ属 *Abies* マツ科 写真図版 I-1a-c. (14558)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材、晩材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかからやや急である。樹脂細胞は基本的にない。放射組織は柔細胞のみからなり、その垂直、水平壁には多数の單壁孔（モミ型壁孔）がある。これらの形質からモミ属の材と同定した。

モミ属には全国の暖温帯に広く分布するモミ *Abies firma Siebold et Zucc.* のほか、本州、四国、四国の太平洋側地域の冷温帯に多いウラジロモミ *Abies homolepis Siebold et Zucc.*、そして富士山をはじめとする亜高山帯にはシラベ（シラビ） *Abies veitchii Lindley* とオオシラビソ（アオモリトドマツ） *Abies mariesii Mast.* があり、その材構造での区別は困難である。

資源量から言って木材としてよく利用されるのはモミとウラジロモミで、モミは東北地方中部以南の本州、四国、九州の暖温帯から冷温帯下部にかけて普通に生える針葉樹で、幹径1.5m、樹高30mになる大高木である。ウラジロモミは静岡県地方では山地帶上部にあって、やはり樹高30m以上の大高木となる。いずれも材は木理通直で割裂性がよく、加工は容易だが、肌目が粗く、軽軟で、狂いやすい等の欠点がある。各種建築材、箱ものなどの器具材、小細工もの、棺桶、卒塔婆などの用途がある。当遺跡からは40点が出土し、その大部分は容器の底板（蓋板）であり、その他には折敷や組み物の蓋板、箸などがある。

##### 2. トウヒ属 *Picea* マツ科 写真図版 I-2a-c. (14548)

水平および垂直の樹脂道を持つ針葉樹材で、垂直樹脂道は早材の終わりから晩材に散在し、放射組織には水平樹脂道がある。晩材は量多く明瞭。早材の仮道管径は小型で、晩材とは壁厚の変化によって区別される。放射組織は單列で、放射仮道管と柔細胞からなる。柔細胞の垂直、水平壁はモミ属同様、厚く肥厚し、多数の單壁孔（モミ型壁孔）がある。放射仮道管の有縁壁孔は孔口が狭く、しばしば孔口縁には突起があることからカラマツと区別される。分野壁孔はヒノキ型で小さく、1分野に2-5個ある。これらの形質からトウヒ属の材と同定した。

本州中部に分布するトウヒ属の樹木はトウヒ *Picea jezoensis (Siebold et Zucc.) Carr. var. hondoensis*

(Mayr) Rehder, イラモミ *Picea alcoquiana* (Veitch ex Lindl.) Carrière, ハリモミ *Picea torano* (Siebold ex K.Koch) Koehne など幾つかの種が冷温帯から亜高山帯にかけて分布するが、量的にやや多いのはトウヒである。これらは奥地林に生育することから、木材が商品として流通するようになってから利用されたと考えられる。当遺跡からは10点が出土し、曲物が2点、曲物など容器の底板及び蓋板が7点、箸が1点である。

### 3. アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 写真図版 I-3a-c. (14483)

垂直・水平の樹脂道を持つ針葉樹材で、早材、晚材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかである。垂直樹脂道は多くは晩材中に散在する。放射組織は単列と紡錘形の2形があり、後者には水平樹脂道がある。放射組織は放射仮道管、柔細胞、分泌細胞からなり、放射仮道管の内壁は顯著に肥厚し、その先端は鋭い歯牙状となる。分野壁孔は大型の窓状で通常1分野に1個ある。これらの形質からアカマツの材と同定した。

アカマツは本州、四国、九州の冷温帯から暖温帯にかけてもっとも普通に生える針葉樹で、特に瘦地や二次林に多い。静岡県地方では平野部から山地丘陵にかけてどこにでもアカマツがある。成長は早く、幹径1m、樹高30mになり、材は木理通直で重硬、樹脂分が多く、保存性がよい。アカマツはクロマツとともに一つの短枝に2本の針葉が東生し（二葉松類）、1本の針葉にある維管束が二つの部分からなる複維管束亞属に属して、材質が堅いのに対して、ヒメコマツなどは、2本の短枝に5本の針葉が東生し（五葉松類）、維管束が1本のみからなる單維管束亞属に属し、材は柔らかい。アカマツの材は建築材、各種器具材、土木用材、製鉄用の炭材、薄く剥いて経木や繩にするなど、広い用途がある。当遺跡出土材は31点あり、丸木杭が15点、下駄が7点、容器の底板（蓋板）1点、用途不明の木材が8点である。マツ材の下駄は「庶民的」である。

### 4. クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科 写真図版 II-4a-c. (13663)

材の基本構造はアカマツに良く一致するが、放射仮道管の内壁の肥厚が未発達で、鋭い鋸歯状にはとがらないことで区別される。

クロマツは青森県以南の本州、四国、九州の沿岸部に広く分布するが、それに比べ海岸部に限定される。静岡県地方でも近世になり海岸砂丘の飛砂防止、緑化に積極的に植林された結果、海岸部はどこにもクロマツ林があるようになった。成長は早く、アカマツ同様、幹径1m、樹高30mになり、材質、用途もアカマツ同様である。当遺跡出土材は丸木杭が8点、用途不明の材2点である。杭材にはアカマツ同様にクロマツも多用されており、鶴鳴広田遺跡と手乱遺跡双方ともこの両者が存在することから、当時はこの2種を区別して用いてはいなかったことが窺われる。

### 4. マツ属複維管束亞属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科

上に述べたとおり、アカマツとクロマツは放射仮道管の内壁の歯牙状肥厚の顯著さで区別されるが、材の保存が悪く、細胞壁が劣化しているためそのいずれとも判定できなかったものを「複維管束亞属」とした。单維管束亞属からは放射仮道管の内壁の肥厚が顯著であることで区別される。

当遺跡出土材は杭が1点である。

### 5. 单維管束亞属 *Pinus subgen. Haploxyylon* マツ科 写真図版 II-5a-c. (14546)

アカマツ、クロマツよりは年輪幅がやや狭い針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道がある。早材から晩材への移行は緩やか、晩材部は一般に幅が狭い。放射組織は単列と水平樹脂道を含む紡錘形があり、柔細

胞、放射仮道管、分泌細胞からなる。分野壁孔は大型の梢円～窓形で1分野1個、仮道管の内壁は厚くならず、平滑である。これらの形質からマツ科マツ属のうち、ヒメコマツ *Pinus parviflora Siebold et Zucc.*などの單維管束亞属（五葉松類）の材と同定した。

ヒメコマツは北海道から九州の暖温帶上部から冷温帶に分布し、樹高25m、幹径60cmほどになる。材は木理通直、緻密で柔らかく加工性がよい。建築材、組み物、指物、各種器具など幅広く用いられる。当遺跡出土材は容器の底板（蓋板）1点である。

#### 6. ツガ *Tsuga* マツ科 写真図版 II-6a-c. (14596)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。垂直、水平の树脂道をともに欠き、放射組織は単列で、放射仮道管と柔細胞からなる。柔細胞の垂直、水平壁はモミ属同様、厚く肥厚し、多数の单壁孔（モミ型壁孔）がある。これらの形質からツガ属の材と同定した。

ツガ属には関東以西の本州、四国、九州の暖温帶上部から冷温帶下部にかけて広く分布するツガ *Tsuga sieboldii Carr.* と、亜高山帯に分布するコメツガ *Tsuga diversifolia (Maxim.) Masters* があり、静岡県内ではこの両者ともに比較的多く、特に富士山の3-5合目にはコメツガ林が発達している。

ツガは幹径80cm、樹高30mくらいの大木になる、コメツガは一回り小さい。両者とも材は木理通直で、重硬で、保存性は中位である。建築材、箱ものなどの各種器具等に用いいる。当遺跡出土材は箸2点である。

#### 7. スギ *Cryptomeria japonica (Linn.f.) D.Don* スギ科 写真図版 III-7a-c. (14624)

年輪の明瞭な針葉樹材で、遺跡出土材は黒褐色となることが多い。年輪幅は通常広く、広い早材部と晩材部を持ち、早材から晩材への移行は緩やか～かなり急なものまで変異がある。老齢樹に由来する部分は年輪幅が大変狭く、晩材部もわずかで、早材から晩材への移行は急であり、ヒノキ材に似てくる。树脂道はない。树脂細胞は主に晩材部にやや接線方向に連なって散在する。树脂細胞中に黒褐色の物質があり、細胞の水平壁は平滑で薄いか、やや厚く、多少球珠状に肥厚する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、垂直、水平壁は平滑、分野壁孔は大型の梢円形で開孔部は厚いレンズ状となり、スギ型で、1分野通常2個ある。以上の形質からスギの材と同定した。スギの遺跡出土材は年輪幅が広いこと、黒褐色の色調、際だった早晚材などでモミ材によく似るので、肉眼での識別は難しい。

スギは青森県から九州屋久島までの冷温帶から暖温帶に広く分布する針葉樹だが、日本海側に多い。幹径2m、樹高35mを超える大木となり、材は木理通直で割裂性がよく、軽軟で強韌、加工性がよく仕上げは中位であるが大材が多量に得られるので、建築材を始め、ありとあらゆる用途がある。本州日本海側と東海地方の太平洋側に多く分布し、これらの地域では繩文時代からスギ材が多量に利用されてきている。当遺跡出土材で最も多く96点、全体の約19%が同定されたが、これは選択したサンプルについての結果であって、出土材全体ではもっと大きい比率を占めることが容易に推察される。容器の底板（蓋板）が29点、箸が24点、栓が10点、下駄が4点、漆器が2点、用途不明の木材が24点である。

#### 8. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata (Thunb.) Siebold et Zucc.* コウヤマキ科 写真図版 III-8a-c. (14081)

材質が大変均質な針葉樹材で、晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行はやや緩やか、年輪はあまり明瞭でない。树脂細胞を欠き、放射組織は柔細胞のみからなる。分野壁孔大型で梢円～窓形を丸く膨らました窓状で1分野あたり通常1個ある。これらの形質からコウヤマキの材と同定した。

コウヤマキは福島県と本州中部以西、四国、九州の暖温帶上部～冷温帶下部に生える針葉樹で、幹径

1m、樹高30mの大高木となる。静岡県西部には分布しない。材は比較的軽いが堅く強靭で、木理通直で、年輪が目立たなく均質であり、加工性よく、仕上がりが美しい。耐朽性、耐湿性に特に優れ、日本産の針葉樹でもっとも材質がよいと言える。材質がよいから建築材を始めありとあらゆる用途に用いることができるが、資源量が少ないため、特にコウヤマキが必要とする種類に用いられるが、弥生時代～古墳時代の木棺にはコウヤマキが特に使われていた歴史がある。当遺跡出土材は漆椀1点で、コウヤマキの漆椀というの非常に珍しい。

9. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa Siebold et Zucc.* ヒノキ科 写真図版 III-9a-c. (1455)

年輪のあまり目立たない針葉樹材で、垂直・水平の樹脂道を持たない。遺跡出土材はスギの葉に黒ずまず、明るい褐色を呈する。年輪幅が通常狭く、均等で、木目が美しい。晩材部は幅狭く早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在する。樹脂細胞はスギ同様黒褐色物質で充填されるが、水平壁は通常厚く肥厚し、結節状となる。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はやや大きめの円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で斜めに位置し、トウヒ型～ヒノキ型で1分野あたり通常1～2個ある。以上の形質からヒノキの材と同定した。

ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する針葉樹で、幹径1m、樹高35m以上になる。材は木理通直で割り易さが大変よく、軽軟で、加工性が大変良い。材は緻密、強靭で、耐朽性に特に優れ、光沢美しく、芳香がある。日本産の針葉樹ではコウヤマキに次いで優秀な木材で、大型建築物から個人住宅までのあらゆる建築材、様々な器具材、仏像、彫刻物、曲物、組み物、指物など実に広い用途がある。当遺跡出土材は85点とスギに次いで多く、曲物、折敷などの塗装でないもの合わせて45点、箸が13点、栓と下駄が7点ずつなど、様々である。

10. サワラ *Chamaecyparis pisifera Siebold et Zucc.* ヒノキ科 写真図版 IV-10a-c. (1452)

ヒノキによく似た材で、一般に年輪幅はヒノキより広いことが多い。幅広い早材と狭い晩材からなり移行はヒノキより緩やかである。樹脂細胞がやや接線方向にまとまる傾向を見せて散在し、細胞内に茶褐色の物質を含み、細胞の水平壁は厚くなっている單壁孔を持つことが多い。放射組織は単列で柔細胞のみからなり分野壁孔はヒノキ型～スギ型で2個ある。これらの形質からヒノキ科ヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは東北南部から中部地方の内陸部の暖温帯上部～冷温帯に分布し、樹高30m、幹径1mの大高木となり、静岡県の北部の山岳地帯ではヒノキと同所的に存在する。材はヒノキより軽軟で材質がやや劣るが特に水湿に強く、風呂桶、桶類などの特用があるが、基本的にはヒノキと同様に用いられる。当遺跡出土材は33点で、容器の底板（蓋板）が14点、曲物が1点、栓8点、箸3点などである。

10'. ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科

基本構造はヒノキ、サワラと同様だが、保存が悪いため分野壁孔が十分に観察できずそのいずれであるかが識別できなかったものである。出土材は2点で、用途はヒノキ、サワラと同じである。

11. アスナロ *Thujopsis dolabrata (Lin. Fil.) Siebold et Zucc.* ヒノキ科 写真図版 IV-11a-c. (14610)

垂直、水平の樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は一般に幅広く、晩材部は比較的多く、早材から晩材への移行は緩やかである。仮道管内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞は簇ぐ集まって接線状に配列する。樹脂細胞の水平壁は通常厚く肥厚して数珠状になる。細胞内に黒褐色の物質を含む。放射組織は単列で柔細胞からなる。分野壁孔は小型で輪郭が丸く、開孔部が狭いトウヒ型、1分野に2～4個ある。

これらの形質からヒノキ科のアスナロの材と同定した。

アスナロ（変種のヒノキアスナロを含む）は北海道南部から九州にかけての冷温帯から亜高山帯下部に分布する針葉樹で、樹高20m以上、幹径80cmに達する。木理通直でやや軽軟だが芳香があり、保存性に特に優れる。建築材、家具材、器具材等、ヒノキ同様の用途がある。当遺跡出土材は用途不明の材1点である。

11. ヒノキ科 *Cupressaceae*

年輪の明瞭な針葉樹材で、樹脂細胞が晩材部付近に散在し、樹脂細胞は黒褐色の物質で充填され、水平壁が結節状になることからヒノキ科であることは分かるが、保存が悪く分野壁孔等、詳細な形質が十分観察できないため、ヒノキ科のいずれの樹種であるかが不明なものである。当遺跡出土材は用途不明の材2点である。

12. イスマキ属 *Podocarpus* マキ科 写真図版 IV-12a-c. (11935)

年輪の全く目立たない針葉樹材で、垂直・水平の樹脂道はない。仮道管内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞が年輪内に均一に分布している。樹脂細胞は黒褐色の物質で充填されることなく、また水平壁は大変薄く平滑である。放射組織は單列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は開孔部が広いスギ～ヒノキ型である。以上の形質からマキ科のイスマキ属の材と同定した。

イスマキ属には房総半島南部以南西の暖地に生えるイスマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Lambert とさらに南方の紀伊半島以南に生えるナギ *Podocarpus nagi* (Thunb.) Zoll. et Moritz があるが、材構造での両者の区別は難しい。

イスマキは樹高15m、幹径80cmくらいになる常緑高木で、静岡県地方では生垣などに良く植えられる。地際からしばしば萌芽枝を出し、その萌芽枝は通直で成長がよい。材は木理通直で堅く粘りがあり、樹脂が多くて耐湿性、耐朽性に優れる。枝材は粘りがあって曲げに強い。カヤ同様に建築材、器具材などに使われるが、水湿に特に強いので琉球地方では土台、柱材に重用している。静岡県地方の弥生時代の遺跡からはイスマキ属性の丸木弓が多数出土するが、それ以降は多く出土しない。当遺跡出土材は杭材1点である。

13. カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 写真図版 V-13a-c. (13949)

出土材の保存性が極めてよい黄褐色の針葉樹材で、材は淡黄褐色、年輪は目立たず、樹脂細胞はなく、仮道管と放射組織からなる。早材部には方形の仮道管が整然と並び、晩材部ではやや細く厚壁となる。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があり、2-3本ずつまとめて走る。放射組織は柔細胞のみからなり背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

カヤは東北地方南部以南の暖温帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径1m、樹高25mの大高木となる。幹は通直で材の木理も通直、堅く粘りがあり、緻密で弾性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。建築材、各種器具材など実に多様な用途があるが、碁盤、将棋盤などの専用がある。特に、古来、一本の木彫仏に重用されている。当遺跡出土材は栓が1点である。

14. サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Siebold et Zucc. クルミ科 写真図版 V-14a-c. (14479)

中型橢円形の単独道管が緩く集まって斜め放射方向に配列する放射孔材～散孔材で、道管密度は低く、年輪界は目立たない。道管の穿孔は單一。本部柔組織は接線状。放射組織は1-2細胞幅で背の低

い同性である。これらの形質からクルミ科のサワグルミの材と同定した。

サワグルミは樹高25m、幹径60cmほどの幹が直立する落葉高木で、北海道南部から九州熊本県にかけての冷温帯の沢沿いに生える。実は食糧となる。材は軽軟で加工性は良く、指物、箱物、火鉢の胴、下駄など用途がある。当遺跡出土材は下駄が2点である。

#### 15. ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gymnothurus* カバノキ科 写真図版 V-15a-c. (14521)

薄壁で多角形～楕円形の小道管が単独、あるいは2～4個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪内の道管径の変化はあまりない。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状で、側壁の壁孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。本部柔組織は散在する。放射組織は單列同性と集合放射組織の両方がある。以上の形質からブナ科ハンノキ属のうち、ハンノキ節の材と同定した。

ハンノキ属には低湿地に多いハンノキ *Alnus japonica* (Thunb.) Steud.、山地斜面に多いヤマハンノキ *Alnus hirsute* Turcz. var. *sibirica* C.K.Schn.を始め幾つかの種類があるが、材構造で個々の種を識別するのには困難である。

ハンノキは北海道～九州の暖温帯～寒温帯の低湿地、湿原などに多く分布する落葉高木で、樹高15m、幹径50cmほどになる。ヤマハンノキは母種のケヤマハンノキと共にハンノキと同じく北海道～九州の暖温帯～寒温帯に広く分布するが、生育地は山地斜面で異なっている。樹高20m、幹径50cmになる。ヤマハンノキの材はやや堅硬で、ハンノキの材は柔軟という違いはあるが、安価で手に入りやすく、床柱や梁、板などの建築材始め各種器具材等に広く用いられる。ただし、腐朽しやすい欠点がある。当遺跡出土材は漆器梶と挽物の皿が1点ずつである。

#### 16. ハンノキ属ヤシャブシ節 *Alnus sect. Bifurcatus* カバノキ科 写真図版 VI-16a-c. (14493)

薄壁で多角形～楕円形の小道管が均一に分布する散孔材で、年輪は不明瞭である。道管は単独あるいは放射方向に2～多数が複合する。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状、側壁の壁孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。本部柔組織は散在する。放射組織は單列同性で、集合放射組織は殆どでない。以上の形質からブナ科ハンノキ属のヤシャブシ節の材と同定した。

東海地方に分布するヤシャブシ節の樹木には、山地の温帶上部から冷温帯に広く分布する落葉高木のヤシャブシ *Alnus firma* Siebold et Zucc.、沿岸部に普通に生育する落葉中高木のオオバヤシャブシ *Alnus sieboldiana* Matsumura がある。前者の材は軽軟、割裂自由で木目が美しく、まな板、下駄などの用途がある。後者の材はやや堅硬だが幹が太くならないことから材の用途はあまりない。当遺跡出土材は下駄2点であり、ヤシャブシである可能性が高い。

#### 16'. ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科

ハンノキ節とヤシャブシ節は材の基本構造が同じで、集合放射組織の出現頻度で区別されるが、当該プレパラートの材の保存性が大変悪く、また木口と板目の切片が小さくてその出現の有無を判断できなかったものである。出土材の下駄1点はヤシャブシである可能性が考えられる。

#### 17. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 写真図版 VI-17a-c. (14472)

小型(直径約30～60 μm)で丸い管孔が、単独あるいは放射方向に数個複合し、それが緩く放射方向に集まって配列する散孔材～放射孔材。道管の穿孔は單一で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。

木部柔組織は接線状～短接線状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は同性で、1-3細胞幅のものと、大型の集合状のものからなる。これらの形質からカバノキ科クマシデ属のイヌシデ節の材と同定した。

イヌシデ属にはイヌシデ *Carpinus tschonoskii Maxim.*、アカシデ *Carpinus laxifolia (Sieb. et Zucc.) Blume*などがあり、いずれも暖帯～温帶に広く分布する落葉中高木で、特に二次林に多い。いずれの材もやや硬く緻密で弾力があり、柄物などに用いられる。当遺跡出土材は容器の底板（蓋板）1点である。

18. クリ *Castanea crenata Siebold et Zucc.* ブナ科 写真図版 VI-18a-c. (14478)

年輪の始めに楕円形の大道管が1-3層並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって火炎状の紋をなす環孔材で、心材部はタンニン様物質が変質したもので漆黒となり、材は堅くなつて保存性が大変良い。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、道管内壁には薄壁のチローシスが発達する。木部柔組織は散在あるいは單接線状で、晩材部で目立つ。放射組織は単列同性、道管-放射組織間の壁孔はサイズが不揃いな楕円形で、その長軸の向きは様々である。これらの形質からクリの材と同定した。

クリは北海道南部以南の全国の冷温帶から温帶に広く分布する落葉高木で、幹径1m、樹高20mに達する。陽光の地に生え、成長が早く、材はやや坚硬で割裂容易、耐朽性、特に耐湿性に優れる優秀な木材である。大材が得られるので大型建築物の柱材や土台、各種器具材を始め、ありとあらゆる用途がある。また特に耐湿性と耐朽性に優れているので土木用材、木造の橋、鉄道枕木などの特用がある。材質の優秀さと人里近くに多く生えることから、古くから多用されてきている。当遺跡出土材は下駄16点に漆椀1点、用途不明品が1点である。

19. ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真図版 VII-19a-c. (14071)

丸みを帯びた小道管が密に分布する散孔材で、道管は単独あるいは2-数個が様々な方向に複合する。道管の穿孔はほとんどが單一だが、横棒が10本以下の階段状穿孔がわずかに混じる。放射組織はほぼ同性で1-10細胞幅ほどになり、大きいものは肉眼で認められ、接線面での形状は綺麗な筋錐形となる。これらの形質からブナ属のブナ属の材と同定した。

ブナ属には全国の温帶林にあるブナ *Fagus crenata Blume* と、本州太平洋岸の温帯にあるイヌブナ *Fagus japonica Maxim.* とがあるが、材構造での区別は困難である。いずれも樹高30m、幹径1mを越える大高木となり、静岡県地方では両者とも分布する。ブナの材は堅硬、緻密で割裂自在で加工性はよく、木目が美しいが、腐りやすい欠点がある。机、椅子を中心とする各種家具、挽物、剝物、漆器木地、玩具、運動具など実にさまざまな用途があり、国内の資源量が多いことから安価であり、「庶民的」な木材と言える。イヌブナの材はブナに似るが、質は劣る。当遺跡出土材は漆器椀42点、皿3点、椀1点、下駄2点である。

20. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 写真図版 VII-20a-c. (14618)

出土材はしばしば暗赤褐色をして、中～大型の丸い道管が単独で、放射方向に配列する放射孔材で、道管の穿孔は單一、木部柔組織は1-3細胞幅の独立帯状、放射組織には単列同性と大きな複合状の2種があり、道管-放射組織間壁孔は縦長の楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科コナラ属のうち、常綠性のカシ類、すなわちアカガシ亜属の材と同定した。なお、同定された8点はいずれも道管径が200μmを超えないことから、この中にイチガシが混じっている可能性はない。

カシ類は照葉樹林を特徴づける種群で、東北地方南部以南に沢山の種類があり、多くは高木となる。静岡県地方ではアカガシ *Quercus acuta Thunb.*、アラカシ *Quercus glauca Thunb.*、シラカシ *Quercus*

*myrsinaefolia* Blume、ウラジロガシ *Quercus salicina* Blume などがある。なお、海岸によく生えるウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray はこのグループには含まれない。カシ類の材は堅硬で木理通直、緻密で割裂性よく、弾性があって強靭であり、建築材を始め各種農具類、柄物、木刀など多くの用途がある。本遺跡出土材は鉢3点と用途不明の材5点である。

21. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真図版 VII-21a-c. (13969)

年輪の始めに丸い大道管が1-数層並び、そこから順次径を減じて晩材部ではクリ同様、薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は2-3細胞幅の独立帶状をなし、晩材部でよく目立つ。放射組織は單列同性と複合状があり、道管-放射組織間の壁孔はカシ類と異なり、いびつな楕円形で縦に長くならない。以上の形質からコナラ属コナラ亜属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には全国の山野に普通で、特に二次林に多いコナラ *Quercus serrata* Thunb.、暖温帯から冷温帯にやや希に産するナラガシワ *Quercus aliena* Blume、冷温帯に多いミズナラ *Quercus mongolica* Fish. var. *grosseserata* Rhed.、冷温帯から亜寒帯にあるカシワ *Quercus dentata* Thunb. などがあり、静岡県地方ではコナラが普通であり、山地上部に行くとミズナラが出現し、カシワが希にあるがナラガシワはあまり見かけない。コナラは幹径60cm、樹高15mくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。ミズナラは幹径1m、樹高20mを超える大木となり、材質もコナラより優れていて、特に家具材に重用される。当遺跡出土材は鉢と下駄が1点ずつである。

22. ムクノキ *Aphananthe aspera* Thunb. ニレ科 写真図版 VIII-22a-c. (13963)

中～小型で丸い楕円形の道管が、年輪内に単独あるいは2-3個放射方向に複合して均一に散在する散孔材だが、年輪界に向けて道管径はやや小さくなり、半環孔材的になる。道管の壁はやや厚く、穿孔は単一、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で密に交互状にある。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では周囲状及び数細胞幅の帯状で著しい。放射組織は異性で1-5細胞幅くらい、1-4細胞高の単列部には小型の結晶がしばしば見られる。これらの形質からムクノキの材と同定した。

ムクノキは関東地方以西の暖温帯に生える落葉高木で、直径60cm、高さ20mくらいになる。成長の早い木で集落周辺および二次林に特に多い。材はやや堅く緻密で強靭であり、割裂は困難で、さまざまな農工具の柄、天秤棒等の用途がある。本遺跡出土材は下駄1点である。

23. ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科 写真図版 VIII-2 a-c. (14480)

年輪始めに丸い大道管が1(-2)層に並び、孔圈外では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊状となつたものが分布する環孔材で、年輪がよく目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状に密に並ぶ。小道管には顯著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状、ストランドは1-4細胞で層階状に並ぶ。放射組織は背があまり高くない紡錘形で、鞘細胞はなく、上下端に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県から鹿児島県までの暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径1.5m、樹高25mを超える大木となる。材は堅硬、強靭で美しい杣が出て、保存性、耐朽性は高く、切削加工は容易である。材質に優れ、大材が得られることもあって、大きな建造物の柱、梁、扉などの建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物を始め各種器具材、家具、漆器本地等として実に多様な用途がある。当遺跡出土材は漆椀17点、皿など4点、下駄5点、用途不明

品2点である。

24. ヤマグワ *Morus bombycina Koidz.* クワ科 写真図版 VIII-24a-c. (13653)

年輪始めに大きな楕円形の道管が1-3層に並び、順次径を減じて、晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊となったものが斜め接線方向に連なる傾向を以て散在する環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は多少大きめの小孔紋で交互状、小道管の内壁には顯著ならせん肥厚がある。放射組織は3-7細胞幅の紡錘形で、單列の翼部が発達し、異性である。以上の形質からヤマグワの材と同定した。

ヤマグワは広く全国の山野に分布する落葉高木で、幹径40cm、樹高15mくらいになり、特に沢沿いに多い。材はやや堅硬で韌性にとみ、木理は粗いが光沢があつて美しく、特に保存性に優れている。和風建築の内装材や家具材、強さを必要とする各種器具材、彫刻材などに用いる。当遺跡出土材は農具1点である。

25. クスノキ *Cinnamomum camphora (Linn.) Siebold et Zucc.* クスノキ科 写真図版 IX-25a-c. (14511)

丸くやや厚壁の中型の道管が単独あるいは2個放射方向に複合して比較的まばらに分布する散孔材で、年輪界に向けて道管径はかなり小さくなる。道管の穿孔は單一、希に1横棒の少ない階段状で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、道管内にはチローシスが発達し、横断面でもよく見える。柔組織は周囲状でときどき大型の油細胞が混じり、横断面で道管のように見えることがある。放射組織は2-3細胞幅の異性で、背の低い紡錘形であり、直立細胞に大きく膨らんだ油細胞が混じる。遺跡出土材でも芳香を保持している。以上の形質からクスノキの材と同定した。

クスノキは関東南部以南の暖温帯に生える常緑高木で、成長が早く幹径1m、樹高20mを超える大木となる。社寺等には直径2mを越える大木があり、しばしば天然記念物等に指定される。古くから良く植栽されてきたので、現在の分布域は本来の自生域よりも広まっていると考えられる。材は堅硬で耐久力、保存性にすぐれ、光沢があつて芳香を持ち、建築材、和洋家具、箱物、木魚などの各種器具材に良く用いられる。当遺跡出土材は下駄1点である。

26. クスノキ科 *Lauraceae* 写真図版 IX-26 a-c. (14603)

丸く壁がやや厚い小道管が単独あるいは放射方向に2-3個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の少ない階段状あるいは單一である。柔組織は周囲状でときどきやや大型になって精油を含んだ油細胞が混じる。放射組織は背が低く、2-3細胞幅の紡錘形で、異性、上下端にある直立細胞にわずかに膨らんだ油細胞が混じる。以上の形質からクスノキ科のクスノキ以外の材と同定した。

クスノキ科には多くの属、種があるが材の基本構造は共通である。中でも、照葉樹林の主要素であるタブノキ *Machilus thunbergii Sieb. et Zucc.*、シロダモ *Neolitsea sericea (Blume) Koidz.*、ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum Sieb. ex Nakai*、カゴノキ *Actinodaphne lancifolia (Sieb. et Zucc.) Meisn.* などは互いによく似ていて区別が困難である。タブノキは照葉樹林を特徴づける常緑高木で、幹径1m、樹高15mくらいになり、しばしば横に広がった樹形となり海岸部に多い。シロダモは幹径50cm、樹高15mほどの常緑高木で、東北地方南部以南に広く分布する。いずれも材はやや堅く、きめは粗く、割裂困難で加工性はあまり良くない。精油成分を持つので芳香があり、保存性はよいがクスノキほどではない。建築材、家具、器具材、細工物などに使われる。当遺跡出土材は用途不明の材1点である。

27. モクレン属 *Magnolia* モクレン科 写真図版 IX-27a-c. (13650)

暗赤褐色を帯びた出土材で、薄壁で多角形の小道管が複合したものが密に分布する散孔材で、道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔は階段状で、道管内には薄壁のチローシスがたくさんある。放射組織は多くは2細胞幅で背がやや高く、道管-放射組織間の壁孔は楕円形で、交互状で密にある。以上の形質からモクレン属の材と同定した。

モクレン属には北海道から九州の冷温帯から暖温帯上部に広く分布するホオノキ *Magnolia obovata* Thunb.、同様な分布をするがやや暖温帯に多く、特に二次林に普通に生えるコブシ *Magnolia kobus* DC. の他数種があり、出土材はこのいずれかと考えられる。ホオノキは幹径50cm、樹高20mになる落葉高木で、成長が早く、幹が直通に成長する性質がある。材は軽軟で年輪が目立たず均質であり、切削加工が容易で、建具・箱物・版木、下駄などによく用いられる。コブシも材質は軽軟、均一で加工性がよく、ホオノキと同様に用いられるが、幹がしばしば大きく枝分かれして直通な材が得にくいのと、材質が劣るのであまり利用されない。当遺跡出土材は漆器椀3点と下駄1点である。

28. カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. カツラ科 写真図版 X-28a-c. (14605)

薄壁多角形の小道管が単独で密度高く均一に分布する散孔材で、晩材部では道管径は小さくなり、織維組織が目立つようになる。道管の穿孔は横棒が20本くらいの階段状である。放射組織は異性で2列、単列部は直立細胞、多列部は平伏細胞からなり、接線断面ではスマートな紡錘形である。これらの形質からカツラ科のカツラの材と同定した。

カツラは北海道から九州の冷温帯に広く分布する落葉高木で、特に沼沿いなど水湿地に多い。成長は早く、幹径1m、樹高20m以上になり、幹は直通でしばしば萌芽枝が出て「千本桟」となる。材は軽軟で木理直通、加工が容易で、和洋家具、指物、組み物、様々な器具材に用いられる。当遺跡出土材は漆椀2点、下駄2点、用途不明品1点である。

29. ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 写真図版 X-29a-c. (11766)

微細な薄壁多角形の道管がほとんど単独で均一に分布する散孔材で、年輪始めに一回り大きい道管が並ぶ。道管の穿孔は横棒が10本くらいの階段状で、側壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状、放射組織は2-4細胞幅で異性、直立細胞がときどき大きく膨らんで中に大きな結晶を一つ持つ。以上の形質からヤブツバキの材と同定した。

ヤブツバキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、東北地方以南の沿岸部から、関東以西では内陸部まで広く分布し、幹径30cm、樹高10mくらいになる。材質は堅硬強韌で粘りがあり、割裂、加工は困難だが、柄物、滑り台、滑車、轆轤部品など強度を必要とする部分によく用いられる。遺跡出土材では容器の蓋1点である。

30. イヌノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 写真図版 X-30a-c. (14114)

多角形の小道管が単独で密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たず、道管径は年輪内で殆ど変化しない。道管の穿孔は横棒が10本以下の階段状、内壁にらせん肥厚は見られない。木部柔組織は接線状で細胞内にしばしば黒褐色の物質を持つことからよく目立つ。放射組織は2細胞幅程度、典型的な異性である。これらの形質からイヌノキの材と同定した。

イヌノキは伊豆半島以西南の暖地に生える常緑高木で、幹径50cm、樹高15mになる。しばしば葉に大きな虫瘤ができる容易に見分けられる。材は極めて堅硬、強韌で重たく、美しい光沢があり、保存性に優れるが、割裂、加工は極めて困難である。床柱等の建築造作、柄物、家具、各種器具、箸、櫛、三弦

の棹、琵琶のバチ等、材質に応じた用途がある。当遺跡出土材は柵 1 点である。

31. サクラ属 *Prunus* バラ科 写真図版 XI-31a-c. (14054)

丸い小道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合して密度高く均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の櫻孔は大振りの小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で、放射組織は 1-5 細胞幅くらいの同性にやや近い異性、構成細胞は大振りである。これらの形質からバラ科のサクラ属の材と同定した。

サクラ属には多数の種があるが、特徴的な形質が見られない限り、種の特定は困難である。もっとも普遍的なヤマザクラ *Prunus jamasakura Siebold ex Koidz.* は本州から九州の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高10m以上になる。材はやや堅く緻密で保存性、耐朽性がよく、加工も容易で優れた広葉樹材である。当遺跡出土材は漆挽 2 点である。

32. カエデ属 *Acer* カエデ科 写真図版 XI-32a-c. (14577)

丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは 2-3 数個放射方向に複合して密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。繊維組織は薄壁でやや直径の太い繊維の集まりと、壁がやや厚く直径わずかに小さい繊維の集まつた部分とがモザイク状になって雲紋状の文様を作る。道管の穿孔は單一、側壁の櫻孔は小孔紋で交互状に密にあり、らせん肥厚がある。木部柔組織は目立たないが年輪界にあるものはしばしば結晶を持つ。放射組織は 1-4 細胞幅くらいの同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

カエデ属には全国の暖温帯～亜高山、亜寒帯にかけて多数の種があるが、それぞれ互いに材構造が似ていて種の識別は困難である。静岡県地方にはイロハモミジ *Acer palmatum Thunb.*、イタヤカエデ *Acer mono Maxim.*、ウリハダカエデ *Acer rufinerve Sieb. et Zucc.* など多数ある。いずれも幹径50cm、樹高10mほどの落葉高木で、山地に生える。イロハモミジの材は堅硬強靭緻密で光沢があり、時に美しい空ができる。切削加工は難しうが、建築の装飾的部分、各種家具、器具材、楽器材などに用いられる。当遺跡出土材は柵が 1 点である。

33. トチノキ *Aesculus trubinata Blume* トチノキ科 写真図版 XI-33a-c. (14078)

単独あるいは数個が放射方向に複合した薄壁梢円形の小道管が均一に散在する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は單一、道管相互の櫻孔は小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がかすかに見えることがある。放射組織は単列同性で層階状に配列する。道管・放射組織間櫻孔はやや大きめの小孔紋で交互状、密に並ぶ。これらの形質からトチノキ科のトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯に広く分布する落葉高木で、成長が早く、幹径を 1m、樹高20m以上の巨木となる。種子は多量のデンプンを含むが、有毒のサボニンを含むのであく抜きが必要である。材は柔らかく、肌理細かく光沢があって美しく、加工性に優れるが狂いが出やすく、また保存性も低い。大材が得られるので建築の大きな板を必要とする部分に使われることがあるが、主に剣物、挽物、漆器本地などに绳文時代前期から非常に利用されてきている。本遺跡出土材は漆挽31点と挽物の柵 1 点である。

34. シナノキ属 *Tilia* シナノキ科 写真図版 XII-34a-c. (13953)

小型で薄壁の丸みを帯びた道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合したものが均一に分布する散孔材で、短接線状の木部柔組織が目立つ。道管の穿孔は單一で、道管相互の櫻孔は小孔紋で交互状に密

にあり、道管内壁に繊細ならせん肥厚をもつ。放射組織は1~4細胞幅程度の同性である。これらの形質からシナノキ属の材と同定した。

シナノキ属には北海道から九州までの冷温帯に分布するシナノキ *Tilia japonica* (Miq.) Simonkai, 北海道から本州中部までの冷温帯に分布するオオバボダイジュ *Tilia maximowicziana* Shirasawa, 西日本の暖温帯に分布するヘラノキ *Tilia kiussiana* Makino et Shiras. があり、静岡県地方にはシナノキのみが分布する。シナノキは樹高20m、幹径50cmになる落葉高木で、材は軽軟緻密で加工性はよいが耐朽性、保存性に劣る。箱ものなどの器具類、下駄、マッチ軸木などの用途がある。当遺跡出土材は下駄1点である。

### 35. ヤマボウシ *Benthamidia japonica* (Siebold et Zucc.) Hara ミズキ科 写真図版 XII-35a-c. (13942)

丸い小道管が単独で比較的まばらに均一に散在する散孔材で、年輪界は不明瞭である。本部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は7細胞幅位になり背も比較的高く、木口面でも目立つ。典型的な異性で上下に單列の翼部がある。これらの形質からミズキ科のヤマボウシの材と同定した。よく似た材にクマノミズキ *Swida macrophylla* (Wall.) Sojak があるが、放射組織が大きいことで区別される。

ヤマボウシはおおむね樹高10m以下、幹径20cm程度の落葉小高木で、本州、四国、九州の温帶上部~冷温帯の山地丘陵に広く生え、4枚の白い苞を持つ花が咲いてよく目立つ。材質は堅硬強韌緻密で粘りがあり、折れにくく、切削加工は難しい。材質を活かして各種柄物、下駄、機械材などに重用される。当遺跡出土材は独楽と紡績具が1点ずつである。

### 36. ミズキ *Swida controversa* (Hemsl.) Sojak ミズキ科 写真図版 XII-36a-c. (14110)

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。本部柔組織は散在するが目立たない。道管の穿孔は横棒の多い階段状、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。放射組織は1~5細胞幅くらいの典型的な異性で、單列の翼部は時に高くなる。これらの形質よりミズキの材と同定した。

ミズキは北海道から九州の暖温帯~亜寒帯の山地、丘陵、平野に広く分布する落葉高木で、成長が早く、樹高15m、幹径40cm以上になる。材はやや軽軟だが目は緻密、切削加工が容易で材の白さもあって各種器具材、特にこけしなどの彫刻材の特用がある。本遺跡出土材は漆椀2点と容器2点である。

### 37. エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 写真図版 XIII-37a-c. (13950)

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が放射方向に2~6個複合したものが散在する散孔材で、道管径は晩材部ではかなり小さくなる。道管の穿孔は横棒の少ない階段状、本部柔組織は1細胞幅の独立帯状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は2~3細胞幅の異性で、單列の翼部が高い。以上の形質からエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には全国の山野にごく普通なエゴノキ *Styrax japonica* Siebold. et Zucc.、それより山間部に多いハクウンボク *Styrax obassia* Siebold. et Zucc. などがあるが、当遺跡出土材は分布からエゴノキの可能性が高い。エゴノキは幹径20cm、樹高8mほどの落葉小高木で、材はやや堅硬で弹性高く、均質なので切削加工は容易である。木が身近にあることもあって床柱、柄物、独楽、駒、各種玩具、各種器具、小細工ものなどの用途がある。当遺跡出土材は唐傘の軸轂3点と漆椀1点である。

### 38. サワフタギ *Symplocos chinensis* (Lour.) Druce var. *leucocarpa* (Nakai) Ohwi ハイノキ科 写真図版 XIII-38a-c. (14129)

丸～やや角張った小道管が単独で均一に分布する散孔材で、道管径は年輪内で殆ど変化しない。道管お線香は横棒が20本ほどの階段状、らせん肥厚は見えない。木部柔組織は短接線状。放射組織は1-3細胞幅で典型的な異性である。これらの形質からハイノキ科のサワフタギの材と同定した。

サワフタギは全国の山野に自生する落葉低木で、通常、樹高2-3m、幹の根元径は10cm以下である。材は硬く強靭で木理細かいので、算盤の球、将棋の駒、洋傘の柄、把手類などの特用がある。当遺跡出土材は独楽1点である。

#### 39. トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 写真図版 XIII-39a-c. (14487)

年輪のはじめに単独あるいは2個放射方向に複合した格円形の大道管が1-2層並び、順次径を減じて晩材部では厚壁で外形多角形、内腔円形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合したもののがまばらに散在する環孔材。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は微細孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は周開状、晩材部では量が多くなり翼状、時に連合翼状となる。放射組織は1-2細胞幅の同性で、背は低く、サイズがほとんど揃う。これらの形質からトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には多数の種があるが、材構造は互いに似ていて種の識別は困難である。静岡県地方にはトネリコ *Fraxinus japonica* Blume、オダモ *Fraxinus lanuginosa* Koidz. f. serrata (Nak.) Mura.、ヤマトオダモ *Fraxinus longicuspis* Sieb. et Zucc.、マルバオダモ *Fraxinus sieboldiana* Blume、シオジ *Fraxinus platypoda* Oliv.などがある。落葉の小高木～大高木で、大きなものは幹径60cm、樹高20m以上となる。材はやや柔らかく弾力があり、木理通直で美しく、保存性が高く加工も容易な優秀な広葉樹材で、建築材、各種器具材、特に家具、運動具の用途がある。当遺跡出土材は下駄1点である。

#### 40. 散孔材 Diffuse-porous wood

小道管が散在する散孔材だが、プレパラートの切片の保存性が悪く詳細な同定ができなかったものである。当遺跡出土材は漆塗りの容器の底か蓋1点である。

#### 41. 竹笹類 Bamboosoidae イネ科

桿の中心側に原生木部腔、左右に丸くて大きな一对の後生木部道管、外側に籠部があって、それを厚壁で緻密な纖維組織が覆って1本の維管束をなしていることから、イネ科のタケ亜科の材と同定した。

タケ亜科には桿径が大きく、桿が伸びた後、葉鞘が脱落するいわゆる竹類と、桿が細く、葉鞘が永続する笹類に便宜上区別することができる。今回の出土品のうち、桿径が明らかに太いものに由来するものを「竹類」と、明らかに細いものを「笹類」とし、いずれとも判断が付かないものを「竹笹類」とした。竹笹類としたのは漆塗り箸1点と編み籠1点である。

##### (a) 竹類 *Take group* 写真図版 XIV-40a-c. (14112)

竹類としたものは図版にあるように、太い桿を割り裂いて削って箸に使用しているもので茎組織の一部を観察することができる。我が国にはマダケ *Phyllostachys bambusoides* Siebold. et Zucc.、モウソウチク *Phyllostachys heterocycla* (Carr.) Mitford.、ハチク *Phyllostachys nigra* Munro var. *henonis* Staff ex Rendleなどがあるが、いずれも古代以降に大陸から渡來したものである。

当遺跡出土の竹類としたものは漆塗り箸2点、竹筒を利用したコップ状の容器1点である。

##### (b) 笹類 *Sasa group* 写真図版 XIV-41a-c. (14113)

桿が細く、図版にあるように切片が作られる大きさの範囲で髓腔、表皮などを持つか、維管束が明らかに弧状に配列し、桿の直径が細いものに由来することが分かることから、笹類と見なした。笹類にはスズタケ *Sasa borealis* (Hack.) Makino et Shibata、チマキザサ *Sasa palmata* (Lat.-Marl. ex Burb.) E.G.Camus、

ネザサ *Pleioblastus argenteostriatus* (Regel) Nakai f. *glaber* (Makino) Murata など、日本自生の種類と、ヤダケ *Pseudosasa japonica* (Siebold et Zucc. Steud.) Makino やメダケ *Pleioblastus simonii* (Carrière) Nakai など、大陸から渡來したと思われるものがあるが、それらの差別はもちろんできない。笹類としたものは漆塗りの箸とされるもの2点であるが、これは黒色化した桿表面が漆塗装と見誤ったものかも知れない。

#### 42. ウラジロ *Gleichenia japonica* Spr. ウラジロ科 写真図版 XIV-42a-c. (14117)

試料の断面はゆがんだ楕円形で、表皮細胞は下表皮層の細胞と顕著な形態の違いがない。下表皮組織の外側は表皮同様に径が小さく細胞壁も厚く、内側に向かって順次細胞径が大きくなり、細胞壁が薄くなっている。内側の薄壁で径の大きい皮層の基本組織へと移って行く。試料の維管束は内皮に縁取られ、原生木部が多数ある中型である。試料の中心に上面が開いた弧状の大きな維管束が1本ある。維管束は原生木部が多数ある中型である。以上の形質からシダ類ウラジロ科の「葉柄」と同定した。葉柄は断面が真円でないものの硬く平滑な表皮で覆われて光沢があり、硬度がある。当遺跡出土試料は「漆塗り箸」とされるもの1点であるが、観察した所見では漆の塗装はなされていない。また、出土した遺物の範囲には切削等の加工痕は認められない。これらのことから、ウラジロの葉柄を箸と見誤った可能性が強いが、手近に生えていたウラジロの葉柄を折り取って箸として使った可能性を否定するものではない。

## 2 鶴喰広田遺跡および手乱遺跡における木材利用

冒頭に述べたように、本報告では鶴喰広田遺跡からは404点、手乱遺跡からは100点、合計504点の木製品を抽出してその樹種を調べ、48の植物種を識別した。二つの遺跡は御殿川の両岸に位置しており、一連の遺跡と看做されているが、表1にあるように、樹種組成から見ても多くの樹種が両遺跡に共通であり、木材組成からも矛盾はない。また、同時代の他の遺跡から判明したことや当遺跡の他の遺物の状況から、これらは農村部の遺跡と考えられている。ここではこのことを前提に木材利用について検討を行う。

出土した木製品の用材傾向を見るため、大きく漆器、容器、箸、栓、下駄、農具、杭、その他、用途不明、の9群に便宜的に分け、それぞれについて用材の傾向を検討した。

【漆器】表3にあるように出土した漆塗のある物を漆器とし、130点の樹種を調べた。もっとも多いのは漆椀で100点あり、その樹種を見ると、ブナ属が41点ともっとも多く、次いでトチノキ(31点)、ケヤキ(17点)で、この3樹種で8割を占める。挽物の漆器椀に使われる木地の大部分をこの3樹種が占めるのは、全国的に古代末以降現代まで続く用材傾向である。近世における漆椀の木地の樹種と加飾とそれを使用した人びとの社会階層との間には密接な関係があり、それは漆器の「価値」と連動していることが知られている。即ち、ケヤキ、トチノキ、ブナの順に「安く」なり、それだけ塗りも簡便化し、加飾も少ないものになっている。上に述べたように鶴喰広田、手乱両遺跡は「農村部」の遺跡であると考えられており、ブナ(属)がもっとも多く出土したことはずけるが、それより「高価」とされるトチノキ、ケヤキの椀がかなり多く出土していることは驚きに値する。庄屋等、農村部の中でも「家格」が上の人びとの生活物が多く入っていることを反映しているのかも知れない。

一方、漆器椀にはこれら3樹種以外にも出土数は多くないものの沢山の樹種の木地が見られた。挙げると、カツラ、サクラ(属)、ミズキ、モクレン属(ホオノキ?)、クリ、コウヤマキ、ハンノキ(箇)である。この多くは確かに漆器木地に使われないことはないもののその生産量は多くなく、こうして遺物として出土する機会はあまりないものと考えられる。特にコウヤマキの漆器椀というものは、恐らくは遺物としての出土は初めてのことだろう。このような多様な樹種の漆椀の存在は近世における活発な商

品流通の反映と考えることができよう。

椀以外の漆器は曲物や箱物、折敷などの部材、底板、蓋板などで、こちらは一般的に針葉樹材が使われる。出土数は少ないので、ヒノキが12点、スギ2点とモミ属が1点あり、それにブナ属、エゴノキ属、散孔材が混じっている。

この遺跡からは大量の箸が出土した。その大部分は塗りはないが、漆が塗ってあると判断されたのは7点で、竹箆類が5点、イスノキが1点である。竹箆類のうち、竹材を削って漆が塗ってある物は3点で、残り2点は箆の丸い根で、遺物化の過程で黒色となり表皮が光沢を持つことから漆塗りと間違えられた物であることは樹種の記載の項に述べたとおりである。また、ウラジロは漆の塗りはないことは同様に植物種記載の項に述べたとおりである。なお、イスノキの塗り箸というものは高級なものと言え、これの出土は漆碗の項で述べたように「家格の高い」人びとの生活具が混じっているとの考えに良く符合する。さらにイスノキの漆塗りのバチ形が1点あるが、これはイスノキの用材として十分うなづけるものであり、漆が塗ってあることも「高級さ」を示唆する。この他漆の塗りのある物は、ヒノキ材で「用途不明」のものが4点あった。

【容器】曲物、折敷、箱物の部材、蓋板などのうち、漆の塗りのない物を「容器」として表2に集計した。133点あり針葉樹が8樹種117点、広葉樹が8樹種15点である。針葉樹はスギ、ヒノキ、サワラ、モミ（属）など、これらの良く使われる樹種だがトウヒ属の9点というのはちょっと特異である。曲物が2点と容器の底板（蓋板）が7点で、奥地林に生育するトウヒ属の何れかの樹種が曲物製品として流通していたことが分かる。一方、広葉樹の方は、ブナ（属）、ケヤキ、トチノキ、ミズキなどすべて漆器と同じ樹種であり、用材は基本的に塗りのあるなしにかかわらず同じであったと考えられる。

【箸】ここに箸として集計されたのは塗りのないもので44点が調べられた。既に述べたように当遺跡群からは箸は数百点に上る数が出土しており、これはそのごく一部を抽出して樹種を調べたものである。44点は全て針葉樹で、スギ（24点）とヒノキ（13点）で大部分を占め、その他、サワラ（3点）、ツガ属（2点）、モミ属、トウヒ属（各1点）となっている。ツガ属、トウヒ属の箸への利用はちょっとうなづけないものがある。

【栓】この遺跡では面白いことに桶樽などの「栓」が27点も出土した。その樹種はスギ（10点）、サワラ（8点）、ヒノキ（7点）に集中し、広葉樹はカエデ属が1点のみであった。針葉樹の用材は桶樽等の本体の用材とはほぼ一致していたものと考えられる。

【下駄】当遺跡では大量の下駄の出土により、その用材をよく調べることができた。59点の下駄の樹種は、針葉樹ではヒノキとアカマツが7点、スギとモミ属が4点、それにサワラが1点で樹種が比較的限定されている。木材の「価額」という視点で見ると、ヒノキはやや高価な方に入るがその他は廉価と言える。ただ、これらはいずれも漆塗りではなく、その意味ではいずれも廉価な下駄の部類に入る。一方、広葉樹ではクリが16点ともっとも多く、次いでケヤキ（5点）がある他は、ブナ属、カツラ、ヤシャブシ節、サワダルミ（以上各2点）、コナラ節、モクレン属、クスノキ、シナノキ属、トネリコ属、ムクノキ（以上各2点）と実に多様である。キリ下駄は全く無い。これらはいずれも針葉樹同様「廉価」なものと言える。

【農具】農具として集計した物は5点のみで、アカガシ亜属が3点、コナラ節とヤマグワが1点である。カシとナラは全て鍛である。静岡県内の弥生～古墳時代の木製農具の鍛にはイチイガシが多く使われていることが知られているが、ここではこれとは異なり、イチイガシ以外の樹種が使われていることになる。

【その他】その他としたものは出土点数が少ないものを集めたもので、様々な木器がある（表4）。樹種記載の項で述べたように昔のイスノキ、唐傘櫻のエゴノキ（属）はまさに材質と現代の用材に良く

一致する。その意味でヤマボウシ、サワフタギの独楽もうなずけるのである。また、鶴喰広田遺跡から編み籠が1点出土したがこれは竹筐類であった。

【杭】御殿川の流路を制する護岸に丸木杭が多数打ち込まれていたが、その樹種はイヌマキ（属）の1点を除いては全てマツ類であった。前項に述べてあるように、ここではアカマツ、クロマツの区別をせずに両樹種が使われていたことが分かる。

【用途不明】出土遺物の形状から用途が推察できなかった物がここに全てまとめられている。「用途不明品」の樹種組成を見ると、全体の用材と基本的に同じ傾向を示す物が多い。

以上、鶴喰広田遺跡及び手乳遺跡から出土した近世を中心とした木製品504点の用材傾向を見てきたが、御殿川両岸の護岸に由来する物（杭等）と旧流路に埋積した生活具等からなり、後者からは三島付近の農村域の人びとの暮らしを垣間見ることができた。

表1. 手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木材の樹種同定結果

樹種名	鶴喰広田遺跡	手乱遺跡	合計
モミ属	36	4	40
トウヒ属	9	1	10
アカマツ	21	10	31
クロマツ	7	3	10
マツ属複雑管束亞属		1	1
マツ属單雑管束亞属	1		1
ツガ属	3		3
スギ	91	5	96
コウヤマキ	1		1
ヒノキ	71	14	85
サワラ	33		33
ヒノキ属		2	2
アスナロ	1		1
ヒノキ科	1	1	2
イヌマキ属		1	1
カヤ	1		1
サワグルミ	2		2
ハンノキ属ヤシャブシ節	2		2
ハンノキ属ハンノキ節	2		2
ハンノキ属	1		1
クマシデ属イヌシデ節	1		1
クリ	13	5	18
ブナ属	36	12	48
コナラ属アカガシ亞属	6	2	8
コナラ属コナラ節	2		2
ムクノキ	1		1
ケヤキ	13	15	28
ヤマグワ	1		1
クスノキ	1		1
クスノキ科	1		1
モクレン属	2	2	4
カツラ	5		5
ヤブツバキ		1	1
イスノキ	2	1	3
サクラ属	2		2
カエデ属	1		1
トチノキ	16	16	32
シナノキ属	1		1
ヤマボウシ	2		2
ミズキ	3	1	4
エゴノキ属	4		4
サワフタギ	1		1
トネリコ属	1		1
散孔材		1	1
竹笹類	5	2	7
ウラジロ	1		1
合計	404	100	504

表2. 手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木材の用途別樹種組成

樹種	漆器	容器*	箸*	栓	下駄	農具	その他	杭	用途不明	合計
スギ	2	29	24	10	4	3			24	96
ヒノキ	16	29	13	7	7	2			11	85
サワラ		15	3	8	1				6	33
ヒノキ属		1					1			2
アスナロ									1	1
ヒノキ科									2	2
モミ属	1	32	1		4	1		1		40
アカマツ		1			7			15	8	31
クロマツ						1	8	1		10
マツ属複維管束亞属								1		1
マツ属單維管束亞属		1								1
トウヒ属		9	1							10
ツガ属			2					1		3
コウヤマキ		1								1
カヤ					1					1
イヌマキ属							1			1
ブナ属	42	4			2					48
トチノキ	31	1								32
ケヤキ	17	4			5			2		28
クリ		1			16			1		18
コナラ属アカガシ亜属						3			5	8
コナラ属コナラ節					1	1				2
カツラ	2				2				1	5
ミズキ	2	2								4
モクレン属	2	1			1					4
エゴノキ属	1						3			4
イスノキ	2						1			3
サクラ属	2									2
ハンノキ属ハンノキ節	1	1								2
ハンノキ属ヤシャブシ節					2					2
ハンノキ属					1					1
サワグルミ					2					2
ヤマボウシ								2		2
ヤブツバキ		1								1
カエデ属				1						1
クスノキ						1				1
クスノキ科									1	1
シナノキ属					1					1
トネリコ属					1					1
ムクノキ					1					1
ヤマグワ						1				1
サワタギ							1			1
クマシデ属イヌシデ節		1								1
散孔材		1								1
竹苞類	5	1					1			7
ウラジロ		1								1
総計	130	133	44	27	59	5	16	25	65	504

\*これらはいずれも漆器（漆塗製品）を除いた数

表3. 手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土漆塗製品の本地の樹種

樹種	杣	容器蓋 底板	箱・膳等 の部材	板材（箱・膳 等の部材か？）	箸	簪	不明	合計
ブナ属	41	1						42
トチノキ	31							31
ケヤキ	17							17
ヒノキ		3	4	5			4	16
竹箆類					5			5
カツラ	2							2
サクラ属	2							2
ミズキ	2							2
モクレン属	2							2
スギ		1		1				2
イスノキ					1	1		2
クリ	1							1
コウヤマキ	1							1
ハンノキ属ハンノキ箆	1							1
エゴノキ属		1						1
モミ属		1						1
散孔材		1						1
ウラジロ					1			1
合計	100	8	4	6	7	1	4	130

表4. 手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木製品「その他」の木製品

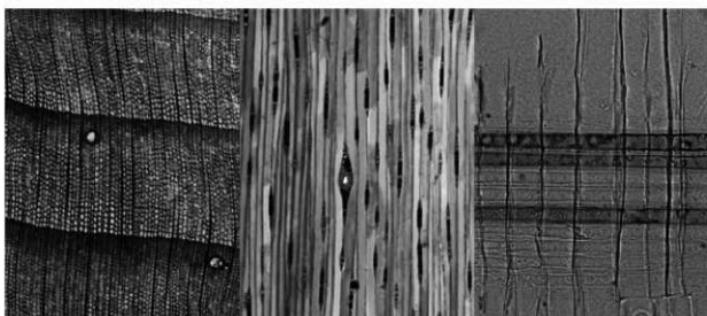
プレバ ラート No	遺跡名	挿図番号	製品名	樹種	備考
11974	手乱遺跡	第16図-9	簪	イスノキ	
11765	手乱遺跡	-	編みカゴ	竹箆類	
11953	手乱遺跡	-	はし状木製品	スキ	
13950	鶴喰広田遺跡	第55図-51	傘櫛轆	エゴノキ属	
13951	鶴喰広田遺跡	第55図-52	傘櫛轆	エゴノキ属	
14130	鶴喰広田遺跡	第55図-50	傘櫛轆	エゴノキ属	
14128	鶴喰広田遺跡	第65図-149	独楽	ヤマボウシ	
14129	鶴喰広田遺跡	第65図-150	独楽	サワフタギ	
13942	鶴喰広田遺跡	第65図-151	独楽	ヤマボウシ	
13641	鶴喰広田遺跡	第68図-170	塔婆	ヒノキ	

写真図版I



1a. モミ属 14558 木口×30. 1b. 同 板目×60.

1c. 同 桩目×240.



2a. トウヒ属 14548 木口×30. 2b. 同 板目×60.

2c. 同 桩目×240.



3a. アカマツ 14483 木口×30. 3b. 同 板目×60.

3c. 同 桩目×240.

写真図版 II



4a. クロマツ13663 木口×30. 4b. 同 板目×60. 4c. 同 桩目×240.

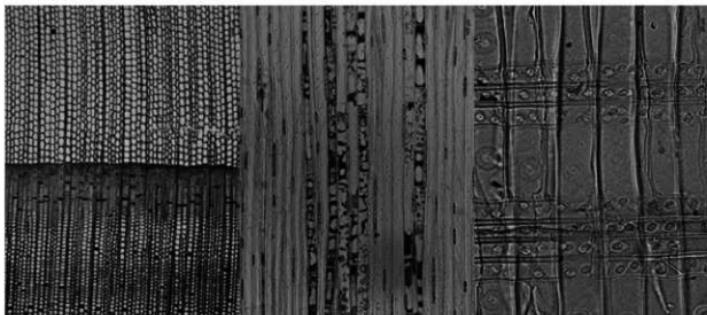


5a. 単維管束亞属14546 木口×30. 5b. 同 板目×60. 5c. 同 桩目×240.



6a. ツガ属 14596 木口×30. 6b. 同 板目×60. 6c. 同 桩目×240.

写真図版 III



7a. スギ 14624 木口×30.

7b. 同 板目×60.

7c. 同 桩目×240.



8a. コウヤマキ 14081 木口×30. 8b. 同 板目×60.

8c. 同 桩目×240.

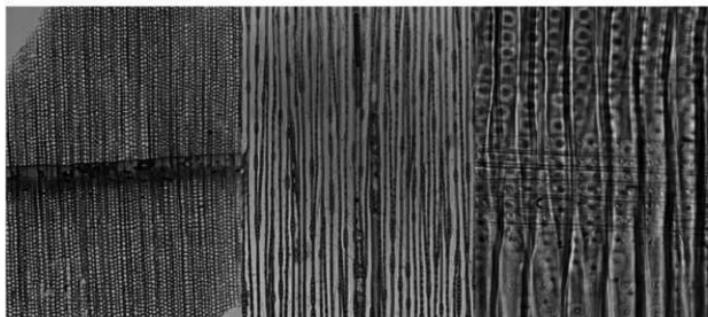


9a. ヒノキ 14553 木口×30.

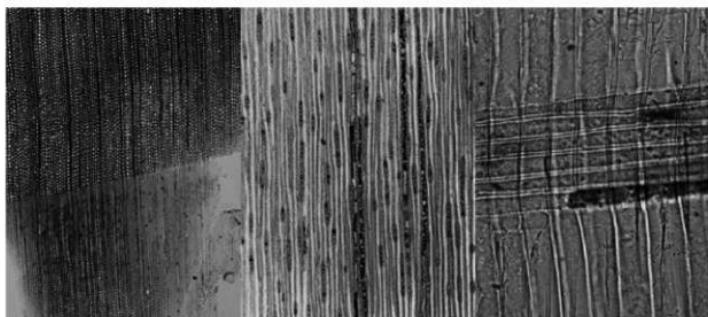
9b. 同 板目×60.

9c. 同 桩目×240.

写真図版 IV



10a. サワラ 14528 木口×30. 10b. 同 板目×60. 10c. 同 楯目×240.

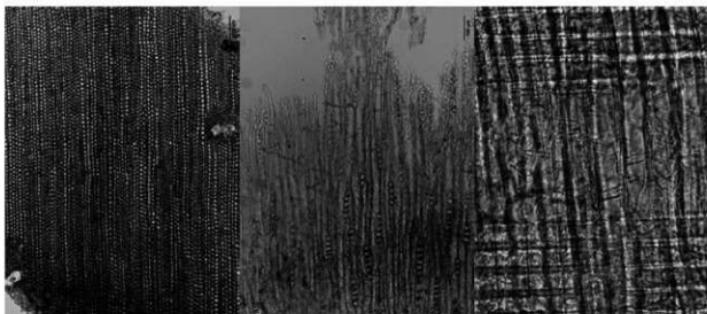


11a. アスナロ 14610 木口×30. 11b. 同 板目×60. 11c. 同 楯目×240.



12a. イスマキ属 11935 木口×30. 12b. 同 板目×60. 12c. 同 楯目×240.

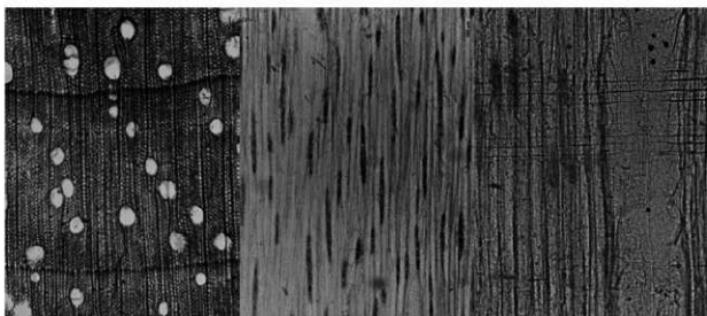
写真図版V



13a. カヤ 13949 木口×30.

13b. 同 板目×60.

13c. 同 楢目×240.



14a. サワグルミ 14479 木口×30.

14b. 同 板目×60.

14c. 同 楢目×120.

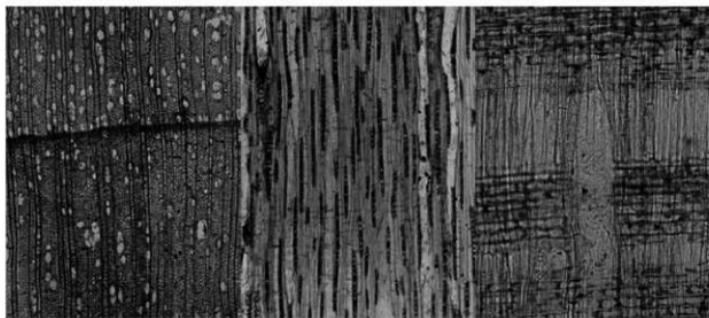


15a. ハンノキ節 14521 木口×30.

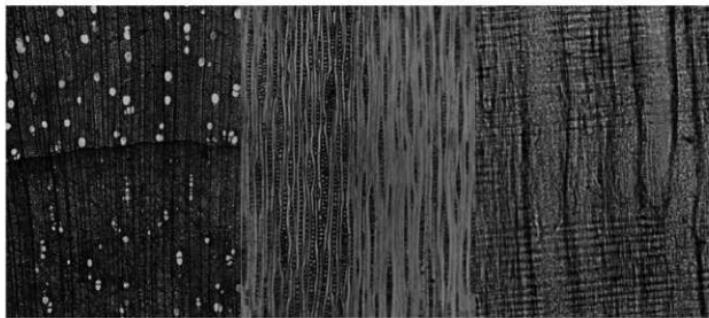
15b. 同 板目×60.

15c. 同 楢目×120.

写真図版 VI



16a. ヤシャブシ節14493木口×30. 16b. 同 板目×60. 16c. 同 楢目×120.



17a. イヌシデ節14472木口×30. 17b. 同 板目×60. 17c. 同 楢目×120.



18a. クリ 14478木口×30. 18b. 同 板目×60. 18c. 同 楢目×120.

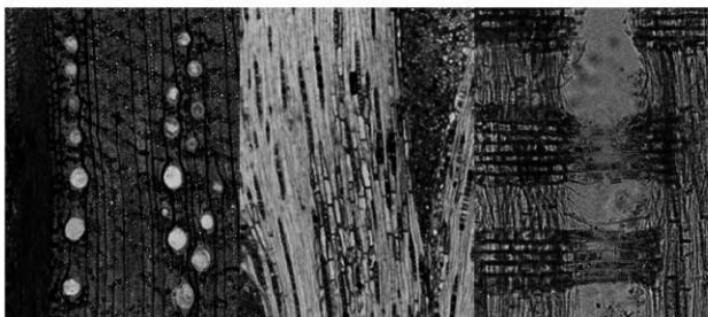
写真図版VII



19a. ブナ属 14071 木口×30.

19b. 同 板目×60.

19c. 同 楯目×120.



20a. アカガシ亜属 14618 木口×30.

20b. 同 板目×60.

20c. 同 楯目×120.

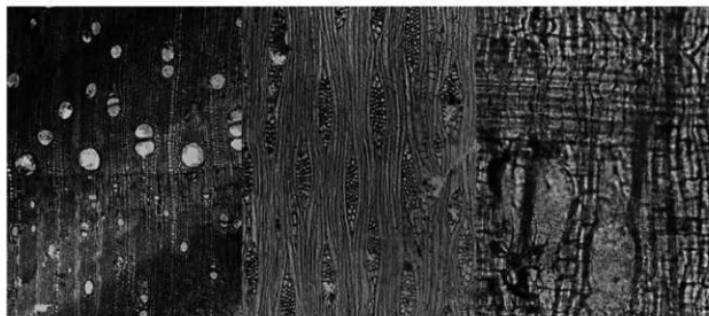


21a. コナラ節 13969 木口×30.

21b. 同 板目×60.

21c. 同 楯目×120.

写真図版 VIII



22a. ムクノキ 13963 木口×30. 22b. 同 板目×60. 22c. 同 楯目×120.



23a. ケヤキ 14480 木口×30. 23b. 同 板目×60. 23c. 同 楯目×120.



24a. ヤマグワ 13653 木口×30. 24b. 同 板目×60. 24c. 同 楯目×120.

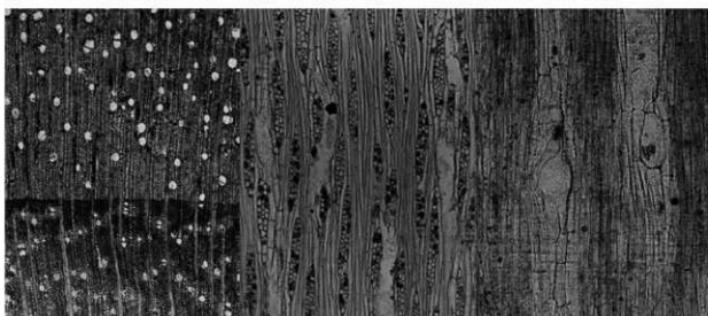
写真図版 IX



25a. クスノキ 14511木口×30.

25b. 同 板目×60.

25c. 同 楢目×120.



26a. クスノキ科13127木口×30.

26b. 同 板目×60.

26c. 同 楢目×120.



27a. モクレン属13650 木口×30.

27b. 同 板目×60.

27c. 同 楢目×120.

写真図版 X



28a. カツラ 14605 木口×30.

28b. 同 板目×60.

28c. 同 楢目×120.



29a. ヤブツバキ11766 木口×30.

29b. 同 板目×60.

29c. 同 楢目×120.



30a. イスノキ14114 木口×30.

30b. 同 板目×60.

30c. 同 楢目×120.

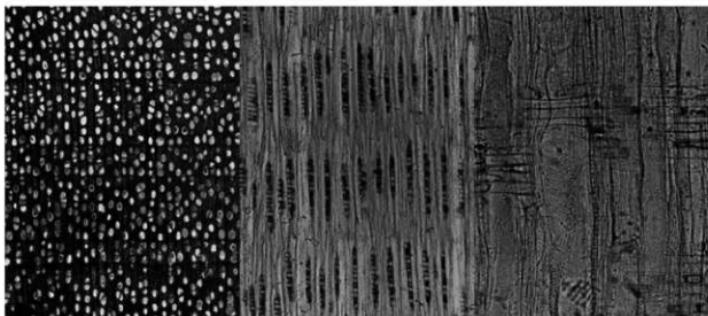
写真図版 XI



31a. サクラ属 14054 木口×30. 31b. 同 板目×60. 31c. 同 楯目×120.



32a. カエデ属 14577 木口×30. 32b. 同 板目×60. 32c. 同 楯目×120.



33a. トチノキ 14078 木口×30. 33b. 同 板目×60. 33c. 同 楯目×120.

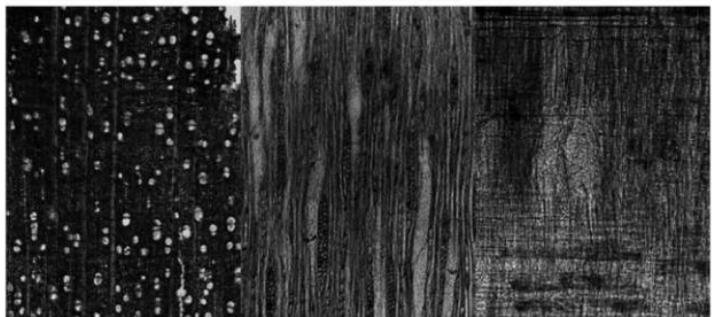
写真図版 XII



34a. シナノキ属13953木口×30. 34b. 同 板目×60. 34c. 同 楢目×120.

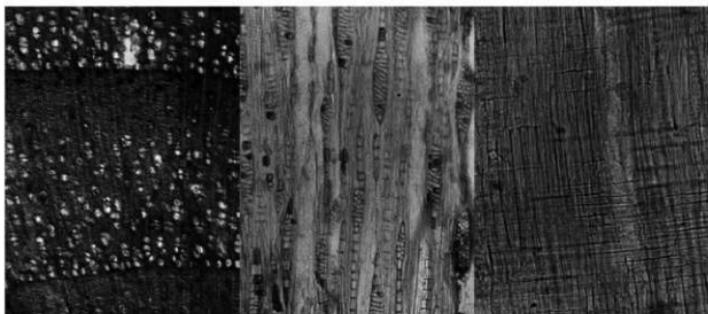


35a. ヤマボウシ13942 木口×30. 35b. 同 板目×60. 35c. 同 楢目×120.



36a. ミズキ14110 木口×30. 36b. 同 板目×60. 36c. 同 楢目×120.

写真図版 XIII



37a. エゴノキ属13950木口×30.

37b. 同 板目×60.

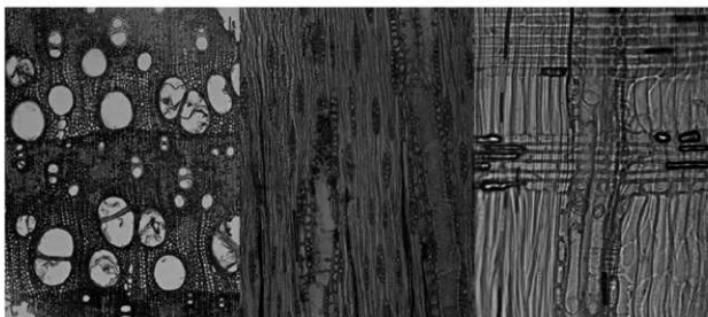
37c. 同 楯目×120.



38a. サワフタギ14129木口×30.

38b. 同 板目×60.

38c. 同 楯目×120.

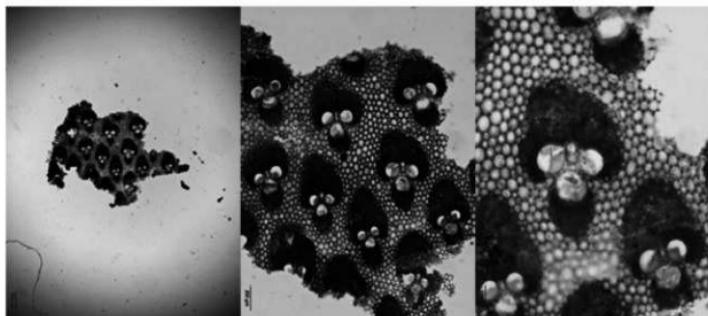


39a. トネリコ属14487 木口×30.

39b. 同 板目×60.

39c. 同 楯目×120.

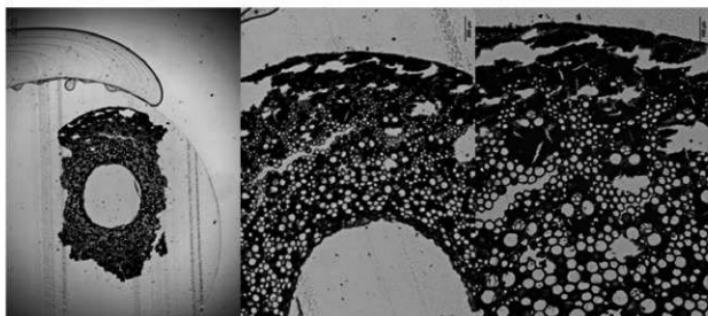
写真図版 XIV



40a. 竹類 14112木口×10.

40b. 同 木口×30.

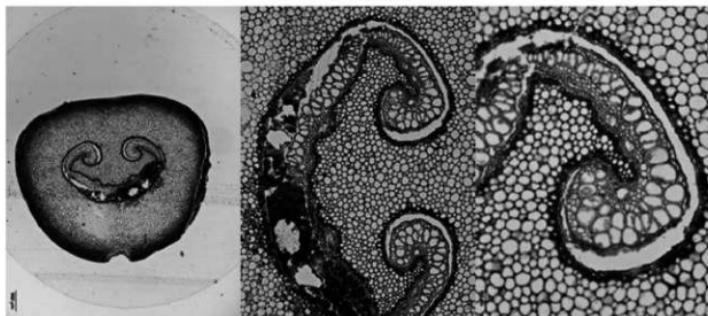
40c. 同 木口×60.



41a. 筋類 14113木口×10.

41b. 同 木口×30.

41c. 同 木口×60.



42a. ウラジロ 14117木口×10.

42b. 同 木口×30.

42c. 同 木口×60.

## 付編2 手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土の動物遺体

中村賢太郎（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

手乱遺跡と鶴喰広田遺跡は、いずれも静岡県三島市南部に所在する御殿川河岸の遺跡である。両遺跡の発掘調査では、旧河道が検出され、その中から弥生時代～近世・近代の遺物が出土した。ここでは手乱遺跡と鶴喰広田遺跡の旧河道から出土した動物遺体について報告する。

### 2. 試料と方法

試料は発掘調査現場において目視で取り上げられた動物遺体118点である。試料は1点ずつ袋や容器に収められていた。同定は肉眼で現生標本との比較により行った。計測が必要な部位については、ノギスを用いてDriesch (1976) に従い、計測を行った。また、ウシの下顎臼歯については、Grant (1982) に従い咬耗指數を記した。

以下、遺跡ごとに試料の詳細を述べる。

#### (1)手乱遺跡

手乱遺跡の試料は35点である。動物遺体は乾燥状態で保管されていた。動物遺体は、Ⅲ層と旧河川堆積層から出土した。Ⅲ層は、基盤層の上位に堆積した砂礫層で、下部から弥生時代や古墳時代の遺物、上部から近世の陶磁器などが出土しており、複数時期の遺物が混在している。旧河川堆積層は、砂層で、近世よりも新しい時期の堆積物と考えられる。

#### (2)鶴喰広田遺跡

鶴喰広田遺跡の試料は83点である。動物遺体のほとんどは水漬けで保管されていた。動物遺体は、Ⅲ層とⅡ層から出土した。その他、トレンチや排水溝から出土したもの、一括取上げ、排土中から発見されたものがある。Ⅲ層は、手乱遺跡と同じく、基盤層の上位に堆積した砂礫層で、下部から弥生時代や古墳時代の遺物、上部から近世の陶磁器などが出土しており、複数時期の遺物が混在している。Ⅱ層は、近世以降の砂層と考えられる。

### 3. 結果と考察

#### (1)手乱遺跡

弥生～近世のⅢ層では、貝類はイシガイ科、哺乳類はイス、イノシシ、ニホンジカ、ウマ、ウシ？あるいはウマ？、その他不明哺乳類が見られた。

イシガイ科は、左殻3点、右殻2点が見られた。イシガイ科は、イシガイ、カタハガイなどを含み、淡水に生息する二枚貝である。イシガイ科は、食用可能であるが、河川に生息していた貝が死んで埋没したのか、人により食用された後に廃棄されたのかは不明である。

哺乳類について述べる。イスは左桡骨と左右の尺骨が見られた。イノシシは左肩甲骨、右大腿骨、右脛骨が見られた。ニホンジカは左対角骨と基節骨が見られた。ウマは逆離歯が5点の他、右桡骨・尺骨、右脛骨、左基節骨（後肢）、中手骨あるいは中足骨が見られた。ウマは、逆離歯がH-14～16、それ以外の部位がK-19とそれぞれまとまった位置から出土している。ニホンジカは野生、イスとウマは飼育されていたと考えられる。イノシシは野生の可能性と飼育されていたブタの可能性と両方ある。Ⅲ層は弥生時代～近世の遺物が混在していることから、同定された動物遺体も複数時期のものが混在している可

能性を考慮しなければならない。

近世・近代より新しい旧河川堆積層では、ウシの遊離歯1点とウマの遊離歯3点が見られた。旧河川堆積層が堆積した時期に近隣で家畜として牛馬が飼育されていたことが考えられる。

## (2)鶴喰広田遺跡

弥生時代～近世のⅢ層では、貝類はイシガイ科、哺乳類はヒト、ウシ、ウシ？あるいはウマ？、ウマ、ウマ？、その他不明哺乳類が見られた。

イシガイ科は、右殻1点が見られた。イシガイ科は、イシガイ、カタハガイなどを含み、淡水に生息する二枚貝である。イシガイ科は、食用可能であるが、河川に生息していた貝が死んで埋没したのか、人により食用された後に廃棄されたのかは不明である。

ヒトは、右上顎骨～頸骨、左右頭頂骨、大腿骨が見られた。なお、左頭頂骨は2列トレンチ出土の右頭頂骨(29)と同一個体の可能性がある。傷の有無を観察したが、確認されなかった。また、焼けてはいなかった。

ウシは遊離歯のみが見られ、少なくとも頭部があったと考えられる。

ウマは動物遺体の中で最も多かった。特に遊離歯が多く、40点が見られた。ウマの遊離歯は、左下顎第2前臼歯と右下顎第3後臼歯が各2点見られ、ウマは少なくとも2個体存在したこと示している。年齢は、左下顎第2前臼歯と右下顎第3後臼歯の歯冠高計測値から、6～7歳程度と11～13歳程度だったと考えられる。遊離歯の他、左大腿骨、左距骨、左中足骨が見られた。頭部と後肢が存在したと考えられる。

Ⅲ層が堆積した時期に、近隣で家畜として牛馬が飼育されていたことが考えられる。ただし、Ⅲ層は弥生時代～近世の遺物が混在していることから、同定された動物遺体も複数時期のものが混在している可能性を考慮しなければならない。

近世・近代のⅡ層では、ヒト、イヌ、ニホンジカ、ウシ、ウマ、ウマ？、その他不明哺乳類が見られた。ヒトは左大腿骨が見られ、骨幹中央に傷が多く見られた。長軸に直交方向に走る幅数mmの浅い溝が多数平行しており、齧歯類の咬み痕の可能性がある。イヌは右上腕骨、ニホンジカは右下顎骨が見られた。ウシは中足骨の破片のみ、ウマは遊離歯のみが見られた。近世・近代において、近隣でイヌ、ウシ、ウマが飼育されていたと考えられる。また、ニホンジカは野生と考えられる。

## 引用・参考文献

- Driesch, Angela von den (1976) A guide to measurement of animal bones from archaeological sites. 137p.  
Peabody museum.
- Grant, A. (1982) The Use of Tooth Wear as a Guide to the Age of Domestic Ungulates. Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites, edited by Wilson, B., Grigson, C. and Payne, S. 91-108.
- 久保和士・松井 章 (1999) 家畜その2—ウマ・ウシ. 西本豊弘・松井 章編「考古学と動物学」:169-208. 同成社.
- 松井 章 (2008) 動物考古学. 312p. 京都大学学術出版会.

表1 手乱遺跡出土の動物遺体

分類群		部位	左右	数量
斧足綱	イシガトイ科 Unionidae spp.	殻	左 右	3 2
哺乳綱 Mammalia	哺乳綱 Mammalia spp.	各部位	—	3
	イヌ <i>Canis lupus familiaris</i>	橈骨	左 左	1 1
		尺骨	右	1
	イノシシ <i>Sus scrofa</i>	肩甲骨	左	1
		大顎骨	右	1
		脛骨	右	1
		髌骨	右	1
	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	脛骨	右	1
		基節骨	?	1
	ウシ <i>Bos taurus</i>	遊離歯	右	1
	遊離歯	左右	8	
ウマ <i>Equus caballus</i>	橈骨 尺骨	右	1	
	脛骨	右	1	
	中手/中尾骨	?	1	
	基節骨	左	1	
ウシ? ウマ? <i>Bos taurus? Equus caballus?</i>	側頭骨	右	1	
	上顎骨	右	1	
	橈骨	左右	2	
	合計			35

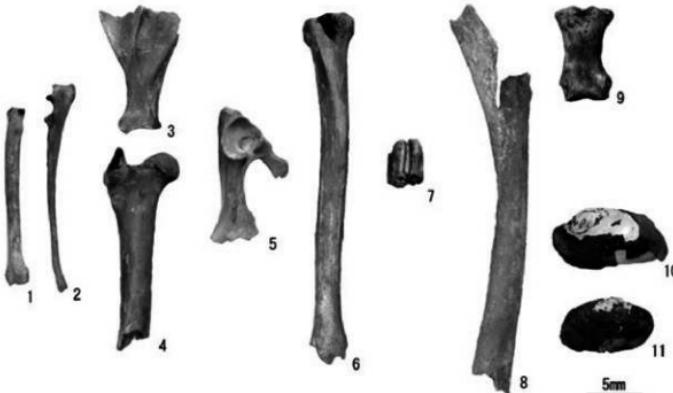
表2 鶴喰広田遺跡出土の動物遺体

分類群		部位	左右	数量
斧足綱	イシガトイ科 Unionidae sp.	殻	右	1
哺乳綱 Mammalia	哺乳綱 Mammalia spp.	各部位	—	9
	ヒト <i>Homo sapiens</i>	頭頂骨	左 右	1 1
		上顎骨、頸骨	右	1
		大顎骨	左	1
	イヌ <i>Canis lupus familiaris</i>	上腕骨	右	1
	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	下顎骨	右	1
	ウシ <i>Bos taurus</i>	遊離歯	左右	5
		中足骨	?	1
		遊離歯	左右	50
	ウマ <i>Equus caballus</i>	大腿骨	右	1
	中尾骨	左	1	
	距骨	左	1	
ウマ? <i>Equus caballus?</i>	遊離歯	?	5	
ウシ? ウマ? <i>Bos taurus? Equus caballus?</i>	腰椎	—	1	
	仙骨	—	1	
	合計			83

表3 動物遺体観察表

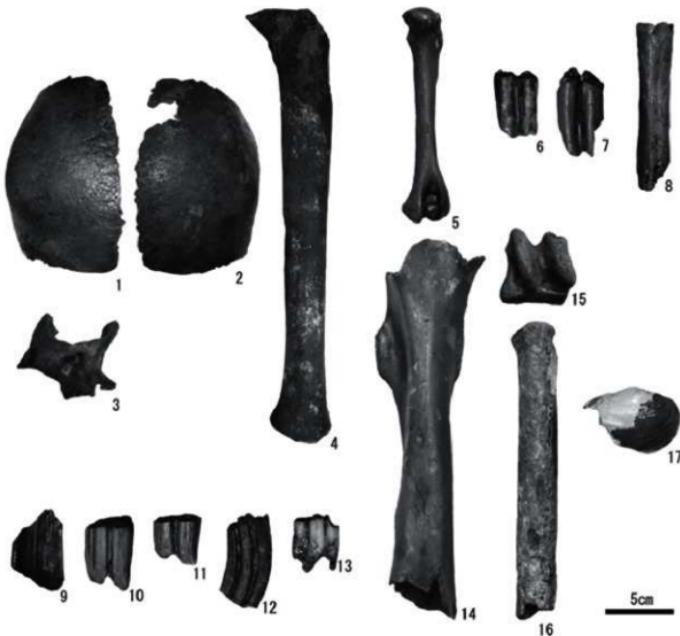
学年 組	組番号	調査年度通し番号	グリッド	部位	分類群	部位	部分	左右	数量	備考
1	1	1	1	左耳	鳥類	上脇部	骨鈴	右	1	
2	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	鱗片	左	1	
3	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	骨鈴	左	1	
4	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	骨鈴	左	1	
5	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
6	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	GLP: 33.3mm Rp: 59.5mm LA: 38.5mm
7	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
8	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
9	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
10	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
11	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
12	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
13	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
14	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	SD: 24.3mm Rp: 75.3mm
15	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	SD: 17.8mm
16	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	GL: 15.0mm Rp: 51.5mm
17	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	SD: 17.5mm
18	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	SD: 29.0mm
19	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
20	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
21	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
22	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
23	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	P: 20.0mm
24	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	GL: 31.1mm, 背中筋に傷多數
25	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
26	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
27	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
28	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
29	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
30	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
31	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	SD: 35.0mm
32	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
33	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
34	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
35	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	SD: >30.0mm, SD: 34.5mm
36	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
37	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
38	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
39	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
40	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
41	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
42	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
43	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
44	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
45	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
46	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
47	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
48	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
49	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
50	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
51	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
52	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
53	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
54	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
55	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
56	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
57	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
58	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
59	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
60	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
61	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
62	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
63	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
64	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
65	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
66	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
67	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
68	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
69	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
70	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
71	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
72	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
73	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
74	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
75	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
76	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
77	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
78	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
79	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
80	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
81	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
82	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
83	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
84	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
85	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
86	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
87	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
88	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
89	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
90	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
91	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
92	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
93	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	
94	1	1	1	左耳	鳥類	頭部	頭骨	左	1	

95	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-334	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	臼歯破片	?		
96	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-365	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	歯冠片	?		
97	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-371	C-2.5R	直脚	ウマ	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 33.3mm
98	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-372	C-2.5R	直脚	ウマ	直脚骨	歯冠片	石		Wlor認定 荷気高さ 33.3mm
99	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-373	C-2.5R	直脚	ウマ	直脚骨	臼歯破片	石		Wlor認定 荷気高さ 63.3mm
100	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-401	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 20.8mm
101	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-411	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 30.3mm
102	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-412	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 30.3mm
103	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-413	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 30.3mm
104	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-441	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	?	?	
105	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-451	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	?	?	
106	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-461	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 51.4mm
107	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-462	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 49.1mm
108	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-481	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	切歯	?	?	
109	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-491	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	下顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 47.3mm
110	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-501	C-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 47.3mm
111	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-521	D-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 47.3mm
112	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-東-531	D-2.5R	直脚	ウマ?	直脚骨	上顎歯(歯茎)	石		Wlor認定 荷気高さ 47.3mm
113	イヌ遺跡	H-01	H-14.5R	直脚	イヌガイ科	はばたき骨	—	石	昭和41.昭長-7.2mm 埋没深さ 39.6mm
114	イヌ遺跡	H-02	H-14.5R	直脚	イヌガイ科	はばたき骨	—	石	昭和41.昭長-8.0mm 埋没深さ 46.7mm
115	イヌ遺跡	H-03	H-14.5R	直脚	イヌガイ科	はばたき骨	—	石	昭和41.昭長-10.5mm 埋没深さ 51.1mm
116	イヌ遺跡	H-04	H-14.5R	直脚	イヌガイ科	はばたき骨	—	石	昭和41.昭長-10.5mm 埋没深さ 51.1mm
117	イヌ遺跡	H-05	H-14	直脚	イヌガイ科	頸片	—	石	昭和41.昭長-10.5mm 埋没深さ 51.1mm
118	鶴堀広田道路(2)鶴堀広田-1-401	C-1.5R	直脚	イヌガイ科	頸片	—	石		昭和41.昭長-10.5mm 埋没深さ 51.1mm



図版1 手乱遺跡出土の動物遺体

1. イヌ左桡骨(15)  
2. イヌ左尺骨(14)  
3. イノシシ左肩甲骨(5)  
4. イノシシ右大腿骨(6)  
5. ニホンジカ右寛骨(7)  
6. ニホンジカ右脛骨(21)  
7. ウシ右上顎第3後臼歯(51)  
8. ウマ右桡骨、尺骨(20)  
9. ウマ左基節骨(後肢)(16)  
10. イヌガイ科左股(116)  
11. イヌガイ科右歯(114)



図版2 鶴喰広田遺跡出土の動物遺体

- 1.ヒト右頭頂骨(29)
- 2.ヒト左頭頂骨(24)
- 3.ヒト右上顎骨、頬骨(32)
- 4.ヒト左大腿骨(25)
- 5.イヌ右上腕骨(23)
- 6.ウシ左下顎第2後臼歯(112)
- 7.ウシ左下顎第3後臼歯(109)
- 8.ウシ中足骨(26)
- 9.ウマ右上顎第2前臼歯(78)
- 10.ウマ左下顎第2前臼歯(70)
- 11.ウマ左下顎第2前臼歯(93)
- 12.ウマ右下顎第3後臼歯(75)
- 13.ウマ右下顎第3後臼歯(76)
- 14.ウマ右大腿骨(40)
- 15.ウマ左頭骨(36)
- 16.ウマ左中足骨(35)
- 17.イシガイ科右殻(118)



写 真 図 版



図版 1



1. 手乱遺跡遠景（南より）



2. 手乱遺跡杭検出状況



3. 弥生土器出土状況

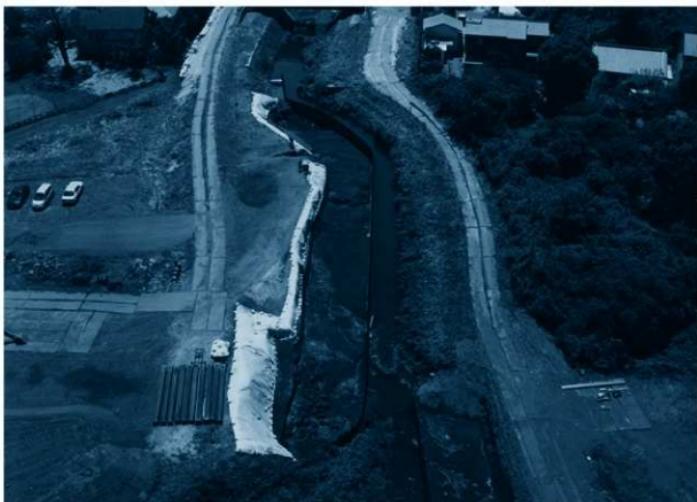


4. 須恵器出土状況



5. 木製品出土状況

図版2



1. 手乱遺跡全景（北より）



2. 鶴喰広田遺跡H20調査区全景（北より）

図版3



1. 鶴喰広田遺跡H20調査区全景（南より）



2. 鶴喰広田遺跡H20調査区北区全景（北より）



3. 鶴喰広田遺跡H20調査区中区全景（北より）



4. 鶴喰広田遺跡H20調査区南区全景（北より）



5. 鶴喰広田遺跡H20調査区杭検出状況

図版4

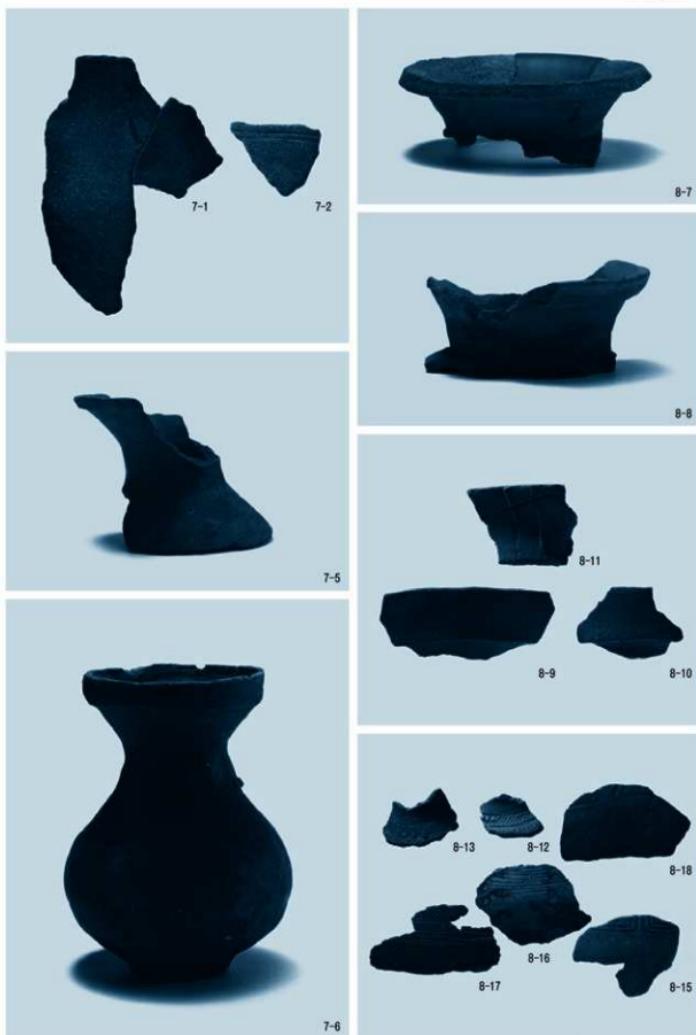


1. 鶴喰広田遺跡H21調査区全景（南より）



2. 鶴喰広田遺跡H21調査区流路2遺物出土状況（北東より）

図版5



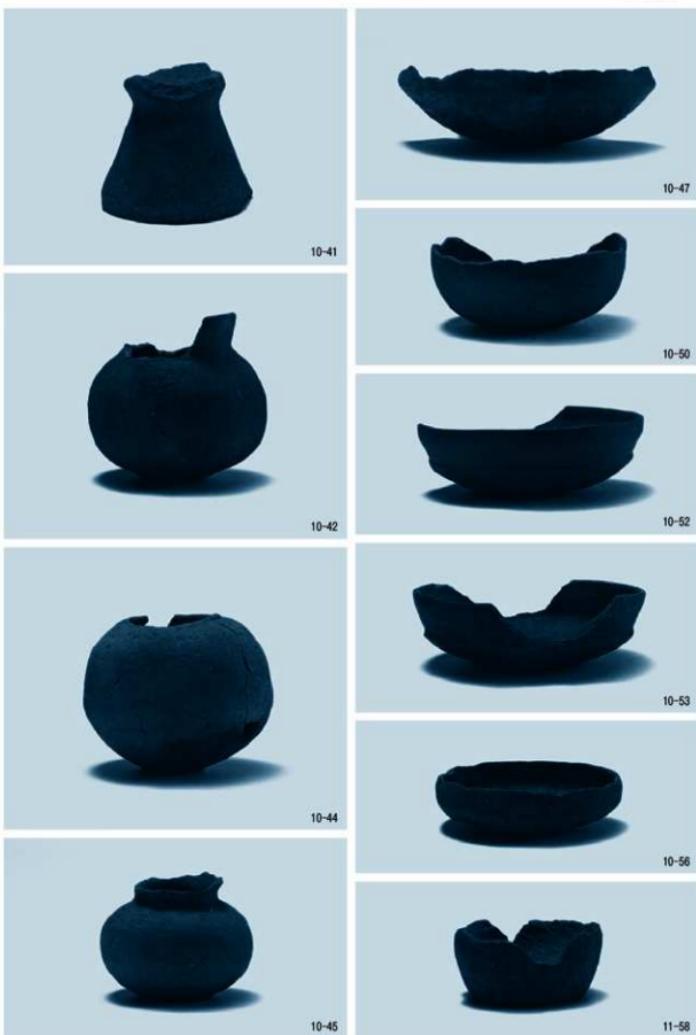
手乱遺跡出土遺物1（土器）

図版6



手乱遺跡出土遺物2（土器）

図版 7



手乱遺跡出土遺物 3 (土器)

図版8



手乱遺跡出土遺物4（土器・陶磁器）

図版9



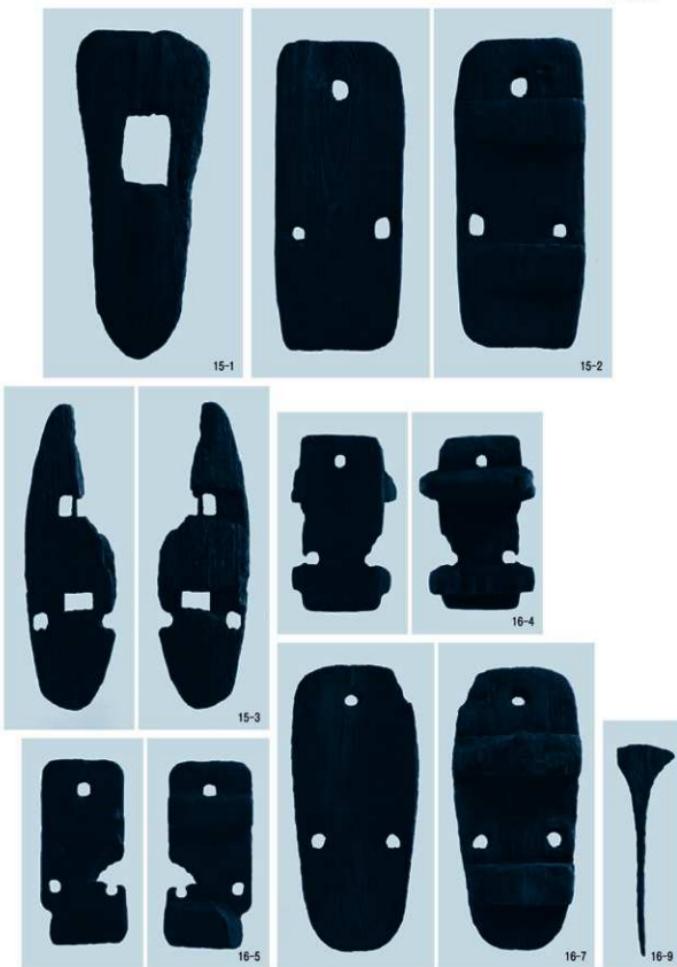
手乱遺跡出土遺物5（陶磁器）

図版10



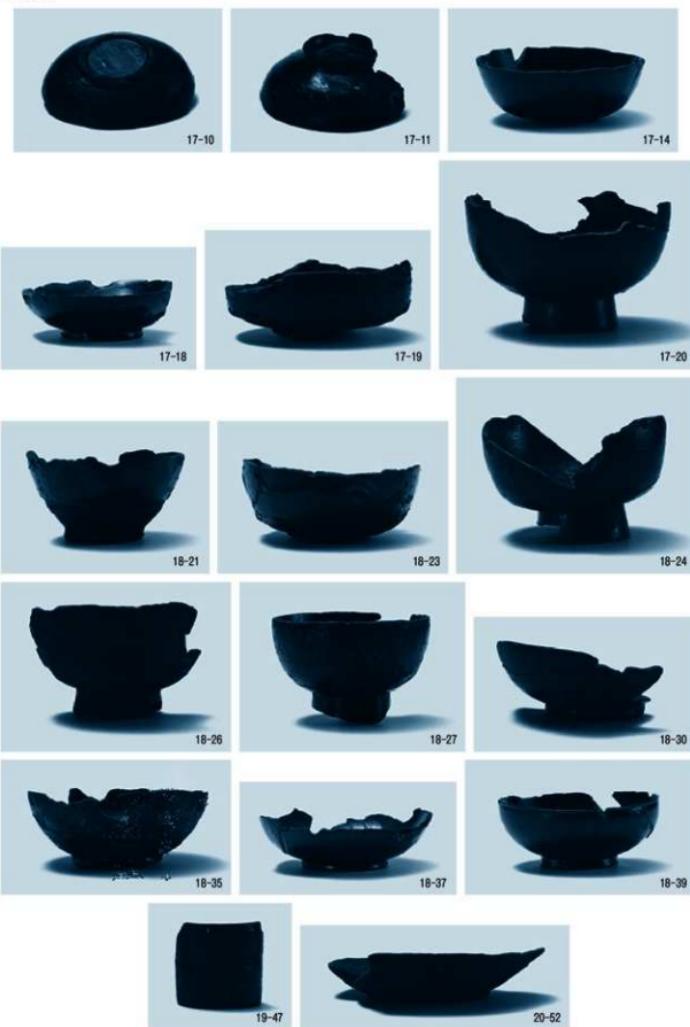
手乱遺跡出土遺物6（陶磁器他）

図版11



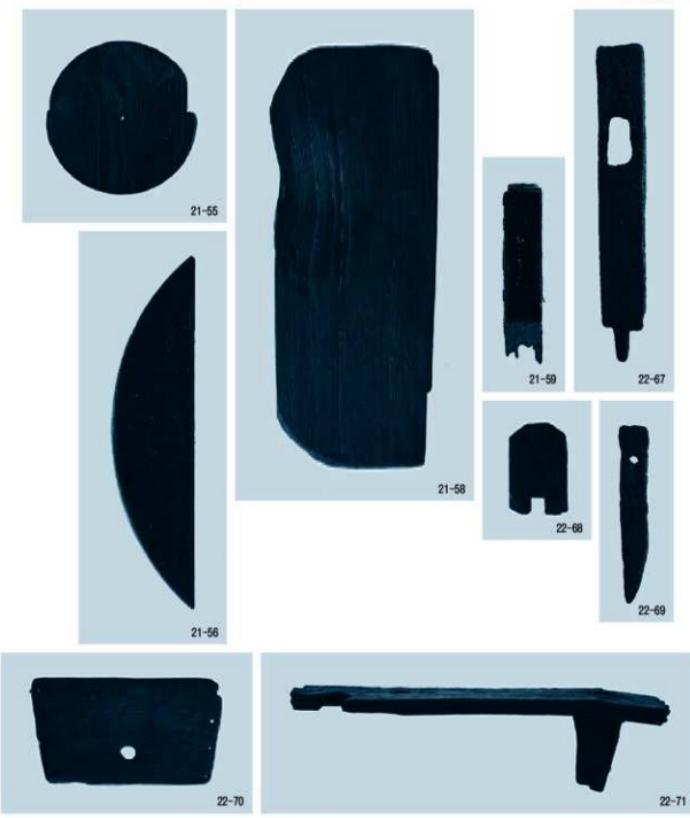
手乱遺跡出土遺物7（木製品）

図版12



手乱跡出土遺物 8 (木製品)

図版13



手乱遺跡出土遺物9（木製品）

図版14



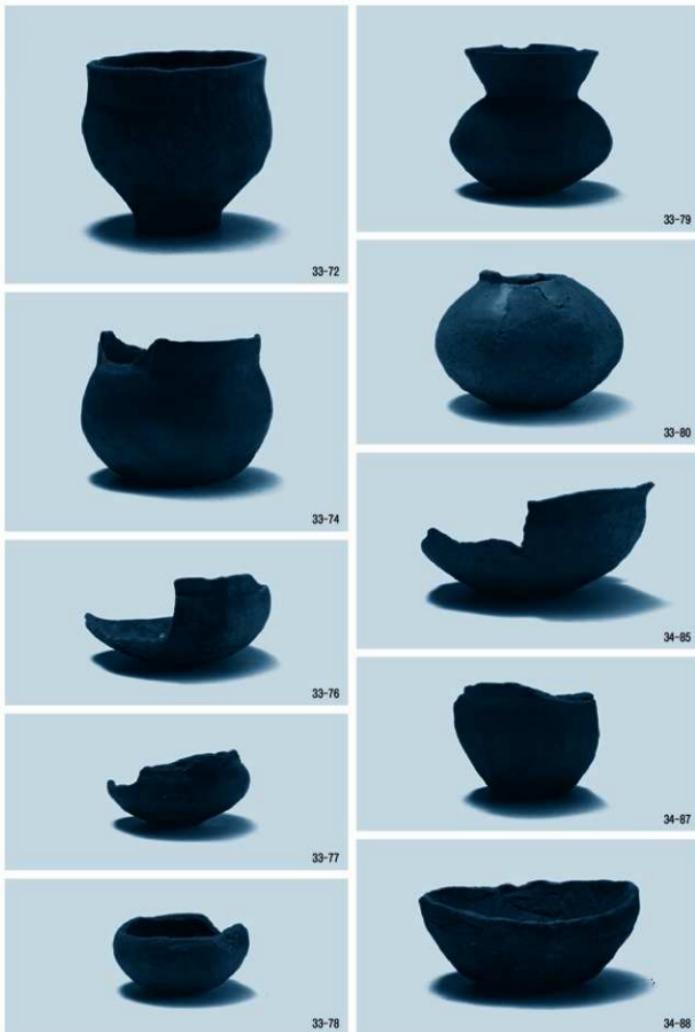
鶴喰広田遺跡出土遺物 1 (土器)

図版15



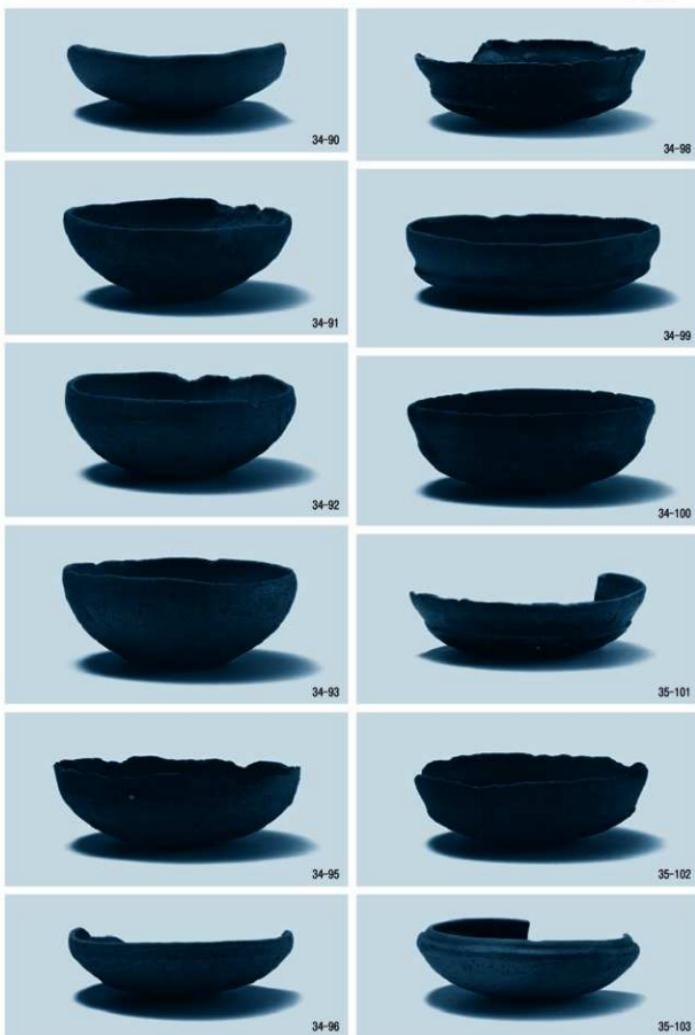
鶴喰広田遺跡出土遺物2（土器）

図版16



鶴喰広田遺跡出土遺物3（土器）

図版17



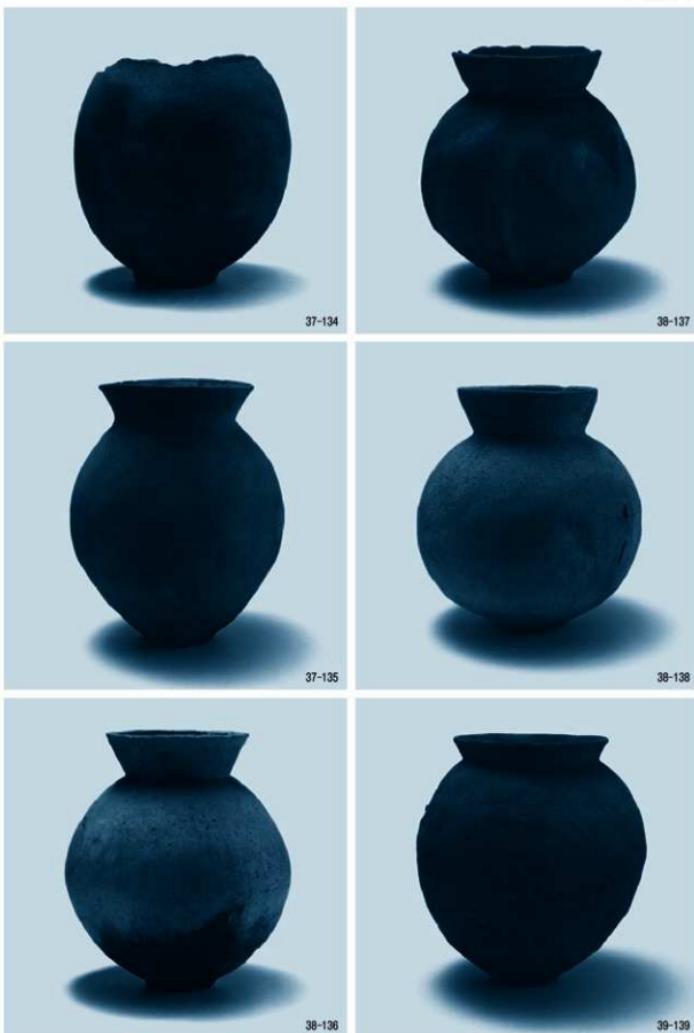
鶴喰広田遺跡出土遺物4（土器）

図版18



鶴喰広田遺跡出土遺物5（土器）

図版19



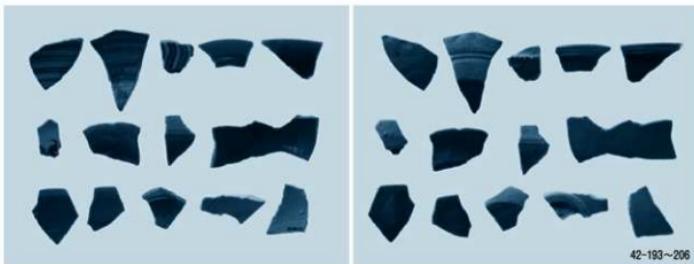
鶴喰広田遺跡出土遺物6（土器）

図版20

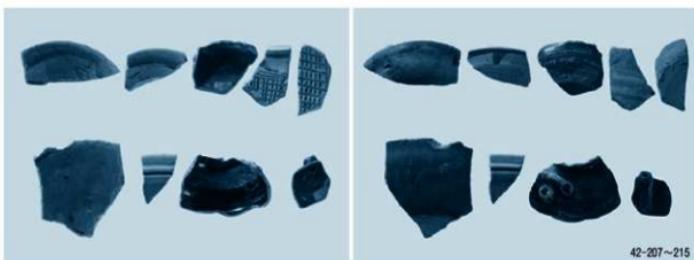


鶴喰広田遺跡出土遺物7（土器）

図版21



42-193~206



42-207~215



42-224



42-227



42-225



42-228

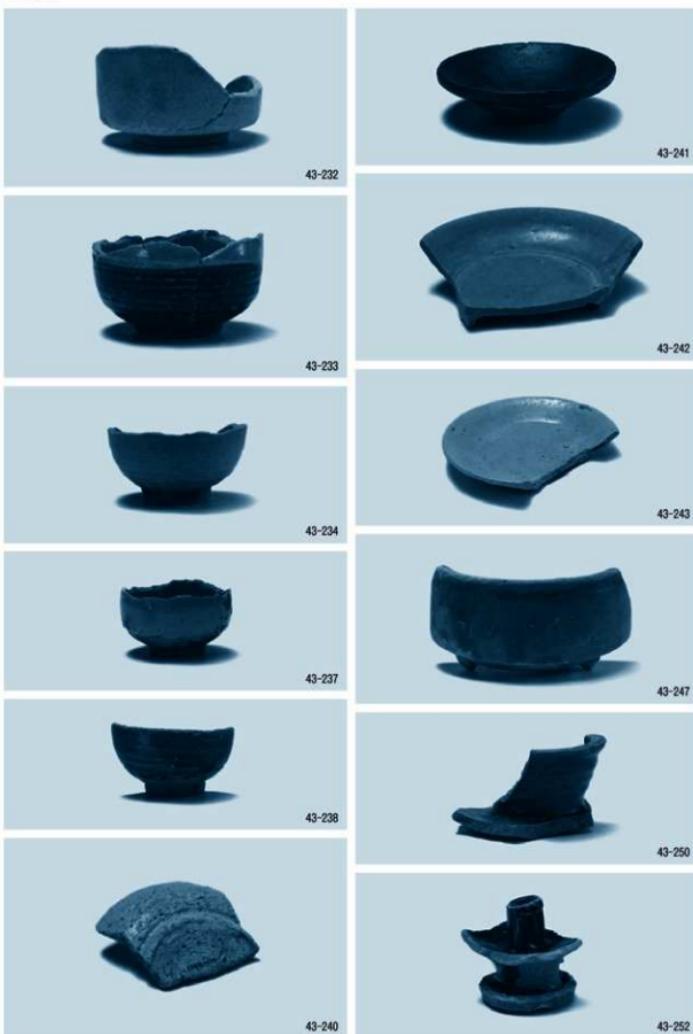


42-229



鶴喰広田遺跡出土遺物8（陶磁器）

図版22



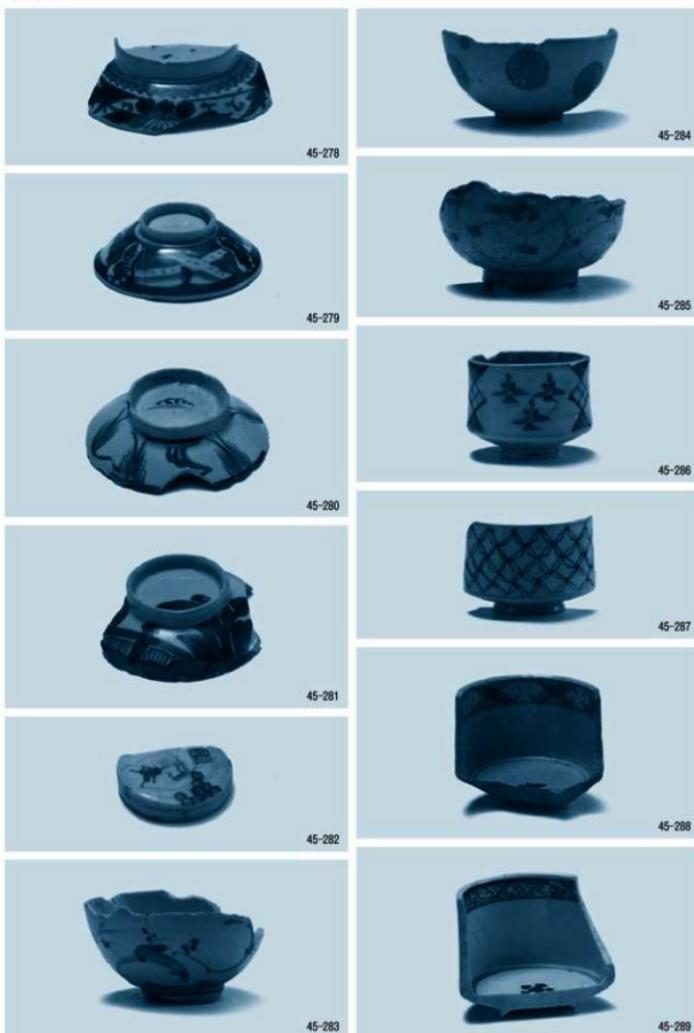
鶴喰広田遺跡出土遺物9（陶磁器）

図版23



鶴喰広田遺跡出土遺物10（陶磁器）

図版24



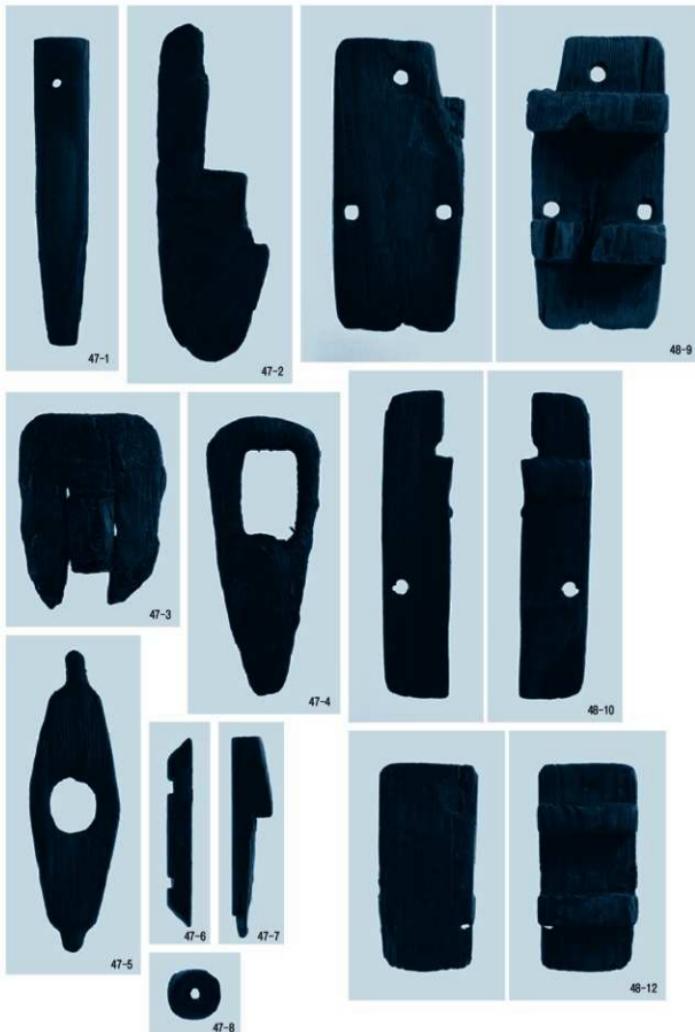
鶴喰広田遺跡出土遺物11（陶磁器）

図版25



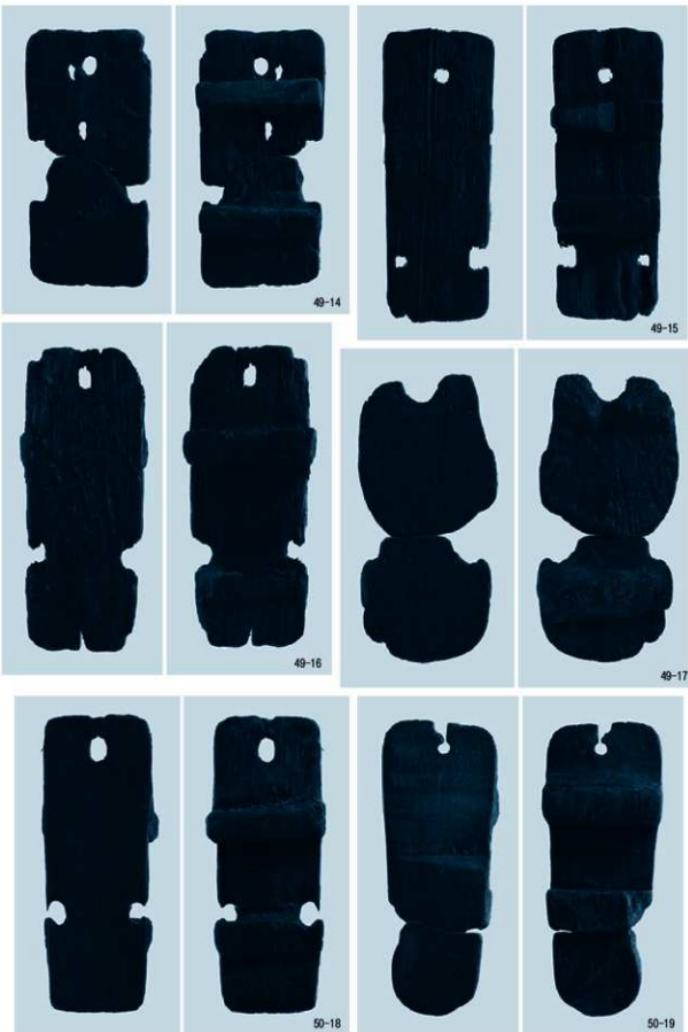
鶴喰広田遺跡出土遺物12（陶磁器他）

図版26



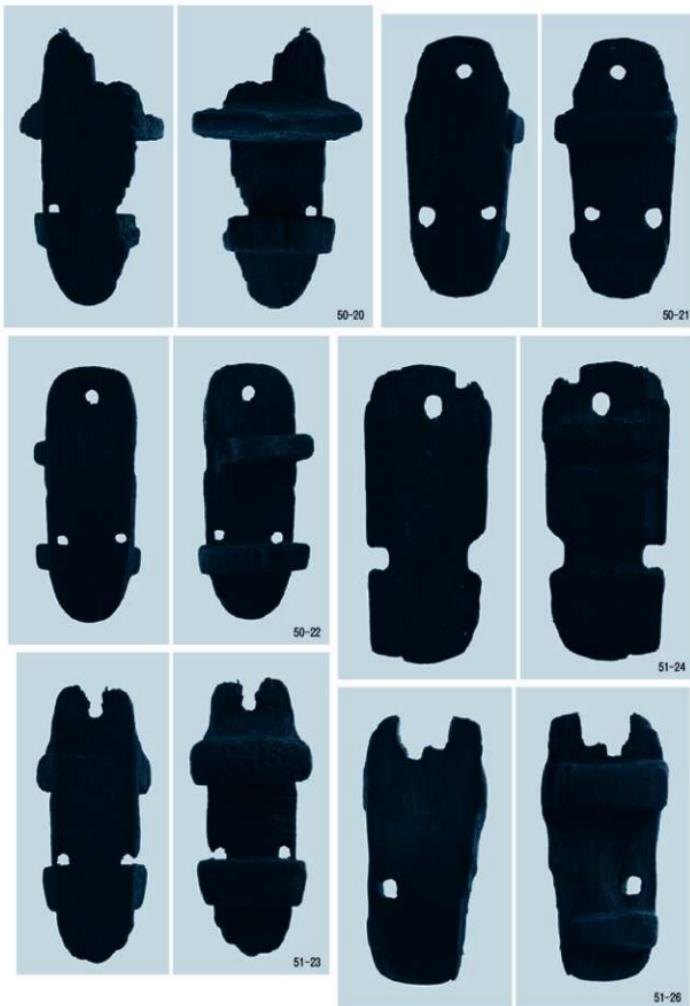
鶴喰広田遺跡出土遺物13（木製品）

図版27



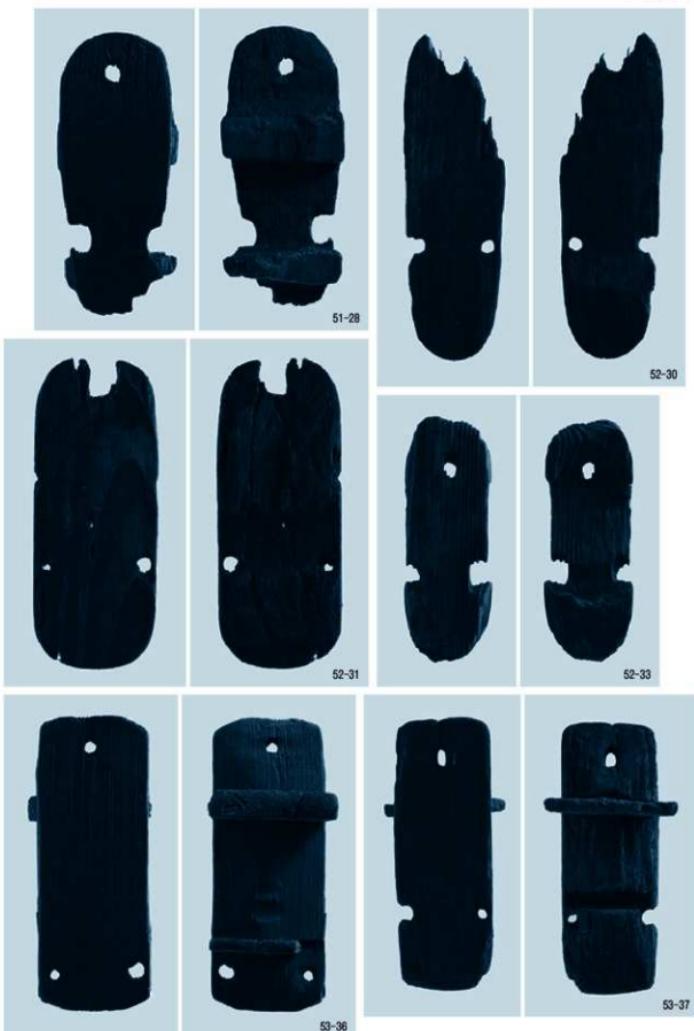
鶴喰広田遺跡出土遺物14（木製品）

図版28



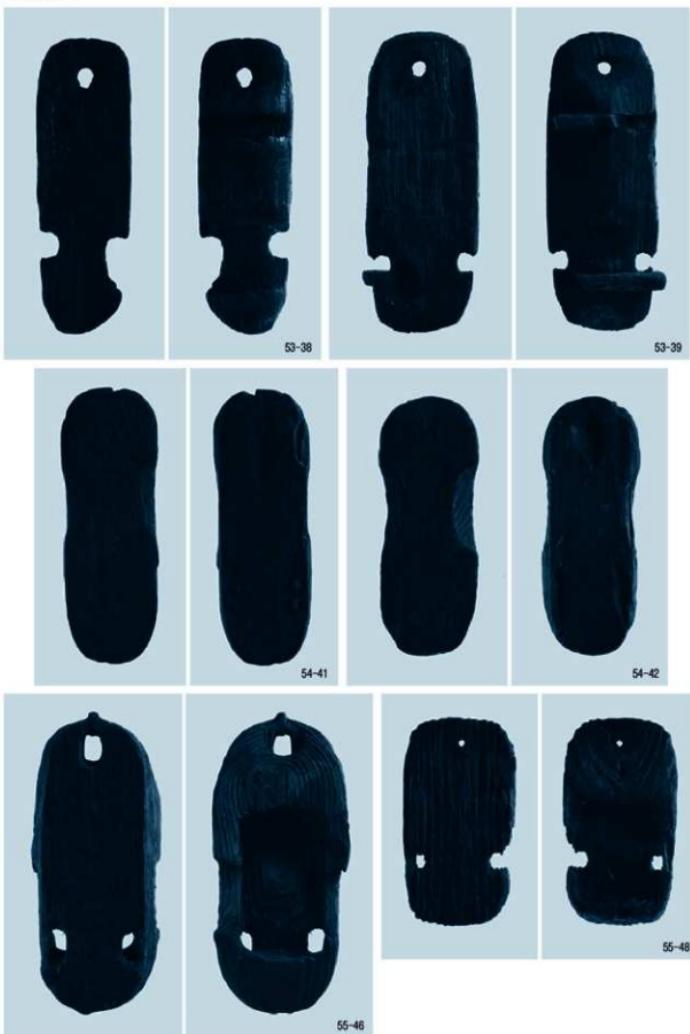
鶴喰広田遺跡出土遺物15（木製品）

図版29



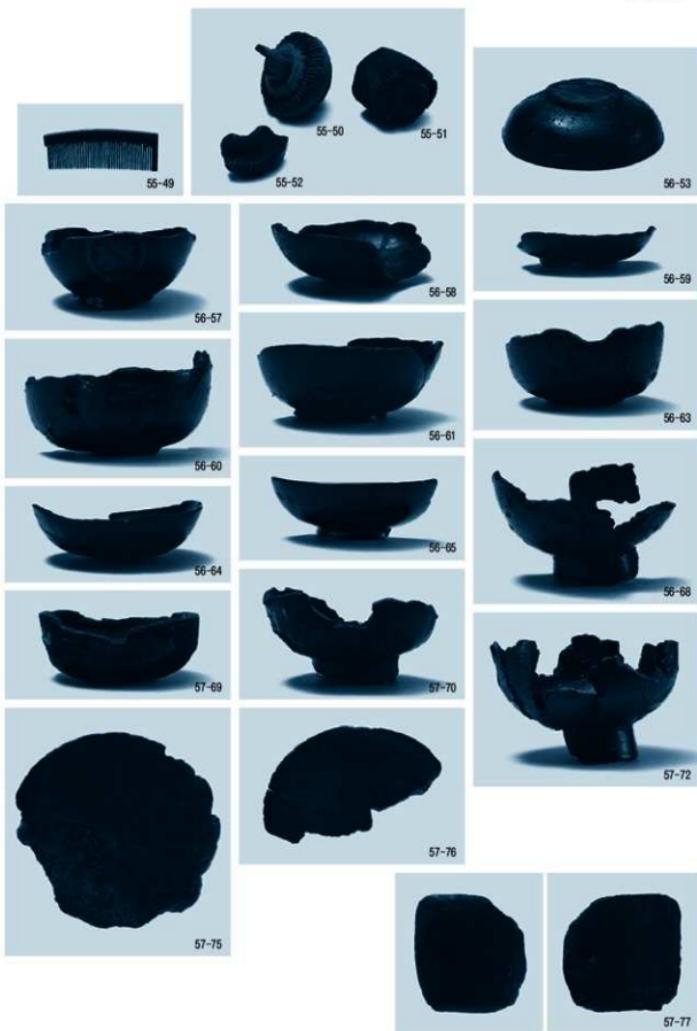
鶴喰広田遺跡出土遺物16（木製品）

図版30



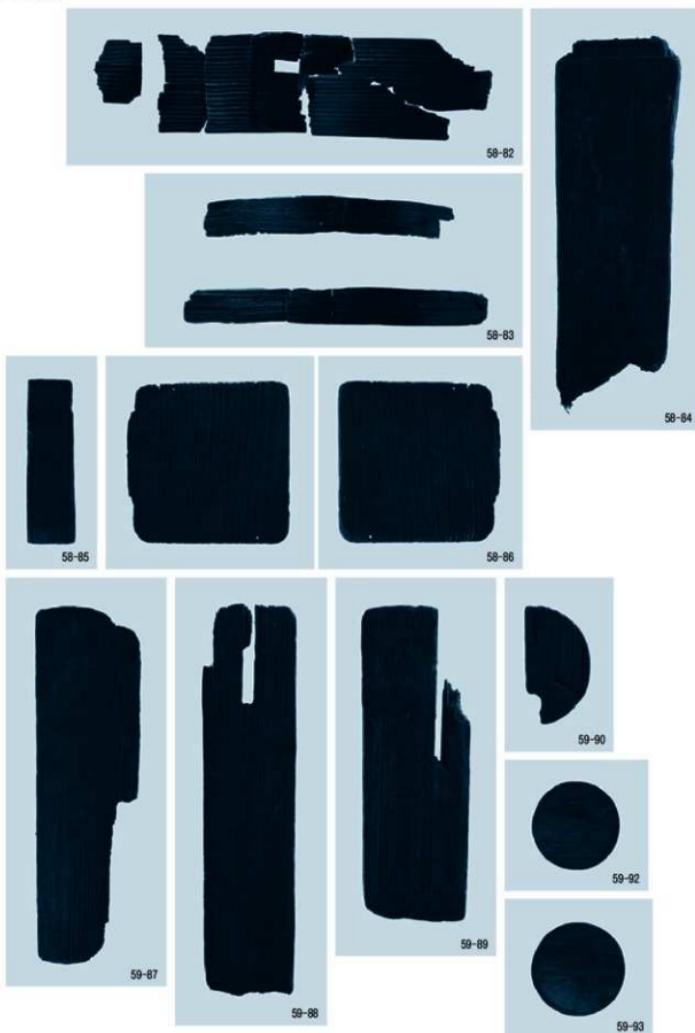
鶴喰広田遺跡出土遺物17（木製品）

図版31



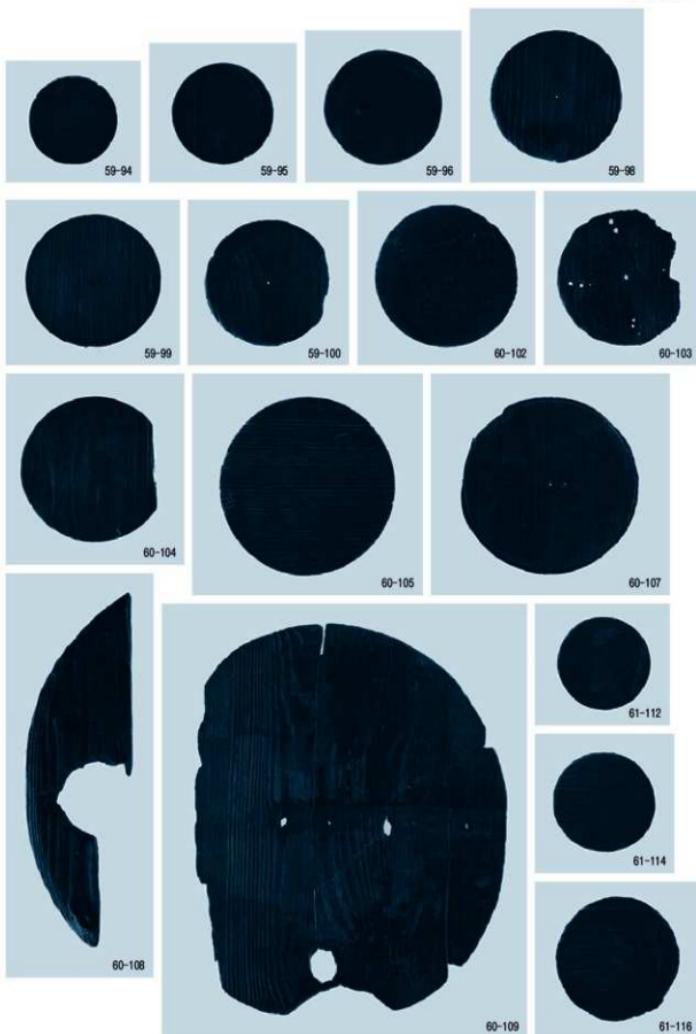
鶴喰広田遺跡出土遺物18（木製品）

図版32



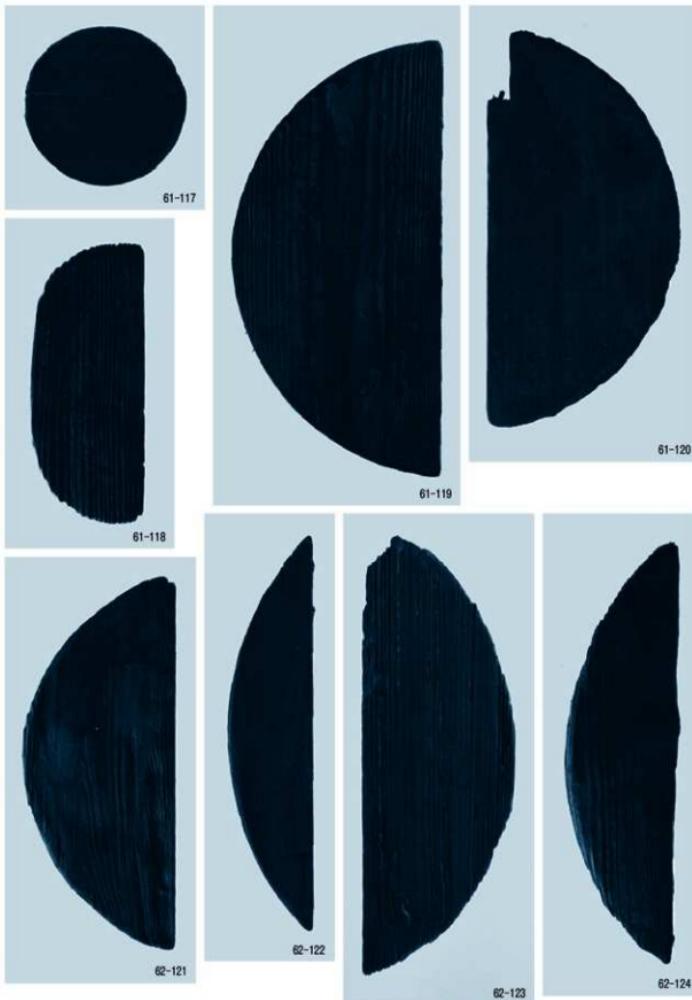
鶴喰広田遺跡出土遺物19（木製品）

図版33



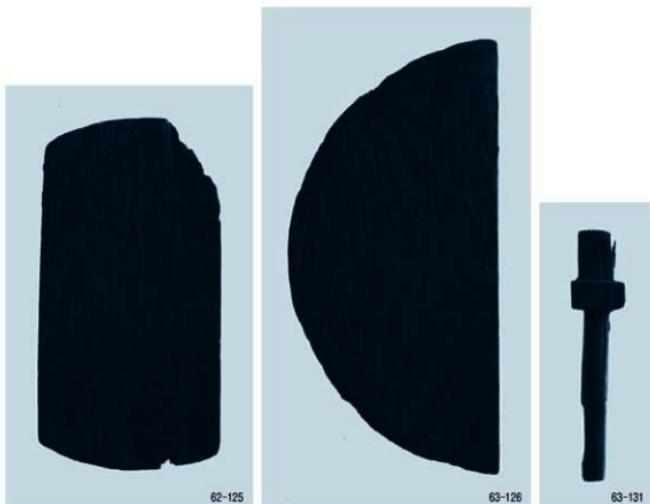
鶴喰広田遺跡出土遺物20(木製品)

図版34



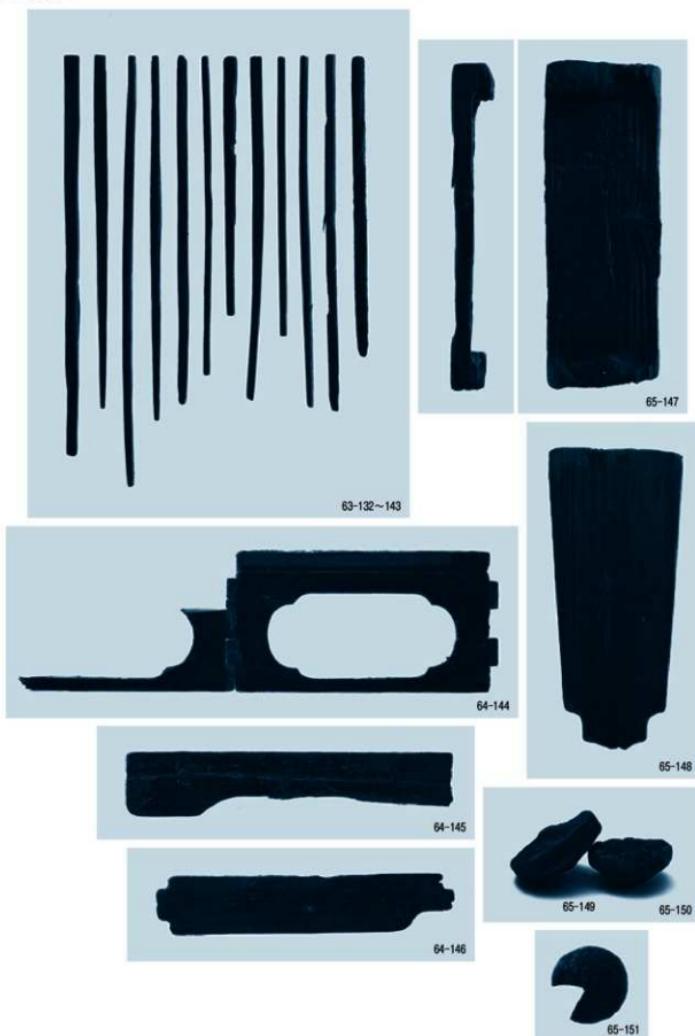
鶴喰広田遺跡出土遺物21（木製品）

図版35



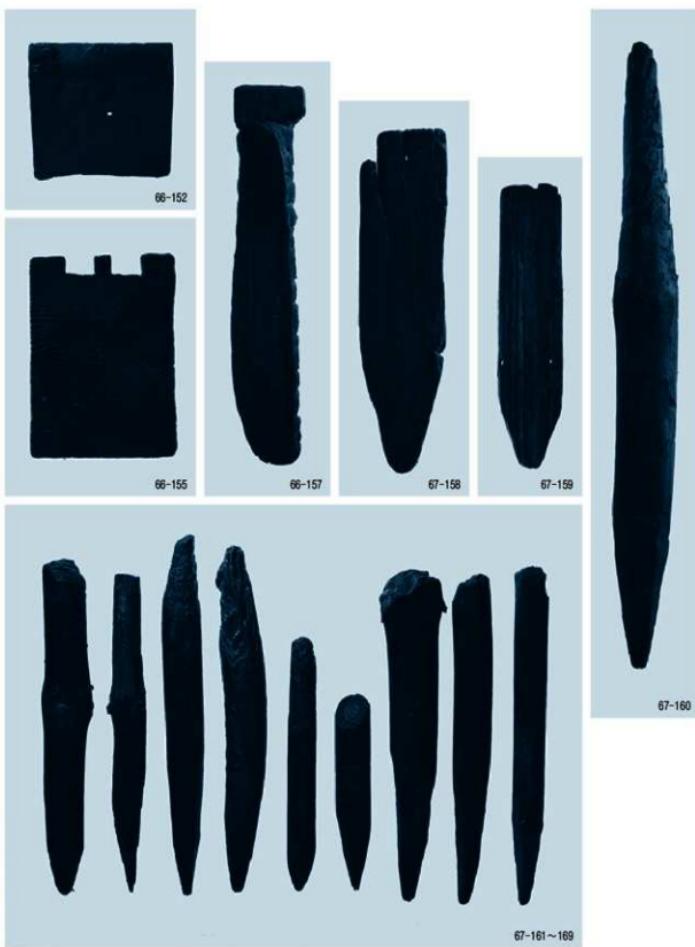
鶴喰広田遺跡出土遺物22（木製品）

図版36



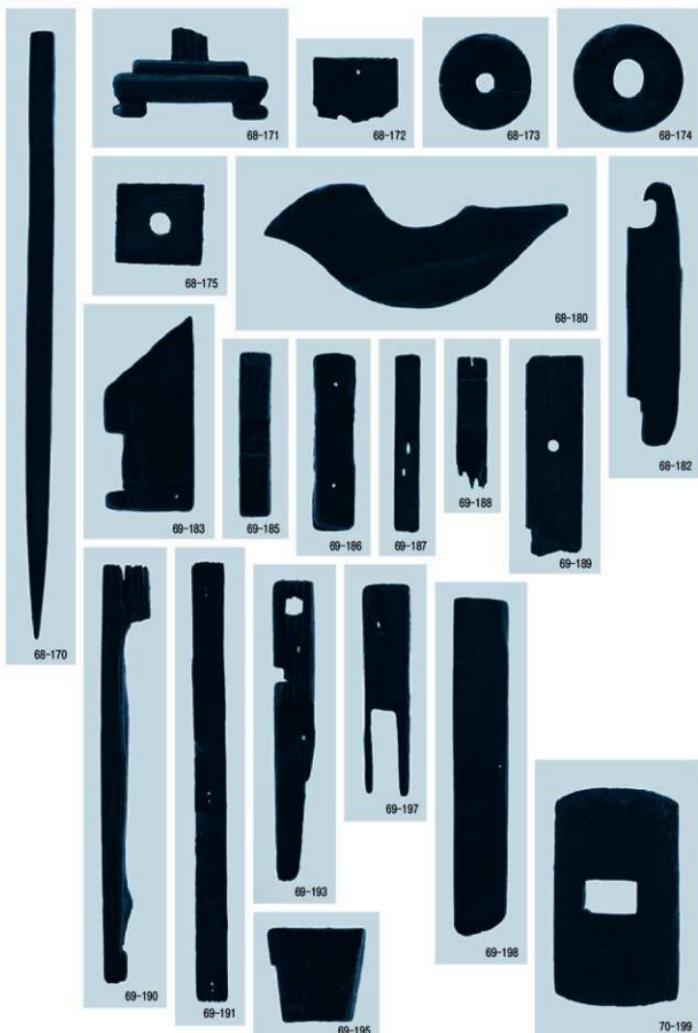
鶴喰広田遺跡出土遺物23（木製品）

図版37



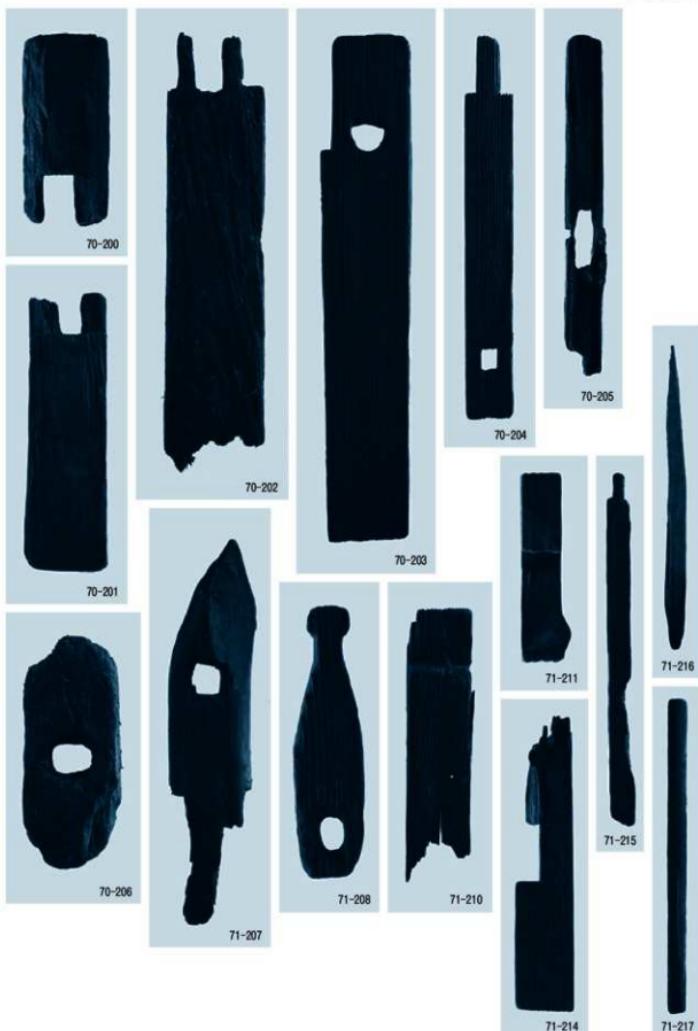
鶴喰広田遺跡出土遺物24（木製品）

図版38



鶴喰広田遺跡出土遺物25（木製品）

図版39



鶴喰広田遺跡出土遺物26（木製品）

図版40



手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（石器）



鶴喰広田遺跡出土遺物（石器・石製品）

図版41



手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（金属製品）



## 報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第39集

## 御殿川流域遺跡群 V

### 手乱遺跡・鶴喰広田遺跡

平成19~24年度 一級河川御殿川広域河川整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年3月29日 発行

編集発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261 (代)

FAX 054-262-4266

印刷所 松本印刷株式会社

〒421-0303 静岡県榛原郡吉田町片岡2210

TEL 0548-32-0851 (代)